巨人荒尾精

附　十二烈士傳

序

荒尾君逝而十四年君之後進井上雅二氏著巨人傳請予序之

天以英邁之資抱興亞之大計終身遑々滿腔經綸未及施之而早世矣豈可不深恨

武亭夙知之偉發文
最親君天性忠孝學
問精勵心術端正操行
謹從嚴員持孝道重亭

清夫人矣天下大家假以年
違之志望之一二年
則其救時濟世界
如甘地白雅二氏亦

年壯氣銳紹興起於此
是不啻感奮盡己
振作士氣揮發風教
也多矣是所以樂之

序之也
明治四十三年夏
義東書

序

有爲の材を抱いて。終身道途に奔走し。空しく志を齎らして早世す。人生の恨事。何んぞ曾て之に過ぐるものあらん。吾が荒尾精君の如きそれ然らずや。

余夙に君が天下の士たるを知る。顧に二十三年の頃。君の日清貿易研究所を創するや。余は川上大將と共に其の擧を賛し。其の事を助く。二十七八年戰役の興るや。君は嘗て養成する所の諸生を擧げて。悉く從軍通譯の任に當らしむ。諸生皆な憂國の志士。奮つて一身を擲ち。國家に貢献せしは。中外の喧稱せし所。職として君の訓育に由らざるは無し。君の功や偉なりと謂ふべし。傳末附記する所十二烈

士の如き。以て其の一班を見るべし。而して今や君と川上大將と皆な亡矣。余豈に今昔の感に堪へざらんや。君逝矣茲に十四年。君の後進井上雅二氏。君の傳を著し。余に一言を題せしむ。惟ふに世の青年子弟。君の傳を讀み。君の風に感じ。續々興起し。以て國家に奉公するものあらしめんか。君死すと雖も猶ほ生るが如き也。即ち其の著や。徒に君の靈を慰するのみならず。其の世道人心に稗益する夫豈に鮮少ならん哉。

明治四十三年夏

侯爵　桂　太　郎　識

東方齋荒尾君之碑

荒尾君深憂東亞大勢。竊以挽回衰運爲己任。奔走勞劬。經營慘憺、二十年如一日。一旦航海南。冒瘴疫。雄志未酬。溘焉斃於道塗。海內志士。悲痛悼惜。相共治喪。葬之東京谷中里全生庵。未幾東亞多故。時局日難。於是中外益惜君器識。悲君不遇。而同人追悼哀慕之情愈不能禁。遂胥謀立一碑於京都若王子舊廬之側。乞予誌君心事欲以傳不朽。嗚呼予不文何足以傳君。然區區憂時難思國士之心。亦不能自已。竟不敢以不文辭。

君諱精。初名義行。號東方齋。幼而沈毅有大志。年十二。入外國語學校。又受經芳野金陵門。夜則學劍講武。明

治十一年入陸軍教導團。翌年任陸軍軍曹。入大阪鎭臺。十三年入陸軍士官學校。十五年冬畢業。任陸軍少尉。十九年春始往清國。先是君在士官學校。按中外圖史。觀東西國勢。以謂西力東漸之勢。若河決下流。東亞舊邦之命。若一髮引千鈞。夫脣亡而齒寒。虢破而虞危。此豈我儕優游之時乎。自是留心東亞事。慨然有救濟志。及畢業。請假遊清。欲以審中外情勢。以不得命未果。至是由上海溯長江。深入內地。時有少壯慕志來會者二十餘人。君與分方面。四出觀采。南極閩粤滇黔。西入秦隴巴蜀。北窮蒙古伊犂之疆。東涉滿洲三省之野。崎嶇間關。備嘗艱辛。久之。據其所身經目睹。及獲乎同

人探討者。悉清國情形。審東亞大勢。　於是相謀。創日清貿易研究所於上海。二十二年四月東歸詢諸朝野識者。　其說曰。東亞之計。莫善乎富强日清兩國而協合其心力。富强協合之計。莫善乎振作互市通商。顧兩國通商之未振者。非無物可貿遷。無人能經紀也。則及今於清國要津。開一大學堂。講習商務。造出通才者。豈非東亞最大急務耶。　時相黑田松方諸公。皆韙其舉。而岩村農商務大臣。以其有大補商政。許爲設法籌經費。君乃遊說府縣。招募生徒。　明年四月還京。適有勸業博覽會之舉。海內商工輻湊都下。乃開日清貿易研究會。大招府縣紳董。臚列彼我百貨。俾老事者數人逐

一指示需給多寡。販運利害。君亦登場。細說東亞大勢清國情形。以及日清通商之急要。慷慨淋漓。移晷而罷。當此時。舉世滔々。心醉泰西文物。偶有談清事。輒詬爲迂愚。而一朝君唱西力東漸東亞危急之說也。所在官民傾聽感悟。由是海內心目。翕然趨向東亞時局。他年國計民生。籌措豫立。施備前定。一旦有事。不跲不困。所謂知彼知己百戰百勝者。實君豫爲之地也。 既而府縣子弟。應募進來者。三百餘。君考取才優志篤者百五十人。別掄教導才。得二十餘人。請於朝恭覽 宮城。九月九日到上海。越數日舉開教儀。 君又籌設日清誘導商會。與研究所相表裏。以益皷舞商務。十一月東歸。

經營累月。事將就緒。會研究所支持難難。飛報告急。初研究所師生。已集京師。將尅日登途。而岩村大臣以疾去官。不能履籌費之約。而君意氣加銳。纔立苟完計。發程創業。由是度支常絀。經紀日難。至是衆心恟恟。不知所底止。君乃抛誘導商會之舉而西。推赤誠定衆心。汰職員。節經費。尋移校舍。舉創立記念之儀。於是紀綱重張。校運復振。 又開編纂局。修清國通商總覽。據同人所積年辛勤蒐集之資料。參以今古著錄數千種。督率衆員。分門專攻。期年而成。 二十五年夏哥老會匪。滋擾江上上海洋人。日夜恇怖。結義團備不虞。獨研究所。教學自如。不肯入義團。洋人怒懟之我領事官。君乃貽

書圖帥曰。研究所者。聚千金子弟。授千金學術之學堂也。師生心力。不許輕費于他事。抑自知既居租界。當護租界。果有警急。當獨力從事以盡租人之分。中外士商聞之。隱然倚重研究所。而其畏敬邦人之情。自是漸生云」二十六年七月。研究生畢業。即開日清商品陳列所。令學生習實務。尋籌設東方通商協會。併合研究陳列二所。更張規制。推廣業務。其所期一則振作日清通商。以收東亞商權於既失。二則協輯兩國和好。以防中外葛藤於未結。萬一有事。則居間解紛以省國際交渉之煩也。時首相伊藤伯大悅。欲以提議帝國議會。君乃歷說政黨首領大隈伯板垣伯品川子。并得贊同。加以

海內紳商十餘人、列爲創立人。區處粗定。提議有日。而議會解散事遂不果。」會韓國東學黨亂作。事涉東亞三國。頗有搖動大局之虞。君即畫撥亂策。與二三大臣謀。將赴韓有所施爲。有異議又不果。」亡幾隣好遂破。皇師出征。問罪于清。君乃上疏。具陳敵國情勢。及攻伐善後之方略。薦故舊門生二百餘人於大本營。充偵候通譯。而自退居京都若王子山。日夜淬礪。講東亞經綸。又力圖誘掖後進造就通才。」二十九年一月。出遊清國。察戰後情形。逾月而還。屢會朝野有力者。提唱日清商工同盟之急要。尋、遊臺灣。視南門鎖鑰。經鹿兒島大島琉球至臺北。時新舊吏民情意未熟。彼此交疑。動欲

相乖離。君爲設紳商協會。以融和之。將遂巡視全島以及廈門福州香港。會鼠疫大行。先發三日。中疫。病六日卒。實十月三十日也。初君至臺北也。官民來見者。日夜不絕。及疾病。猶起坐延客。談論移晷。由是病勢加劇。竟以不起。享年三十八。

君於東亞時事。見機察微。知無不言。謀無不忠。在士官學校日。聞韓京有變。以一學生。見當路言事宜。清釁初啓也。著對清意見。戒海內士民。將議和也。指摘敵計所出。資當局籌措。著對清辨妄。辨輿論惑。見媾和約條有貽患我民也。授全國商工大會。以訂約建議案。見韓廷動搖有再擾大局之虞也。周旋官卿。糾合志士。勸當路

定對韓策。凡其所謀雖不盡行於當時。而其所慮無一不驗于後日焉。

君既卒。清韓二邦。變故百出。強鄰環伺。凌邀萬端。大局安危。靡所底止。中外志士。益服君見機之早慮患之遠。而深惜其志業之不終。近者清國懲毖多難。興革變通。取範於我。禦侮捍患。倚重於我。我朝野同憂之士。及君朋舊義故。方且追君遺志。効力於持危扶顛之策。而脣齒輔車之勢。將以漸成矣。天若假君以年。使其得乘此機運。經綸東亞大局。以立其所謂百年長計者。豈不盛歟。 奈何徒苦其心志。勞其筋骨。空乏其身。拂亂其所爲。又從而奪之年。世徒悲君之死於窮裔之塗癘疫之

毒。而不レ知三君之死之有二關世之安危興廢一也。悲夫、君生二于尾州枇杷島一。考曰荒尾義濟。世仕尾州藩云。

明治三十五年

從二位公爵　近衞篤麿撰



讀書以擇地以擇時照內忠之具而忠有六秀自
恕親高宗深以為殺之處於小試飄發寫笑之志之
小而新安之累大也君子之立志也有民胞物與之量內聖
外王之業而後不忝於父母之生不愧為天地之完人故其為
憂也以不如舜不如周公為憂也以德不修學不講為
憂也是故頑民梗化則憂之蠻夷猾夏則憂之小人在位賢
才否閉則憂之匹夫匹婦不被己澤則憂之所謂悲天命
而憫人窮此君子之所憂也若夫一身之屈伸
一家之饑飽世俗之榮辱得失貴賤毀譽君子固不暇憂及
此也

耕

七



上海時代





少尉時代



東京谷中全生庵巨人之墓



名古屋森氏邸



名古屋琵琶島



京都若王山下蘇東方齋舊居



京都若王子山中延年臺廬址


大熊鵬君


藤崎秀君


石川伍一君


楠内友次郎君


福原林平君


山崎羔三郎君


猪田正吉君


浦敬一君


高見武夫君



京都若王子山麓殉難九烈士之碑



東京高輪泉岳寺三崎之碑

自序

東方齋荒尾精君逝て十有四年、此間帝國の地位と勢力とは、前後兩次の戰役を經て、空前の發展を爲し、今や列强と班伍して、獨り東洋和平の主持者たるのみならず、世界治亂の機を制せんとせり、之れを君が獨立孤行、東方問題を絶叫して應ずるもの稀なりし當時に比較せば、實に隔世の感あり、若し君をして今日に在らしめんか、其天稟の英資は、練修の工夫と相俟つて、益〻德器を成就し、帝國の進運に貢獻し、興亞の偉業を贊襄する多大なるを疑はず、悲い哉旻天無情、之に年を藉さず、春秋僅に三十八、臺北の瘴土に客死し、其抱負の十一を行ふを得ざらしむ、而して谷中寺畔の墓石、今や苔むして人の弔ふなく、遺芳漸く世の記憶より去らんとす、想ふて

此に到れば、萬感交々胸に湧き、君を追慕するの念は、延て之を傳へんと欲するの情に堪へず、

余韓延に筮仕する六年、事務漸く緒に就く、因つて官暇を以て君の傳を作らんとし、昨秋を以て材料の蒐集に着手し、翰を飛ばして遺稿遺墨を求め、友に囑して名士の談片を集めたるも、得る所寔に寥々にして、未だ余の意を滿たす能はず、然るに今や余は日韓兩國の官囑を受け、歐米及び亞細亞、亞非利加兩洲殖民地視察の爲め、萬里遠遊の途に上らざるを得ざるに至る、想ふに日進の趨勢は、駟馬に鞭ちて驅るが如く、世態の變遷、旦夕を測るべからず、材料乏しきの故を以て之を中止せんか、日を經るに從ひ其の跡益々湮滅し、而して余の一身亦益々多忙となり、遂に刊行の期なきに終らん、況

んや之れを求むる既に半歳、有るものは既に之れを得、更に其以上を得んこと不可能に屬するをや、是れ余の材料の乏しきを顧みず之れを傳するの已むを得ざる所以なり、傳末十二烈士の小傳を附するもの、君の雄圖實行の一斑を證せんとすればなり、

而して余や遠遊日迫り、俗務蝟集し、復た想を按じ文を練るの隙なく、一氣に筆を呵して成る、君に對して禮を失するの嫌あらんも、君の宏量必ず余の赤誠を領づき地下に破顔すべく、而して讀者亦余が意を諒とせらるべし、因て本書を世に公にする所以を述べ、以て序に代ふ、

明治庚戌夏五月第二回世界周遊發途に先ち

高田村莊に於て　井上雅二識

巨人荒尾精傳

目次

一 荒尾精本傳

目次終

巨人荒尾精

山洲　根津　一閲
梧堂　井上雅二著

一　荒尾精本傳

第一章　少年時代

一　家庭と生地

東方齋

東亞に巨人あり、荒尾精と云ふ、幼にして一太郎と稱し、義行と名づく、後ち精と改む、耕雲其他の雅號ありしも、晩年は專ら東方齋を以て聞ゆ、祖父を福田某といふ、尾州琵琶島青物市場問屋善九郎の女を娶り、君の父善十郎を生む、善十郎名古屋藩士森氏の女を娶り君を生む、後ち善十郎妻子を伴ひ、同藩荒尾家を繼ぎ、義濟と改名し、祿百石を食む、

其父祖の琵琶島に住居し、而して君の琵琶島町に產せしを以て、君を名古屋出身の巨人と謂ふを得るなり。

名古屋出身之巨人

時は是れ安政五年、即ち內に在つては井伊直弼の大老となりし翌年にして、邊警頻りに動き、海內騷然、竟に米、魯、英、佛、蘭の諸國と通商條約を締結せさるべからざるに至り、外に在つては英軍天津に入り、英佛の使臣辱められ、次で所謂同盟軍燕京を陥れ、淸帝亂を熱河に避くるの階をなし、又印度の政治、英女皇の手裡に歸する年の、正月東方問題の先覺たる君は輝ける企望の光を浴びて呱々の聲を母家花木町の森氏に擧けたり令妹四人中纔かに二人を存するのみ、而して母君の實家森氏は當主を仲麿と呼び、依然舊宅に住し、仲麿の母たる君の母君の嫂は猶生存せらるゝも、齡既に高くして、耳遠く記憶鈍り、君が幼時に就き好材料を得る能はず。

巨人之誕生

君の生地琵琶島は、昔時名古屋淸州間重要の一驛にして、枇杷島とも書し、市の西北一里許、庄內川を挾み、河東を琵琶島町、河西を西琵琶島町と稱す、豐太閤の出生地中村と相距る僅かに里餘に過ぎす、地勢平濶、風物雄大名古屋城、小牧山、淸州等の要區、双眸の中にあり、規模の濶大なる、巨人を產するもの偶然に非らざるを見る、此河東の邊は源平

地勢雄大生ニ巨人ニ

琵琶島之由來

の時代、「土器野（かはらけの）の里」と稱へられ、平清盛の爲め熱田の南一里餘なる井戸田村に謫せられたる太政大臣藤原師長が、後許されて歸路に就くや兼て情をかけたる里正の女の、後を慕ひて此に來りたるを以て、白菊てふ秘藏の琵琶を記念に與へ、別を告げたるに、女は一旦歸路に就けるも、愛慕の念遣る方なく生別の悲みの死別に勝るを思ひ、復た引返して、

四つの緒のしらべにかけて三つ瀨川
沈み果てしと君に傳へよ

との一首を殘し、紀念（かたみ）の琵琶を抱いて身を投げたる所にして、名古屋附近に於ける最も詩的の名所たり、又東西琵琶島町の間庄内川の中央に三町許の中洲あり、其形の琵琶に似たるを以て琵琶島と云ひ、川に二橋を横へ、大橋、小橋と呼び、共に名所の一たり、琵琶島の名の史上に著はるゝに至りしは、慶長十六年三月家康上洛の際、此川を渡り地勢の凡ならざるを認め、奉行に命して地方（ちかた）を取らしめたるに始まる。後其地野菜の集散地となり、三百年間德川家の青物用達を勤め、平民以上の格式を獲て、勢力頗る熾んなりし、今や當年の威勢なきも、豪俠なる風氣は、依然存在せり。此地の繁昌は、則ち青物市場の繁昌にして、問屋三十三軒、之が中心となり、人家五六百軒簷を並べて櫛比し、郡役所あり、町役

豪俠之風氣

場あり、而して河西は維新後大に發展して名古屋市と相連る、

二　苦學の兒

維新の初君の父は家祿を奉還して商賈と爲り、明治四五年の交、家族を提げて出京し麹町五丁目に僑居し、纔かに荒物商を營みしが、幾ばくもなくして、生計甚だ難む、偶々鹿兒島人にして栃木縣知事たりし菅井誠美、當時麹町警察署詰警部として同町に居住せり、是れ君が後ち菅井夫妻の暖き手に養育せらるゝに至る因縁にして、義を好み士を愛する菅井は、常に君の深沈大度動作群童に異なるを見て、之を愛し深く其家貧にして學に就く能はざるを憐み、遂に君の父母に謀りて自家に寄寓せしめ、之を撫育すること己が子の如くせり、これ實に明治六年春君甫めて十五歳の時なりき、十一年夏敎導團に入る、十二年夏父君を喪ひ、翌十三年又た母君を失ふ、其の間君の賴る所唯だ菅井氏あるのみ、故に君の菅井に於けるは、殆んど師父の誼ありと謂ふ。

當時我家に同居の書生二名あり、荒尾君と同年配にて好尚相同じければ、何ッの間にか學友となりて、近隣のことなれば日々互に往來歡語し、且つ互に學業を勉勵しつゝありし

に、君の父母營む所の商業甚だ振はず、やがて閉居して他に移居せらるゝ事となり、家計の困難なる、幼少の令妹三人をも他家へ奉公に出すに至る、而して君の學問に熱心にして資性誠實剛膽事に當つて機敏なる動作は、到底尋常の兒輩の企及する所に非らず、余一日君の來りて書生等と分袂を惜むの話を聽き惻隱の情に堪へず、余も亦其席に臨みて家政困難の狀を詳にするに及んで、一層同情の感を深くし、左やう困難の悲境にあるなれば、君の一身は余之を世話すべし。能く兩親に諮らるべしと云ひければ、君は喜色滿面に顯はれ直に馳せ歸り、須臾にして父義濟氏と同行し來れり、氏は先づ悴に對する從來の庇蔭を厚く謝せられ、喜悅の餘感涙に咽びつゝ兩親共の賴みとするは唯此悴一人あるのみ、他に便る可き者もなければ今後のことは何分宜しく賴むと申されたり、其父なる人も天性正直にして一見天正時代の古武士的人物なりき、君は此日より余と同居することゝなりぬ、是なん君と余との關係を結ぶ始めなりき。

是より君は二人の書生と麴町元園町に漢英數學を教授せる私立學校へ通學し、孜々學業を研ぎつゝありしに、恰も征韓論の起れるに際し、陸海の軍籍に在る余の友人等は、日夜衡門を叩きて慷慨悲憤、互に議論を戰はし、或は將來に於ける清國の恐るべきを說

き、高談四筵を驚かすの概ありき、之を耳にしたる氣鋭の三書生は、爲めに痛く感ずる所やありけん、俄かに將來の方針を定め、驥足を伸ばさんには、如何なる學問こそ最も必要なるべきやとの問あり、余曰く己の方針を定めんには、各自の信ずる所に一任せん、然れども余の意見に依れば、獨、英、佛、淸四國の學問こそ肝要なるべしと云ひしに、君は

東方經營之原因

然らば余は淸國の歷史を研究し、治亂興亡の事跡を討ね、古今豪傑の成敗に鑑み、以て將來彼の國に對するの意見を定めんと云ひ、又西洋學は他二生と共に佛國の學問を研究せんとの企望を以てせり。(菅井誠美氏談)

學ㇾ劍讀ㇾ書、嚴寒酷暑、不ㇾ爲ニ安臥ニ、艱難玉成

君菅井家にありてより、外國語學校に入學して、佛蘭西語を修め、最も勵精の譽れあり、傍ら擊劍を學び又芳野金陵先生に就き漢籍を講習し、刻苦奮勵寸陰を空くせず、嚴寒酷暑と雖も、終夜端坐書を讀み纔かに机に凭りて一睡し覺むれば復た讀み蓐に就き安臥すること稀なりき。後菅井夫妻は常に後進子弟を戒むるに、君が苦學の狀を說て之を激勵せりと云ふ。

其後余は、本鄉警察署長に轉じ、同區に移住す、因つて、君等三人の書生をして、外國語學校に入學せしめ、夜間は鈴木某の漢數學の私塾に通はしめ、尙ほ餘暇を利用して、

立二渡清之志一

志士不レ忘レ在二溝壑一

撃劍を學ばしむ、幾くもなくして、十年の役起る、翌十一年に至り、君は余に請うて曰く、外國語學校に學ぶは、宿望を達するに迂なるを免かれず、若かず校を退き更に軍人となり、兵を練るの術を學び、傍ら清國の事情を研究し、以て他日渡清の便を得たしとて、反覆其の理由を說き、辭色倶に熱誠なり、余は到底其の志の奪へし難きを洞察して、之を容れ更めて教導團に入らしむ、君か余と同居せしは明治六年春にして教導團に入りしは、十一年夏なり、此間五箇年有餘の長日月、君は一日と雖も讀書を怠りしことなし、今其の狀態を語らんに、寒夜の如きは夜具を被りて讀書しつゝ、机側に倚りて一睡し、覺むれば則ち書見し、四季を通じ蓐を延べて寢しこと稀なりき、常に袴を着し夜間尙且つ之を解かず、曰く是れ男子非常に應ずるの用意なりと、而して身體最も健全にして、當時余が同鄉の書生及各地よりのものを合せて、二十五六名、何れも各學校に寄宿せるが、余は之が監督の任にあるを以て日曜には、必らず十五名以上の學生我宅に來つて相撲撃劍等を試むるも、一人として君に及ぶものなかりき、愚妻の如きは今尙君の勤勉家たり腕力家たりしを語りて後進の學生を訓戒しつゝあり、（菅井誠美氏談）

第二章　軍隊生活

一　鎮臺の下士

學術優秀、品行端正、儀表群生、

明治十一年君陸軍教導團に入り、砲兵科を修む、學術優秀、品行端正、嚴然群生の表式する所と爲る、同年秋竹橋暴動の起るや、當時の教導團は櫻田門外に在りて竹橋を距る甚だ遠からず、事不意に發し、衆周章出る所を知らず、然るに君は入學日淺くして未だ軍務に精熟せざりしに拘はらず、泰然自若として擧措進退、其宜を得ざるなく、人皆其膽勇に歎服せりと云ふ。

將帥之器

忠勇義烈、一生之本領、

十二年君教導團の教科を卒へ、陸軍軍曹に任ぜられ、大阪鎮臺に赴き、半小隊長に補せらる、職に就くの初、首として士氣を振作するを圖り、課餘を以て和漢忠勇義烈の士の事蹟を編集し、參するに靖獻遺言等の諸書を以てし、以て士卒を薫陶せんと欲し、案を具へ上官に稟議し、之を部下に行ひたるに、他の諸隊も稍々其例に倣ひ、殆んど全隊に波及し、士氣振興の效尠少ならざりしと云ふ、又部下の兵卒を率ゐ劍客西田某の門に入り擊劍を學ばしめ、受る所の月俸悉く投じて謝金となし嚢中常に一錢を留めず、西田其義に感じ心を

西鄉南洲爲大將、不手月倖君眇然一軍曹、而爲之、雖大小異其志、則同、宜矣後日稱君爲西鄉之再來也、

選友責善、砥礪士道、

靖獻派

傾け敎授し、兵卒も亦奮勵して業を受け、君を敬愛する父兄の如し、而して當時君は僅に二十一歲の青年なりし。

二　靖献派の領袖

十三年君選拔せられて、陸軍士官學校に入り、歩兵科を講習す。是より先き君世道の漸く衰へ、士風日に萎靡するを觀、慨然として匡濟の志あり、是に於て交友を選び、善を責め義を重んじ、切磋砥礪以て大に爲すあるを期す、結ぶ所の同志二十餘人、專ら氣節を以て相尙び、義に赴く歸するが若く、惡を疾む仇の若く、同校の生員にして苟くも鄙吝怯懦の言行を爲すものあるを見れば、面責して毫も假借せず。是より同校の生員大に畏憚し、目して靖獻派と曰ふ、而して君は實に其領派たり、校內喫烟室あり、暇時生員相集りて談笑す、時に偶々鄙猥の談を爲すものあり、歡笑頗る酣なるに方り、君等靖獻派の入り來るあれば、輒ち目を以て相警め、肅然容を改めて話頭を轉じ、或は慙愧して避け去るに至ると云ふ。

君嘗て同志と議して曰く、我徒他日力を天下に致さんと欲する者、豫じめ百難を凌ぎ萬苦

陶侃運瓶

鍛錬志氣以慣艱苦

注眼宇内以策興亞

に耐ふるの氣力を養はざる可からずと、因て相約し行軍等に於て、各自背嚢中に數個の鉛塊を入れ其重量を加ふるを常とせり、始めて習志野に野營の爲め行軍せる際の如き、生員中或は足痛を患ふる者あり、君之を助け背嚢銃劍等を代擔し、眩暈して倒れんとするに至りしことあり、又校に在りては規定の軍學を專修せざるべからざるを以て、日曜祭日毎に、校側の宗泰院なる寺院に、同志者を會集し、孫子、靖獻遺言、武教功錄、義士銘々傳等を讀み、互に相砥礪し暑暇中同院に宿泊する際の如きは、夜を徹して如上の書籍を輪講し、相約して蚊子の刺螫に任じ、之を撲てば罰あるに至る、其志氣を鍛錬し平生艱苦に慣るゝを力むる大概ね此類なり。

十五年冬君士官學校を卒へ、陸軍歩兵少尉に任せらる、時に年二十四歳なりき、君の士官學校に在るや、深く國家の前途を慮り、眼を宇内の大局に注ぎ、心竊かに東亞の衰運を挽回せんことを誓かひ、課餘東邦に關する群書を渉獵し、時に高名の先輩を訪ふて、其意見を叩き、苦心修養、須臾も怠るなし、朝鮮京城の變あるや、間を請ふて時の陸軍卿大山巖に謁し、滿腔の熱血を注で建言する所あり、區々一生員の身を以て、東亞の大策を論ず、冒進の譏或は免かるべからざるも、君が一片耿々の至誠と、自任の厚く意氣の壯なる、以

慷慨之餘欲ニ辭レ官渡清ー

て想見す可し。

爾來西方東漸の勢、漸く熾にして東邦の時局日に艱難なるを見、慷慨激越自ら禁ずる能はず、是に至り意を決して清國に遊び、其實勢を探究せんと欲し、乃ち菅井を訪ひ多年敎養の恩誼を謝し、且つ官を辭し渡清せんと欲するの意を告ぐ、菅井之を不可とし、猶數年の研鑽以て大兵操縱の術を會得したる後、彼地に渡る決して遲からざるを以てす、君終に其說に服し辭職渡清の意を飜す。

君の十五年冬卒業して少尉となるや、一日辭令生を携へ來て曰く、任地は何れの師團にても可なり、各自の希望を申出よとの內意ありしも、此際斷然本職を辭し、以て清國に航せんと欲すとて、其意見を縷述し、以て余の同情を求むること切なり、余答へて曰く、數年軍事の敎育を受け、漸く卒業の榮を荷ひ、今日少尉の辭令を拜受するや否や、其職を罷め直に渡清する如きは、宿昔の大目的を遂ぐる所以に非らず、何となれば過去四箇年間の練習は、戰術上大隊以下の小技術に過ぎず、未だ以て聯隊以上の大兵を操縱するの實驗に乏しきを如何んせん、加之ならず旅團の如き、將た師團の如き大兵營生活の狀態、實地の經驗皆無なるを遺憾とす、故に愚見に依れば、少くも今後兩三年を期して其

老成之言、使二君翻一意

卓識拔二時流一

抱負既大意氣亦壯

命ぜられたる任地に赴き、各種の經驗を積みて、然る後に渡淸するも決して遲きに非るべく況んや今日淸國の危機眼前に迫れりと云ふに非ざるをや、古人も兵は精しきを貴ぶといひ大事變に際會して、所謂生兵法家の往々危地に陷りて嗤を後世に殘せしは、和漢西洋其例尠からず、且夫れ時機を圖らず急遽職を辭せんか、或は當路者をして惡感情を抱かしめ、爲めに渡淸を妨げらるゝの虞なしとも限らず、故に友人諸士とも相謀り篤と再考あれと告げ、祝宴に移り獻酬數杯にして辭し去りぬ、翌夕に至り君の書簡に接す、忙手披見すれば、御意見に對し二三の友人と披襟談合し、徹宵熟考の結果、終に貴意に服從するの外なきを發見せり、謹んで老成の御敎示を感謝す云々。(菅井誠美氏談)

君の渡淸を止めしは、獨り菅井のみならず、當路の諸公亦百方慰諭する所あり、當時某公君に問ふて曰く、今や海內の俊髦、爭ふて歐米に遊び宇內の大勢を究むるを願はざるなし、何事ぞ子獨り固陋の淸國に入らんと欲するやと、君答て曰く、海內の士皆歐米に心醉して淸國を顧みず、是れ愚が淸國に遊んと欲する所以なりと、他の某公問て曰く、淸國に遊び何を爲さんと欲するや、君笑て曰く、取て之を治めて以て東亞を興さんと欲するのみと、其意氣の壯想見すべし。

時流慣々志、在ニ温飽ー

當時士官學校生徒の始めて業を卒へ、士官に任せらるゝや、府下に留まり優遊歡娯、積年苦學の勞を慰め、任處の定るを待つを以て常とす、獨り君は此間に光陰を徒消するに忍びず、木曾山道の風雪を冒して、氣力を試みんと欲し、一枚の綿衣一條の木杖、飄然として途に上り、遂に木曾山道に至る、一日薄暮天色暗澹、風雲空を蔽ふ、行く數里ならずして天大に雪ふり、忽ち積むこと尺餘復た蹊路の尋ぬ可きなく、漸やく嶺上に達し樹下に憩ふ、更深くして寒威益々激しく、衣を振ひ膚を摩し、勇を鼓し疾走して下る、轟然聲あり、飛丸袂を掠む君歩を駐め一顧すれば、黑裝の二壯漢、銃を挈げて至る、君を見、恭しく鹵莽の罪を謝して曰く、君の下られたるは野獸の通路にして、我れ等君の跫音を以て野猪ならんと速斷して發砲したるなり、且つ我等頗る射術に長じ百發百中せざる無し、然るに獸は横に長きも人は縱に長きを以て、幸に命中せざりし、想ふに前路獵夫の、道側に伏して野猪の過ぐるを待つ者多し、若し强ひて過ぎなば焉んぞ彼等も復た余と同一の過を犯さゞるを保せんやとて、君を其家に伴ひ、一泊せしめ、間道を指示して公路に達せしめたりと云ふ、一時青年士官傳稱して之を壯とす。

三　銀杏樹下の今西郷

今西郷

尚二德義一礪二士風一

渡清之志、不レ能レ禁

十六年春君步兵第十三聯隊附に補せられ、熊本に赴く、其隊に在るや、勤務に精勵し、士卒を愛撫し、最も德義を尚とび、士風を砥礪するを勉む、未だ幾くならず、青年將校靡然として其風に向ひ、各自氣節を以て相戒め、遂に全聯隊の美風を成すに至る、是より後君の一言一行は、將士の傾聽注視する所と爲り、君の名聲は軍人社會に喧傳し、凡そ同聯隊の將校にして他の聯隊に轉任若くは往復するあらば、輙ち君を以て好談柄となし、青年士官の模範なりと稱せり、君隊務に精勤する已に斯の如し、而して渡清の志勃々禁ずる能はず屢〻書を在京同志に寄せて曰く、禹域此地を距る僅に一葦帶水のみ、然かも身は籠鳥に似て高く飛ぶに由なく、夢魂徒に四百餘州を繞る、嗚呼余の京を辭してより既に二星霜、東亞の大勢は時々刻々に非なり何の日か能く其志を伸べん、寧ろ決然官を擲ち槎に乘せんのみと、諸友幹を飛ばして之を慰諭し、官亦君の辭職を允さず親友花田中佐に寄せたる一律以て當年を想見すべし、

告レ君千古英雄士、　過ニ得盤根錯節一來。

憑翊功成登ニ麟閣一、　班超名遂入ニ雲臺一。
艱難經歷皆如レ此。　辛苦遭逢豈啻哉。
請見前園梅一朶、　堅氷凌得復能開。

當時前の遣清留學生御幡雅文の職を熊本鎭臺に奉ずるや、君乃ち請うて官舍を共にし、隊務の餘暇支那語を學習す。御幡今尙ほ君が夙夜黽勉進步の速かなりしを歎稱せり、君は毎日牛肉一斤、酒五合を用ゐ、居常木綿檳榔子染の紋付を着し。支那語研究の傍、傳習錄を愛讀して精神を鍛練し、又柔術及ひ居合術を學び、一夜も其定規を廢せず、居ること二年、君の英名は啻に隊中のみならず、熊本の全市に響き、兒童走卒も亦皆君の人と爲りを敬慕し、群兒の相聚りて戯遊するや。西郷大將を擬するに非ざれば則ち肩を張り濶步して。我は荒尾少尉なりと傲稱するに至る。少年士官の榮も亦大なりと謂ふ可し。

想ふ十四年前、予僅に成童、頑惡を以て縣下に知らる、君時に陸軍步兵少尉となり、任に熊本に就き、人を介して予を招く、予等年少事に於て識るなきも、自ら一郷の風を持し敢て漫に他人の門に趨るを欲せず、後一日友輩三四と共に君の官舍を叩き、聊か試むる所あらんとす。君溫然君子の風あり、而して自ら剛毅、敢て冒すべからず、予等に敎

南洲問答

ふるに天下の大勢を以てし又古今英雄豪傑の事を以てす、予等推服竊に以て當世の英雄となす、是より暇あれば則ち敎を請ひ殆んど師弟の誼あり、君予等の頑惡を棄てず、又大に戒むる所あり、其秘する所の南洲問答書を示し、諄々訓誨毫も倦色なし、予等益以て其人と爲りに服し、而して床上を見れば長さ六尺餘の木劍一把あり、亦以て其風格を知る可し、當時君僅に少尉たりしと雖、全師團中君の名聲最も籍甚し、又時の聯隊長坂元中佐、(少將元照)最も君を重せりと云ふ、(明治二十九年十一月日本新聞所載、鳥居素川氏記)、

四　亞細亞局の狻猊

志望始達

君十八年を以て參謀本部支那部附に轉ず得意想ふ可し、是より君は秘庫を開き、東洋諸國に關する典籍、及地圖を檢討して、審に其形勢を案じ、又東洋に志ある先憂の士を求めて、交を締し、以て大に爲す所あらんことを期せり、今野巖太の如きは君の最も深く結托する所なりしと云ふ、

今野巖太

巖太會津の人、幼にして父を喪ふ母氏賢なり、艱苦覆育、敎ふるに義方を以てす、七八歲

の頃樺太島露國の有に歸す、母氏慨然巖太を戒めて曰く、嗟呼是れ帝國無上の耻辱にして、臣民終天の恨事に非ずや、之を克復せん者こそ眞に日本男兒なれ、爾吾子ならば銘肝以て爲す所あれと、巖太感奮遂に樺太恢復の志を立て、晝は文を學び、夜は武を講じ、十四五歳の時、略〻宇内の大勢に通ぜり。因て親しく海外を歷覽せんと欲す、然るに家貧にして旅資を辨ずる能はず、母君日々乾飯少許を作り、積で一斗を得たり巖太乃ち之を負ふて鄕里を辭し、北海道を經て、樺太を週遊し、轉じて西比利亞に入り、內地を探査す、一日積雪路を塞ぎ行步頗る艱めり巖太巖上に登りて困臥せしに、忽ち怪聲夢を破て山岳を震動す、大に驚き頭を擡ぐれば巖下に三頭の猛虎あり、眼を瞋らし牙を鳴らし將に來り搏たんとす、而して巖高く且つ險にして攀登するを得ず幸に危禍を免るゝを得たり、其艱苦冒險の狀概見すべし、斯の如くして更に蒙古に入り、印度を横ぎり波斯に至り、瘴癘に觸れ、曠野に臥す、偶〻國王の巡遊するに會し。扶けてられて醫院に入る、全治の後、歸國の旅費を給せらる、巖太遂に孟買に出で汽船に搭じて歸朝す、是に於て一日君と相見て共に語り、意氣投合して深く東洋の爲めに盡さん事を誓ふ。

當時巖太水戸に在り君は東京にあり巖太常に數日の行厨を帶び、徒歩して東京に到り君と

談じ、徹宵止まず餓ゆれば行厨を披きて之を食ひ、談盡くれば深夜風雨を論せず直に辭して去る。其後巖太再び海に航して安南交趾を歴遊し、雲南貴州の境に出入せり、時に劉永福雲南黑旗軍に將たり、巖太を得て總兵(我少將相當官)に任じ、參謀と爲す、明治十七年清佛の安南に事を構ふるや、黑旗軍奮戰頗る功あり、其謀略實に巖太の劃策する所に係ると云ふ、既にして永福の倶に爲すあるに足らざるを知り、去て印度に遊ぶ、去るに臨み一書を君に漢口に寄せて其意中を告げたり。其後杳として消息なし知らず今何の狀を爲すや。

第三章　漢口に於ける梁山泊

一　三箇年の研究

岸田吟香

君參謀本部に在ること一年、翌十九年春官命を奉じ始めて清國に遊ぶ、時に歲二十有八、宿昔の志之より漸く將に伸びんとす、是に於て先づ上海に航し、故岸田吟香と交を締し、抱負を語る、吟香深く君に傾倒し將來及ぶ限りの後援を爲すを約せり、君は長江を溯り深く內地に入り、居を九省の會たる漢口に占め、上海なる吟香の許より書籍藥材、雜貨等を送らしめ、漢口河岸に樂善堂なる看牌を掲げ、身を商賈に扮し、一は以て調査研究の

財源とし、一は以て支那官憲の注意を免かれんとせり。斯の如くして君は、我陸軍當局に報告諜報をなすの職責を有し、各地方情況調査の必要に迫られたるのみならず、清國に對する一大計畫よりするも、自然實勢を究むるの必要ありしを以て先づ之れに力を注ぐの方針にて調査研究事業の端緒を啓けり。時に少壯有爲の士、君と感を同うし觀光采風の事に從ふもの尠なからず。是に於て天津、上海等に散在する有志を招致せしに井深彦三郎、高橋謙、宗方小太郎、山内巖、浦敬一等の諸士前後來集する者十餘名に至れり。蓋し清國の大一人の能く之れを調査する所に非ざるを以て、嘗て知る所の此等人士と共に事を謀らんと欲せしなり。而して君は實に之れが中心たり。諸士皆な支那人に扮裝し萬艱を冒して調査に從事し南北兩京、兩江、湖廣の地は論なく或は南、兩廣の要地を探り、或は西南、雲貴の蠻境を窮め、或は巴蜀に入り、或は陝甘を巡り、或は北、蒙古伊犂に出入し、或は渤海を渉りて滿州の野に曝露し、足跡四百州に遍く即ち漢口を中心とし、此に本部を置き、君を首領とし、湖南支部は初め高橋謙之れに當りしも、後四川支部を幹することゝなりて、山内巖之れを襲ぎ、北京は宗方小太郎之に當り、各支部には各三四名の同志ありて諸般の調査に從へり。而して到る處山河の形勢、關塞の要害、風土氣候、人情風俗、農工商

諸士忘レ身報レ國之狀、宛然在レ目、

艱苦可レ想

の現況、水陸物資の多寡、金融、運輸、交通の梗概を精査し、又博く群籍を涉獵して、古今の成敗に鑑み、內外の機運を按じ、熟謀審議夜以て日に繼ぐ、斯の如くすること三年、其間山崎羔三郎の雲南蠻境を往來して瘴癘の激毒に侵されたる、藤島武彥の江中群盜に襲はれたる、松田滿雄の苗蠻に圍まれたる、石川伍一の囹圄に繫がれて極刑に處せられんとせる如き、萬死を出でゝ一生を得たる者、枚擧に遑あらず、彼の浦敬一が蹶然獨行伊犂の邊境に向ひ廣岡安太の四川より雲南に入りて、共に踪跡杳焉死生知るべからざるに至りしも、亦此際に在り、自餘の十數士、皆備に艱苦を嘗め、一人僅かに十錢乃至十三四錢にて一泊の費を辨じ、辮髮滿服流疫に罹り瘴熱を患ひ、死に瀕すること一再ならず、君も亦南船北馬風餐露宿、嘗て一日も安居寧處せず、而して其堅忍の氣、敢爲の勇、一難に遭ふ毎に一倍し來るの概あり、竟に君が親經實歷する所と諸士の探究し得たる所とを總合大成し、四百餘州の實勢を詳にするを得たり、

二　樂善堂規則

君の漢口時代は、二十八歲より三十一歲に至る最も年壯氣銳の時なりしも、其志や常に君子

君子自任、尊王、鄙覇
任重道遠
用意周到
慎言行、養實力

に在り、則ち王道を以て全地球を救ふに在り、彼の覇を唱へ、一國一州に臨むが如きは、豪傑者流の事として、君の傚ふを潔しとせざりし處なりし、故に其の己を律する極めて嚴なるも、人を待つ極めて寛に、汪洋たる大海の度量は、常に同志を誡めて之が大成を期せしめたり、今左に君の手記に係る樂善堂規則を示さん。

一般の心得

第一條　我黨の目的は極めて大なれば、任最も重く、道最も遠し。豈に輕進緩慢の能く致す所あらんや、其興廢の關係する所實に尠少に非らず、宜しく深謀遠慮、其蹤跡を愼み、其擧動を重んじて、萬に一失なく、能く其機に投じては疾雷激電、耳を掩ひ眼を瞬くに遑なからしめ、以て其目的を全ふせんことを期せざるべからず、故に自ら顧みる最も重ふして、平常他人に接するにも、勉めて温和叮嚀を旨とし、決して少壯書生がましき擧動あるべからざるのみならず、殊に支那人に遇ふ時は、其擧動を輕くし成る可く談を商業上に移して商人を裝ふ可し。

第二條、各分任の事務を勉むるは勿論、餘閑と雖可成無益の言動を愼み、偏に實力を養成すべきものとす。

第三條、堂員の同志者を二に分ち、一を外員とし、一を內員とし、堂長之を總轄す。

第四條、堂長は常に內外員を督して、其事業の進退に注意し、兼て一般の大勢に注目して專ら其進步を計畫すべき事。

第五條、外員は直に一方に當つて事を處するの重任なれば最も巧に運動して、嫌疑を避け、各分任の目的を果すは勿論、自ら其地方の大勢に注目して、他日の便益となるべき件々は、精究遺漏なきを要すべき事。

第六條、內員は各其分擔の事務に勉勵し、專ら事業の進捗を圖り、兼て諸外員に便益を與ふることを勸むべき事。

第七條、毎年春季に於て、各外員を集め總會を開く、然れ共本堂或は外員の都合に因り、及び堂長或は內員の各地を巡回する時は、之を停止することあるべし。

但、總會を停止する時は、各地の狀況及決議せし件々は、都て之を各外員に通知すべし。

內員概則

第一條、內員は之を分つて理事、外員掛、及編纂掛の三とし、各掛の人員は事務の繁閑

と堂員の多少とに因り、增減するものとす。
第二條、理事は專ら其部下の諸員を督して、本堂商業一般の事務を總理し、其擴張を圖り、以て我堂の運動に便益を與ふることを勤むるものとす。
第三條、外員掛は、常に各外員を通報して、在外幹部の景況を審にし、兼て內外國の大勢より、我堂運動の摸樣に至る迄、萬事外員の便益或は參考となる諸事件を摘報し、各外員の運動を補助することを圖り、且、我が日々の事業大小を摘要して、簡單なる目錄を製するものとす。
第四條、編纂掛は各地の諸報告、及東西洋の諸新聞等より、他日の參考に供し得べき事件を摘要編纂し、且漸次書籍の蒐まるに從ひ此國の內部より始めて終に外部の事に及ぼし、他日の參考となるべき事件を簡單明瞭に摘要編纂すべきものとす。
第五條、都て各內員の一事を處せんとするや、必ず先づ之を堂長に議る可し。
第六條、諸員の服務時間は、午前は四時間、午後は三時乃至四時間とす。
　但日曜大祭日を休業日とす。
第七條、毎日曜日に於て、午後八時より研究會を開き、都て便宜方法を講究するものと

す。

第八條、內員の內一名づゝ每週交代して、當直を務めしむ、之を週番と稱し、週番に當る者は、專ら堂內の風紀を維持し、室內外の不潔にならざる樣注意し、若し不潔の場所あらば直に掃除せしむべし。

紀律嚴正

夜間は、堂內外を巡視して、能く非常を警しめ、十一時に至れば、自ら點燈を携へ、各室の燒火及燈火を消さしめ、諸門及諸入口に錠を下ろし、堂長以下、週番に告げずして十一時迄に歸堂せざる時は、堂內に入らしめざるものとす、週番は堂長の許可なくして、漫に外出す可からず。

週番の交代は、土曜日の午後に於てすべし、其交代せし下番の週番は、其週間に於て各人の勤怠、及物品の保存法、舖所の改良等に意見あらば、之をも堂長に申述ぶべし。

着目遠大

外員の探査すべき心得

人物の部

一、君子

一、豪傑

東洋君子

道之一字君終生本領

東洋豪傑

一、豪族
一、長者
一、俠客
一、富者

右六の者は充分心を盡して其住所姓名、年齢行跡等詳に記載し置く可し、今左に各人物の異同を記して參考に供す。

一、東洋君子の志左の如し

道を修めて全地球を救ふ、　第一等
道を修めて東洋を興す、　第二等
國政を改良して其國を救ふ、　第三等
子弟を鼓舞して道を後世に明にす、　第四等
自朝に立ち國を治む、　第五等
獨自淑して機の至るを待つ、　第六等

一、東洋豪傑の志左の如し

政府を顚覆して新政を布く、

兵を起して一方に割據す、

西洋人の跋扈を懲して國外に逐ふ、

西洋の利器を取らんと欲するもの、

工業を目的とするもの。

軍備を目的とするもの、

商業を目的とするもの、

農業を目的とするもの、

豪傑の行は君子より或は小にして、一方に偏す、故に國を治むるの一器を得て、滿足する者多し、其志多くは道を存する尠くして、功名榮利を主とす、

右の志のみにては、未だ豪傑となすに足らず、其行跡中に左の行跡あつて始めて認むべきなり。

行は人の儀表とするに足る

智は嫌疑を分つに足る、

信は約を守らしむるに足る、
廉は財を分つに足る、
義に處して回らず。
危を見て苟も免れず、
利を見て苟も得ず、

一、豪族、

豪族は古來の名家の後か、或は古來の富家なり。故に豪族の名ある者にして敢て賢ならず、又敢て俊ならず。凡あり愚あり、然れ共多くは人の望を有つて忌まるるもの尠なければ、一人を得て一鄕の人を得べきなり。

一、長者

家富んで貧を惠むを好む、
鄕人を愛して善に導く。
或は學才あり、或は無くして質良なり、
或は其志世を濟ふに在るも大ならず、

侠客

君子の學識なき者に似たり。

此長者も一郷の仰望する所なるを以て、一人を得ば一郷の人を得べし。

一、侠客

侠客は、凡其氣剛なり、然れ共、眞の剛にあらず、私慾あればなり、故に多くは名譽を主とす。且權の道を知らず、是を以て小義大義合せて之を爲さんと欲し、却つて大義を誤ることあり、然れ共、其氣剛なるを以て名利の爲には死を恐れず、故に命を擲て人を救ふことあり、財空ふして人の窮を憐むものあり。是を以て俗人の尊敬を受け、浮薄の徒の仰ぐ所となる、若し其一人を得ば此も亦一擧衆多の人を得べきなり。

君子及豪傑は、先づ其行跡を詳にして、審に其人と爲りを考へ、其志の存ずる所を見、往て其言語容貌を察すべし、而して其相親むを待つて徐に其志の存ずる所を叩くものとす。

此外尙ほ哥老會、九龍會、白蓮會、及馬賊等の匪類あり、今其組織の大概を左に記して參考に供す、此等も共に探査すべし、(以下略之)

其他

調査精細

土地の部、
被服陣營の部、
運輸の部、
糧食薪炭の部、
兵制及諸製造所の部、

等に區分し、山川土地の形狀より人口の粗密、風俗の善惡貧富は固より、被服量秣の微に至る迄、悉く軍隊式に倣り調査せしむることとし、之れが凡例をも明記しあり、後年清國

通商總覽之材料

通商總覽の材料は、多く當時堂中諸士の苦心蒐集せるものに係ると云ふ。

三　當年の回顧

當時君と事を共にしたる同志の士、宗方小太郎、山內嚴、高橋謙、井深彥三郎、中野次郎、井手三郎、緒方二三等、今猶健在して爾來二十年一月の如く、君の志を紹ぎて大陸の舞臺に活動しつゝあり、而して齊しく漢口時代を回顧して懷舊の情に堪へざるものゝ如し、今

漢口時代諸士實歷談

茲に二三諸士實歷談を揭げ其口を籍りて以て君の遺芳を傳んとす。

高橋謙氏の談　余は支那内地を跋渉し、十九年夏漢口に着し、初めて荒尾君に會見せしも、豫定の旅行を終へんが爲め、更に遠征の途に上り、翌二十年春再び漢口に還る、當時の在留邦人は、荒尾君と井深と余の三人の外領事館員二名あるのみ。

同志之招致

同志の招致、其後檄を飛ばして有志の士を招致せしに、相前後して來集せるもの、山内巖、宗方小太郎、浦敬一、藤島武彦等を始め、十餘名あり、荒尾君を中心として、將來の大方針に就き左の決議を爲せり。

同志目的在改造支那

　吾同志の目的は、世界人類の爲に第一着に支那を改造すること。

今日より想ふも荒尾君の言語擧動と云ひ、風采態度と云ひ、自ら同志の中心となるに足るべき充分の資格を具備せしが如く、其人格誠に他に卓越せるものありき。

財源之發見

財源の發見、事業の着手に就き、第一に困難を感せしは、財源の枯渇、否な絶無なる事なりき。同志は何れも志餘りあるも、何分にも君を始め年少の儕輩のみにして、世間に對する經濟上の信用などは、皆無なりしを以て、此に就き非常に腐心せしが、遂に其の方法として、時の漢口領事町田實一氏の後援に依て、委託品販賣規約なるものを制定し、町田領事に依り、農商務當局の手を經て、阪神及京濱間の貿易商より商品の委託を受く

ることゝなし、其計畫稍々功を奏して委托販賣を申込者遽に増加せしより書籍賣藥及其他委托品の販賣より生ずる利潤を以て、旅行及調査の經費に充つることとしぬ。

支部の開設、一般方略定まると同時に、樞要の方面に支部を開設するに決し、取敢へず湖南支部を設けたり、抑も湖南の地方たる長髮賊の亂に當り、淸國中興の企業を翼賛せし曾國藩、左宗棠、胡林翼、李續賓、李續宜、羅澤南、曾國荃、彭玉麟等、の郷貫にして、有爲の人物を輩出せし丈に、風氣も自ら他地方と異なり、支那の將來に對して最も重大の關係を有せしのみか、當時同省は未だ曾て外人の足跡を印せざる地方として傳へられ、歐米宣教師さへ一歩も城内に入るゝ能はざりし程なりし爲め、勢ひ其内情を知るの必要は、同志間に認められ、二十年夏余は湖南を擔當することゝなり、長沙府に支部を開設して、商業及調査に着手せり、間もなく荒尾君の通牒に接し、漢口に還りしが、時恰かも露國が西比利亞鐵道敷設の計畫を發表して、列國の注意を喚起せし際とて、漢口の同志中、此計畫を聞くや、其敷設後の結果を豫測して、一方ならず憂慮する者あり、直に之に對する善後の方策を討議せしが、先づ當面の措置として露國が將來此鐵道に依て、支那及朝鮮方面に勢力を擴大するを絕對に妨害するの必要を感じ、之を爲すには遲くも十

年以内に、支那改造の目的を遂せざるべからざる事を認め、二十一年五月の頃浦敬一に、北御門松二郎、河原角次郎兩人を附し、僅に七百金の旅費を調達して、直に蒙古に向け出發せしめたり、其目的は將來蒙古民族を連合して、露人の侵入に對抗せしめ、而して同志が支那本部に於て改造の任務を完成する迄、露國の干渉を防遏するに在り、同時に四川にも支部の開設を企てたり、蓋し四川の地勢たる、古巴蜀の地にして、支那の西隅に僻在し、別に一天地を劃する關係よりして、苟くも、支那經營を策するものゝ見逃す可からざる樞要地區たるを以て、同志將來の根據地も此地を以て自然の金城鐵壁と選定せり、斯の如く情況調査の必要より、余は新に四川支部を擔當し、石川伍一、松田滿雄、廣岡安太等を率ゐて同地に向ひ、同時に山內を湖南に宗方を北京に分派することとなれり、北京に於ける宗方の任務は、官人の人物行動を探査し、中央の政況調査を主としたり、斯く當面の計畫は急轉直下、大に進境に入り、浦は蒙古に向ひ、余は四川に赴き、山內は湖南に去り、宗方は北京に入る、荒尾君は內外の機務を總理する必要上、依然漢口に留まれり、而して此間に於ける荒尾君の苦心は頗る慘憺たるものありき。

緒方二三氏の談、余は明治二十一年中渡清せしが、時恰かも荒尾君が其抱負を支那大陸

に施爲せんとして計畫の第一程に入りし際なりしを以て、余も同志に加盟して漢口に駐り、君と辛苦を分てり、人も知る如く君の偉材は同人中一頭地を拔き、當時既に暗々裡に統帥の器を以て許されしも、敢て自ら謙抑し、特更に師弟の關係をなさず、誰人にも甲乙なく友人として行動を共にせり、而かも事實上の主動者は、謂ふ迄もなく君にして君は萬事を指揮し、他は其樞機に參與せしに過ぎず、而も今余が語らんとする漢口時代なるものは、實に明治二十一年下半期より翌二十二年中の消息に屬す。

表面之營業

表面の營業、本支部共に樂善堂規約の下に分掌事項を定め、之に從事したるが、各支部員は何れも辮髮胡服して支那人に成り濟まし、雜貨店を開きて商賣しつゝ調査に從へり、營業は勿論利益主義にあらざれば、殆ど居喰の姿なりしが、二十三年に入り種々の事情の爲め漸次支部を引揚げたり。

諸結社之關係

諸結社との關係、漢口時代には、哥老會、其他の政治團體とは別段著しき交渉關係を有せざりし、之は一寸不思議に思はれしも當時は今日と異にして、諸結社の內情、實力等、未だ容易に外人間に紹介せられず、眞價以上に買被ぶられつゝありし際とて、直に君も手出し能はざりしならんと思はるゝ節なきに非ず。

通商綜覽の編纂起源、本部に於ける分掌事項中の諸制度、鑛業、林業、農務通商貿易等の情態調査は、是れやがて清國通商綜覽編纂の起源を爲すに至れり。

同志之招致

同志の招致、本部に於て同志を招致せしは勿論なるも、各支部に在ても、同志を募集して若干を得たり、中西正樹、白須直等も其中に在り、中西は前に緬甸戰爭を觀覽し、歸途雲南地方を巡遊せしを以て、其齎らす所の冒險談頗る饒きを記憶す。

兵學之講習

兵學の講習、余が漢口に入る以前には、君は同志に兵學を教授し、時に假設演習などを試み、以て軍事的智識を普及するに努めしこともありし。

對露策

對露策　露國の南下を防遏せん爲に、同志は頗る腐心せり、遂に本部に於て凝議の末、浦敬一に補助員若干を付し、時の伊犁將軍劉錦棠を說き、其幕僚となりて防遏策を講ずるに決し、二十一年五月浦は漢口を發し、同時に北京支部より、宗方の補助員たる北御門松二郎、河原角次郎と甘肅省蘭州に落合ひ、浦之れを統率して入伊の計畫なりしが、蘭州に落合ひたる同志間に、經費問題に付き議纏まらず、終に南北相別れ、浦は意を果さずして漢口に引揚げ來りしが、次で再舉遠征に決し、藤島武彥を伴ひ、翌二十二年初春更に伊犁に向へり、程經て藤島一人飄然として歸來せり、曰く余浦と共に嘉峪關を越

へ遠く長城外に出でしも、行く行く議論合はず前途到底事を共にする能はざるを知り、遂に袂を分てりとの事にて、其後浦の形跡杳として討ぬべからず、浦は別れに臨み三年間消息なくば余は既に死せしものとせよと言殘せしが、斯語偶々讖を爲すに至れるは、寔に悲むべし。

最後の根據地　支那救濟の大事業に着手する場合に於ては其根據地果して何れに定むべき乎は、唯一の大問題にして衆議巴蜀の嶮に據るに一決せり、而かせんには、猶ほ奥深く内地の地理人情等を調査し置く必要あるを以て、其頃更に石川伍一、松田滿雄を西藏地帶に廣岡安太を雲南、貴州の苗族地帶に分派して、取敢へず牧畜に從事し、其傍所期の調査を遂げ、以て他日の準備を爲さんとし、三子をして各目的地に向はしむ、尤も松田は渡清日淺く清語不充分なるより、石川を介添として同行せしむ三士中廣岡は遂に還らず今に至りて消息なし。想ふに浦と同じく胡人の慘害に遭ひしか。

要するに漢口時代の同志は、皆な年少氣鋭の士の集團にして、誰人も志に厚薄なく、今日より顧れば、其學殖智謀等に於て、或は間然するなきに非ざりしも、至誠奉公の覺悟固く、胸裡一點の雲翳なかりき。

第四章　日清貿易研究所時代

一　設立の計畫

日清貿易

君已に清國內地の情形を審にして、益々東洋局面の危急を憂ひ、焦心苦慮、之れが救濟の策を講せんとし、遂に日清貿易に從事すべき、適當の人材を養成するの必要を感せり、謂ふ、泰西諸國の東洋に對する、虎視眈々以て時機の乘ずべきを待つ、東洋に國するもの今に及んで之れが防衛の計を立てずんば、邦家の安危實に測るべからざるものあり、然りと雖も富强ならざれば、東洋の衰運挽回すべからず、日清提携せずんば西力の東漸阻遏すべからず、日清の提携と富强とを圖らんには兩國の貿易を振興するに若くは無し、然るに兩者の貿易萎靡して振はざるは、全く彼我の狀勢を詳にせざると、貿易に從事するもの適當の人材を得ざるに因る、故に之が救濟の策たる、人物を養成するより急なるはなしと、是に於てか同志の諸士と謀り、日清貿易研究所を上海に創設するの案を具し、二十二年四月を以て歸朝せり。

黒田松方諸公之贊成

君歸朝、先づ之を在朝の有力者に謀る、黒田清隆總理大臣たり、松方正義大藏大臣たり、岩

朝野之贊同

村通俊、農商務大臣たり、而して前田正名農商務次官たり。何れも君の案を見て其擧を賛し、其志を壯とし、其成立を補助せんとし乃ち君が遊說に便ならしめん爲め、各府縣知事に對する紹介書を與へたり。是に於て君は全國を周遊し、備に東方の實勢より、日清貿易振興の急務を說き、先づ之が順序として、人材養成の必要を述べ、到る處官民歡待して君の演說を聽て、大に警醒する所あり。蓋し君が渡清せしより既に三年國會の開設眼前に迫れるの當時に在ても、猶ほ海内徒に歐洲の文物に心醉し、敢て東洋の情形を顧みるもの稀に偶、人の清國の事を說く者あれは、衆皆以て迂となし、敢て之を意に介せざりしが、一旦君が全國を周遊して剴切痛快、彼我の情勢を說き、方今の急務を論ずるや、始めて對清思想を喚起し、爾來兵事に國交に、將た政治經濟に、多く東洋の局面に着眼するに至らしむ

警醒朝野、喚起對清思想

廿七八年戰捷之基

所謂知レ彼知レ己百戰百勝の基を爲したるは、一として君の賜にあらざるはなし。

當時君が隨員たる井深彥三郞等の筆に成る、各府縣巡廻日誌を見れば、君が到る處如何に歡迎せられ、如何に對清思想を鼓吹せしかを想見するに足る。而して君の計たる、固より區々一研究所の創立にあらずして、即ち日清貿易協會、同研究所、成立の曉には、更に一步を進めて亞細亞協會を設立し、之に亞細亞貿易研究所を附屬し、其研究生を普く亞細亞

興亞之大計

各國に採り、協會の支部を亞細亞各要地に置き、以て亞細亞の商權を掌握するの階梯となし、興亞の大計を策せんとするにありき、今茲に二十二年十二月博多に於ける、君が演說中の一節を抄出して、之を證せん。

私は全體軍人にて參謀本部に奉職して居りましたが、抑も參謀本部なるものは、一朝海外と戰端を開くの時に當りては、攻守共に其軍略を運す至重の府なれば、此れに奉職せる私は、常に軍機の懸引上に苦慮する所ありしかども、前に陳べたる如き國勢なれば、進んで攻るにも退きて守るにも、如何にも胸算が立兼ました、依りて軍備擴張に意を用ひ、精密の調査を遂たるに、不充分ながらも、今後十年間參千萬圓宛の支出を仰がねば、其準備上覺束なき算用なり、併ながら日本當時の身代では、兎ても此支出は六ヶしく、我

天皇陛下に於せられては、軍備上に關しては殊の外　宸襟を惱し給ひ、已に去る頃、御手許金を御下賜相成て、海防の費途に充てさせられ、尙又忠愛熱心なる朝野の紳士も、聖意の在る所を奉體して、各々義捐の擧はありたるが、まだ以て充分の軍備を張るに足りませぬ、そこで私も大に考ふる所あり、外國に對等の力を有し、我國威を擴張するには、商工業の發達を謀り、外國より金錢を引入るゝの手段に越す者あるべからずと考附

き、私も單に現職に從事し、洋劍を佩び、肥馬に跨りて、一時の外觀を衒ふに過ぎませねば、遂に軍人社會を脫し、商工業者の御中間入をして、商工業の周旋役とは身を變じました、扨て斯く變化しました處で、我日本は天與の商工業國なり、我人民は商工業により適當せる智識を有するものなり、之れを發達せしめて、其目的を遂ぐるの端緒は、何れよりして可なるべきやと、此點に就きて、又大に考案を費す所ありしが、倩々思ふに歐米各國の如きは、人民生活の度、遙に我國の上に位し、其習慣風俗も異なり、且つ美術の發達せる國々なれば、彼に劣りたる我力を以て、通商貿易を試むるも、其利益決して期すべきにあらず、之れに反して西隣の支那國は、風土人情より百般の關係、總て我國と類似し、且つ道程の遠近、固より歐米と日を同うして語るべきにあらざれば、所謂易より難に進むの順序を踏みて、茲に斷然日淸貿易の務むべき理由を得、飽まで之れを完備せしめんと奮起したる次第であります。

然るに從來我國人にして、支那貿易に關係せしものなきにあらざるも、一人として其利益を博したる者とてはなく、大抵失敗破產の淵に沈み、日淸貿易に從事するものは、早

三問題

晩敗北の覺悟なかる可からずと云ふの有樣を呈しつゝある折柄なれば、其何に因りて然るかを研究せんが爲に、私は三箇の問題を持して、以て明治十八年に始て支那に渡航いたしました、其三個の問題とは、一に曰く日清貿易に從事せし人は、何故に斯く失敗を招きし乎、二に曰く支那商人の技倆は果して如何なる所ありて、以て我が商人に優る乎、三に曰く從來の失敗を將來に挽回するには、如何なる手段に依賴すべき乎、是の三點なり、そこで此の問題を研究せんが爲め。私は渡航早々支那の內地を跋涉し、多少の艱苦を嘗め、而して如上の目的を達せんには自から商店を開き、商業に從事して、徐に經驗を積むに如かずと思考し、それより同國の中心、即ち我國で申せば大阪とも云ふべき、湖北省の漢口を相して、支那國との直接交商を營み、二年過ぎ三年を經、遂に本年に至りて彼の問題に付充分の經驗を得ました、依りて去る五月に歸朝し、朝野の紳士に說くに、我が經歷並に將來施すべき設計を以てしたるに、孰れも大に同感の意を表せられ愈よ明年より實施する事として。斯く各府縣の要地を歷巡し、諸君と親しく相見るを得て、御相談をなすの運とはなりました次第にて、是れより私が數年に實地研究せし要點を逐一に說明致しませう。

扨て私が研究したる第一の問題、即ち從來日清貿易に關係せる日本人が、概ね蹉跌したる原因は、何れにあるかと云ふに、日本人中同地へ渡航し、支那人と直接に貿易を試みるに適當の資格を備ふるの商人なきに歸せねばなりませぬ、元來支那には銅錢の外は通用貨幣の制あるにあらず重なる貨物の賣買は凡て金銀塊を削り、其量目を以て融通に充るの慣習ゆゑ、商業に當るには、其金銀塊の性質から鑑定して行くの眼識なき時は、同量たりとも價値に至り、大變の等差を生じます、其他度量衡の如きは、最も錯雜を極め居れば、其間に處しての懸引、且つは其風俗慣習より通辯對話に至るまで充分心得て後、始めて之れに當るべく、左なき時は、隨分無法の商法であります、併し從來の日本人は之れを能くすることが出來ませぬからして、故に先づ支那人を雇ふて、之れを番頭に使ひますが、凡そ何れの國を問はず、雇人たるものは、其主人の爲に忠義を盡し、自己の責任を缺かざる樣、立働くが普通の事情にて、支那と雖も亦た然り、それに肝腎の主人と雇人の間、言語は通せず、事理は不分明なれば、動もすれば番頭善をなすも、主人却て之を怒るが如き變相を呈し、賞罰其當を得ずして、番頭又た番頭たらず、其忠勤は忽ち變じて詐欺騙取の策を構へ、遂に主家をも覆すの場合に瀕しては、主人は獨り豫想外

の失敗に驚くこと、是迄の通例でありました。

猶支那内地商業上の實際に就て、委しく述るならば、支那十八省の一たる四川省とせよ、幅員は日本に二倍せるの廣大の土地を有するを以て、其風俗慣習も、種々異様に出で、決して同一の觀を呈せず、其遠近の便不便に至りては、大に趣を異にし、陸運の極めて便ならざる土地なれば、大河に沿うて水利は殊に自在なる部分もあります、又支那人の性質と云へば、時好を追ひ、流行に奔る等の事は毛頭も之れなく、十年過ても百年經ても、慣習は依然と存し、更に少しも動かぬのが奇妙であります、譬て申さば、今此の机上のコップにしても、深きを賞する地方もあれば、淺きを望む地方もありて、其嗜好に至りては、百年以前と百年以後と、矢張り同一に出るを以て、何品にまれ、一度び信用を博する時は、爾後百千年と雖も、決して其聲價を墜すの憂なし、丸で歐米各國文明人とは、正反對に出る姿なれば、此れと云ひ彼と云ひ、我日本人は此機に乘じ、彼の支那國の信用を得、永久我物産を輸入するの好得意先を造るの事に、孜々汲々以て勉めねばなりませぬ。

次に支那人が物品を仕入るゝ上に就て申せば、彼等は一年の仕入時を二期に別ち、正月

より六月までを前半期とし、七月より十二月までを下半期として、前半期内に贖ふべき物品は遠きは前年の十月上旬より近き地方と雖も、十二月十四五日比までに、大抵其仕入を畢るを例とす、後半期の分も、之れと同じく、前半期の四五月より仕入に着手するの慣例であります、其仕入地は、上海又は漢口等が重であります、去れば此の仕入時を謬らず、物品を揃へて彼等を待つにあらざれば、到底旨い譯には行ぬに、是迄の日本人は、大體此等の機を誤り、前半期に拘る仕入品は、漸く其期の半比に積送り、後半期でなくては叶はぬ物をも、更に頓着せぬなどの事ありて、遂には失敗を來すに至る、之に反して日本在留の支那商人は、孰れも此の掛引に注意し、機を見て敏捷に立働くが故に、愈愈我國人は之れと競爭する能はず利する所なくして、詰り倒るの外はあるまい、畢竟その原因を探れば、我商人は日清貿易に關し、支那商人と對立して競爭し得るの資格を有せぬからの事であります。

次に第二の問題なる支那商の估價に關し、日本人が一己の私利に眼眩みて、公益を顧みず、一時の便宜から彼等に安賣をして、爲めに物價の權衡を失する弊害に說及ぼす積りなるが、此れに就ては、餘程錯雜したる談話に涉り、此席の學生諸氏へ向ては、左のみ

必要的の事にあらず、依りて只物價の權衡を失せぬやうとの大要に止めて、第三問題に移ります。

扨て第三問題たる從來の失敗を挽回するの矯正策に轉じますが、此矯正の方法と申しまするは、必竟失錯の原因が我商人に資格なき故なれば、之れから彼等と對峙し得る、資格の人物を養成するの方法如何と云ふに至つては、頗る考案を要する次第にて、或る人は上海に一の商業學校を起すの利を説きますれど、私は元來軍人にて自分の職業上から考ふるに、商業と戰爭とは、徹頭徹尾相似たるものに相違ありませぬ、然るに軍事の掛引は、敎育よりも寧ろ實地にあることにて、今我陸軍士官學校を卒業したる人あらんに、成る程學理上にては、天晴れの大將軍なれども、其兵を率るには一中隊はおろか、一小隊も六ヶしい事であります。此點より見る時は、商業と雖も、單に其學校にて業を修めたるのみにては、決して適當なる商業運動をなす事は覺束なし、どこまでも實地に當り、現物にて苦心する所なくては、差當り役に立ちませぬから、學校設置も妙案には相違なきも、第二に讓り、いよ／＼充分に思案を凝らせし所にては。

上海へ日清貿易協會を設立し、其分社を漢口に設け、以て日本內地の物貨を陳列して、之

れが販路に就きては、大小共に同商會にて斡旋する事とし、其傍に日清貿易研究所と名くるものを附設し、之に日本有爲の青年、其數概略三百人を選みて入所せしめ、各物品の取引に從事する傍に、支那語英語の研磨より、金銀銅の鑑定、度量衡の使用、各地の風俗人情より、當用販賣の掛引に至る迄、凡そ日清貿易に關するものは、細大漏さず、實地に練習せしめ、以て相當の人物を造出することに決しました。

此等の青年が充分其發達を來すの日は、先づ三箇年と假定し、首尾よく業成るの時は、猶一箇年間支那內地の旅客として、要港其他の巡視を命じ、我國產の販路等に就き、大に視察せしめ、之れをも卒へたる所にて、始めて免狀を附與す、夫よりは歸朝して事業に當るもあるべく、又た社員として運動を試むるもあるべし、但し右の免狀を所持する向は、內地に在りて軍役に服せしと同前なれば、政府は他日此種の人に限り、現役を免除するの特典を與へらるゝこともあらん、斯る設計にて、今より四箇年の後は、始めて適當の人物を得て、我日本の經濟に、一大關係ある日清貿易の直輸出入を眞正に實行するの運とはなりませう。

以上の計畫にして、果して成功を見るの曉ともならば、是よりは更に一歩を進め、亞細

亞貿易協會を設立して、之に亞細亞貿易研究所を附屬し、總ての手續きは、日清貿易協會、並に日清貿易研究所に於けるの順序を以てして、其研究生を日本人のみに限らず、普く亞細亞洲內の諸邦、即ち支那朝鮮安南暹羅緬甸印度等より、俊秀の青年を募り、其學期は前同斷三箇年として、各港輸出入の取調より、各地の物產研究等をなさしめ、卒業の上は、初めて實地の演劇に着手し、各國共に亞細亞貿易協會の支店を置き、右の支店には必ず日本人一名を添へ、其國の研究生と共に運動せしめます、畢竟今より八箇年目即ち明治三十年には、外は我國旗が亞細亞の各港に飄し、內は殖產興業の發達するありて始めて我日本の國威を海外に耀し、一國經濟の基礎を鞏定し、亞細亞貿易の牛耳を執りて、東洋の英國たらしむるを得ると得ざるも、此生徒の奮發如何に在りて判ずる儀なれば、其身體も强壯ならざる可からず、其精神も堅忍ならざる可からず、斯る生徒を得んとするに當りては、素より單に一片の廣告に依賴し、座して其人を得んとするが如きは、決して策の得たるものにあらずと自信し、之れが爲めに私は斯く內地を巡廻して、生徒募集に奔走する所であります、故に農商務大臣も、態々各府縣知事へ照會下されたる程にて、今日此所に諸君と相見るの榮を得ました、就ては諸君に於ても、國家將來の

川上桂兩中將斡旋最力

爲め、大に奮起せられ、此の擧を賛し、此の募集に應ぜられん事を希望の至に堪へませぬ。

翌二十三年四月、君周遊を終へて東京に歸るや、天下有爲の青年、其募に應じて研究所に入らんとする者、無慮三百餘名、當時參謀次長川上中將陸軍次官桂中將斡旋最も力められ、體格檢査の如き、陸軍病院に於て之を行ひ、警官練習所に於て、學科の選拔考試を爲し、百五十餘名の選良を得たり。又是より先き、第三回勸業博覽會の開催を機とし、木挽町厚生館に、日清貿易研究會なるものを設け、貿易に關する物貨を陳列し、廣く實業家の縱覽に供したり、今や庶般の準備漸く整ひ、渡航日ならんとするに方り、忽ち非常の困阨に遭遇せり即ち資金調達の蹉跌是なり。

岩村大臣前田次官

二　資金の調達難

研究所の創立を圖るや、臺閣諸公大に之れを賛せられたるは業に既に前述の如くにして、事の商務に關するを以て、岩村大臣前田次官の如き特に力を盡して其の成立を援助せられ之れが資金として、北海道に在る十萬圓許の山林を拂下の名下に下附せんとし、時の商工

局長齋藤修一郎の如き此間にありて熱心盡力し、事將に成るに垂んとし、山林拂下規則に照し反對を唱ふるありしも、未だ其內議を飜すに足らず、加之ならず榎本文部大臣の如き亦た熱心なる贊成者にして、部下の技師をして、學校令に適合せる校舍の設計圖案を作成せしめ、之れが敷地としては、上海對岸浦東の、海軍貯炭所用地を以てせんとす、斯く學生は既に集り、資金調達の約殆んど成り、校舍の設計敷地の選定等に至るまで悉く好結果ならざる無し然るに意外にも一大故障は起りぬ、即ち岩村農相腦を病んで冠を挂け新に米國より歸朝したる無關係の陸奧宗光之れに代り、前田正名亦次で野に下る、是に於て山林拂下の可を唱ふる者只齋藤修一郎一人あるのみ而して遂に反對を主張せし、山林局長の意見終に勝を制するに至りしこと是なり、

然れども陸奧大臣は、君に告げて謂へらく、余は君の事業に對して固より大贊成なるも、唯山林の一事は、規則上之れを許す能はず、然れども資金調達の如き余別に妙案あり、今や國會將に開かれんとし、國有財產を舉げて悉く調査登錄するの際なれば、國民の承諾なくして增減する能はず、幸に陸海軍に古武器あり、未だ登錄せられず、今其一部を賣却せんか、五萬、十萬の資金何かあらんやと、君厚く其好意を謝し熟考の上回答すべき旨を告

處此苦境不苟取與行義全道有此本領可始說與亞之大計、偉人哉、偉人哉、

至誠感天

げ歸りて之れを根津一に謀り相議して曰く、我國常備軍極めて少なく從て武器も亦餘裕ありと云ふ可からず一朝國難の起るあらば古武器と雖も必要の起るや必せり、我等軍人の身を以て研究所を起すは、國家の爲めに盡さんと欲するのみ、而して今此重器を以て其の資に充てんか、萬一の時に至り我等は何を以て天下に對ふべきや寧ろ斷然之れを謝絕するに若かず、終に陸奥大臣に見へ之れを辭す、嗚呼此の苦境にありて猶ほ大義を論じ取與を苟もせず古の所謂一不義を行ふて天下を得るも爲さゞるの槪あり。

夫れ進んで事を果たさんか非義に陷らざるを得ず、退て再擧を計らんか、信を天下に失し百五十餘名の志士を誤らんとす、若し常人をして此間に處せしめば進退其度を失するや必せり、而して君泰然自若毫も辭色に形はさず遂に非常の大決心を以て一條の活路を開き纔かに創立の費を辨じ渡航の準備を了するを得たり、而して職員生徒等は異數にも宮城の拜觀を許され有栖川大將宮殿下は榎本文相川上中將等を隨へて研究所に親莅し特に一同に謁を賜ふ、職員生徒等感泣奮勵して報効を期せざるはなし。

三 開校

開校式辭懇篤周到言々出ニ肺腑一

九月二日、君は職員生徒約二百名と、横濱を出帆し、九日春申江頭に着し、先づ領事館を訪ふ、鶴原領事(定吉)歡迎の演説を爲す、前に派遣せる委員高橋謙等の準備に成る英大馬路泥城橋畔の假校舍に入り、同二十日を以て開校の典を擧ぐ、君の式辭に曰く。

我國貿易の道開けてより四十年、外船の來りて我港に出入するもの年に多きを加ふ、有無相通ずるの道、益々盛なるに至るや應さに遠きに非るべし。然れども各國對峙輸贏相制するの秋に際し、世界の經濟をして重きを我國の一擧一動に措かしめ、商業の全權を收めて我掌中に歸せんと欲せば、必ずや東洋を凌駕し、歐米を睥睨し、嚴然として商權を洋の東西に振ふの素を養はざるべからず、我國の志士、苟も國家經濟の前途を慮るもの、亦皆此に見る處なきに非ず、然れども我國維新以來日尚淺く、瘡痍未だ癒へざるに、國家の多事なるに遭遇し、士民殆んど奔命に疲憊し、空しく此の志を抱いて果たさゞるもの幾何ぞや、其極實業の方針鞏固ならず、遂に姑息一時を苟偸するの弊習を釀成するに至れり、余久しく淸國に遊び、彼我貿易の大勢を視察し、歸朝の後、各府縣を周遊し、大に感ずる所あり、曰く此の勢を振はんと欲せば、須らく先づ其の本を治めざるべからず、本とは何ぞや、外は貿易の大勢に通曉して、輸贏を未然に決するの素を養ひ、内は

國產の不振を興して、實業の方針を鞏固ならしむるの道を開く是なり、此の本治まらざれば、此の姑息遂に改むべからず、此の姑息矯むべからざれば、豈能く外貿を製肘して商權を振ふを得んや。此に於てか不敏を顧みず、遂に貿易研究所の設立を企つるに至れり。

此擧幸に世の容るゝ處となり、有志諸士の賛助と、所員諸氏の黽勉とにより、遂に期年ならずして起業の功を成すことを得たり、余諸子と共に。父母の國を去てより二旬、內外の準備略ゞ整ひ、玆に明治二十三年九月二十日を以て、開所式を擧ぐるに至れり、此擧に際し、余は預め諸君に請はざるを得ざるものあり、夫れ淸國は鄕土を離るゝこと遠からず、僅かに一葦帶水の間のみ、然れども今諸君父兄の心情を沈思するときは、割くべからざるの慈愛を割きて、日々怡々たる顏貌を見ること能はざるの悲哀を忍び、奮然として諸君を海外に遊ばしむる所以のものは、是必ず大に此より忍びざるものあるに非るを得んや、今日我國商業の狀勢を見る時は、猶彼の糟糠の間に苦めらるゝ疲馬の覊なきに非ず、汲々として尙食に飽かず、常に命を外商に受くるの辱に遇ふ。諸君に許すに此の行を以てするものは、彼を以て是に易へ難ければなり、今よりして後諸君負ふ所の任

豈に重からずや、若し他日其任に堪ゆるの材を爲さずんば、諸君何の面目か有て國に歸るを得ん、請ふ能く父兄の意を體し、寤寐の間も必ず之を忘るゝ事勿れ、旣に設立の趣旨を陳べ、亦諸君の注意を乞へり、希くは諸君旃を勉めよ、我國經濟の現況は、朽索の千鈞を引くに似たり、今此の頽勢を挽回し、富强の基を開かんとせば、必ずや商權の恢復より急なるはなし、商權の恢復は、彼我貿易の大勢に通ずると、實業の振作とより急なるはなし、而して此の責を負ふものは、諸君に非ずして誰ぞや、諸君今より俛焉其の業に勤め、他日業成るの後、各其長ずる處に從て、旣成の材を奮はゞ、歐米を叱咤し東洋を風靡するの素も、此に始めて其萠芽を出し、本所設立の業も亦徒勞に屬せざるを得ん乎、今開所式を擧ぐるに當り、暫く諸君に望む所を陳ぶること此の如しと云爾。

明治二十三年九月二十日　　荒尾精

四　教育の精神要旨

若し夫れ教育の精神要旨に至りては、君が式辭に於て其一端を洩せる如く、東亞の商權を掌握すべき原動力を養ふに在れば、自ら尋常一樣の立言に非らず、而して生徒に期待する

所レ期遠大

教育之精神

所亦從つて大なりき。今左に之を擧ぐれば。

敎育の精神

先づ我が嘉永以降、世運の爲に誘化養成せられたる、最も淺薄なる所の成見迷心を洗滌除却し、此東洋ある以來、深く其秀靈の江山風物と相因緣して生じたる、我固有の天眞を喚起し、之を歐洲形而下の長所に傳へて、其れをして益々自ら其活動を靈妙ならしめ、以て大に我が事に利用されしむるを主とし、務めて常に無形ありて然る後能く形を形するの旨を失はしめず、感化陶冶、恰も島國狹少の池魚を轉じて、汪洋たる大陸の江湖に潑剌たらしめ、居以て其氣を移し、之が規局をして益々發達濶大ならしむるが如きの意を體し、其前途責任の重且大なるを說くに當りては、常に必ず聳然身自ら現に其地に在り、既に夙に全然之を負ふの思あらしめ、始終薰陶の意を推擴して、孜々自ら之が活用を鍊磨し、經綸の才幹に富み、自立の氣力に豐かならしめ、最も公同協成の大局に通達せしめ、精神を琢勵振作し、忍耐力を強大堅固ならしめ、重きを德育に置くと雖も、亦必ず厚く力を其智育に致し、宏遠模稜に失せざる區域內に於て、勇敢敏捷廓通精緻の體用を全たからしめ、必ずしも遽かに一物事に巧小ならしむるを要せず、以て漸く各々或は其

長ずる所を執り、或は其愛する所の事に從ひ、假令處を異にし事を同うせざるあるも、然れども其所志の方向に至つては、始終一轍河嶽と悠久、或は親しく相提携し、或は遠く相應援し、其勇敢なるは怒濤疾電の如く、其不屈不撓は長蛇の如く、先づ人情の近づき易き卑近の實際より入り、黽勉經營、依て以て終に必然の理勢を制し、臨機應變、東洋の乾坤に誓つて特色の一新紀元を創し、靜かに彼我均霑の福利を享有するに至らしめんとす。

教育之要旨

教育の要旨

理想に流るゝときは、實際に疎く、實際に泥むときは、固陋に失するの弊なき能はず、是教育の難き所以なり、本所生徒の教育は、專ら日清間の貿易に資するの事項にありと雖も、素と貿易なるものは、其活用巧拙如何に由り、小にしては一家の産業を誤り、大にしては國家の經濟に關係するを以て、其生徒の養成に於けるや、實際を旨とし、着實を主とするは勿論なりと雖も、亦能く必然の理勢を推し、能く之を活用せしむるの能力を養成せしめざるべからず。

我國維新以來の大弊は、信用地を拂うて滅びたる是なり、夫れ信用なるものは、各自の

交際に必要なるは勿論、商業社會に在りては其盛衰一に此に在りと謂ふも不可なかるべし、而して此信用なるものは、自ら信ずるにあらざれば、人之を信せず、人之を信せざれば、己れ亦人を信ずること能はず、相欺くの端、遂に之より生ず、故に本所生徒の養成に於けるや、務めて節義を尊び重んせしめ、必ず其言を食まざるの素を養ふべし。

人氣宇濶大ならざれば、錯節に當り難く、剛毅ならざれば、久きに堪ゆる能はず、我國將來の貿易を盛大にし、國家經濟に資せんとせば、其業の運行上幾多の艱難に遭遇するや知るべからず、此時に當り、氣宇跼蹐、小事に狼狽し、挫折其任に堪ゆること能はずとせば、其學ぶ所將た何くに施さんや、是本所生徒の養成に於けるや、務めて其氣宇を汪洋濶大ならしめ、其精神を砕勵して、剛毅不撓の性を具へしめざるべからず。

其周到は一小事と雖も、忽にする所なく、所謂精緻の性を必要とすと雖も、亦其志を宏遠にし所謂功を全局に收むるの性を養成せざる可からず。

生徒成業の後、各所に散在して將來貿易に關する産業の道を開き、我國貿易の一大隆昌を計らんとせば、實業家をして能く相結合協力せしめざるべからず、然るに實業家の間に立て斡旋し、之をして能く結合協力せしむるは、一に生徒の和緝能く其衆心を收むる

に在り、此故に本所生徒の養成に於けるや、人自ら之を畏愛し、之に歸依する、溫良の性を發達せしめずんばあるべからず。

之を要するに、人の性相異なること、各其面の如く、其材能に於けるも、所謂尺も短き處あり、寸も長き所ありて、相同じからざるべしと雖も、必ずや其用ゆべきの一德なくんばあらず。

以上列擧する所の如きは、將來其業務に必要なる大體を示すに過ぎずと雖も、苟も陶冶の任に當るもの、各其長ずる所に從つて之を誘掖涵養せば、庶幾くは其正鵠を誤らざるを得ん。

君は此の如き精神要旨の下に、嚴重なる規律を制定して、必要の學科を教授し、孜々事に從へり、其初め清人は半ば疑を抱き、目して日東の兵員となし、之を疑懼するものあり、特に風土の變よりする疾病の襲來を防ぎ、健全なる衞生狀態を保維せしめん爲め、跑馬場を借りて操練を行ひ、又は柔道擊劍等の武術を奬勵せしを以て、益々其疑を深うするの傾向あるを遺憾とし、一時此等の操練を廢し、武術をも中止し、同時に内外官紳及新聞記者を招きて授業を參觀せしめしより、漸く其疑を解き却つて此擧を壯とし、新聞紙上亦之を傳

稱するに至れり。

五　財政の苦境

一難過ぎて、又一難來る、曩に非常の苦境を突過し、終に開校の運に至るや、生徒の多くは異郷の風土に慣れずして、流熱に罹る者續出し、校舎は一時病院の觀を爲し、第二の財政難は起れり、既に創立費に窮乏し、基本金の準備なきのみならず、病者續出の爲め、豫算外の支出を要し、財政難の起るは當然のことゝ謂ふべし。是に於てか君は一方に於て日清誘導商會を設立せん爲めと、他方に於て初期議會を機とし。朝野の間に奔走して善後策を講ぜん爲め、根津一を漢口より招き校務一切を委任し其年十一月初旬歸朝せり。

苦境可レ想

然るに第一議會は自由改進兩黨、合同して政府に肉薄せんとしつゝある際なりしかば、政府は其鋭鋒を避けん爲め、豫算の大削減を行ひ、爲めに豫約の補助金も不履行に終れり、此報の上海に達せしは、十二月二十八日薄暮なりしが、金庫中僅かに一弗數個の現金あるのみ、列國環視の裡に在りて一百五十名の生徒を擁し、空手以て異郷第一の新春を迎へざるべからざりし職員諸氏の苦衷果して如何んぞや、況んや、此實情毫末にても院内に漏泄せ

んか、士氣沮喪し甚麼なる事態を醸出するやも測られざるに於てをや、幸ひ同地の商賈三箇月支拂の商習慣あるを以て、之れを利用し最も盛大に佳辰を祝せんとし、種々の裝飾を施し準備を整へて、續々入り來る在留民の慶賀を迎へ、祥雲瑞氣轉た濃かなりき。左れど眼前に横はる困難は、之れを排せざるべからず、依て新年早々漢口樂善堂の信用を籍り、三箇月拂の約束を以て苧麻を買入れ、三井洋行に依頼し荷爲替を附して上海にて即金を得、纔に事きなを得たり、纔に事なきを得たるも時正に沍寒、娯樂の以て身心を嬉ばしむるものなく、四顧の光景亦寂蕭たり、而して學徒の志望或は眞の對淸貿易業者たらんと欲する者、或は徴兵忌避の爲め入學せる者、又學科に不滿なるもの、職員に不服なるもの等ありて衆意動搖し、遂に瓦解するに至らんとするの勢あり、君事態の急を聞き、輙ち商會設立の企てを擲て上海に歸る、實に二月十五日なり。

果斷之改革、大開ニ生面ー

君諸生を會し、先づ本所設立の本旨を申明し、永く留りて修學するを欲せざる者は、直に申出づべしとて、親しく其志の存する所を問ふ、去らんと欲するもの約三十名に退學を命じ、而して一方誘導商會を廢絶し、其調査部は之を研究所に移し、商會部其他を解散し、所員の冗員を淘汰し、經營慘憺一大改革を斷行し、校舍の市內に在るを廢し跑馬場前の洋

屋に移轉し、長崎商業學校長たりし、猪飼麻二郎を教頭に聘し、教務を改善し人心漸く定り校紀大に振ふ。是に於て十月三日、創立一週年記念會を張園に催し、內外の紳士淑女を招待して、大に前途を祝す。

六　淸國通商總覽と會匪滋擾

歲月流るゝが如く、明治も二十五年に入り、學生の卒業も亦た一年の後に迫る、而して此等の新人材をして、日淸兩國通商の舞臺に活動せしむるには、先づ我邦人に淸國の實狀を紹介すること必要にして、其手段の一は大著述に在り。淸國に關する書を公にし、淸國の有要を鼓吹唱導するに在り、是が爲め多年同志の士が採收せる資料及古今の群籍に據り、淸國通商總覽の編成に着手し、八月に至り之れを刊行せり、本書第一編は之れを天地の二冊とし天の部は商業、地理、庶制、運輸、金融、交通、生業等の諸門に分ち地の部は太古より現在に至る。支那一般の商工業及農事を概論し、第二編は工藝品、陸產物、海產物等の諸門に分ち、あらゆる商品に就き之れを詳述せり。其紙數二千頁に及ぶ、此書出でゝ、世を稗益せる所多かりしは、普く世人の知る所余復た之れを贅せず、根津一當時の苦心を

語りて曰く。

材料は荒尾君、曩に漢口に於て心血を注ぎ蒐集せるもの、積で山の如く其統一を托せられたる爲め余專ら之れを整理し、又之に意見を加へ、一方には直に之を印行して、支那を世上に紹介し、研究所の存在を世に表はし、以て第二の計畫たる商品陳列所を建設せざるべからず、故に此大著述を、遲くも六箇月間に完成するの要あり、其頃余は頗るの大酒家なりしも、絕對に禁酒を守り、一切の事務を敎頭に委任し、樓上の一堂に閉居せり、洋室なれば、洗面所あり、便所あり、一週一回、室外に出で、職員等に面會するの外常に室內に蟄居し、毎晚二時に至る迄、鉛筆を以て走書し、二三人の書生に命じて淨書せしむ、朝も食事に時を費すを惜み、鷄卵四箇と牛乳二合とを用ひ、晝夜の二食も之に準じ、一意專念復た他を顧みざれば、容易に人に狎るゝことなしと云はるゝ鼠迄も、狎るゝに至り其鼠は漸々に增長し、次第に膝の邊に進み來り、遂に身體に上り、背中を走り肩に上るに至れり、此鼠は後に編輯終りても數匹の兒鼠と共に尙ほ時々顯はれ來り、客ある時には菓子の類を與ふれば悅んで含み去りしと。

同年夏哥老會の徒、長江一帶を騷擾して勢猖獗を極め、爲めに沿岸各埠在留の外人、難を

哥老會之徒、騷擾ニ長江一帶ニ、

組ニ織義勇隊ニ、

深知ニ哥老會之無レ爲ニ不レ入ニ義勇隊ニ、

高ニ邦人之品性ニ、

上海に遁け、上海も亦人心恟々、日暮行人を絶つに至る、外人相議して、義勇隊を組織し、以て萬一の變に備へんとす、當時邦人の上海に在るもの、男女老幼八百名其中百餘名は研究所の壯年者にして、兵式操練に熟達せるを以て、義勇隊より頻りに之が加入を勸め來れるも、所員は彼れ哥老會の爲すなきを知り、出入平日に異ならざるのみならず、別に自信する所あるを以て之に加はらず、是に於て外人等は忽ち疑を挾み、或は哥老會に通ずるものならんとし、新聞を以て攻擊するに至る、鶴原領事之を憂ひ、自ら馬車を驅りて來訪懇談して曰く、研究所今や中外疑心の集中する所となる、願くは義勇隊に加入せられよと、されど頑として應せず、曰く我研究所は、日本中流以上の子弟を集め、貴重なる教育を授くる所なり、其心身と光陰とを妄りに費やす能はずと、然れども其の疑惑の愈々深からんを慮り、一書を義勇隊長に送りて、此旨を告げ、且つ曰く既に居留地に在りて居留民諸君の恩惠に預るや大なり、今我校は德義を重んずるを以て精神とす、若し一朝眞に急變あらば、必ず全力を振ひ單獨事に從ひ、以て居留民たるの本分を盡くすべしと、是より內外人始めて疑團を氷解したるのみならず、益々我に信賴し、各西字新聞亦嘖々之を傳へ、其言の禮あり義あるを稱す、是に於て大に研究所の價値を上げたるのみならず、延て我邦人の品

師弟厚誼當世罕レ見、

起華旣見二至情一、師弟同體誼如二父子一、

曰諸子健全、曰諸子忍勉、任重道遠、諸子豈得レ不二相勵一

位を高めたり、而して哥老會は遂に大事を爲す能はざりき。

七　師弟の厚誼

時に君歸朝し、東西に奔走して劃策に餘念なかりしが、念頭一日も滬上の同志を忘れず、特に師弟間交誼の厚き、士道の衰へたる當世に於て見るを得ざる所とす、學徒の君を慕ふや父の如く、君の學徒を思ふや、骨肉に勝る、以て君が德化の大にして統帥の器を具するを窺ふに足る、余は今玆に君が書翰の一二を公にせんとす。

嗚呼白駒匆々我を待たず、前後已に四旬を經過せり、諸子幸に恙なきや、否、霜朝風夕、誠に相思ふの情に堪へず、頃日根津代理所長より諸子考試の細報に接し、親戚諸子奮勵の結果を知るを得、千萬感悦雀躍之至に堪へず、大に旅魂を慰めたり。

予の歸京するや、西より東より朝に夕に去々來々殆んど吐握に暇なく、上となく下となく貴となく賤となく、其問ふ所は諸子の健全如何、諸子の忍勉如何にして、皆重きを諸子に措かざるなし、諸子の任又重しと謂ふべし、任重ふして道遠し、宜しく相共に提携日の暮るを可レ被レ惜候。

自重一哉、

諸子所レ居不レ小、輝ニ皇國之美名ニ挽ニ回東亞之運一在ニ諸子ニ、

教育之道在レ使ニ諸生不レ俛、君苦心狀瞭々可レ見、

予人に逢ふ毎に必ず曰く。今日我國經濟の消長は偏に日清通商政略の方針を誤ると誤らざるとに在り。故に今の經濟を論せんと欲せば、宜敷先づ日清貿易の如何を詳かにするを要す。日清貿易の如何を詳かにせんと欲せば須らく。先づ清國の樞衢を巡見するに如かずと、此言幸に在朝在野諸子の容るゝ所となり、明年を期して渡清せんと約するもの不尠に到れり、噫明年は何等の幸年ぞや、豈に天の我同志同袍に與ふる好機ならずや、豈に奮勵宜く我事業を以て、國家問題となし。諸子自ら我國經濟の機關となり。又我國を機關ともなし、電運雷轉進で　皇國の美名を輝かし亞細亞の衰態を挽回するの基本を立つべきの時にあらずや、諸子猛省之を勉めよ。

當方の用事は、皆了せり後來の約束も整定せり、明春早々陳列所に於て、內外輸出入貨物の試賣買を實施し、貿易上未だ盡し能はざる要點、及金融運輸交通の便否利害等、愈愈實地の研究に取掛るべし。吁歸國以來。予の尤も苦慮せしは、明後早春を期し、大運動をなすべき商會の組織を爲し、第三年期より諸子をして實驗を踏ましむべき準備にありたりしに。今や算外の好果を見ることを得たり。予大に安心せり。諸子亦幸に之を安せよ。

既安之、忽說其艱、至七轉八倒、以師弟共苦樂、挽回亞細亞之衰運、結之意匠慘憺、苦心可想、

禍福由己、教訓合道、

予若し此商會をして當時流行の株式組織を取らしめば、幾百萬圓の運動たりとも、敢て其難きを憂へざるなり、然れども予は一旦心に誓ひ、亦諸子に約せり、諸子後來の便益を希望するが故に、敢て之に隨ふを欲せず、予は飽まで諸子と共に奮勵致し、假令七轉八倒するも諸子と共に、苦樂を同うし、諸子と共に日本の富强を製造し、諸子と共に亞細亞の衰態を挽回するの覺悟を取れり。

凡そ人非常の事を爲さんと欲せば、非常の決心なかるべからず、我商會の如、亦古今未曾有の一大事業なり、豈に前途未曾有の困難なきを保せんや。然れども予は如何なる困難に遭逢するも、單に私利的の賤行に變移するが如きは、予の斷じて取り得ざる所なり、嗚呼諸子よ商會をして、前途の困難を生ぜしめず、商會をして速に幸福を得せしむるものは一に諸子が體格の健全、氣宇の壯濶、品行の端正、學術の勉勵をして、日清人に感徹せしむるに外ならず、諸子其れ之を勉められよ。

銀行頭取あり、會社々長あり、商業學校長あり、皆來り請ふて曰く、研究所生徒卒業の後は、幸に其二三名を分てと、予答て曰く、予應に日清の貿易を興さんとす、而して其人の尙ほ未だ足らざらんことを恐る、何ぞ分つを得んと。又人あり來り語つて曰く、生徒にして

抱負與他異、是所以出幾多俊傑、

至出十二烈士、而人始知之矣、

燕雀何知大鵬之志、

張耳陳餘、曾爲斷金之友、兄弟不若、後終相殺戮者、盖不爲道交也、根津之於荒尾、同一身體、始終不渝者、盖爲道交也、今讀東方齋傳、無不以

業成らば、此許多の人才何くに之を用ひん、當時彼業を營むもの、三井會社廣業洋行等に過ぎざるにあらずやと、予答て曰く、甚ひかな君の言や、我生徒をして當時の會社洋行等に於ける手代番頭の如くにして止ましめんならば、我何を苦んでか多年之を養成するの必要あらんやと、其人分らずして去る。

嗚呼燕雀何ぞ大鵬諸子の志を知らん、諸子は實に今日實業社界の模範者なり、積弊を一洗するの創業家なり、亞細亞恢復の委員なり、我國富强の製造者なり、豈に區々燕雀と伍をなすものならんや、嗚呼諸子之を記せよ。

予曩きに諸子と袖を申江に分つや、一言以て遺すあらんと欲せしが、蒼卒暇あらずして之を果さゞりし、諸子幸に之を容れよ、當時代理所長根津氏は、予が竹馬の益友なり、予が事業の兄弟なり、予が無二の親友なり、彼愁ひは我之を愁ひ我喜びは彼之を喜び、彼爲に計れば、我爲に計り、我爲に勞すれば、彼爲に勞す、一心同體、進退提携、誠に玆に廿餘年を經過す、而して予今や根津子の學識函宏を欽慕し、顧みて予が不能を愧づる而已、乃ち予の諸子と別るゝや、根津氏爲に計り、爲に勞する所以なり、予一時も早く歸所するの情に堪ずと雖も、事業の爲、尙ほ半月を費さゞるを得ず、諸子請ふ根津氏

道爲歸甚矣道之不可以己也、爲尾得庵嘗評根津曰、根津每有大事、必來諮予曰、我欲云云不背道乎、今也滔々天下只利之謀、以道爲問者獨有根津得庵之評、可移評荒尾矣、道義結局君子之言、可欽哉、

を見る予を見るが如。予を見る尙ほ根津氏を見るが如くんば。予が喜悅及安堵は、何を以て之に過ぎんや。諸子寸暇あらば。宜く就て道義の蘊奥を極めよ、他亦何をか言はん、匇々不宣。

明治廿三年十二月廿二日夜三時認

東京

荒尾精

上海日淸貿易硏究所

生徒諸君

諸子九月廿一日の書を得、縷々數百言藹然たる和氣一堂に充ち、凜乎たる至誠古今を歷す之を誦する再三、轉々感激の情に堪へざるなり、余諸子と相見ざること字星霜、其間諸子剛毅撓まず、精勵懈らず、斐然として竿頭の進步を見るを喜ぶ、今や事略了り幸にして諸子と再び相見ることを得るも、當さに遠きに非ざるべしと雖も、玆に其要領を摘んで、諸子の左右に致さん。諸子請ふ之を安んぜよ。

曩に計畫する所の商品陳列所も、今や漸く將に其緖に就かんとせり、他日相携へて之を

研究するも亦將に遠きに非ざるべし、且歸朝以來天吾黨に下す所の二大賜あり、余鞠躬盡力して稍々其尾を結べり、是れ未だ大に呂下の助を成すに足らずと雖も、諸子が他日業成り東洋に雄飛するの秋に至らば、大に其羽翼たるべきを信ず、此事長ければ之を歸所の日に讓り、膝を交へて親しく之を報ぜん。

前途之有望

現時之形勢

回顧すれば東洋の大勢は、日に月に其趣を變じ、又前日の比に非らず、國に固定の財本なければ、富を起すの籌に窮し、商に必勝の略なければ、利を收むるの途なし、故に關聯の漸く密なるは、其危機の益迫れるを知るべく、融通の漸く緊きは、其輸贏の旦夕に決するの徵なるを知るべし。況んや弱肉强食殆んど其極に達せんとするをや。

天下滔々利之趨

然るに今我國の狀勢を觀るに、颶風烈震に遭遇し、顚沛流離の慘境に彷徨し、災害洽く天下を蕩搖したるの後に於けるが如く、資財ある者と雖も、卓然以て此境遇を振興するの餘勇なく、只管利己の技途に狂奔するもの滔々たる天下皆是なり、目睫の急も尙ほ顧慮するに遑あらず、況んや百歲の成敗をや、或は偶々經國の要を說き、財理の途を談ずる者あれば、身に擔石の貯なき者に非ざれば、一攫千金の輕薄子のみ、嗚呼我國の大勢既に此の如し、而して救濟の道既に之を他に望むべからずとせば、此衝に當り鞠躬國家

任重道遠

剛勁不レ撓、至誠報レ國、

に盡くすべき所のものは、我研究所諸子を措て、將た何にか之を求めんや、余諸子の書を得て、大に其業の進むを知り、又諸子が剛勁不撓、至誠國家に盡すの高義は余の夙に親しく知る所なり、今回余が歸朝するや、陳列所も將に其緒に就かんとし、又天の吾黨に下すに大賚を以てする所のものも豈に其致す所に非ざるを知らんや、諸子請ふ勉旃。

明治二十五年十月三日

於東京　荒尾精

日清貿易研究所

生徒諸君一同

追伸、時正に變候に屬す、諸子金玉厚く愛護せよ、余の歸日は必ず當に日ならずして定まるべし、定まるを得ば直に電報を以て急報すべし、日夜西望の情に堪へず、待たるゝものゝ心切、請ふ之を察せよ。

情報

諸子の書に接するの夕、偶々約あつて本所に盡力中の諸有志皆集まる、余襟を正し諸子

師弟敬愛之至情、溢二于楮簡一

の手書を傳覽せんことを請ふ、諸有志覽了り皆曰、嗚呼此業あつて此人あり、此人あつて此精神あり、此精神あつて始めて此業を成すべきなり。前途の事已に定まれり、其等の力を致すも實に此人あるが爲なり。今日此書を見て幾層の勇氣を加へしかを知らざるなりと、余之を聽き感泣復た起り。恍惚として諸子の面貌、交々眼前に徘徊し言ふ所を知らざりし其夜一同杯を擧げて　帝國萬歳を祝し。併せて諸子の健康を祈り、歡を盡くして解散せり以て報す。

瀛華廣懋館

八　陳列所の創設と研究所の終局

清國通商總覽の世に出づるや、世依つて老大帝國の實情を明にするを得、有識の士皆之に感奮し、研究所の聲價頓に揚り。大阪の豪商岡崎某等の出資に依り。遂に瀛華廣懋館を、上海河南路に建設するに至れり。瀛華廣懋館とは、日清貿易商會とも云ふべき意にして、之を日清の商品陳列所とす、廿六年一月創設の主旨を發表し、七月に至り成立したるが、研究所卒業生は、毎日十五名乃至二十名來りて商業を實踐しぬ、本陳列所は廿七年日清戰役當時迄繼續し、愈々在留同胞の上海引上に際し。一切の保管を某英人に托し、八月下旬

瀛華洋行

卒業之祝典

卒業生八十九名

研究所之閉鎖

後藤農商務大臣祝辭

歸東したるが、戰後卒業生の一人たる土井伊八、英人より之を受取り、自ら資を投じて家具器物の破損せるものを修理し、貨物を購入し、再び業務を開始することゝなり、其功勞に酬ゆる爲め、店名其他一切を土井に讓渡せり、今の英大馬路なる。瀛華洋行即ち是なり、陳列所の創設と相前後して、三年の課程終りを告げ、玆に盛大なる卒業の祝典を擧行し、八十九名の卒業生は、東亞經綸の先登者として校門を出でたり、研究所は固より誘導商會本部廿五開港場に於ける、其支店に活動すべき人材を養成するの目的なりしかば、所定の學業を終ると共に、一旦之を閉廢することゝなれり、卒業式日は內外貴紳の來會する者數百名に及び、我農商務大臣及京都、兵庫、熊本、佐賀、長崎、富山各府縣知事等は祝詞、祝文を寄せて其典を壯せり、而して君が人物養成の目的も玆に一段落を告げたり。

農商務大臣の祝辭、　商業は豈一國孤立の能くする所ならんや、萬國交通し始て其效用を擧ぐるを得、今や萬國交通商業の道開く、國民經濟の發達は一に此通商の興隆に實す通商興隆の方法何如、曰く國民通商上の智能を開發するに在り。

淸國の我に於ける獨り其地勢脣齒相依るのみならず、通商上相倚屬せざる可からず、兩國通商の盛衰實に其休戚に關す、余曩に日淸貿易研究所設立の擧あるを聞き私に其隆盛

を望みたりき、今や學生卒業の式を擧ぐ、焉ぞ之を喜び之を嘉みせざるを得んや。且つ聞く該卒業生をして、更に實地の科程に就き、益々其業を習熟せしむと、既に學術を究む、而して加ふるに熟練の力を以てす、余通商興隆の爲に深く將來に矚望せざるを得ず、乃ち一言を致す、所員及學生其れ旃を勉めよ敢て祝し敢て望む云爾。

明治二十六年六月　　　　　　　　伯爵　後　藤　象　二　郎

千田京都府知事祝辭

京都府知事の祝辭、　夫れ萬里の波濤を踰え危險を冒して、買易の道を講じ唯其利を求むるに汲々たるものは、歐米の諸洲是れなり、蓋し各國相隔絶雄視の勢ひ已むを得ざるものあらん、而して本邦の商人の如き比隣なる清國あり、其の土地の廣き人煙の稠密。且つ人情風俗の相類して、嗜好生活の相似たるのみならず、往復の際、亦同文のあるをも顧みずして、遠く歐米と相角逐して其利を爭はんとするは何ぞや、蓋し人情近きを遺すれて遠きを圖るの弊。遂に此に至る歟。

吾友荒尾君は、夙に此に見る所あり、數々清國に遊び、曩に日清貿易研究所を上海に設置し、本邦生徒一百五十餘名を募集して、通商貿易の道を研究せしむること玆に年あり、今回其穎才の既に卒業せしもの若干を得たり。又進んで本所の事業を擴張し、日清商品

陳列所を創立し、該卒業生をして更に實地に就き、本邦各種の貨物を試賣し、益々其道を鍛錬せしめんとす、用意深切にして能く誘導の要を得たりと云ふ可し、是れ豈に國家の爲め慶祝せざるを得んや、嘗て本所の新著に係る通商總覽を拜閲するに、清國商業地理、庶制、運輸、金融、交通、生業、其他大小網羅漏さず、其詳密なると之を掌上に示すが如し、亦以て他日國家に一大鴻益を與すの一端とするに足れり、古語に曰く、工其事を能くせんと欲せば、先づ其器を利くすと、是れ予が君の所見に推服する所以なり。今や卒業證書授與せらるゝの日近きに在るを聞き、聊か欣慕の意を陳べて、盛式を祝し併せて國家の爲め本所旨趣の大成を期すと云ふ。

明治廿六年六月　　京都　千田貞曉

九　研究所の長歌

春申江頭日東八十九名の健兒が、春花秋月機に觸れ興に乘じて朗吟、以て志氣を皷舞せしは、則ち左の長歌なり、記して以て當年の狀況を回想せしむ。

一

長歌四、末句必以亞細亞結之、抱負可想、雄壯痛快、歌去歌來、不覺傾數太白一、

曰月曰花曰雪、何等之優美、日旭光輝亞細亞所謂有志者、事終

秋津島根の大丈夫が、百と五十數打ち揃ひ、
大海原に乘り出でゝ、遠く唐土の呉の空に、
來りし心を人問はゞ、見よ見よ他日其時を、
雲も晴れつゝ空澄みて、亞細亞の月も照り出でん。

二

海を烹るべし山を鑄よ、くろがね鞭を手に取りて、
弛るむ惡魔にむち打てや、艱難辛苦は飴ぞかし、
嘗めて試めさむ我が心、戈壁の沙漠に晝眠して、
喜馬拉山に枕せば、亞細亞の花も咲き初めん。

三

春申河頭の春の花、滬城々外秋の月、
清き眺めは變りなく、心を照らせ香を放て。
倶に載く櫻花、操を花に倣らへつゝ、
互に勇み勵みなば、亞細亞の雪も薫りなん。

成之意歟

（研究所生徒櫻花を帽章とす）

四

港みなとに船停め、　朝日の御旗飜へし、
互に有無を通じなば、　國も榮へつ家も富み、
足りて裕らふ習なり、　共に競ひつ勵みつゝ、
遠き彼岸に達しなば、　亞細亞の光り輝かん。

（當時支那各開港場に誘導商會の支店を設け互に連絡を取りて活動せんとしたり）

第五章　戰前の計畫

一　東方通商協會

東方通商協會創立之趣旨

旣にして君は、陳列所の業務を理事者に委托し、單身歸朝、之が擴張を計畫し、改進黨大隈重信、自由黨板垣退助、國民協會品川彌二郎の三政黨首領に謀り、其協贊を得、又總理大臣伊藤博文の同意を得て東方通商協會の創立を企てたり、其趣旨に曰く、

西力東漸は、宇内の現勢。吾人に視すこと久し。東風西化は、世界の實狀、吾人に敎ゆ

ること深し、蓋し之を見ること久しければ、見て以て當となし、之を習ふこと深ければ、習ふて以て異となさず、因襲の人心を鎔蕩し、浸潤の士氣を銷磨すること、畏れて而して警しむべきものあり。

偶ま發憤の士あり、其間に起ちて勵聲疾呼するも、長夜の昏眠は、洪鐘の一撞と雖も、之を奈何せんや、抑も之を警醒する所以、未だ盡さゞるある乎、吾人竊に以て憾となす、我協會の興る、豈其れ已むを得んや。

絶代の鴻圖偉業の如きは我協會の敢て當る所にあらずと雖も、東漸の西力に拮抗し、西化の東風を挽回し、以て久しく東方の天地を蔽鎖する重大の問題に向て、着々解決を試むるの志望と計畫とに至りては、我協會誓て人後に落ちざるべし。

當今朝野の間、東方の事を言ふもの多く、東方の爲に劃するもの尠からざるは、洵に喜ぶべしとなす、而して時運未だ會せざる乎、計畫未だ盡さゞる乎、確然立脚の地盤を築成して切實の建設を企圖するものなきは悲む可き也、立脚の地盤とは何ぞや、西力東漸に對する東方振興上、已むを得ざる諸般の用意是なり、切實の建設とは何ぞや、彼我共濟有無相通、一は以て相互の感情を融解し、一は以て厚生利用の泉源を悠久に開闢する

是なり、立脚の地盤にして鞏固ならずんば、名案良策も空論に歸せん、切實の建設にして缺如たるあれば、雄圖遠略何かせん、此時に方り吾人が東方振興上に關し、半生の事業を賭して計畫し來りしもの、著々其緒に就き、前後緩急の序を履み、各種の機關稍整頓を告ぐるに遇ふ、我協會此際に勃興せざらんと欲するも得んや。

惟ふに滔々日進の西力に抗し、屹然として東方の振興を圖らんとせば、先づ東南洋に於ける商權を收めて、我掌中に歸するより急なるはなし。商權の歸する所、國際上渾ての權力勢威の歸する所なり、吾人夙に此に見るあり、東方通商の道を講究する久し、曩きに眞成性能を備ふる貿易者の必要を感じ、日清貿易研究所を上海に起し、青壯子弟の養成に任じ、聊か誘奬の勞を取る、諸子亦た刻苦黽勉、豫定の科業を卒へて出所するもの八十餘人、次で又商品陳列所を同地に設け、卒業諸子を擧げて各其業務に當らしめ、專ら貿易物品の發達増殖を圖る、幸に諸子の奮勵と、江湖有力者の贊助とに因り、彼我の信用日に重厚を致し、業務月に繁忙を加ふ、而して東方振興の氣運は、漸く回轉し來り、吾人をして前途益多望ならしむるものあるに似たり、吾人奚ぞ駑鈍に鞭ち彌々振作奮進せざらんや、則ち玆に規模を擴張し、東方通商協會を組織し、從來の貿易研究所及び商

品陳列所を擧げて、其一部となし、更に進んで東南洋の通商に關する諸般の準備に着手せんとす、吾人豈敢て絶大の鴻圖偉業を期せんや、亦唯だ立脚の地盤を築成して、切實の建設を企圖せんとすと云ふ而已。

斯くて本協會は、日清貿易より進んで東南洋諸邦との通商貿易を奬勵誘導するを以て目的とし、之に必要なる諸般の事業を經營せんと欲せしのみならず、苟くも東方通商上彼我の便宜となるべき事件ある時は、兩國朝野の間に周旋して、其便益を全うすることを謀り、兼て彼我の交情を厚うすることを務めたり、彼の朝鮮に於て防穀令の出づるや、兩國政府の意見合はず、公使大石正已將に國旗を奉じて歸國せんとするに至る、斯かる問題は其國際的性質を帶ぶるに先だち、民間有志に於て平和の裏に居中調停し、以て大局の維持に力むるを上策とす、是れ亦本會の發起せられたる動機の一たりしと云ふ、

御一別以來、玆に三閲月、老生は疎濶、誠以不堪陳謝候次第、御海恕是祈候、時々小山兄よりの書面に據り、諸君が益御奮勵被爲候に由り、內は百事整頓を告げ、外は四方の信用を高め候趣、代表者たる老生に取つての喜は、實に不過之次第、邦家に代り厚く御禮申上候、次に老生義も出京以來日夜悤奔罷在候處、諸君御奮勵の結果は、當方に影響

し、不容易好都合に相成申候、而して諸君が多年御螢雪の次第も、已に朝野志士の肝に銘じ、終に諸君をして完全の御修業を遂げしめ、邦家の大用を委任致度とて、各政黨も奮發被致、又其筋に於ても本年の議會に提出する爲、已に補助金として豫算中に可被込入樣內決相成候得ば、一先歸所御報告申度と樂居候處、我義兄弟たる卒業諸子の內には、餘程資金に困難被致居候人も不尠趣、諸方より承及候、斯く相成候ては、折角多年慘憺の經營を積み、醇乎として現はれたる事業も、功を一簣に缺き、又忠良の資、勇武の質を以て、目前の私利に迷ふ瀆俗の境に陷り、或は小刀の細工に掛らざるべからず、老生の悲憤御察被下度候。

且又今回銀貨下落の好機と、防穀處分後日韓間の感情の結果とは、吾人が東方に期する所の宿志の幾部を達するに、近來珍敷好機會に御座候を以て、老生が其悲憤と希望とは終に勘忍嚢を破壞して突出仕候て、仲々に働致居候處、時運の際會は妙なものにて、遂に大勢爲之動搖致來候次第に御座候、就ては老生も御承知通瘡痍未癒の身、非常の運動は無覺束と存候得共、已に諸君の膽を琢して待るゝあり、此好機會の再來は又難期候に付、玆に胸を撫で瞑目一番、俄に傷を包で踴躍三百、終に死地に飛入り候、是全く不

得止次第、御諒察被下度是祈候、此上は諸君の多力に依り奮進仕候外無御座候。徳川家康曰、事の未だ成らざるや勘忍にあり、其將に成らんとするや大膽不敵、已に成るや油斷大敵と、吾人今日の境遇は其第二段に到着せり。當に大膽不敵の運動に掛らざるべからず、諸君亦御覺悟相成度候。

偖其悲憤と希望とを達する爲には、東方通商協會なるものを組織致す考にて、昨今其順序等協議中に御座候、其規約の大略は、別紙新聞紙の報導通に御座候、尚左に一言を寄す。

嗚呼當今朝野の間。東方の事を言ふもの多く、東方の爲に劃するもの尠なからざるは、洵に喜ぶべしとなす、而して時運未だ會せざる乎、計畫未だ盡さゞる乎、確然立脚の地盤を築成して切實の建設を企圖するもののなきは悲むべき也、立脚の地盤とは何ぞや、西力東漸に對する東方興振上已むを得ざる諸般の用意是なり、切實の建設とは何ぞや、彼我共濟有無相通じ、一は以て相互の感情を融解し。一は以て厚生利用の源泉を悠久に開く是なり、立脚の地盤にして鞏固ならずんば。名案良策も空論に歸せん、切實の建設にして缺如たるあれば、雄圖遠略何かせん、此時に方り吾人が東方振興上に關し、半生の

事業を賭して計畫し來りしもの、着々其緒に就き、前後緩急の序を履み、各種の機關稍成形を告ぐるに遇ふ、吾人をして此協會を勃興せしむる豈に止むを得んや、

通商協會

惟ふに滔天の西方に抗して、屹然として東方の振興を圖らんとせば、先づ東南洋に於ける商權を收めて、我掌中に歸するより急なるはあらず、商權の歸する所は國際上凖ての權力勢威の歸する所なり、其的例の如きは宇內の大勢世界の實狀が、吾人に敎視して歷歷諸を掌に指すが如し、吾人今に於て何をか疑はん、而して東方振興の氣運は漸く回轉し來りて吾人をして前途益多望ならしむるものに似たり、吾人奚ぞ駑鈍に鞭ち彌々振作奮進せざらんや、則ち茲に規模を擴大し東方通商協會を興す已むを得ざる時運に際會し、已むを得ざる計畫より成る事なれば、吾人猖狂自ら揣らず深く百年の望を屬せざらんや、諸君請ふ勉焉。（明治二十六年十月十一日君東京より在上海商品陳列所新舊所員一同宛に送られたるもの）

東方振興之氣運、回轉漸來

朝野の協贊を得たる本協會は、前掲の書翰にあるが如く、既に補助金下附の內議ありたるを以て君は議會開會劈頭に於て提出可決せしめんとせしも、時の勢にて彼條約勵行案第一に現出し、攻擊論難議會は忽ち解散の運命を擔ひて一頓挫し、其後百方奔走の末漸く成る

通商協會之中止、

に垂んとして、又東學黨の亂あり事東亞の大局に關するを以て、君は慨然として對韓經綸策を講じ、將に反正の業に從はんとし、爲めに暫く通商協會の創立を擲つに至る。

二 對韓經綸

對韓經綸策、

君の對韓經綸策を講ずるや、同憂の士と謀り、議旣に熟し、將に發せんとして時局一進、兩國の和破れて其計畫も亦君を煩はすに至らずして止み、旋乾轉坤、手空しく存し、滿腔の雄圖遂に伸ぶるに由なかりし、君が落膽は想見するに餘あり、日南福本誠當時君と事を共にせられたるの人、左に其談を掲げ、以て其顚末を詳述せんとす。

日南之實歷談、

荒尾精君と事を共にしたるは、明治二十七年に於ける對韓計畫にして、當時韓國には東學黨の亂起り、李鴻章直隸總督として北洋大臣を兼攝し、久しき以前より大に海陸の軍備を整頓し、機會だにあらば、則ち天津條約を破棄し全然半島を、自國統治の下に置かんとの志あり、偶々東學黨蜂起し、韓政府の力容易に之を鎭壓する能はずと見るや、機乘ずべしとして、大兵を半島に送るに至り、之が動機となりて、我も亦出兵の已むなきに至れり、時の總理大臣伊藤伯の政策は、善く云へば平和政策、惡しく云へば事勿れ主

義なるを以て、此際に於ても猶ほ彌縫に力め、能ふ丈け淸國との衝突を避けんとせり、斯くして東洋の平和を維持し得べくんば猶ほ可なるも、淸國の目的は前に述べたる如くなるを以て、其成行に放任せんか、半島は全く淸國の支配に歸するを免れず、是に於て在野憂國の士は、何れも當路の優柔不斷を憤慨し、同年六月六日對外硬派大懇親會を錦輝舘に開きて、國民の對韓方針を發表し、翌七日には更に當時の政派たる六派の聯合委員會を帝國ホテルに催うし、大に對韓意見を公にせり、而して一方に於て形勢は益切迫し、我政府も最早傍觀する能はざることとなり、月の八日廣島より一旅團の兵を半島に派遣せり、此間には吾人想像の及ばざる內情ありて、伯は此の時に至るも猶ほ彼我の衝突なからしめんと欲し旅團長大島義昌に或意味の內命を含めたりと云ふ、之を探知したる海內の志士は、益々之を憤激し此際淸國の暴戾を懲誡せすんば、永久的平和は到底望む可からずして、我は終に孤獨の危地に陷り、從つて東洋の大亂を惹起すべしとなし、政府に向ひ痛切なる忠告を與へたり。

當時對外の政策に、最も愼重の注意を拂ひつゝありし東邦協會は、委員を半島に特派して其實勢を目擊せしむるに議決し、同十一日の評議員會に於て、余は派遣委員に推選せ

處ニ非常ニ不レ可レ無ニ非常之斷、學問要ニ着ニ眼大處ニ者、爲レ之而已、

長岡外史

られたり、此間に一の佳話あり、協會より愈々余を派遣することとなりしも、經費の支出に就て評議員は何れも策の出づるなきに苦しみしに、流石は副島伯なり、議を建てゝ曰く、『諸君は金が無いと云ふけれど、協會には御下賜金があるではないか、協會に賜金を下されたのは、畢竟協會をして國家の用を爲さしめ樣と云ふ渥き御思召に出たのであらう、左れば斯る塲合に御下賜金を使うのは、至當の道に用ゆるのではないか』と、會頭の此英斷は、總ての評議員を感服せしめ、即時其内より旅費の支給を受け、同十三日東京出發のこととなり、其前夜荒尾君等と神田の某所に會合して、大に此局面に處するの方略を講じたり、是れ君と對韓計畫を共にしたる端緒にして、余は同二十九日京城に入り實情の觀測に從へり。

此時清國の眼中既に日本なく、大兵既に京城を距る遠からざる牙山の地に屯し、我兵は龍山に在りて隱然對對の勢を現はせり、時の駐屯軍中には、年壯氣鋭の參謀長長岡外史の如きあり、大島旅團長と雖も、亦溫和の方針を固執する能はざるに至り、兵氣昂騰抑ゆべからず、而して我大鳥公使は毎日本國より國交を斷絶すべからざる旨の訓電に接し左せんとせば右より制せられ、右せんとせば左より制せられ、進退維れ谷まるの窮境に

ありたり、時に我同志として東京よりの同行者には、田中賢道あり、先着者には岡本柳之助あり、依て余は兩君と協議を重ね、事態此の如くんんば如何ともすべからず、清兵の目的半島併呑に在るに拘はらず、形式に於ては韓國政府の依賴を受け、內亂鎭定の爲め入韓せるものなるを以て、直に之に向ひ兵端を啓く可からず、左ればとて此儘に放擲せんか、此局面は總て淸國の利益に解釋せらるゝに歸着すべし、此際に處するには韓の內政を改革し、韓政府をして淸兵を謝絕し、我に依賴せしむるの外なし、然るに今の政府は閔泳駿等の事大黨を以て組織せられ居るを以て、此の希望は到底此輩に望む可きに非らず、是に至りては最早大院君を起して攝政たらしめ、一切の內政を改革すると同時に、淸國に對しては貴國の好意に依り、東學黨の亂も旣に鎭定せる以上は、貴國の大兵を我內地に駐屯せらるるの必要なし、直に撤退を望む請求せしむべし、事玆に出でなば淸國如何すべきや、淸國は決して其軍を撤せざるべし、是に於て始めて名分を生ず可し、卽ち我が國の內亂旣に鎭定せるに拘はらず、貴國が撤兵を肯んぜられざるは、是れ內亂に乘じ我存在を危くせんとするものなり、我は日本と同盟して貴國の暴戾に當るの外なしとの、最後の通諜を發せしむべし、則ち名正して事順に、列强に對し毫も顧慮す

る所なし、斯くして時局を進轉せしむることに相談一決せり。因つて當時韓國の有志者と目せられたる、金嘉鎭、兪吉濬、安駉壽等に說きて、其同意を得、余は大鳥公使を說き、岡本は大院君を說きて、此意を以て兩人を動かさんとせり、爾後幾回か岡本、田中と共に兩人の間に往復して、相談を進めたるも、扨て之を實行するの一段に至り、困難を感ぜしは、前述の計策は日本人の仕事として之を爲すを得ず、先づ韓人をして內政改革の序幕を演ぜしめざるべからず。然かも腰拔の韓人恃むに足らず、英邁と雖も大院君も亦韓人なり、容易に蹶起せんとせず。故に如何にしても政府に關係なき我在野の有志を以て、此快擧を成立せしめざるべからず、而して當時在留の日本人と云へは、少數の銀行會社員か、又は小賈に過ぎず、到底此徒に對し命懸けの仕事を望むべきに非ず、內地より派遣せられたる新聞記者、其他有志を算ふるも、用を爲すに足る者十人を出でず、かゝる少數にては何等の芝居をも演ずること難く、少くとも一百二百の同志を本國より呼び集るの要あり、依つて余等三名協議の上、岡本は夙に京城に在りて、大院君と相善く、其國情にも通せるを以て、京城に駐め、余と田中の二人急歸同志を糾合し來ることゝなし、長崎を經て大阪に出づ、大阪には高橋健三在り、荒尾

諸豪集ニ東京ニ

愉快可レ想

好事魔多

君も土佐堀國本に止宿し、佐々友房亦た下阪中なりしを以て、相共に協議し大體の方針を決定せり、此結果何れも東京に於て熟議することとなり、二十、二十一、二十二の三日間に何れも相前後して上京し、それより翌八月三日に至る約二週間に於て其の同志をも加へて、日々集會凝議し、渡韓の準備を爲せり。

此間に於て荒尾君は、若殿原の豪傑連を指揮して、韓國に討入るには最も適當なりとの衆評にて、君を討入の總大將とせり、余の如きは今より云へば一小兵に過ぎざるが、先づ參謀長の役割なりき、斯くて或方面より參萬餘圓の準備金を引出し、彼地に入らば直に大策を決行する筈にて、韓國々是大令案を作り、君之を懷にし、之れさへあらば、着韓の翌日にても發表し得べしとて欣々然たり、斯くて當時亡命の朴泳孝をも黨中に加へたるが、此等の謀議に列りたる重なる人士を擧ぐれば、高橋健三、頭山滿、佐々友房、陸實、古莊嘉門、田中賢道、柴四郎、國友重章、朴泳孝等にして、東邦協會の關係より、山田猪太郎、朴泳孝の關係より須永元、最後に長谷場純孝等も之に加はり、將に東京を發せんとする機一髮に迫り、幸か不幸か、京城に於ては形勢の切迫する所、臆病なる我當局も、用心深き大鳥公使も、到底平和の解決不能なるを悟り、同志の一人にて曩に京城

岡本柳之助

に殘せし、岡本柳之助をして大院君を引出さしめ、余等の目論見案の如く決行せしめたり、此報本國に傳はるや、最早日清兩國の交戰狀態成立し、政府は浪人の加勢を喜ばず、忽にして態度を一變し、或夜急に朴泳孝を拔きて警視廳に連込めり、警視廳にて保護を

無用之長物

加へ、政府の手を以て半島に送り歸さんと云ふに在り、玆に至りて我等同志は無用の長物となれり、當局の眼より見れば厄介者となり、行くも止まるも勝手たるべしと云ふの有樣なり、否寧ろ運動差止の方針を採れり、此に至りて萬事休す、同志は何れも大不平

不快可想

なりしが、就中不平の極點に達したるは、韓國討入の總大將に擬せられたる荒尾君なりし。

君はこれより京都に往き坐禪の稽古にてもなさん、と云ひ東京を去りたり、是れ余との永別にして、後ち一度上京の際余が早稻田の僑居を訪はれしも、生憎く不在なりし爲め遂に相遇はず、其時君は荊妻に向ひあの時は馬鹿を見ましたと、大口を開いて笑ひしと

今昔之感

云ふ、今にして之を想へば當時の同盟荒尾君を筆頭として、高橋健三、陸實、佐々友房田中賢道、國友重章、山田猪太郎の諸士既に鬼籍に入り、古莊嘉門岡本柳之助の如きも意氣當年に似ず。只僅かに長谷場純孝が衆議院議長の高壇に上り、赭面を抗して蠻音を

振ふを聞くのみ、曷んぞ悽愴に堪へざらん、今に於て征韓總大將の容貌辭氣、猶ほ眼前に彷彿するを覺ゆ。

韓國國是大令案

自主

朝鮮國自主之邦、一切他國交際、須下以二彼此同等之禮一相待上、獨淸國視レ我如二屬邦一、我廷臣亦有下執二臣禮一者上、此非下所以二建國訂盟一之道上也、自レ今以後宜下改二近世之陋一復二先王之制一以永保中有兩國同等之權上。

同盟

朝鮮國與二日本國一欲レ表二和親之實一、俱以二彼我同等之禮一相待、兩國脣齒之關係、固當二緩急相救一、今也邦家之事、中外多難、日本國友誼敦厚、速遣レ兵來援、且勸二內政之改革一、宜下輔車相依以保中我自主之國權上。

王道

我朝開國、五百年二於茲一、王家之威德、入二民心一也深、中葉以降、大權下移、外戚擅レ制、百政之弊、職是之由、宜下及レ今洗二除舊弊一恢二復王權一以復中專任二賢能一之制上。

法制

法制

法是民之準、準一則民安、近世外戚擅ㇾ權、諸道監司不ㇾ得二其人一、淫刑苛稅、賄賂公行、天下之民、無ㇾ所ㇾ措二手足一、朝廷宜下張二綱紀一、信二賞罰一、革二峻法一、平二斷獄一、以定二民心一、鞏中國本上也。

兵制

兵制

兵者民命所ㇾ托、國安所ㇾ繫。故國有二兵備之完一、則內杜二姦國之非望一、外絕二敵國之覬覦一、惟近時國家兵備、弛廢達二其極一、一朝會ㇾ警。中外屢驚、此非下保二社稷一安二民人一之道上也、其宜下則二先王立國之洪謨一、參二宇內各國之兵制一、以大整中兵備上。

財政

財政

財用不ㇾ給、則國家凋弊、百度隨廢、國何以爲ㇾ國乎、近致二國計日艱黜一、民生月困瘁一者、雖ㇾ由二國家多事一、抑以三理財不ㇾ得二其道一也、其宜下量二國力一察二民生一以齊中財政上、且自今庶政可二更張一者、不二一而足一、皆待三給乎二國帑一、須下擧二山林湖海之利一以豐中國用之源上。

懷柔

懷柔

自主之邦。與二萬國一交際、宜先革下除阻二塞交情一之諸例規上、務開二寬容懷柔之道一以期二中外相親相益一、修二道路一開二港津一、敷二鐵道一、架二電線一、通二郵便一改二貨幣一、又漸密二捕防之法一、皆中

外相安之道也。

高橋健三書簡

七月三十日大阪高橋健三より在東京の君に寄せたる一書、能く當時の眞相を穿てると同時に識見透徹、操守堅固なる國士の英風を想見すべきを以て左に收錄す。

職見透徹、議論正大、極得眞相。

拜啓愈御清適奉賀候、陳者御出京後日々御斡旋の模樣、貴東及福本氏の通信にて詳悉仕候、就ては小生所感の一二御參考迄に申進候。

內閣

一、現內閣は假令一時吾々の擧を賛するも、決して永遠當てに成申間敷、又永遠は扨措き吾々現に事業に着手せば、忽ち內に在て掣肘を試むるに至らん、吾々の事業著効を奏せんとするに至ては、一層然るべしと被信候也。

此は從來の實驗が論より證據に候。

公使

一、現任公使にては、假令同意を表するも、倶に大事を行ふに足らず、而して彼の內政革新の實を擧ぐるは、公使の公然干涉するは自他外邦に對し得策ならざるにも、隱然吾吾と結托して表裏一定の方針に由て、斡旋するにあらざれば望少く候。

宰相

一、卓越なる新公使を得ると共に、民間より更に卓越なる一人物を得て、之を韓廷の宰相(此名嫌あれは宰相の實權を握るを以て足れりとす)に推すべし、韓人丈に一任せば、

假令進歩黨獨立黨乃至日本黨にもせよ、百年は措き十年の大計も覺束なし、或は曰はん日本人内外に在て監督せば足らんと、是れ或は多少の効驗あるべしと雖も、恐く有名無實に過ぎざるものとならん。

一、以上の希望を實にするには、必ず許多の障碍を見るべし、豫め之を排除するは目下の急なり、排除する能はずんば今回の事業は先づ實行を望むべからず、第一の障碍は伊内閣なり、早く其更迭を見ざれば公使の任免、韓廷宰相の事共に行はれまじ。

一、今日の所、文武平等を欠き武は極力前進するの暴狀にして、吾人の心を強ふするに足れども、文は纔に武の後尾に附着して、區々事に從ふものゝ如し、夫れ故文武並馳など思もよらず候、現に内政改革の細項に關しては、彼に强求し内閣の新組織も實行せられたる樣子なるに、未だ其獨立の名を支那に通せず、之と共に封冊冬至使以下の諸項を公然廢罷するなきは如何、而して一方に於ては、海陸の戰爭は日々進歩しつゝあるにあらずや、武臣如何に外に在て奮闘するも、文臣内に在て優柔事に從ひ、韓國の大義名分を明にするの所爲を、彼に實行せしめざるに於ては、武臣の勞苦は全く水泡に歸すべきのみ。文武の並馳なくば國家の恩威を外に示すに足らず、吾々は戰の爲めに戰を欲するものに

改革

あらず、唯文を行ふに之を手段として用ふるのみ、而して今日の景況尙且つ右の如し、此の如くならしむるもの他あるなし、唯伊內閣の然らしむる所。

一、內閣更迭は、我が前途百般の事に關し、殊に目下對韓淸問題に關し、其大成上實に闕くべからざる豫備條件なり、此條件だに實行せられなば、餘は刃を迎へて解くが如くならん、之に反し此條件すら行はれずんば、百事龍頭蛇尾に終らん。

一、朝鮮內政改革の事、其着手は甚だ容易なるのみ、唯其實行に於ては最も識者の經綸を論ずる所、我維新に鑑み、なほ今日迄の內政に考へなば、事理至明なり、朝鮮をして日本の覆轍を履ましむる勿れ、又着手の容易に由て實行の容易を速了する勿れ。

佐々氏には當地出發の日、內談仕置候次第有之、前記の事と之と重複に涉るもの可有之と存候得共、仍同氏より親しく御聞取可被下候、

當地へは何日頃御出相成候や、御確定の上は御豫報有之度御紙面中陸氏と御面談無之樣相見申候、同氏には必ず御談可然と存候、失言かは存不申候得共、是迄御會合被成候諸氏中一人も同氏程の識見を有するもの無之と存候、必ず御相談相成樣希望仕候、右貴答旁內々得貴意候草々。

七月三十日　　自　侍　生

荒尾賢公侍史

第六章　戰時の勇退

一　靜中の動

戰時之勇退

靜中之動

爲レ材報レ國

着眼遠大

上疏陳ニ清國形勢及兵略一

著ニ對清

君對韓經綸に一跌するや、其同志及門下の才俊百餘名を官に薦めて、通譯に任じ軍に從はしむ、當時條約改正問題盛なりし頃なれば、戰終了と共に條約を改締せざるべからず、之を爲すには戰爭を文明的に行はざるべからず、而して文明的の戰をなすには、通譯を精選して能く敵情を探り、言語不通より生ずる一般の誤解を避け、殊に無辜の良民との衝突を避けざるべからず、言語不通なるときは戰の擧措、自ら慘酷に渉り、且つ無益の勞費をなし剩へ各國の同情を害する如きこと多からん、是れ心あるものゝ痛心する所なりしが、幸ひ君の同志及門下の士の義勇奉公の念に富めるありて、獻身軍務に從ひ、爲めに偉勳を奏したるは、人の能く知る所なり、君又上疏して具さに清國の形勢及兵略等を陳じ、傍ら對清意見を著はして、其懷抱する所を陳べ、大に朝野の注意を喚起せり、後京都若王子山中に

意見ヲ以喚ニ起朝野之注意ヲ、東洋前途、戰後之經營、

憂國之惻誠

入り、沈心靜思、深く東洋前途の經綸を考へ、且つ國家戰後の策を按じ、尋で又當路に建議する所ありたり、左に君が書簡二三を擧ぐれば。

拜啓朝夕は追々秋冷相催候處、益御清祥奉恭賀候、降て迂生義も爾來彼此奔走の末、聊か所感有之斷然奔走相止め、去十二日　陛下へ對清卑見一篇を捧呈し、又一般朝野の有志者へも參考の爲清國の實情を述べ、善後策相綴り、不日出版公示の手筈に仕置候、且研究所卒業生も、此際日清貿易上盡力爲致度と存じ、米國公使等とも講究致居候得共、是亦亂暴の清國故、其道も相絕へ候而已ならず、成歡の役古志少佐の自害仕候も、彈藥糧食の不間合源因、又牙山の敗兵を追擊方斷念せしも同原因、且今回平壤の役にも已に糧食彈藥の缺乏せし事は、世に公にせられたる通りにて、兎角今日都會に在る人士の多くは、平常汽車、汽船、電信、電話、通運、郵便等の便に依り、人を送り物を運ぶに困難を忘れたるより起りし不注意の源因多々、左れば腦中を舊幕時代の木曾街道に造直さず候ては、到底向後の困難思遣られ候、加之今回清國に於ては我軍需物品の一切を清國民より戰爭後吾政府より可受筈にて、割符を以て徵發方を實施する由に候、然るに左樣の義は到底容易に支那人には了解可レ不ニ出來一就ては彼國の言語風俗等、不案內の軍隊は殊

志士之從軍

善後策

に難澁可仕候に付、卒業生中故障無之ものは、悉皆從事可爲致事に相決し候處、何れも奮つて從軍希望仕、卒業生中にて七十二名舊職員中にて十九名丈、悉く軍の通譯官として出征軍に便利相圖候事に致候處、大本營に於ても殊の外相喜び悉皆同資格を以て、優遇可ニ致呉一事に相成候間、去廿八日迄に悉皆廣島大本營へ可相集樣、手筈相整置候間、小生は一昨日東京出發、昨日當地へ罷越候、最早油斷不致候はゞ、左程の困難も可無之候間、小生は暫時茲にて、尚ほ詳細の善後策研究旁世故の煩累を避け、前途の經綸と克己の工夫とに、全力相注度決心致候、何れ得拜眉委曲可得貴意候得共、若し御閑暇も被爲有候はゞ、當家は山麓にて片田舍に候得共、至て清閑にて朝夕は風景も宜敷、熟談等には至極妙に御座候間、御泊掛にて御來遊被下度候、昨日來已に杜鵑も兩回迄音づれ呉候次第に御座候、早々不備

ほとゝぎすそれとばかりの一聲も
いとなつかしく聽き取れにけり

(廿七年九月卅日即ち入洛の翌日君が牧山震太郎氏に送りし書簡)

廿六日附芳書拜見、鐘崎、山崎、篠崎等五名偵察中被レ逢ニ慘害一候趣、兼て覺悟の事と

先見有レ明、三國干渉之來、不レ足レ怪

奉存候得共、東洋の爲深く可惜事共に御座候、迂生入山以來、傍ら學問に志し候共、乍ニ御耻敷事ニ、意必固我の根、最も深く、汚染殊に厚く、尋常にては到底根治六敷と存候間、刻苦奮勵常に嚴密武毅の力を用來り候處、近來稍々困勉變じて易簡平和と相成申候に付、此多欲界には最早心を引くもの無之候得共、唯時に心を動かすものは舊新同盟諸君が、非命の一事に御座候。

偕善後策に付、深く御先憂被爲成居候段、御尤至極に奉存候、何分久敷歐化に偏し候結果として、唯々表面上の運動而已にては、西力東漸の妨害に逢ひて、目的を遂し難くと被存候、何となれば我若し好結果を得んと欲せば、列國必ず之に干渉して可妨、若し干渉不致候節は、各競ふて分食可仕候、萬一分食の端を開候時は、東洋の事亦益々困難に可陷と杞憂此事に御座候、迂生も聊か善後策に付卑見も有之候得共、何分書面に難載候間、何れ其內時もあり候はゞ可奉得貴意候。

嗚呼天地の不運を旋轉し、宇內の活機を控掣するは、人力の容易に企及ぶべからざる樣に候得共、不得已の時運に際會し、不得已の計畫を立候はゞ、絕代の鴻圖偉業を建設して、驚天動地爍として寰宇の上に一大生面を開發し來るべし、此故に匹夫にして百世の

匹天而爲二百世之師一、大丈夫不レ可レ無二此抱負一

東方齋

師となるあり。小邦にして萬國の表となるあり。固と自ら氣運の相會するものなるべからず、乍併忠良の資勇武の質、之を養ふに經營の慘憺を以てし、百練千磨醇乎として其れ醇なるの素あるものに非ずんば、終に玆に難到矣。不得已の時運に際會し、不得已の計畫を立つるの期も、殆んど熟せんとするの今日、何卒幾重にも御自重被爲遊度候不堪切望候。舊盟諸君へも御注意是祈候匆々拜復。

追て迂生、入山以來、不相變俗客の來訪有之候處、近來は殊に煩敷相成申候間、獅ヶ谷若王子山に有之候知人の山齋修理中の處、稍出來上申候に付、昨日より此へ立籠申候、山齋を東方齋と名け、第二門へ左の一聯を揚げ申候。

人心竟如レ此、天理究如何、

勿論舊家屋に住居致居候事に致居候間、御文通は矢張舊廬へ願上候。此山齋へは一人俗客も不入積に御座候。

(前書と同じく君が牧山震太郎氏に送られしもの)

前略進軍の模樣御地の議論如何に候哉。例に依り遲々戰へば常に勝つとも要領を得ざる間は戰捷の甲斐無之候、山東侵略は未だ始むるの模樣無之候哉、速に同省を略して手を

兵略　對清意見　興亞之大策　列國干渉之囚

直隷省の南西方に延ばし、以て南方の援路及糧道を絶ち、並せて清帝の逃路を遮らざれば、到底時日を送るのみにて、終には清國の瓦解を時ならざるに催し、諸外國の交渉を惹起し、內外不レ可レ言の困却に可レ不レ陷哉、新山人昨今全身震ひ出し候。貴地の內議何卒、大至急御探の上。大略の模樣にても御一報被下度、模樣に依ては同志に謀り、非常の準備を不レ可レ不レ致義と奉存候間、返々も大至急に報導奉懇願候、第三軍は終に編成不致哉に、同志間より續々報來候、果して如何に候哉、是亦同報導を祈る過日一寸白岩迄申述置候如く、過般の對清意見に對し。已に百八十餘通の疑問書到來、尙ほ日々相續事故一々細密に難答、又不答候而は、行掛上不相濟。不得止、將來清國の我と共に、興亞の大事業を謀るに足るの國柄にして、國民も亦可然所以と、無暗に要求のみ多きを貪り候ては、將來の大害ある所以とを述べ、一二新聞の餘白に答度存候間。已に昨今草案中に御座候、此義は此際我國人に極めて緊要の注意と被信候に付、可相成々程と會得すべき材料相集度候間、是亦何卒大至急に御送り奉願上候匆々不備。

十二月念二日　東方齋

宗方大亮賢兄悟右（宗方氏時に廣島大本營にあり）

頃日當山齋の主人、余か書院前の築山に一寄石を立て、紀念にせばやとて一詠を賴まれて。

思ひ立ち此山影に潜む身の
世の稀らしき景色をぞみる。」

新年の御清祥萬里同風、先以御多福御超歲被爲遊奉敬賀候、降て迂生義も過般來不圖山居仕候より、鴨水の東、東山の麓、山靜に谷幽なるの處、駕齡申候間、乍慮外御放慮奉懇望候、山居の御申譯左に。

元來迂生は十六歲より軍隊に入り、何の素養も無御座、徒に先憂後樂杯の眞言を取違へ、自分無力の憂國男兒となり、大膽にも世間に這出狂言妄行仕り、不知不識大苦界に陥り罪作仕候、迂生の志望は不尠候得共、皆善事に候得者、常に樂んで爲さゞるべからず。然るに其樂皆樂中に求候樂に候故、悉く變じて大苦と相成申候次第、自レ是發奮樂外上達の心地に眞樂を求め、往くとして樂土に非ざるなき無上眞樂を不得捕候間は、決して再び世間に罪造は不仕樣、深く覺悟致候に付、不惡御賢察奉仰候。

偖今回は始めて神州男兒の眞面目を世界に發表仕候樣の運に相成、雀躍此事に御座候、

又此事より支那の革命を早め候事、及兼て御配慮爲蒙來候、研究所卒業生をして、彈雨の下に經驗せしむるを得候段、是亦竊に躍々に不堪次第に御座候。

例に依て遲々たる大本營の議も、愈々去月廿四日の決議にて、御養育被爲遊候、第二師團も山東方面に向ふ事に相成、是より始めて見事と被存候、是迄の戰爭は山中の妄評より申せば。

第一軍はしくじり、第二軍はのろし、支那軍は素人故全體に感服難仕候。

已に御聞及にも候はん、有栖川宮殿下には、過般來御不例に被爲渡、客臘以來舞子へ御保養被爲遊居候處、兩三日來御大患に被爲渡、昨夜俄かに御歸東被爲遊候御事に相成候侍醫の報告に依れば、此度は御生命の程も無覺束。御歸途も如何敷被按候旨、宮内省へ來電ありたりとて、十六日附を以て今朝大本營方より通報有之候。

嗚呼此國家大事中興業未終の秋に際して、此患ふべき報道に接し、仰では宸襟を察し奉り俯して四千萬蒼生の前路を想ひ、惆悵憂冲に勝えず候。以下略

一月十七日　　荒尾生

大久保春野老臺梧右

識見抜群

昧者不レ知

先見

排英主義

他日日英

明治二十八の年首を祝ひて

今日こそは、殊にうれしや　天皇の
　みいづ輝く春を迎へて。」

君が憂國の至誠と克己の工夫は、前掲の翰墨により窺見するを得べく、而して其高邁遠識遠く群を抜ける、閭國の人心激昂して、北京居るべし、滿洲取るべしとて躁言暴議せる間にありて、卓然冷然自説を主持し、東方大局の爲め温和の措置を採るべきを提唱せるを以て、世或は君を疑ふものあり、君則ち對淸辯妄を公にして、其惑を解き、志士の覺悟を促がせり、殊に淸國全權大使李鴻章の來朝するに方りては、彼の國情に考へ、彼の人物に察して、豫め其計の出づる所を洞見し密に要路の知己に警告したり、惜哉當局之を採用する能はず、終に君が憂慮せる所をして、一々他日に驗あらしむるに至れり。

拜啓兼て得貴意置候如く李鴻章氏は愈々干渉の材料取に參り候て露、佛、獨の連合干渉相起申候、露主となり、獨佛之が客となり居候得共今回の干渉は寧ろ排英主義に候より佛國等の連合纏り候次第、當局及在外公使のボンヤリ驚入候。

過般李の馬關に在るや、我要求點を淸廷に電報して、列國に告げしめ候處、露の滿洲割

同盟之起、誠有レ故哉、

讀而至此、不覺憤慨、後人有レ詩曰、嗚呼文臣不レ知武臣苦、媾和臣空棄遼東城

先見卓論

眞摯苦心

讓に不同意を唱ふるの返電ありしを以て、俄に強硬となりて割讓を拒み申候、〇〇は大に驚き直に電報にて〇〇を招き、土地の割讓は紛擾の種となるべければ止度との事、然るに〇〇は然せざれば軍人の制壓出來難く、〇〇〇〇同論なり、然るに其後露は飽迄干渉を試むべく、又佛、獨も之に應ぜんとの電報。清廷より報越せしを以て、俄に論鋒を變じ、若し償金五億圓を二億に減せば。領土割讓すべしと申出せり、是は領土割讓は他國の干渉あれば差支なしと斷定して、馬鹿にせしものなり、然るに我當局は手を打て李亦知るべしとて笑へり、抱腹に堪へざるなり、媾和後俄に三國の干渉起るや〇〇の驚愕は不一方直に、電報して〇〇を招き〇〇を派遣せり、是は一は彼地にて軍人の激昂を恐れ最強硬の〇〇を引拔きしものならん、一は殘餘の軍人を鎭撫の爲ならん、而して露は非常の奮發にて掛り來り、決して示威運動には無之候、清廷も已に批准相拒申候事に相決し申候由、御承知通り迂生は領土割讓は紛擾を來たす根源に付、不同意に候處、已に御批准被爲遊世界へ相廣まり候事故、表面丈は其儘にして禍を轉じて福となすべき一案有之候間不得止注射に取掛申候。下略（廿八年五月三日京都より菅井氏に送りしもの）

讀み去り讀み來り君の眼光炬の如きに驚かずんばあらず、

○○者何人、小人、行爲、常誤二國家一、可レ迸二諸四夷一

後馬關條約の締結せらるゝや、君其第六條第四款の國家經濟に大患を貽すを憂へ、偶々全國實業家の名古屋に大會を開くを機とし、往て利弊の在る所を痛論し、與に當局に匡濟の議を上らんとす、不幸にして斗筲輩の中傷する所と爲りて事遂に止む、然れ共時勢の進行は果して君の所見に歸着せりと云ふ。

前略借御來山の節。一寸得貴意置候、在清工業云々の義に付ては、松方品川兩氏の力にも及兼候に付、不得止別冊卑見全國實業者へ相通候處、○○の之に對する運動甚敷、遂に紡績聯合會の中堅を破碎して、幾多の讒誣流布致候事に相成申候、然るに迂生は邦家の前途を憂ひ、不得止發表仕候事故、素より一身の毀譽一家の肥瘠、顧みるに暇無御座候間、益々運動罷在候處、昨今は追々賛成者も相生來候に付、本月名古屋に開く全國商業會議所聯合會に打出し、邦家將來の爲極力運動仕候存念に御座候。先は右得貴意草々

(二十八年九月二十日京都より菅井誠美氏に送りし書簡)

二　臥龍時代

廿七年秋より廿九年春に至る、山居の一年有半は、君が一生を通じて安息の時代にして、

憂國之忱誠

又修養の時代なりし、而して一片耿々の志と、憂國の忱誠とは時に發して立言となり、建議となり、或は出でゝ江湖に奔走を敢てするに至る。此間に於ける克己の工夫志氣の鍛錬は君をして德器を成就し、捲土重來の力量を蘊蓄せしめ、將に大に鵬搏を試みんとして、不幸南溟の瘴地に斃れしもの豈寔に悲しむ可きならずや、余の君と相見しは則ち此時代にして、一見肝膽相照すの槪あり、君と其居を隣にし、或は倶に鞍馬山中に禪定し、或は倶に藤樹先生の墓に展し、或は嵐峽に花を賞し、志賀の舊都に秋を探り、朝に東亞經綸の大義を聽き、夕に克己復禮の道を講じ、相隨ふ一年に滿たざりしと雖も、感應殊に深く敬すべく親しむべき偉大なる人格の、今猶ほ眼前に髣髴たるを覺ゆ。

克己之工夫、志氣之鍛錬、成就德器

讀書

逍遙

靜坐

君平生、群籍の間に端坐し、靜坐讀書に餘念なく、感興れば筆を執つて經綸策を書し興至れば山林泉石の間に逍遙す、客あれば溫然之に接して、赤心を人の腹中に置き、人自ら之に化せられざるなし、又屢々姿を隱くすこと數日に及ぶことあり、初め之を怪みたりしが後に至り君が塵を避け、深く鞍馬山中に入り靜坐せしものなるを知り得たり、當時の消息は左の一二書翰に依り其一端を窺ふを得べし。

其一　前略近來は古人と書中に相逢ふと、舊知相携へて東山に紅葉を賞するの樂は、仲

古今同感

後人有レ詩曰、順逆無ニ二境一。逆境即順境。君子安ニ其境一。眞人忘ニ其境一。

仲朽弱國征伐どころの樂に難代候樣相成申候、斯く申し候ては兵馬倥偬の際、恐多く候得共、古人の詩に所謂。

閭國擾々事ニ戰爭一。　幾萬兵馬乘レ車趨。
山人獨坐幽窓下、　只見浮雲動ニ大空一。」
楓葉半紅酒微醉。　伎倆極處莫ニ他奇一。
山人不レ望功名事、　雲白山靑好境涯。

は迂生目下の境遇に御座候。

其二　前略何も因縁にて、人力の難及處に御座候得者、順逆、死生、禍福、貧富入るとして自得せざるなきより外に可無之、是れ君子は不憂、不惑、不懼との妙用に候はん、時は誠に可望して求むべからざるものと被信候間、自然に御一任可被爲遊候。

迂生は不相變大得意にて樂天命居候、近狀を申せば、古人の詩に、

尋レ梅曳レ杖鶯相伴。　覓レ友敲レ碁亦有レ隣。
公朝未レ報春消息、　贏得山林自在身。」
近年閭國入ニ烟塵一。　朝野忽忙未レ覺レ新。

請看東山深窟裡、　清平別有二一般春一。

右樣の次第に相似て面白く存候呵々

（前者は廿七年十一月、後者は廿八年二月共に牧山氏に送りし書翰の一節）

君は思を風雲變態の中に馳せ、神を天地有形の外に遊ばせ、所謂英雄閑日月の槪ありし、君は實學に志し曾文正公を慕ひ、藤樹先生を崇び、南洲翁に私淑し、大學を講じ傳習錄を讀み、藤樹全集を繙きたり、而して如何に失意煩悶の時代に在るも、常に晏如として毫も厭世的言動なかりし、

前略昨日は聊か妙に感候事有之候間御一笑迄左に

昨後聊か書に倦み偶出でゝ秋色を探れば、阡陌は綠を競ふて迎へ、楓葉は紅を爭ふて喜ぶ歸つて樓上の書室に坐すれば、漆の如き山童來つて茶を進む、命じて窓を開かしむれば夕陽對山に映じて笑ふが如く、雪は脂粉を粧ふて餘情を呈し、芳樹何れの邊よりか文香を送る。

嗚呼古來名士の時に感じて此地に隱るゝもの多し、而して皆此幽に溺れ、此情に陷りて、終に再び起たず、人を誤まる豈に塵界の名利花巷のみならんや、唯其志の彼名利花巷や

溺レ境失レ實、興二玩物喪志一一般

此幽情の樂より重く且大なるものに非ざれば、終に其天眞を失ふて、其好む處に陷溺するもの歟戒めざるべけんや。（廿七年十月末管井誠美氏に送りし書翰の一節）

第七章　戰後の出動

一　治臺の要諦

戰後の經綸

東方通商協會之再興

日清同盟

治臺之要

戰後再び東京通商協會を興さんとし、第一着手として、日清兩國の經濟同盟を結ぶの必要を認め、之を當局に計りしに、松方藏相等大に贊助せらる、乃ち廿九年一月を以て上海に赴き、清國の實情を觀、大官巨紳に說きて、歡迎を受け、二月歸りて所見を披瀝し、朝野に警告する所あり、其貴族議員の請に應じて爲したる演說の如きは、其一端たりとす。又新領土及南淸諸港を巡視して將來の施設に資せんとするの志ありて、八月を以て程に上り途鹿兒島大島及琉球を經て、官民有志の囑に依り、東洋實業の利弊を談ずる所あり、九月初臺北に到り、廣く土人及內地有力の人士と交り、各種の材料を蒐集して新領土の實況を探り、又首として內地人と土人間とに蟠まる不和猜疑を解き、勉めて之が融合を謀るの治臺の要諦たるを感じ、普く之を上下に謀り、茲に君の勸誘により、紳商協會なるものゝ創立

を見るに至る、當時君が懷抱せし日清兩國融和に關する意見と、紳商協會を設立するの必要なる所以は、君が爲せる招待會に於ける演說と、留別席上に於ける挨拶とによりて概見すべし。

日清融和意見

日清融和に關する意見、　予が本島に來遊したりしは、主として本島民に我內地人が本島に對する眞意を知らしめ、併せて我內地人に向つて本島の實相を知らしめんとするに外ならず、而して本島が我版圖に歸してより、百事草創の際、未だ眞正なる內地人の本色を發揮することを得ざるのみならず、往々不良の徒ありて、爲めに我內地人の意向を誤解せらるゝに至らんか、誤解は誤解を重ね、遂に相互の間和合の望なきに到らん、是れ實に志士の憂慮措く能はざる所なり、故に予は本島民に親接し、內地人の眞意を告げんことを欲せり、幸にして諸君の寵招を蒙り、一夕にして斯く多數の士に親炙するを得たるは、予をして滿腔の赤誠を吐露せしむべき好機を與へたるなり、本島に對して內地人の眞意を明にするには、先づ第一東洋の現勢並に我國と淸國との關係及日本人の感情日清戰爭の關係、本島の割讓の理由より、之を說かざる可からざるも是れ一夕の盡くすべきにあらざれば、略して更に譬喩を以て說かんとす。

譬諭懇切、比之唇齒、更覺明晰、宜矣聽者無異辭也、

聽而至此、誰有不悚然反省者

清國の實勢は恰も千歳を經たる一大老樹が、無數の蠹蟲に浸蝕せられ、其根幹の內部は已に腐朽したるも、尙其枝葉延長繁茂して僅に枯死を免かるゝが如し、近世の偉傑たる曾國藩氏、夙に之れを憂ひ、大淸の改革を行はんとしたりしも、時運の未だ到らざるものあるか、遂に之れが根本的救治策行はれずして止み、彼の曾氏は根幹腐朽せる老樹の傾倒を防がん爲、出來得る丈多くの支柱を架して僅に支持し得たり。若し一朝大風地を捲て起り繁茂せる枝葉を撼搖せば、大樹の運命果して如何、而して我日本は彼の老樹と並立せる小樹が、枝を空中に交へ根を土中に接したるが如し、其根幹牢固にして容易に傾倒せざるも、老樹の傾倒せるに、獨り此小樹のみ安全なることを得んや、日本と清國の關係斯くの如し、顧みて東洋の現勢を見るに、實に悚然として憂ふべきものあり、支那大陸は群鹿の遊べる原野の如く、泰西列國は鹿を追ふ獵夫の如し、甲乙の二獵夫は鹿を驅逐し長江以南を、甲の有に歸し、以北を乙の手に收めんとせり、而して丙は甲乙の二獵夫を斥けて、全野の群鹿を占有せんと企て、又丁なる獵夫は嗜好する食物を與へ、甲乙丙の動靜を群鹿に告げ、群鹿の馴るゝを待て始て、之れを捕獲せんとす、東洋の危機豈獨り淸國のみならんや。

日本と清國とが脣齒輔車の關係斯の如し、故に外侮を防ぎ兩國の平和を期せんこと、夙に志士の唱道する所、興亞會東邦協會亞細亞協會の起る、豈夫れ偶然ならんや、之れを要するに日本國民の清國に對するの眞意は、道理上事實上に於て、絶えず兩國協同の希望と計畫とを證明しつゝあるなり、然るに拘はらず清國に對し開戰をなしたるもの、實に大なる理由あるに依る。

開戰理由

我國は日清兩國の協同を希望するに拘はらず、清國は固陋自尊にして敢て東洋の現勢を解せず、我國民を蔑如し、無禮を加へ、我國民を嫉忌し、危害を加へんとす、斯の如き傾向にして荏苒日を送らんか、到底協同親和の時なかるべし、故に我國民は、彼に一打撃を加へ、其迷想を攪破せしめんとしたるもの、之れを第一の源因とす。

理由一

朝鮮の興亡は、東洋安危に關する事甚だ大なるを以て、我國は其獨立安寧を維持せんことを努む、然るに支那の官民は我國の行爲を妨げ、不絶朝鮮を動搖せしめ、加之朝鮮の名士金玉均が、上海に於て毒手の爲に殪れたるや、聞くに忍びざるの慘虐を肆にせり、又天津條約の盟約を無視し、濫に大兵を朝鮮に派し、兵威を以て我國を劫かさんとするが如き、暴慢無禮も亦甚し之れ問罪の師を興したる第二の原因なり。

理由二

臺灣割讓之理由

然れ共試に思へ、清國の和議を乞ふの時に當り、我軍は已に旅順威海衞を取り、牛莊を陷れたれば、北京を衝き清國政府をして城下の盟を爲さしむること難事に非らず、然るに我國事茲に出でずして、纔に軍費の補償と僅少なる土地の割讓とを以て、和を結び師を班したる所以のもの、他なし、其戰や固と兩國協同親和の障害を除去せんと欲したるに過ぎざればなり、而して特に本島の割讓を以て講和條件の一としたるは、外敵の多年垂涎せる海南の要港、南洋の關門をして微弱なる清國に放任せんこと、日清兩國の安寧を害するに至るの恐あるによるなり。

皇澤

趣旨

予は次に內地人士が、本島に對する眞志を一言すべし、本島が我國の版圖に入り、我內地人と同じく萬國無比の　皇澤に浴するに當り、我政府の官人にして、安撫至らざる所あり、保護盡さゞる所あり、斯民をして累代墳墓の地に安んずるを得ざらしむるが如きことあらば、是れ　聖旨に背く大罪人なり、故に本島人民の生命財產を保全し、智德を啓き、健康を保ち、水土風火の變災を避け、堵に安ずべき政治次第に施設せられ、道路

王道無偏、一視同仁

橋梁鐵道郵便銀行保險交通の機關等、凡て島民の福利を增し便益となるべきもの漸を追ふて設立せらるべく、島民從來の慣習は治安に妨害せざる限り、敢て之れを禁じ、又は

開諭懇誠

紳商協會設立意見

改めしめざるなり、琉球の狀態を一見せば思半に過ぎん、政府の方針此の如きのみならず、內地の紳商は本島を以て國防及貿易上の要地とし、彼我共同して多望の事業を營み自他の福利を增進せんことを希望せり、要するに是に由りて之を觀れば、我內地人が、本對に對する眞意は、在住の本島人を疎外し之れと利害を爭はんとするに非ずして、之れと共に提携して自他の福利を圖らんとするに在ることは、明ならん、終りに臨んで望む、第一本島の紳商たるものは可成內地に行き親しく內地の文物を視察せられんことを第二紳商の子弟は學校に入り、將來有爲の人材たらんことを、第三本島は農產に富み、工業原料に乏しからず、故に此原料を利用して器械工業を發起し、內地本島の資產信用ある者と協同し、斯くて業に從事せば、前途多望の結果を見るに到るべく、斯くて以て實業の改良を圖り、內地人と共同製造業を開き、通商業を擴張し、臺灣人士の名聲を宇內に發揚せられんことを云々。

紳商協會設立に關する意見、　鄙人淸國に在ること多年、深く其內地に入り、日淸兩國の協和を計り、以て東洋の趨勢を挽回せんとす、今や下關條約締結の結果は、着々實行せられんとす、故に兩國の誤解を融き、東洋の平和を計らんが爲め、再び渡淸して此精

周到懇切、誠意欲レ溢

神を貫かんとす、而して之が爲めには臺灣の定略實に默し難きものあり。鄙人敢て自ら量らず、竊に內外の情形を通じて、彼我の交情を厚うせんことを希ひ、當府に來りしより、夙夜駑鈍を鞭ち、觀光采風殆ど一月餘。幸に本府上憲の諸大人、其部吏を飭して之れに考證の材料を給し、之れに觀采の便利を與へられ、駐留の衆紳士も亦其愚意を諒して、或は懇篤なる枉問を辱うし、或は鄭重なる寵招を賜はり、百方拾補啓導せられたるは、鄙人が滿腔の赤誠を以て諸大人と衆紳士とに鳴謝せんと欲する所なり、殊に當地士商公會の會員諸君は、特に鄙人の爲めに一大盛筵を張られ、鄙人をして一堂に於て滿都の士君子に親接し、一夕にして滿腔の懷抱を吐露するを得せしめられたり、其厚情至意、何の時か忘るべけんや、今や官卿各位の實力に頼り、觀采の事項略ぼ其緖に就くを得、遠からず當府を辭して南方に遊び、遂に回般の途に就かんとす、玆に今夕薄酒麁饌を具へ、敢て高軒大駕の光臨を仰ぎ、聊か感謝の微忱を表し、併せて留別の蕪詞を呈せんことを期せるに、斯く諸大人衆君子の枉顧を賜はり、鄙人の光榮何物か之れに過ぎん、唯憾む地窄く筵小、彼士商公會の各位を盡く招請して、親しく謝意を表する能はざるを、願くば光臨の諸君子、幸に鄙人に代り鄙意を他の衆君子に轉致せられんことを、

再遊無レ期、哀哉、

珠玉非レ寶、人和是寶、

融合和親、全島之福祉、

借て鄙人不日當府を辭して、南方の巡遊を了し、次で內地に還らんとす、而して其再遊の期何れの時に在るやを知らず、故に一二珍重の土產を得て、之れを內地人士に齎さんと欲する宿圖なり、尤も鄙人の珍重とする所は、金銀にもあらず、珠玉にもあらず、珍卉奇禽の類にもあらず、本地內地双方の士民として協心戮力して、我臺灣の前途を經營せしむ可き機關の創立是れのみ、詳言すれば双方の感情を融合する機關と、双方の利害を共同する機關とを創立することは、鄙人が本地及び渡來の士君子に切望、措く能はざる所なり。

今や日臺縉紳の交情は、益々密にして事情の融和を得、親睦協同の氣熟して、恰も其媒介者を待つものの如し、鄙人の微力なるも、敢て同志同感の士を求め、懐を披き誠を推し、以て融合親和の福祉を全島に普及せんが爲めに、歲時日臺縉紳の會合を開きて、阻隔乖離の患を除き、政治に商業に公私共に、其福利を享けんことを望む、而して此會合を歲時にするは、之れ亦親睦交誼の上に於ける當下の急に非らずや、而して鄙人の微力を以てして、其會同の端緒を開くを得るに至たるは、鄙人の光榮に堪へざる所なり。

次に双方の利害を共同する所以は、先づ前途多望の事業を發見し、双方の資產信用ある

合資興レ業目下之急務、

者、資本を合せて之れを經營し、以て取得の利益を分配するより善きはなし、鄙人夙に之れが機關たるべきものを籌畫し、現に其最も確實安全なる模型を齎來り、已に一二紳士の協賛を經たり、其目的方法の良否規模の大小等に至りては、此等紳士に就て之れを質されなば、明白なるべく、鄙人も亦敢て說明の煩を辭せず、若し今に及んで本地の資産信用ある諸家が、內地の有力者と共に此種の事業を經營して、巨多の利益を求め、因て以て共同經營の利益を四方に發揚するに至らば、全島の士民誰れか復た利害相爭ひ、以て自ら不利不安の境に赴かんや、全島の士民相率ゐて共同利害の事業を企圖しながら尙ほ一方阻隔乖離の患を貽さんとは、鄙人の信せざる所なり。

終りに鄙人は切に望む、當地の紳商諸位が速に此種の經營に賛同せられ、鄙人をして此重要なる機關成立の吉報を齎らして內地に還らしめ、內地許多の共同を渴望する信用財産ある志士をして、欣んで前途の經營を爲さしめられんことを。

聲望掩ニ全臺ー

何ぞ其說く所の渾然として、包括的なるや、何ぞ其言ふ所の質實にして、熱誠なるや、宜なり君の臺北に留る僅か二箇月內外にして、官民の君を訪ふもの日夜踵を絕たず、一たび君の聲咳に接するもの、皆其德量膽識に推服せざるなく、聲望殆んど全臺を掩ふの槪あり

招待會之景況

嗚呼今や山を出でたるの君。之を疇昔に比し其德器に其力量に一段の進境ありしは、風化の速なるに徵して知るべし、世の君を惜むもの大に君の未來に待つあるが爲めなり。

荒尾君招待會の景況、　紳商李春生、及大加蚋堡務署副主理劉庭玉、大稻埕士商公會長葉爲圭、艋舺士商公會長蔡達卿、外數十名の發起に係る荒尾氏招待會は、豫記の如く去九月二十三日午後五時艋舺龍山寺に於て催されたり、式場は本堂の後面を以てし、前後飾るに無數の岐阜提灯を以てし、卓上處々に花瓶に馥郁たる香花を挿みたるを据へ、一體の裝飾甚だ備れり、特に荒尾氏の爲めには演壇を設け、コップ水瓶を用意する等、用意周到と云ふべし、會する者當日第一の賓客なる、荒尾氏を始め、水野民政局長、角田海軍部長、土居通信部長、金子書記官、田中警部長、衆議院議員佐藤里治氏、鮫島盛氏及本社の山下秀實氏等四十餘名列席す。坐定るや荒尾氏は起て一場の演說をなし、民政局囑托御幡雅文氏之れを通譯し、大加蚋堡務署副主理劉庭玉更らに之れを臺灣語に飜譯せり、此間殆んど二時間の長きに亘りたれども、臺人中何れも傾聽し、其論旨に敬服せるもの丶如く、一夕の諸話彼等をして稗益する所あらしめたる少しとせざるべし。演說了りて一同酒席に着き、宴酣なる頃李春生氏立て曰く、

荒尾氏とは已に西京に於ての知遇なり、而して同氏の來臺に就き、我臺灣人士は同氏の意見を開かんとしたりしや切なり、幸に今夜親しく其高敎を仰ぐを得たり、我臺灣人士たるもの、之れを服膺せば、庶幾くば誤りなけん、加之民政局長海軍部長其他紳士の御來會を辱うし、互に談笑和氣靄々の裡に此會合をなす、天下豈に此の如き愉快なることあらんやと、

次で民政局長は我內地人を代表して左の挨拶をなせり曰く

今夜は日本の名士荒尾精氏の招待をかねて、此に臨席の榮を得たるは、誠に謝する所なり、唯百般の施政匆々に屬して、言語の不通、其他の事情に依り、政府の方針如何を悟らざるものありて、爲に民政上多少の遺憾なきにあらずと雖も、畢竟するに此事たる下情の上達せざるに在り、今や官民一堂に會し、酒席の間に胸襟を披きて、談笑するを得る今夜の如き盛會は、恐らく曾てあらざる所、余は官民調和の其緖に就きたるを賀するものなり、而して今夜の宴會を設けられたる起因は、李春生氏が臺商を代表し、日本に遊び荒尾氏を訪ひたるの結果に外ならずと信ず、終りに臨んで李春生氏外諸君の健康を祈る。

次で豫て臺地に滯在中なりし、福報記者黃乃裳氏、起て曰く
臺灣は恰も養子の如く、清國は實家に似たり、日本は養家にして、我清國と今日名義上の關係は、固より絕へたるも、其實情に到つては豈に多少の關係なからんや、故に日清兩國は須らく親密の修交を爲し以つて南洋の關門たる臺灣と、伯叔父兄弟たらんことを希望す云々と、何れも十分の歡を盡くして散會せしは十一時頃なりき、當夜の如き盛會は、領臺以來未だ曾てあらざる所、官民一堂の下に談笑して交情の親密を致し、上下の事情を通ずるは此上なき佳會と謂ふべし。

未曾有之盛會

留別會之盛況

荒尾君留別會の景況、　豫て當地に滯在中なりし荒尾氏は、今回本島南部の巡回を企て、不日發途すべきに付き、去五日夕同氏の假寓なる府前街有馬組の別莊に留別會を開かれたり、當日は朝野の紳士五十餘名の來會あり、其重なる者は、水野民政局長、立見軍務局長を始め、角田海軍少將、中田木村の兩中佐、押川殖產部長、財部金子の兩書記官、民間にては佐藤廣瀨の兩代議士、田村鮫島太田原野崎幷に本社の山下等の諸氏、臺人の紳商にては、李春生、蔡德芳、林克成、劉廷玉、葉爲圭、李秉鈞、蔡達卿、王慶忠、杜克章、林望周、許論潭、陳志誠、林朝海、揚笑巖、蔡蓮記の諸氏にして、荒尾氏留別の

演說をなし、水野民政局長謝辭を述べ、次で李春生起ちて、日臺兩國有志者の協和すべき旨を述べ終りて、山下氏民間の有志を代表して領土の經營と、日臺協和の必要及び希望を述べて、此機會の到來は荒尾氏の盡意の多きに居るを謝し、日臺協和の會同を以て、同氏歸朝の土產に酬ゆべしと說き、一同退散せしは、午後十一時にして、近來稀なる官民の親睦會なり。（以上臺灣新報所載）

二　紳商協會

斯くて君の勸誘空しからず、十月十九日を以て紳商協會の結合式を擧ぐるを見たり、其趣旨に曰く、

一、本會は日本人臺灣人兩間の親睦を以て、第一の目的と爲す、互ひに情實を通じ、懇親を爲して隔意の弊を除くことを期すべし。

一、本會は下情を上に達するを以て、第二の目的となす、總て人民の利害と業務の得失に關係することなれば、官署に建議、又は申立を爲して、事情不通の患を防ぐべし。

一、本會は、實業を奬勵し、民力を振興するを以て第三の目的と爲す、常に農工商の爲

めに利を興し害を除くの方法を求め、他日政治の機關具備し、內外の交情親密なるの時に至り、社會の先導者たる覺悟を以て、氣脈を內地の商工會に通じ、海外貿易の情況を視察し、時機に應じ、運動して以て農工業の隆興を助け、兼て商業の繁昌を謀るべし。

東方齋最後之演説

發起人總代山下秀實氏之を朗讀し、且つ深く君が斡旋指導の勞を謝したるに對し、君の爲したる演説は、最後の演説にして、其辭懇切叮嚀喜悅の情、滿面に溢れたりしと云ふ、誰か想はん僅に旬日にして白玉樓中の人とならんとは。

滿堂の縉士紳商諸君。今日は野生が夙夜渴望して寤寐忘れざる、日臺協和機關たる紳商協會創開の盛典を擧行せられ、其末班に陪するを得るさへ、客遊中の一光榮として欣躍に耐へざる所なるに、諸君は此盛典を以て野生啓行の祖道に當て、此美擧を以て野生歸鄕の贐儀とせられ、其行色をして金銀寶玉より光彩あらしめんとす、野生たる者宜しく何を以て諸君の隆情殷意に答ふべきや。

志望始達、喜色溢レ面、

滿堂の諸君は、本地名門の領袖たり、渡來紳商の翹楚たり、諸君の創立せられたる本會は日臺協和の機關たり、下情上達の通路たり、臺灣實業の指南車たり、而して其要義と

する所を按ずるに、一として臺灣經營上の急務ならざるはなし、今より以後諸君は歲時に斯會を開張せられ。交情日に厚く結合日に固く、肝膽相照し、意氣相投じ、以て協和輯睦の模範を四方に示して、乖離相隔の畛域を一掃するに務められん乎。日臺士民の感情を融合して、其人心を統一するに何の難きことかあらん、而して又諸君の名望と才德とを以て、常に民衆の利病を問ひ、營生の便否を察し。之れを上憲に稟明して、匡濟獎理の便を資け。深く朝家の至意を奉體し、政令の要旨を咀嚼し、之れを鄕黨隣里に宣敷して、奉公向化の方を示さば、下情何ぞ上達せざるを憂へん、上意何ぞ疏通せざるを患へん、一旦百般行政の機關備はり。內外阻隔の畛域破るゝの時に至り。廣く內外の形勢を攷へ、審に遠近の事物を察し、夫の內地に於ける。各種の實業團體と聲氣を通じ、脈絡を接して、農商工藝の奬勵釐革を圖らば、我臺灣實業上に便益を與へんこと、擧げて數ふるに勝ふ可からざるなり、是れ即ち野生が斯會を以て金銀にも珠玉にも遙かに優りたる至寶至珍として內地の同志に誇示せんことを樂しむ所以にして、內地の同志も亦野生と同じく重望を斯會に屬せんこと、野生豫め信じて疑はざる所なり。

然りと雖も、囑望の重きものは責任も亦大ならざるを得ず、殊に諸君は渡來紳士の翹楚

等末語氣不レ擧何日再會之語、終爲

たり、本地名門の領袖たるを以て、斯會の前途は必ず渡來人の翹望する所、本地人の環視する所たらずんばあらず、然るに萬一斯會が其所定の要議を實踐せざる如きことあらば獨り野生の誇說を聞き斯會に重望を屬する、內地幾多の同志をして全く失望せしむるのみならず、本島無數の環視者翹望者をして遂に協同融和に斷念せしむるに至らざるを保せず、何となれば、彼輩は本地名門の領袖と、渡來紳士の翹楚とを以てするも、協同融和の功を奏し得ざるならば、日臺人間の畛域は、先天的に動すべからざるものならんと迷信するの恐あればなり、苟も此の如きことあらは、野生が金銀珠玉に優るの至寶として吹聽したるものは、變じて瓦礫泥土に劣るの廢物となり、野生は內地幾多の同志を欺弄したるの罪を辭すべからず、野生を親愛せらるゝ諸君が、決して野生を此極に陷れざるを信ず、況や濟々たる多士、專力を集めて之れを經營せらるゝに於てをや、之れを要するに斯會を以て金玉とするも、瓦礫とするも野生をして內地幾多の同志に信を失はしむるも信を完うせしむるも、一に創立委員諸君の決心如何に存するものなり、今や野生は啓行の程に登らんとす、復た諸君の間に馳驅して、犬馬の勞を效す能はず、再び親愛なる諸君と一堂の內に揖讓して和氣藹々の歡會に逢はんこと果して何れの日に在るべきや、彼

レ纖哀哉

到處只憂ニ國家、

を思ひ此れを思へば、眷々の意戀々の情に堪ゆる能はず、聊か蕪雜の詞を陳べ敬で諸君の盛情を謝し、併せて斯會の隆興を祈る。

是より先十月十一日附を以て、君の臺北より內地の管井誠美に寄せたる書翰は、簡單なるも以て當時の狀況を盡くすに足るものあり。左に掲げて以て君が最後の演說と參證せん。

拜啓益御淸福奉敬賀候、迂生儀も一昨月十五日、神戶を出帆し鹿兒島琉球諸島を經て昨月二日當地安着仕候、當地の實狀は誠以不忍見、聞事共多く長大息の外無御座候、然るに默止し難きは、事情疎隔の爲め、內地人と土人との誤解疑惑より、相互に敵視するの風を生じ、大局上今日にして訂正せずんば、他日不測の禍害可相生樣相認め候間、此地にて朝鮮琉球の二の舞爲致候ては、東洋經營上、實に不相成と信じ、不顧不肖、相互の誤解を融く事に從ひ候處、在淸中相交候支那人も有之、着早々當地方重立たる縉士紳商共より叮嚀なる饗應に預り、我版圖に入りしより始めての大會を得候に付、態と別紙新聞紙漢譯の樣に相辨じ候處、爾來相方の感情大に相融け申候間、去る五日當地方重なる人人を招き、速に親和の實を擧げんことを促し、來る十五日頃內地人及土人の名望資產あるもの、毎月一回會合すべき發會式を擧げて、迂生の饑に供さんとて、昨日兩方の委員よ

り出來候次第、御喜び可被下候、迂生は右發會式を見て、來る二十日頃當地出發陸路臺中、臺南、鳳山を經て、打狗港に乘船、澎湖島を一覽し、厦門、福州、香港を巡視し、回航の程に可就筈に御座候間、十二月頃鹿兒島より陸行貴地に參拜、歸京可仕候、其節緩緩可得貴意候、今回は同志者廟堂に入候より、切に北京行相勸來候得共、琉球に一大利源發見仕候間、辨理公使位には誘はれ申間敷候、呵々、（下略）

不屑ニ小官一

今や紳商協會も成立を告げたるを以て、君は豫定の行動を取り、臺北を辭し陸路臺南に至り、打狗より乘船して、澎湖島、厦門、福州、香港其他南淸一帶の要地を巡覽せんと欲し未だ發せざる前兩三日、俄に黑死病に罹り、病むこと五六日にして十月三十日遂に臺北に歿せり、哀ひ哉。

皇天何意奪ニ巨人一

第八章　永逝と葬儀

一　臨終の一週日

初め君の病めるや、熱氣上騰四十度四五分に至りしも、流行熱と思惟して意と爲さず、二日を經て少しく閒あり、乃ち疾を力めて客に接し談論刻を移し、病勢復加はる、廿七日愈

巨人之終焉、囈語不レ及レ私
行年三十有八

黒死病たるを知るに及び、避病院に入院す。其夢寐恍惚の間に在りても、猶ほ東洋の前途を顧み憂心措く能はず、諄々として之を口に絶たず、而して片言隻語も一身一家に及ぶものなかりしと云ふ、君稀世の大器を抱き、絶代の雄圖を企て、苦心慘憺十有餘年、未だ其經綸の十一を行ふに及ばず、不幸志を齎らし恨を呑んで逝く、行年僅かに三十有八、人生悲痛の事孰れか之れより大なるものあらんや。

君十月下旬用務を終へ、將に臺南に向け、出發せんとし忽ち病に冒さる、當時臺地到る處惡性マラリヤ流行せしを以て最初は例のマラリヤならんとの診定にて、猛烈なる眞症黒死病とは思はざりし、戰後諸事匆々の時代とて、衛生機關の如きも整頓せず、病院とても僅かに臺北病院あるのみ。當時未だ日本醫師中實地に黒死病を檢診せし者無く、一兩年香港に於て研究せし、北里、青山二博士の調査報告書に依り。朧げながら之れが診斷を爲す如き有樣なりしは、不幸の極と謂ふべし。

發病當時は臺北有馬組邸宅の奧座敷二階に假寓せられ、來客往訪等。外部との應酬忙がはしき眞最中なりしを以て、取敢へず同邸にて療養する事となり、甲斐靖、岡田晋太郎、水谷三郎等日夜交々看護に懈りなかりしも、病勢日に募り、漸く危篤の容體なるより君に隨

伴して渡臺し微恙の爲め北斗温泉に靜養中なりし、內村邦藏を呼還すことゝなる。

黑死病

如上述ぶるが如く、二三醫師の診斷は黑死病症狀の未だ醫學界に紹介せられざりし時代とて、何れも惡性マラリヤとのことにて、處方も亦專らマラリヤに對する投藥たりしは勿論にして臺北病院長澤田醫師の診定により始めて眞症黑死病たるを確められ二十七日夕刻遂に避病院に送致することゝなり諸士皆な同行を請ふて已まざりしが醫師の許を得ず、再三交渉の後遂に渡部正雄內村邦藏二人擔架に附添ひ、病院に同行し、看護に從事することゝなれり、入院後僅かに四日、十月三十日を以て君終に永眠す。

十月三十日永眠

臺地に於ける內外人、皆君の死を惜しみ、相謀りて弔祭の典を擧ぐるや、文武官人內外紳士の來り弔する者數百人に及べりと云ふ。

提唱東亞經綸喚起對淸思想

世人君の功を稱する、多くは其同志門下の征淸の役に從ひ、大に力を國家に致せるを擧ぐるも、是れ特に其の一端に過ぎずして、之れを夫の擧世滔々として歐米に心醉せる時に當り、大聲疾呼東亞經綸の大問題を提唱し、天下を覺醒して對淸思想を喚起したる偉功に比すれば、其輕重大小固より同日の論にあらず。

征淸の役我れ決然攻勢を取り百戰百勝の機を制せしもの、全く我れ平生能く彼の國情を知

悉し。所謂彼を知り己を知れるの致す所にあらざるはなし、是れ誰れか君が夙に清國に着眼し、一世を警醒したる功にあらずと謂はんや、今や君が生前交る所の同志及び門下の才俊は、日清間種々の事業に從ひ、特に君と一身同體たる根津一ありて、益々東方の經營に盡瘁し、年々同文書院より出す所の人材百名に上り、時勢に適切なる諸般の事業に從ひ、東亞振興の基礎を立て、以て邦家の進運に貢獻せり、即ち君逝くと雖も、猶ほ生るの日の如し、君の遺功亦偉なりと謂ふ可し。

二　國民的葬儀

君の訃一たび傳はるや、天下識ると識らざるとに論なく、哀悼せざるなく、特に其知友門生等は惋惜措く能はず、遺骨の京都若王子祠畔なる舊廬に着するや、弔問する者日夜相踵ぎ、東京に在ては西より東より、集り來る者數十人、在京の知人門生等、亦之れに加はり遺骨未だ到らざるに、其葬儀事務所を赤阪靈南阪上陽泉寺内に設け、日夜其準備に着手し誠意熱心恰も父母の喪に趨るが如くなりし。

永逝の發表は都合に依り、延期せられしが、十一月廿七日叙勳及賜金の恩典あり、十二月

一日を以て喪を新紙に廣告す其文左の如し。

去月二十八日臺北に於て病死致候、就ては本月六日午後一時赤坂靈南坂上陽泉寺出棺築地本願寺に於て佛葬相營候間、此段生前厚誼諸彦に謹告候也。

追て供花放鳥等は堅く御斷申上候

親戚總代　井深彦三郎

舊日淸貿易研究所員一同

嗚呼荒尾精氏溘然逝矣、天奪二志士一痛惜曷堪、茲敬訃二於四方同哀之士一、

在京知人數十名

明治二十九年十二月一日　（姓名略之）

赤阪靈南阪上陽泉寺内

葬儀事務所

斯くて十二月初、根津一等遺骨を護して東上し、玆に六日を以て、愈々葬儀を擧行す、當日は午前九時頃より頭山滿等を始め生前懇親の人々集まり來りて、斡旋到らざるなく、定刻に至り同寺本堂に於て讀經あり、終つて奏樂と共に出棺し、順路葬儀式場たる築地本願

寺に向ふ其葬儀たるや力めて浮華奢美を避け、未了の雄圖を抱て死亡せる東亞の巨人を葬るの禮に適はんことを求め、一切の供花を却け、白灯二對白旗四流、『是生滅法』『生滅々己』『諸行無常』『寂滅爲樂』の文字も悲凄の氣を帶び、導僧數名其間に徒歩し、木主は其表面『不退院釋勇精居士』と故大谷光尊法主が特に君の爲めに自筆せるもの、次に勳章を捧げ、靈柩之に次ぐ、喪主井深彥三郎徒歩之に從ふ、柩の左右には白衣編笠の知人及門生等三十七名肅然徒歩して柩の左右を護す余も亦其中の一人たりき、次に太刀、君が生前愛藏せし備前祐定作の名劍たり。其次送葬者殆んど數町に亘り、大宮巨公も多く徒歩し車よりするもの甚だ稀なり、其儀容の靜肅なる往來の人或は車を下りて禮するあり、葵阪を下らんとするや、偶々通行の米國公使、馬を下り柩を拜す、特に柩側の白衣者從軍負傷のもの多く、人をして覺えず落淚を禁ずる能はざらしむ。二時式場に着す、先着會葬の士既に院内に塡充し、寸地なきに至る、導師島地默雷師衆僧と共に、靈柩を寺門に迎へて、本堂に入り、奏樂と共に場の中央に安置し、法儀莊嚴、是より讀經式の如く、先づ喪主及知友門生の喪服を着けたるもの順次燒香を行ふ、是より會葬の士近衞公を初め一同順次燒香し、四時式を終へ、遺骨を同寺に托し、親戚門生之れを護し、翌七日谷中初音町全生庵に送り、

埋骨の式を行ひ、一片の墓木題して曰く『東方齋荒尾精墓』
會葬の諸士近衞篤麿、副島種臣、松方正義。板垣退助、谷干城、曾我祐準、山路元治、伊藤博文(代)山縣有明(代)大隈重信(代)大山巖(代)河島醇、伊東巳代治(代)岸田吟香、石黑忠悳(代)三浦梧樓、三浦安、兒玉源太郎、船越衞。田中芳男、松平正直、陸實、高橋健三、千坂高雅、日下義雄、大鳥圭介、芳野世經、佐野常民、川村景明、片岡健吉、福本誠、小川又次、清浦奎吾、柴四郎、松平容大、山田為喧、益田孝、神鞭知常、頭山滿、安場保和、北垣國道、前田正名、坂本則美、稻垣萬次郎、粟原亮一、淺田信興、森清右衞門、大倉喜八郎、森村市左工門、李峻鎔。朴泳孝、張紹祖、禹範善、羅庚齡等日清韓の紳士學生無慮千餘人。

尙葬儀當日地方に在つて上京する能はざる知友、及門生等は、各地隨處儀場を設け、燒香の式を行ひ、名古屋大阪臺灣上海等、夫れ〳〵莊重の追悼會ありたりと云ふ、嗚呼一布衣の身を以て此國民的葬儀を受く、盛德者に非ずんば、曷んぞ能く斯の如きを得んや。

左に當時大阪新聞載する所追悼法會の狀況を記すべし。

故荒尾精氏の爲めに、山澤靜吾、藤田傳三郎、北畠治房、田中市兵衞、平賀義美、伊藤忠兵衞其他阪神間有志の紳士五十餘名發起となり、來る十三日午後正一時より、當地津

村別院に於て盛大なる追悼法會を營むに付き、昨日より同別院内に追悼事務所を設けたり當日は本派本願寺新法主導師として、來院の都合なり。

大阪追悼會

追悼會模樣、雲漠々たり、水茫々たり、東方齋荒尾君、萬里大鵬の志を齎して空しく臺北瘴癘の鬼と化せり、其訃を聞く者知ると知らざると、皆爲めに之を哀む、史遷が所謂忠實の心、誠に士大夫に信ぜられたるにあらざるよりは何ぞ能く此に至らんや、君亦正に瞑すべき哉、是より先、君の遺骨を臺灣より載せ歸るや、在京の生前知己相會して盛なる葬儀を營めり、當地に於ても、夙に君が功業を偉とせる者、期せずして相會し、一大弔祭の典を擧げんことを謀り、既に數日前より追弔事務所を東區備後町津村別院に設け土井伊八牧野元良等有志の士斡旋至らざるなく、日夜其準備に着手し、茲に月の十三日をトして津村別院に其法會を營めり、此日天色暗憺凄風時に短髮を吹き、天も亦志士の爲めに無限の感慨を寄するものゝ如し、本派本願寺新門主特に當日の導師として來阪し、參詣者亦殆んど五百餘名、さしもに廣き堂内も立錐の地を殘ざるに至る、凭くて午後一時の定刻に至り法會は執行せられたり。

法會は鄭重莊嚴を極めたれども、其儀容の如きは勉めて浮華虚飾を避け、眞とに東洋志

士を祭るの禮に適はんことを求め、壇上には『不退院釋勇精居士』の靈位を安じたるのみ、隨行の執行法話には、君が生前の知己大洲鐵照師、慨然として君が功勳を述べ、天若し君に十年の壽を假すを許さずんば、五年にても三年にても、僅かに臺灣より歸來三十日間にても、其生を長からしめたらんには。而かも事皆止みぬ、君が音容を追想し、茫乎として夢の如しと云ふに至り、師亦歔欷流涕禁ずる能はざるもの丶如く、第二第三の荒尾君を生ぜむこと、百遍の法會にも優らんと述べ、滿場をして肅然襟を濕すを覺えざらしめたり。是に於て回向終り、來會者諸氏の哀辭弔詞は、其數頗る多きを以て、只之を靈前に供へ、一々誦讀の繁を省きたり、中に就き第四師團長山澤靜吾氏は、病中を以て特に參謀長大谷中佐をして祭文を朗讀せしめたり、左に山澤氏及門人總代土井伊八氏の祭文を掲ぐ、

維明治二十九年十二月十三日、山澤靜吾等、謹故陸軍歩兵大尉正七位勳四等荒尾精君の靈を祭る、君大に爲すあるの資を以て、刻苦勵精夙に文を修め、武を講じ、遂に武班に列し、其本分を盡し、日も亦足らざるが如し、然り而して深く東洋の趨勢を大觀する所あり、茲に於て官に請ひ孤劍飄然清國に遊び、深く內地に入り山川を跋渉し、人物を訪

求し、到る處山河關塞の形勢を察し、或は風土氣候人情風俗を審にし、或は農商工の實況より、水陸物產運輸交通の梗概を精查し、或は曠野に暴露し、毒熱を侵し、死に瀕する者一再ならず、然れども堅忍敢爲邁往勇進。遂に四百餘洲の實勢を明にするのみならず、又博く群書を涉獵し古今の成敗を鑑み、內外の氣運を察し、熟謀審查以て東洋百年の大計を立てんことを企圖せり、君已に淸國の情勢を審にし。深く東洋局面の危急を憂ひ、苦心焦慮救濟の策を講じ、遂に日淸貿易硏究所を創設し。有用の人士を養成せんことを期し、着々步を進め黽勉事に從ひ、稍其目的を達せんとするの時期に際し、非常の困難に遭遇せり、然れども從容自若之を辭色に形はさず、遂に其困難を排除し、此に活路を開き、當初の目的を達し。更に日淸商品陳列所を設け、同志をして其學ぶ所を實習せしむ、而して其西隣に事あるや、日淸韓三國に渉る、君慨然竊かに反正の志あり、征淸の役起るや、君同志及門下の才俊二百餘人を官に薦め、通譯の任に軍に從はしむ、君又懷抱する所を攄べ、兼て世人の注意を喚起せるもの多し。君又臺灣澎湖島及南淸諸港を巡視し、將來施設に資せんとし、遂に臺北に渡り官民を訪ひ、利弊の在る所を痛論し、或は彼に勸め是を誘ひ、紳商協會を創立せしむ。人皆君の德望膽識に推服し、聲望全臺

を掩ふに至る、而して臺北を辭し去らんとするに臨み、二豎の侵す所となり、遂に起たず嗚乎哀哉。

君資英邁剛膽大志を抱き、苦心經營茲に廿餘年、而して其經綸未だ之を施すに至らずして逝く、享年僅に三十有八、人世の悲痛慘憺孰れか是より大なるものあらんや、噫乎哀哉然れども君の養成する所の才俊の在るあり、君の志を繼承し邦家に盡す所あらん、然らば則ち君地下に於て瞑するに足らん、特に

皇上君の勳功偉大なるを賞し給ひ、貴重の勳章を授け給ふ、又以て異數と謂ふ可し、故人云ふあり一世の智勇を推倒し、萬古の心胸を開拓すと、實に君の謂なり、某等此道場に於て、祭壇を設け誠心誠意以て君の英靈を祭る、嗚呼哀哉、尙ば饗よ。

維明治二十九年十二月十三日、門人總代不肖伊八敬具二時羞之奠一、致二哀於東方齋先生之靈前一謹爲レ文祭レ之、嗚呼吾徒今竟不レ得レ見二先生一耶、天既厄二先生一以レ時、而又奪二先生之年一耶、吾徒荷二恩於先生一、須彌不レ足二以比一レ高、滄海不レ足二以喩一レ深、吾徒有レ志先生立レ之、吾徒有レ惑先生解レ之、吾徒有レ事則謀レ之無レ不レ忠、吾徒有レ志則救レ之無レ不レ周、而一朝見二棄背一、使下吾徒忽失中世路之指針上、貿々焉不レ知レ所二適歸一也、吾徒小子惡得而不二痛哭一乎、雖レ然

先生空抱二遠望大志一、呑レ恨入レ地、海内外之志士、孰不下感奮興起、而思丙繼二宿志一成乙遺業甲、況吾徒小子、其敢不三早夜鞭二駑鈍一、以期三酬二鴻恩之萬一一哉、嗚呼先生忠誠之氣、上爲二日星一吾徒小子拜二伏于下一、尙雄魂髣髴來亨、

陸軍將校紳士紳商學生、無慮五百餘名に及ぶ、尙別席の床上には、君が遺愛の古刀劍書畫硯勳章東京に於ける葬式行列の寫眞等を陳列して、茶菓を饗し、境内には豫記の如く擊劍の大會あり、觀者をして追慕の感に堪へざらしめたりき。

京都に於ても、諸名士發起者となり、建仁寺に於て管長、默雷禪師の導師にて大法會を修し會衆五百餘、其盛儀莊嚴大阪に讓らざりき、當時禪師の香偈に曰

經營二東亞一是生涯。天不レ假レ年雄志差。熱血于レ今紅滴々。染成滿地杜鵑花。

咦

犀因レ漑レ月紋生レ角。象及レ驚レ雷花入レ牙。

越えて一周忌辰に當り在上海舊研究同窓生一同の祭文は能く追慕の情と君の志とを盡くすものあり、特に之れを揭げて本篇を終ふ。

明治三十年十月三十日、生等謹用二淸酌庶羞之奠一、以祭二荒尾先生之靈一曰、先二天下之憂一

而憂、後二天下之樂一而樂者、非二先生之志一耶、立二毀譽得喪之外一、特立獨行、不レ顧レ他者非二先生之行一耶、人衆者勝レ天天定亦能勝レ人者、非二先生之過一耶。世人皆謳二歌太平一、先生獨憂二國難一、世人皆航二歐米一、先生獨遊二清國一、北歷二燕齊一南涉二吳越一馬背船脣、往柳來雪、觀二察政化一稽二考民俗一、五閱二星霜一、一裘一褐、備嘗二艱苦一、而志氣益雄、於レ是設三學堂於二申江一、集二子弟一者百五十、敎以二忠孝仁義語言文字地理人情一、著レ書立レ說、躬行實踐、以振二聵聾一、以導二愚蒙一、使三世人知二清國事情一、遏二西力東漸一、當時貲力不レ給、艱難蹇棘、世人往々逞二嘲罵一、甚則欲三障二碍之一、而先生不二以爲レ意。險夷一レ節、生死不レ渝、以期二成功一、所謂立二毀譽得喪之外一特立獨行、不レ顧レ他者非邪。歲之乙未、日清啓レ釁、衆情恟々、獨先生泰然不レ動、令二子弟從軍一、自退二居京都一、徐講二戰後之策一如下豫知二勝敗之數一而爲レ之者上兵革既洗、玉帛重敦、償金割地、世人歡喜、獨先生憂曰、目前小利何足レ喜、安知三大害不二自レ此生一乎、又安知四邦國之爭異日不三變爲二東西人類之戰一乎、豈同類遺レ怨而可也哉。慨然久レ之、嗚呼此先二天下之憂一而憂、後二天下之樂一而樂者非邪、生等從二先生一者數年、私期下付二驥尾一以致上遠、而先生逝焉不レ待レ人、嗟呼悲夫、先生渡臺也、皇天不レ弔猝罹二黑病一、疾數日而不レ起、當時聞レ之者、知與二不レ知莫レ不二哀悼一、會葬者數百千人、世人何其遇レ生之酷。而惜レ死之甚也、所謂人衆者勝レ

天、天定亦能勝ﾚ人者非邪、今也强國虎視耽々、一注ニ日東ﾆ西力東漸之勢日逼、而偉人如ニ先生ﾆ既逝。嗟呼悲哉夫、今日丁ニ先生一週忌辰ﾆ追慕之念自不ﾚ能ﾚ止、靈若有ﾚ知、永鑒ニ護皇土ﾆ尚饗、

二　東方問題と荒尾精

第一章　當時の形勢

一　今昔の感

東方問題之首唱、日清親和論之先覺

君夙に憂を東方の時局に懷き、竊に其衰運を挽回するを以て己が任と爲し、辛苦經營十餘年一日の如く一旦南溟に航して瘴疫に罹り、壯志未だ遂げず、溘然として道途に斃る、誰か之を悲まざる者あらんや、嗚呼三十八年の闔生涯を通じ、興亞を叫び、三國提携を唱へ、兩國通商を提撕したる君は、近世に於ける東方問題の首唱なり。日清親和論の先覺なり。而して座上の空論家に非ずして、挺身之に當りし實行者なること。前篇略ぼ之を叙述せり、乃ち本篇に於ては大は君が懷抱せし宇內一統の理想より、興亞の政策に及び、小は時局に關し隨時發表せし意見の一端を臚列して、讀者と共に巨人を偲ぶの資料とせんか、君逝て

十有餘年、之を君が獨立孤行東方問題を絶叫して應ずる者稀なりし當年に比較すれば、實に隔世の感あり、今の清韓も亦當年の清韓に非らず、清國は甲午戰爭及北淸事變に次ぎ日露大役に於ける我邦の光榮ある戰捷に依り、茲に一大刺擊を與へられ、覺醒の機運は全速力を以て四百州の山河に瀰漫し、憲政準備利權回收の活動十八行省の上下を震撼しつゝあり、試に最近三四年に於ける淸國の時事に就き研究せんか、殆んど面目を一新せんとするの趣きあり、清國の世界的地位は今後十年を俟たずして恐らく大變化を來たすべく、我邦と對峙して如何に亞細亞的光輝を發揮し、以て宇內の平和に貢献するに至るべきかは、實に刮目に値せり、歐人と雖も從來の對亞思想を轉化すべき機運に迫られつゝあるものと謂ふ可し、而して韓國は既に我の被保護國となり、彼我兩國の關係は遠からず其境域を撤し親和合一するに至る可し。

此の如き東方時局轉回の盛時に當り、君が生時に於ける彼我の形勢を回顧するは、稍々迂なるが如きも、故を溫ねて始めて新を知る可く、果により因を推せば益々君が超群の達識と、時代の先覺者たるを認得すべければなり。

（温故知新）

明治政府倚文の政策を取ること十餘年、朝野官民齊しく泰西の文物制度を學ぶに急にして

天生ニ巨人ハ、豈偶然、起ニ君子九泉ニ語ニ當時ハ、

曾て東亞の事物如何を顧みず、東亞の安危興亡一に清國の治亂向背に關するあるに拘はらず、我れの清國を見る、越人が秦人の肥瘠を視るが如く、甚だ冷淡にして當局官吏と雖ども十八行省の名稱すら知るもの稀なるの狀態に在り、此の時に當り天東亞の實勢を究め宇內の大計を策せんとする逸材君の如き巨人を生ず豈に偶然ならんや、清國當時の狀勢如何請ふ君をして自ら之を語らしめよ。

火を擁して之を積薪の下に置き、其上に坐し、火未だ燃るに及ばず、因て之を安と謂ふ方今の勢何を以て之に異ならんとは、漢の賈誼が時勢を慨したるの痛言なるが、今や清國の現勢は偶々賈生が當年の痛言を移して以て之を評するに足れり。

從來我國人の清國の形勢を論ずるもの、多くは以て頑迷にして理に昧く、衰朽にして與みするに足らずと爲し、輕蔑侮慢の心を以て常に之に對したるが、既にして清國政府が露西亞と境を伊犂に爭ふて、露國をして伊犂を既に奪ふに返還せしめ、佛蘭西と難を安南に構へて、又意志を遂げしめず、加之我國と屢々朝鮮を爭ふて、能く其利と實とを占め、外交の政策往々其肯綮に中ると共に、內は電信を設け汽船を作り、以て交通運輸の便を計り、砲臺を築き艦隊を製し、廣く武器の製造を內地各所に起して、國防の實亦漸

く擧がり、殊に近來に至ては、鐵道を布き工業を興すに汲々たるが如き、文明の利器を應用して、次第に發達進歩の勢を呈したるに由り、曩の頑迷にして理に暗く、衰朽にして與みするに足らずとして之を輕侮したるものも、大國の情勢容易に測り知るべからずと爲し、却て恐疑の念を以て之に對するに至れり。

曩の所謂頑迷にして衰朽せりとして之を輕侮したるもの、固より已に皮相の妄斷たるに過ぎず、而して後の所謂容易に測るべからずとして恐れて、而して之を疑ふもの、又復其實情に通ぜず、其内勢を詳にせざるの致す所なり、故に宜しく之を輕侮すべからざるの時に輕侮し、宜しく之を恐疑すべからざるの日に恐疑す、其形に眩して其神を認めず、其果を見て其因を究めず、是れ從來我國人が支那に對する觀察の、多くは其正鵠を得ざる所以なり。

卓見

蓋し清國政府が因て以て盛衰興亡を決する所以のものは、此に在らずして彼に在り、枝葉に在らずして根幹に在り、根幹已に朽ちて枝葉の繁茂するものは未だ之あらず、今の清國政府は根幹已に朽ちて復培ふべからず、而して其枝葉は尚ほ一時の春を存して處處に殘紅を點ずるの類にして、其命脈は遠く已に三十年の前に竭き、僅に餘喘を今日に延

くのみ。

今其根幹已に朽つる所以と、尚ほ其枝葉が一時の春を保つ所以如何と云ふに、清朝が髮賊討平の時に當りて、當時の元勳たる曾國藩、胡林翼、左宗棠等を初とし、時艱に遭遇して輩出したる人物は、何れも文武の才を兼ね、識學共に高くして經綸に富めるを以て騷亂戡定の機に乘じ、清國政府をして一大革新を決行して中興の業を成さしめ、依て以て此國の衰運を挽回し、清國をして長く宇内に雄視せしめんとするの鴻謨を懷きしが、清國政府は元來胡人を以て中土に君臨するが故に、若し此等元勳の建議に從ひて祖法を一變する時は、此國の衰運を恢復すること勿論なりと雖も、同時に其宗社の傾覆せんことを怕れて、遂に之を採用すること能はず、寧ろ祖法を枕として宗社を一日に長うせんとするの窮策を執りしより、所謂元勳の諸士は、僅に戡亂の武功を奏したるに止まり、遂に中興の偉業を翼賛する能はず、是を以て清國政府は、一旦中原を克復して其宗社を既に亡ぶるに回したるにも拘らず、其政體政略は、依然として祖宗の舊套を墨守し、一として根本的改革を施さず、去れば髮賊の以前に於て、業に既に亡國の實を備へたる、政治上社會上百般の弊竇は、悉く前日の有樣を存するのみならず、二十年の長亂に因て

洵然々々

蘖生したる諸種の流弊は、其餘毒を騷亂平定の後に遺して一層の困難を加へたり、所謂根幹の已に朽ちて復培ふべからざるものにして、當時の元勳が已に其爲すべからざるを洞見せるのみならず、清國政府も亦自ら其命運の長からざるを覺悟したるなり。清國政府は自ら其命運の長久なる能はざるを覺悟せりと雖も、尙ほ其宗社を一日に長うせんと企つるが故に、是等の元勳を待つに特禮を以てして、尙ほ其力に依り之を收拾經營せんと試み、元勳諸士も亦收拾の出來得る限りは之が經營の責を盡さんとし、清朝の株守せる祖法に牴觸せざるの範圍內に於て、務めて諸種の事業を擧ぐるに熱心なりしかば、電信汽船の如き、武器製造の如き、對外上焦眉の急にして滿淸の社稷を保衛するに必要なる業務は、漸次に之を行ふことを得、又外交の事に向ひては勉めて折衝禦侮の實を擧ぐることを得たり、是れ其根幹已に朽ちると雖も、其枝葉は猶能く一時の春を保ちたる所以なり。

若夫れ曩に清國政府をして非常の英斷と大決心とを以て、社稷を賭して一大革新の事に從ひ、一世の人傑を網羅して之が經綸施設の任に當らしめば、中興の偉業、固より成るに難からず、果して其經營着々として功を奏し實を擧ぐるの日に逢はゞ、此國の盛强富

實三十年を出でずして雄を宇内に視さんこと、蓋し亦至難の業に非ざるなり。

二　清佛戰爭と東洋館

當時我邦對清思想の幼稚なる彼の如く、清國形勢の振はざる亦此の如かりしと雖も、一葦帶水の大陸、二千年の交渉ある禹域の地、況んや征韓論の後を受けたる我邦に於て、豈に多少の憂を此方面に抱くの士なからんや、果せる哉清佛戰爭頃より我邦人中、往々眼を對岸に注ぐものを生じ來れり、然と雖も社會の風潮は、自由民權論に熱中し、民間志士は內國に於て、政治上の野心を滿たさんとするに餘念なく、政府は歐西に倣ふに惟れ汲々として更に他を顧眄するの暇なく、政客中清國問題を口にするものなきに非ざるも其數極めて寥々たり。

三井郵船、其他個人的商業經營の目的を以て、清國に往來、若しくは土着せしものは、之れを省き。君以前に於て政治的若しくば敎育的方面に於て、對清計畫を爲せしものを數へるに余の聞知する範圍に於ては、最初に芝罘領事東次郎が、北淸に於て同志と何事をか企てんと謀りしことあり、之と相前後して小澤豁朗等が福州に於て淸佛葛藤の機に乘じ、哥

老會と勾結し、事を擧げんとして成らざりしことあり、又同時代に末廣重恭等が、何等かの志望を以て東洋學館なるものを上海昆山路に設立したり、其經營者として來滬せしは、宇都宮平一、大内義英、山本忠禮等の諸士にして、學生には自ら進んで對清經營に當らんとするの志あるものを、自費生として募集せるが如し、然れ共朝野齊しく對清經營に冷淡なる時代なりしを以て、學生の集まりしもの僅に十數名を超えず、學課としては英清兩國語を敎授せしに過ぎず、是れ實に邦人が不完全ながらも清國に敎育事業を興せし嚆矢にして、後ち監督者として宗像政、新井毫等の諸士前後して來りしも、諸般の設備完からず、而して之が經營若しくは監督者は、多く政客たりしが故に、專ら力を清國に集中する能はざりし、學生も亦名は學生なりしと雖も、其實少壯有志家にして、何れも昂然豪傑を以て自任し、風雲の變を翹望せる如き狀態なりし故、漸次退校し、學館も續で閉鎖するに至れり、當時學生として來りしものゝ中に、源抱一庵、澤村繁太郎、山内巖、高橋謙、荒賀直順、中野熊五郎等の諸士ありしと云ふ。

第二章　東方齋の理想

何等之卓見、何等之遠識、

狐死而狸弔

一　興亞政策

君は斯の如き時勢にありて、挺身以て邦家百年の大計を定めんとす其提唱する所自から亞細亞の興隆に在らざるは無し君曾て所見を公にして曰く、

眼を轉じて東亞の大勢如何を觀察するに、最近五十年の間に於て、英は緬甸を略して香港を奪ひ、佛は安南を占めて暹羅を割き、魯は壤を朝鮮に接し、疆を長白の麓に闢きて封豕長蛇の勢を作せり、夫れ來るものは狼饕飽くことを知らずして、居るものは或は貧弱にして自恃の力なく、或は老朽にして衰亡に瀕す、其猶能く殘喘を延き社稷を保つもの、眞に望外の倖と謂ふべし、若し夫れ今後荏苒歳月を消磨し、敢て發憤興起する所なからんか、數年ならずして竣功すべき西比利亞鐵道が、北部滿洲に達し、中央亞細亞鐵道が西方伊犂に通ずるの曉、朝鮮支那は遂に朝鮮支那の有にあらざるべし、脣亡びて齒寒し、我豈獨り枕を高くして東方に安臥するを得んや。

歐亞の兩陸は、東西文華を異にし、黄白の二色は、本來其種族を同くせず、所謂西力の東漸なるものは、直に二者の競爭を意味するにあらずや、去れば朝鮮の貧弱は、假令朝

後人詩曰 東洋舊邦縱三國。同盟祇應レ制ニ強秦ニ。

又曰 殷鑑不レ遠印度國、邦土滅裂委ニ西戎ニ。

鮮の爲めに之を憂へざるも、深く我國の爲めに憂へざるべからず、淸國の老朽は、假令淸國の爲めに之を悲まざるも、痛く我國の爲めに悲まざるべからず、苟も我國をして綱紀内に張り威信外に加はり宇内萬邦をして永く皇祖皇宗の懿德を瞻仰せしめんと欲せば先此貧弱なるものを救ひ、此老朽なるものを扶け、三國鼎峙し、輔車相依り、進んで東亞の衰運を挽回して、其聲勢を恢弘し、西歐の虎狼を膺懲して、其覬覦を杜絶するより急なるは莫し、是誠に國家百年の長計にして、又目下一日も忽諸に附すべからざるの急務なり。

顧ふに印度の一たび覆亡の禍を履みしより、東方の故國舊邦は漸次豺狼の食餌と爲り、今や我帝國を除くの外には、僅に支那朝鮮の二國を剩せるのみ、其貧弱を極めて、未だ絕滅せず、老朽を極めて未だ倒斃せず、尙一線一脈の氣息を通じて宗廟社稷を至危極難の境に維持しつゝあるもの、抑又天意の未だ東方亞細亞を厭棄せざるものありて存するに由るか、天に順ふものは存し、天に逆ふものは亡び、天に從ふものは成り、天に背くものは敗る、豈に深く鑑みざるべけんや。

然らば之を爲す宜しく如何すべきや、曰く天意に順ふより良きは莫し、何をか天意に順ふ

天職
天務
扶植韓國振作清國
清國興隆

と謂ふ、曰く他なし、彼貧弱なるものを救護して富强ならしむる是のみ、彼老朽なるものを釐革して壯剛ならしむる是のみ、此事や實に我帝國の天職なり。天に順ふの責務なり、我國が義兵を起して朝鮮の獨立を扶植するは、此天職を全くせんが爲にあらずや我國が問罪の師を出して清朝の驕暴を懲さんとするは、此天務を盡さんが爲にあらずや、邪は固より以て正に勝つべからず、老は固より以て壯に敵すべからず、天意の歸する所理勢の趨く所、一旦戰局終を告げ、清國我眞意の在る所を知らば、朝鮮の獨立富實を務むるの擧が、東洋の平和と興隆とを計るの第一着たるべきこと、清國如何に魯鈍なりと雖も、豈に豁然として解悟せざるを得んや、誠に如是なれば、彼は啻に我を仇讐視せざるのみならず、當に我を助けて東方の大業を贊襄すべく、我は獨り朝鮮扶植の志を完くするのみならず、進で清國を皷舞振作して、其一大革新を圖らしむるを得べし、是時に及び、彼果して能く非常の大決心と大勇斷とを以て、百般の積弊を掃蕩し、大陸の中樞に據りて財用兵馬の實權を收め、法政敎學の泉源を淸めて造士用材の路を開かば、國光國威の進張より、以て典章文物の興隆に至るまで、駸々乎として宇内の耳目を動かすに至るや期して待つべきなり、且夫れ朝鮮にして富實に赴かんか、小は以て其宗社を保持

すべく、大は以て我國の藩籬と爲すべきや固より疑を容れず、然れども此を以て歐亞大陸の大勢を動かすが如きは、固より望み難きの事に屬せり。

但夫の淸國に至りては然らず、地を以てすれば三十五萬方里人を以てすれば四億有餘萬、歲入を以てすれば革新後二十年にして本部十八省より、優に十五億八千餘萬圓の歲額を收むるに足り、而して滿洲蒙古伊犂西藏等の所納は、是推算中に入らざるなり、夫れ此歲入を以て軍備を支持せば、陸に百二十萬以上の精兵を養ひ、海に百隻以上の堅艦を備ふる何の難か之あらん。

加之此國人民の特質として、忍耐と節儉の二力に富み、而して其事に當るや、輕進せず、此三長は實に彼等の宇內に擅にする所、又誠に其國家を富强ならしむる最大要素たり、若し能く此長所を利用し、之に資するに電線鐵路文明の利器を以てし、之を補くるに工藝機械理化の應用を以てし、山を鑄、海を羨、地上の富を拾ひ地底の利を採り、以て四百餘州に殖產興業勃然として起るの日に至らんか、其富實盛强思ふに測るべからざるものあらん。

且夫兩國の國性たる各其特長を有し、尙武の氣に盛にして、彼は尙文の風に富めり、文

と武と並び行はれて相悖らず、相俟ちて共に進まば、東洋の文明を宇内に耀かし、亞細亞の威風を四海に揚ぐるの鴻謀は、庶幾くは是より緒に就かしむるを得ん、然り而して今や我國は其第一の天職を盡さんと欲して、朝鮮の危を濟ひ、又清朝の罪を問へり、他日朝鮮已に安く。清朝運を改めなば。同一義俠の心を以て、清國の一大革新を輔けて之を成就せしめんこと。實に我國民の眼前に横はる、第二の天職なりと謂ふべし。

然れども茲に至りて別に深く謀り遠く慮らざるべからざるものあり。他にあらず清國の富强が我國の地位勢力に及ぼすべき不利の影響是なり、特に自尊自大を以て、宇内を藐視する性癖と、數千年來遺傳養成したる猜疑嫉妬の情念とは、一般清國民の腦底に播結し、頑として搖かず、牢として拔けず。是を以て彼等は國家極衰の今日に於てすら、猶ほ自ら中華と誇稱し、動もすれば夷狄を以て他邦人を遇せんとせり、然るに向後彼若し我が輔掖啓導に頼り。國力を充實するに至らば、其尊大倨傲の氣癖は益々長じて、猜疑嫉妬の邪念は名を貪り利を射るの情慾を助け、土地人民の大を恃み、無限不盡の富を擁して、宇内を睥睨し、隣近を威嚇せんこと、殆ど疑ふに足るものなし、而して當初我國は仁に依り義に仗り、以て彼の再造を助成したるにも拘らず、此時に至りては彼は却て

志慮周密、憂國家者、不可無此深謀遠慮也、

利を先にして義を後にし、其舊德を忘れて新怨を構ふに至らんことも之を古來の歷史に國性とに攷ふれば、亦殆ど疑を容れず、此時に當り我國は再び能く其富と力とを以て、彼の强梁を抑制し得るか、我國は內自國の安寧を害せず、外朝鮮の獨立を擁護して失墜なきを得るか。

脣齒相依り、骿足相扶け、以て東亞の大勢を挽回し、以て西歐の侵略を斥けんとするは我國が天職として淸國の富强を啓掖する所以の本旨なり、然るに淸國已に富强に赴き、又起ちて反噬を試みんとせんか、我國は啻に脣齒鼎足の勢を持して東方振興の志を展ぶる能はざるのみならず、我國は適ま英魯の强橫を抑へんとして、反て英魯に幾倍する强敵を一葦海水の對岸に設くるものなり、東洋の興隆と平和とを圖りて、反て騷亂と危亡とを招くものなり、是豈に眼を大局に注ぎ、國家百年の長計を按ずるもの丶、深謀遠慮を煩はすべき重要問題にあらずや。

議者或は謂はん、是れ黃人と連衡して、白人に當らんとする一種の排外論にして、時勢に不通なる僻論なり。獨帝等をして所謂黃禍を叫ばしむるの口實を與ふるは、此種の議論なりと、大聲俚耳に入らず、忠言往々世に逆ふ、俗兒動もすれば、這般の說を爲して、强者の

前に叩頭して及ばざるを恐る、而して強者の暴益々暴を加ふるを悟らず、世人皆な歐化に醉ひ、東亞の大勢日に非ならんとするの時に當り、毅然中流の砥柱となりて、興亞を絶叫し、一身の利害得喪を顧みず、是れ自ら信ずる深く、自ら任ずる重き俊傑の士に非らずんば、能ふ所に非ざるなり、況んや君の興亞政策の如き、其目的に非ずして手段に過ぎず、君は謂ふ我國は天の命ずる所に順ひ、四海を奄有し、六合を統一すべし、是れ實に 皇祖天神が、建國の創世に宣らせられたる、叡旨にして、東亞興隆の經綸を定め、西力東漸の暴潮を堰塞するは、是れ我立脚の地盤を築成せん爲めのみ、歐米諸國の人漫に我を目して、東洋の一强國と爲し、邦人も亦或は我國は宜しく東洋の盟主權を握る可きを說く、殊に知らず我國は天成自然の皇國にして、其國位遙に世の所謂雄邦强國の上に在るを、彼の盟主權の如きは是れ覇者の事也、假令全地球上唯一の盟主たりとも、決して吾人の我國に期待す可きものに非ず、何ぞ區々たる東洋の覇權に汲々たらんや、立言堂々寔に凡俗と語り易からず。

二 宇內一統論

宇內一統論

乃ち知る君が東方問題を擔ふて起たんとするの宇內一統の理想に根底するを世の雄邦強國と稱する者の、宇內に行動する所以を觀るに、其策謀權略は、變幻窮りなしと雖も、各自定むる所の一大目的は、確乎として拔く可らざる者あり、是故に英には

各國各有二一定目的一

英の目的あり、露には露の目的あり、米には米の目的あり、佛と獨とには佛と獨との目的あり、夫の百事萬般の事業が、並に進み騈び馳せて相悖らざる者、主として此目的の方向に其針路を進むるに由らずんばあらず。

顧ふに革命分合の常なき泰西の列國に於てすら、猶此の如し、然るに上に萬世一系の皇統を戴き、下に萬邦無比の民風を有するの我國に於て、却て未だ一定不動の目的あるを聞かざるは、獨り何ぞや、國の目的に於けるは猶人の志に於けるが如し、傳に曰く志は氣の帥也、氣は體の充つる也と、蓋志未だ定まらずして氣の能く振ふ者は鮮し、氣振

我國未ダ定二目的一

ふ能はずして、體の剛健なる者は未だ之れあらざる也、國の目的を定めざる者も亦豈に此の如くならざらんや。

然らば則我國は如何に其目的を定む可き乎、曰く天の命ずる所に順ひ之を定むるより善きは莫し、天の命ずる所とは何ぞや、曰く六合四海を一統して、普天率土の生民をして、

我國目的、順ニ天命ニ統ニ一字内ニ

洽く我　皇の仁風を仰がしむること是也、何を以て之を知れるや、曰く、萬邦に冠絶せる國體と民風とを以て之を知れり、請ふ其據る所を擧げて之を證せん。

太古は邈たり神代は悠なり、吾人は敢て其詳を說かずと雖も、六合を一統し、四海を奄有するの宏猷遠謨は、實に　皇祖天神が建國の創めに宣らせられたる大叡旨にして、發して　列聖天皇の懿德丕蹟に現はれ、傳へて不朽の皇典圖書に存し、赫々吾人の耳目を照すこと恰も三光の九天に麗くが如し、爾來年を閱する數千載、　皇德日に新にして大道愈振ひ、　寶祚の隆なる、洵に天壤と窮まりなき者、是豈に萬邦に冠絶せる我國體の眞相に非ずや、

仁義忠孝

仁義忠孝天禀の至性より出で、君臣の大義父子の大道、均しく皇澤の深源より流れ、盈ちて忠勇尙武の元氣と爲り、溢れて盡忠報國の至情と爲り、數千載の前より數千載の後に至るまで、智となく愚となく、長となく少となく、其然る所以を知らずして然る者、是豈に萬邦に冠絶せる我民風の特質に非ずや。

冠ニ絶萬邦ニ

顧ふに上下數千百年生民の家を成し族を成し國を成す者、枚擧に遑あらず、其間天命を受けて下土に降り、之が君と爲り之が師と爲り、以て天職の幾分を盡したる者も、何ぞ限らん、然るに其子孫後昆久しからずして德を失ひ、或は搏噬攘奪の慘境に陷り、或は

流離漂泊の悲途に迷ひ、天緣漸く遠かりて、人心漸く危く、羸顚劉踣前後相踵ぎ、淪沒して復蹤迹を留めず、爾來天涯海角に繼いで出で代りて起る者少からずと雖も、其初或は腕力に依り、或は詐術に依り、或は偶然の事變に依り、或は民衆相互の共約に依り、時に隆盛富强の運に膺たる者なきに非ずと雖も、其立國の基礎は纔に利益の一念を賴むに過ぎず、一旦利益離るゝの曉は、則土崩瓦解の禍を免れざる者、滔々として皆是れなり。

天命

天職

斯かる危險の宇內に立ちて、獨り我國が天成自然の國體民風を蘊備たる絕海孤島に保持して、三千餘年一日の如く、成吉士汗の狂暴、忽必烈の桀豪を以てするも、竟に敢て一指を染むる能はざりし所以は、豈に天の我國に命じ我國に待つ所の、特に厚く且大なる者あるに非ずや、豈に我國の天職は六合を統べ、四海を掩ふの宏猷遠圖を大成するに非ざれば、終らざるの天啓に非ずや。

皇國之名稱

余は常に謂ふ、我國は皇國と稱す可く、帝國と稱す可からず、何となれば我國は　天皇の統治し玉ふ國なれば也と。是徒に虛名空號に拘はりて爾云ふに非ず、古書に曰く、皇國は無爲を圖はし、帝國は德を圖はし、王國は義を圖はし、霸國は智を圖はし、强國は

兵を闘はすと、皇の本字は自王也、自に从ひ王に从ひ、天より命ぜられたる自然の王と云ふの義也、無爲の言たる天成自然の謂に外ならず、然らば則自立して王たる者は勿論衆庶の推薦に依る者も、亦た皇にあらず。

之を支那の上世に考ふるに、伏羲神農黃帝は天成無爲の皇也、少昊顓頊より陶虞に至るの五世は、聖德百代に優るありと雖も。德あれば則王たり、德なければ則亡ぶ、帝と稱して皇と稱せられざる是に故あり、降りて夏殷周の三代に至れば、禹の水に於ける、湯武の放伐に於ける。至然公義に出でゝ一點私なしと雖も。已に五帝の德に慙るあり。更に降て秦漢以下に至れば。自ら皇帝と稱すと雖も、其實五霸の故智を襲ふに過ぎず、五霸にすら且及ぶ能はず、況や三王に於てをや、然らば則皇と云ひ帝と云ひ王と云ひ霸と云ふ。其間自から一定の等差あり。決して徒稱空名として視る可きに非ず。

抑も　皇祖天神の我國に君臨あらせられてより今に百數十世、　神子神孫世々相承け、以て我允文允武なる　今上陛下に至らせらるゝまで、奕世累代畏くも皇祖の御遺體を以て、　皇祖の御遺業を嗣がせられ、毫も　皇祖の御遺勅を損益せずして、　皇祖の御遺德を修めさせられ、以て天壤無窮の寶祚に膺り、萬億世不易不變の乾綱を保維あらせら

れ、曾て一點の人爲人力を其間に夾まざる者、是を天成自然の眞君と謂はずして將た何とか謂はん、我々臣民の遠祖が辱くも神系の庶流より發せしより、亦今に數千載、一宗分れて九族と爲り、九族更に分れて百姓と爲り、百よりして千、千よりして萬、以て海內に瀰漫せる四千餘萬の國民と爲り、今や少數の名門巨族を除くの外は、殆ど復た何れに發し何れより降りしかを辨じ得ざるに至れり、然れども此等幾千萬人の　皇室に對し奉るや、尊崇の意敬慕の念、常に各自の肺腑中より發し、其何に由りて此の如きかは、殆ど自ら覺知せざる者に似たり、是を天成自然の眞皇國と謂はずして將た何とか謂はん、夫れ智力兵力を以て國を立つる者は、固より言ふに足らず、德義を以て一國の帝王と爲る者は、其相優る數等の上に在りと雖も、未だ天成自然の天皇を戴く者と、日を同ふして語る可からず、余の我國を皇國と稱する、何ぞ徒爾ならんや。

更に人類團結の發達順序より考察するも、我君國の獨り天成自然に適合せること、愈よ爭ふ可からざるを見る可し、抑も人類團結の最先模型は家にして、家より族を成し、族より國を成し、國と家とは大小單複の差ありと雖も、其秩序と組織とは、全く同一精神に基く者とす、是れ天然發達の國家也、然り而して天創草昧の人類が、始めて家を成せ

る所以を尋ぬるに、一に血緣を重んずる情念が、夙に彼等の心田に栽培せられたるに由る者の如し、唯其れ血緣を重んずるが故に、血緣の相連りたる人類相合して、家を成す也、唯夫れ血緣を重んずるが故に、血緣の本源たる父若くは母を尊崇して、其の命令に服從する也、既にして漸く人類蕃殖の度を加へ、一家より數家を出だして、遂に本支宗族の關係を生ずるに及んでや、家人が家主を尊崇するの念は、直ちに族人が宗室を尊崇するの念と爲り、一家相親愛するの情は、直ちに一族相結托するの情と爲る、更に進んで邦國の形體を成すに至るも、其所謂治者被治者の關係は、取りも直さず家人の家主に對し、族人の族長に對する關係にして、所謂君臣上下の分位は、取りも直さず子孫の父祖に於ける、支族の宗室に於ける分位に外ならず、何となれば君家は九族百姓の共同宗室なれば也、是に於て乎君臣の義は、父子の親と其精神を一にし、法制道德均しく君家なる一泉源より流出し、全國を擧げて渾然一家團欒の狀を呈せしむる者、豈に天成自然に依るに非ずや。

輓近歐西に於ても、社會學者及法制史家等は、漸く此發達順序を覺得し來りたるのみならず、其前世たる希臘羅馬の社會に於ても、頗る數多の證跡あるを發見したり。

利害生存

然るに現今の所謂雄邦強國なる者は、腕力若くは智術に依りて國を建てたるに非ざれば則民衆の共約又は偶然の事變に依りて團體を結びたる者のみ、而して之が團結の要旨とする所は、民衆利害の異同共同生存の必要と云ふに過ぎず、其基礎の安危と根底の深淺とは措て問はずとするも。彼の博愛平等と云へる人爲的宗教が、容易に其間に侵入し得たるを見れば、今の列國が天成自然の原素に乏しかりしは、推知するに餘あり。

是に由りて之を觀れば。數千歳の上より。數千歳の下に至るまで、能く天成自然の原形を完うして、毫末だも神聖を汚されざる者は、眞に唯我國と我　皇室とある而已、夫れ天には固より二日ある可からず、土には固より二王ある可からず、苟くも萬古侵す可からざる天成自然の眞皇あらば、之れをして六合を統べ、四海を一にし、以て普天率土の生靈を化育せしめられんこと、天意に非ずして何ぞや。

宏猷大謨

我國は皇國也、天成自然の國家也、我國が四海六合を統一するは、天の我國に命ずる所也、　皇祖　皇宗の宏猷大謨也、已に然らば我國前途の最大目的は、此宏猷大謨を大成するの外に出でず、顧ふに皇道の天下に行はれざるや久し、海外列國概ね虎呑狼食を以て唯一の計策と爲し、射利貪慾を以て最大の目的と爲し、其奔競爭奪の狀況は、恰も群

犬の腐肉を爭ふが如し、是時に當り、上に天授神聖の眞君を戴き、下に忠勇尙武の良民を帥ひ、有罪を討して無辜を救ひ、廢邦を興して絕世を繼ぎ、天成自然の皇道を以て虎呑狼食の蠻風を攘ひ、仁義忠孝の倫理を以て、射利貪慾の邪念を正し、苟も天日の照らす所復た寸土一民の　皇澤に浴せざる者なきに至らしむるは、豈に我皇國の天職に非ずや、豈に我君我民の　祖宗列聖に對する本務に非ずや。

經營準備

而して此雄圖鴻謀を大成せんには、之に從事する覺悟を定め、豫じめ健全鞏固なる前途經營の準備を整へざるべからずとて、提言して曰く、

富强之基礎、心力統一、興亞之經綸

何をか前途經營の準備と謂ふや、曰く國家富强の基礎を建設し、其立脚の地盤を築成する是也、何をか富强の基礎を建つると謂ふや、曰く國民心力の統一を固め、其全心を外に傾注して、其全力を內に充實せしむる是也、何をか立脚の地盤を築くと謂ふや曰く、東亞興隆の經綸を定めて、西力東漸の暴潮を堰塞する是也。

眼ある者は視よ、耳ある者は聽け、四海を統一し宇內を風化するの大任を負ふたる我日本國は現に如何なる地位に立てるや、我日本に隣近する東亞の諸舊邦は、現に如何なる境遇に陷れるや、世の呼で强と云ひ霸と云へる泰西列國は、現に東亞の諸邦に向ひ、如

何なる動靜を爲せるや、東方の一大禍機を隱伏する支那の老朽は、今如何ぞや、東洋のバルカン半島と名けらるゝ朝鮮の孤弱は、今如何ぞや、眼ある者之を見、耳ある者之を聞かば、其心頭に湧起す可き感想は、如何ぞや、支那の老朽は獨り支那自身の爲めに憂ふ可きのみなる乎、朝鮮の孤弱は、獨り朝鮮自身の爲めに悲しむ可きのみなる乎、暹羅に緬甸に安南に印度に、陸梁跋扈せる狼吞虎食國の暴威は、獨り暹羅緬甸安南印度の國民自身の爲めに慷慨す可きのみなる乎、念ふて此に到らば、寒心酸鼻に堪へざる者あらん、然らば則今日に於て彼老朽せる支那を奈何す可く、彼孤弱なる朝鮮を奈何す可く、彼衰廢淪沒せる暹羅緬甸安南印度を奈何す可きやの問題を決定するは、實に我國が宇內的事業に對する第一着手と謂ふ可し、啻に宇內的事業の第一着手と謂ふ可きのみならず、彼虎豹豺狼の利爪鋭牙の間に在りて、我宗社家國の安固を保つ所以は、此を措て他に求む可からざる也、且夫れ昊天は既に六合統一の大任を以て我國に命じ、皇祖皇宗は既に四海奄有の宏謨を以て我國に遺させられたり、苟も我國民たる者、其心思を凝らし其の耳目を明にし、以て東亞の實勢眞情を熟察せば、國家進發の前路を塞げる各種の問題、何ぞ氷釋して一定せざるを患へん、獨り各種の問題を一定せざるのみならず、之が

區處條理を立て、東亞興隆の經綸を確定すること、敢て難きに非ざる可し、唯講究未だ熟せず、査察未だ至らざるを憾む耳。

然りと雖も東亞興隆の經綸を行ふに當りては、或は弱を扶けて强を挫くの必要もあらん或は有罪を討して無辜を救ふの必要もあらん、又或は廢國を興し絶世を繼ぐの必要もあらん、夫れ已に弱を扶け强を挫き、有罪を討し無辜を救ひ、廢國を興し絶世を繼ぐの必要あらば、隨て陸海軍備も擴張せざる可からず、軍器兵餉も充實せざる可からず、是豈に一朝一夕にして具備し得可き者ならんや、是豈に一局一部の臣民を以て經營し得可き者ならんや、然らば之を爲す宜しく奈何す可き乎、他なし國民の全心を外に注いで、其全力を內に實し、以て所謂國家富强の基礎を建つる是已、奈何にして國民の全心を外に注ぐ可き乎、他なし政事上國家對外の方針を一定すると同時に、國民海外通商の方向を指示して、之が振興を奬勵する是已、奈何にして國民の全力を內に實す可き乎、他なし國家致富の泉源たる可き農工業を撰定して、之が發達を啓導する是已、今夫れ我國の產物にして海外に輸出し、以て我致富の泉源と爲す可き者は、幾種にして、何々なるや、他の國の產物にして我國の工藝を加へ以て、我致富の泉源と爲す可き者は、幾類にして

何々なるや、是れ第一に講究せざるべからざる所也、已に此等物貨の何種何類たるを知らば、之が產出製造及び輸出入を盛にする總ての方法手段は、須らく豫め其規模方針を定めて、之を施設す可く、同時に金融線、運輸線及交通線も、亦須らく國家對外運動の規模方針と致富の泉源たる殖產工藝、及び貿易の緩急方向とに應じて之を擴充し、進張するの方法手段を實行す可き也、再言すれば前途最も多望なる水陸產業は、如何に獎勵す可きか、將來最も多利なる製造工藝は如何に振作す可きか、此等生產物の販路は如何に開拓し如何に擴張す可きか、之に伴ひ之に要する內外爲換事業は、如何に整備す可きか、海陸保險事業は如何に振作す可きか、銀行及び取引所事業は如何に經紀す可きか、貨幣制度と造幣事務とは、如何に確立し如何に整理す可きか、郵便電線は如何に延長す可きか、道路橋梁は如何に修理す可きか、鐵道は何れより何れに敷設すべきか、港灣は何れに築き、何れに開く可きか、航路は何れに向ひ幾線を通ず可きか、植民は如何、居留地は如何、倉庫棧橋は如何、船渠は如何、造船所は如何、製鋼所は如何等、凡そ農工商業及び金融運輸交通の諸業に關する重要問題は、一々之を政事上國家對外の方針と規畫とに照らし、最も精確に講究して、之を整頓せざる可からず。

富強之基礎、於レ是乎建矣、

而して又當局者は、例へば或る者は某地に向つて某事を行ひ、他の或る者は他の某地に在りて某業を舉げ、又某事の經營は若干年を繼續して、斯々の目的を達し、某件の運動は若干歳を經過して斯々の結果を得可しと云ふが如く、豫め運動の部署を定め、豫め成功の期限を剋し、各線各條の大綱を中樞に總攬し、以て舉國の民衆をして均しく一定の方針に向つて、着々歩武進むるを得せしめざる可からず、苟も此の如くならん乎、國外に於ける貿易の振起は、同時に國內に於ける農工商業の奬勵と爲り、一方に於ける農工商業の發達は、同時に他方に於ける金融運輸諸業の刺衝と爲り、金融運輸交通諸業の進歩は、又同時に內外商業工藝及び水陸產業の振起發達を促がす可きや、智者を待たずして知るべき也、此時に於てや、舉國の民衆は或は、農工商の發達に勤勞して、財力開發の準備を爲し、或は通商貿易の振起に奔走して、富資收集の準備を爲し、或は金融運輸交通の諸業に勵精して、民業隆興の準備を爲し、而して政治家と軍人とは、又各其執る所の職務に鞅掌して、內外經營の準備に怠らざる可ければ、上に閑士なく、下に游民なく、所謂國民心力の統一は、是に於て成る也、所謂國家富強の基礎は、是に於て建つ也、國家富強の基礎已に建てば、進んで海陸軍備を擴張し得可く、進んで兵餉軍器を整備し得可く、

因ニ此理想ニ立言力行

進んで城塞砲壘を經營し得可く、更に進んで東亞經綸の實功を奏し得可く、所謂國家立脚の地盤も遂に築成し得可し。

君は此理想に依り、立言力行す、故に首尾一貫脈路井然、些個の澁滯なく些個の阻碍なし恰かも天馬空を驅るが如く、誰か能く之を支へん、根津一は君と交親同胞も啻ならず、其交情實に管鮑に過ぎたり、故を以て君に就き語る所最も肯綮に中り、地下の君の聞くを喜ぶ所ならん、根津嘗て君が事略を叙せる一節に

君東亞時事に於て、機を見徴を察し、知つて言はざるなく、謀て忠ならざるなし、士官學校に在るの日、嘗て韓京變あるを聞き、一學生を以て當路に見えて、事宜を言ひ、清釁初めて啓くや、對清意見を著して、海內士民を戒め、將に和を議せられんとするや、敵計の出づる所を指摘して當局の籌措に資し、對清辨妄を著して、與論の惑を辨じ媾和條約の患を我民に貽すあるを見るや、全國商工大會に授くるに、訂約建議案を以てし、韓廷動搖し再び大局を擾るの虞あるを見るや、官卿に周旋し、志士を糾合し、當路に對韓策を定めんことを勸む凡そ其謀る所、盡く當時に行はれずと雖も、其慮る所一として後日に驗あらざるなし。

眞に然り、君が日清提携論も、清國膺懲論も、媾和管見も、對清通商意見も、將た對韓計

書も、貿易研究商品陳列所の設立も、通商協會紳商協會の發起も、其他一生を通じて言ふ所行ふ所、悉く君が理想の源泉より分派せるものにして、其言行一々驗あるに於て、益々君の高邁達識遠く時流に超越せるものありしを想はずんばあらず、而して益々君の志業伸びず、所謂百年の長計を立つる能はざりしを惜むや切なり。

三　新立國策

君曾て漢口に在りし時、天下の大勢を觀察し、其經綸策中三帝五王案なるものありき、後洛東若王子に靜居するや、隨時所見を吐露して、國家に稗益する所あらしめんとしたること前說する所の如くなるが、頃者遺稿を撿して、新立國策一篇を得たり事空想に屬するが如きも、亦以て國士の用意を見る可し依て其梗概を抄錄す。

第一段

一新立國設立の主旨、
一同區域、
一同名稱、

一同言語、
一同旗章、
一同衣冠、
一同國祭及儀式、
一同臣民冠婚葬祭儀式、
一從來國民の風俗習慣上、必ず變改を要するもの。及其改良法。

第　二　段

一國是大方針、
一創業上急を要する人才の養成法、
一國富を來すべき水陸物產の種類、及其發達せしむべき方針順序、
一國富を來すべき工藝品の種類、及其發達せしむべき方針順序、
一生產物品の發達に伴はしむべき內外に通ずる交通運輸、金融線、及築港、設術其他造船所製鐵所等の、創設すべき方針順序、
一國防及出師上海陸軍の設備すべき方針順序、

一移住せしむべき國民及其程度、
一創立初年より二十年に至る每年徵收すべき歲入額、
一創立初年より二十年に至る每年歲出に要する不足額、
一創業中歲出不足額の募債法、及其消却法、
一政略及通商上の便益を來さしむる爲、各外邦と交際すべき方針順序、

第三段

國體

一新立國は、當分君主獨裁とす、
獨裁政治の弊は、貴賤の疎隔に流れ、中央干涉の弊は、都鄙の懸隔に陷り、國の統一を破ぶる通患なれば、最も深く講究せざるべからず、
一新立國は、其大方針を達する爲め、左の綱領に依り。政治機關を設く、
一國威を張る、
一國安を保つ、
一國財を整ふ、

一國俗を善す、

一國富を增す、

政治機關立體の綱目

一國威を張る、

注意、國民競爭の甚しき、今日に在りては此種の行政、最も緊要の問題にして、其薄弱なるときは、殆んど國民の獨立及進步をして前途に望なからしむ、故に全國民の爲には勿論、一臣民の爲にも、邦外に對し公力を以て、其妨障を排し、及其利便を圖らざるべからず、之が爲には最も精銳なる外務省及軍務省を立てざるべからず、其兩省の組織は、先づ某國の制度を本とし、其弊害を除き規則は可成簡易にし、當局者をして活動を得せしむべく、宇内諸强國の制度を參考して組織すべし、以下之に倣ふ。

外務省に付ての注意、

外交官には、最も人物を精選せざるべからず、是れ其國の權勢及品位を代表するものにして且新立國の事故、常に敏活廣遠の注意を爲し、各國の擧動にして我國の利益及權利に關するものは、精細に之を觀察して、内閣の耳に入れ、且輿論の注意を

促さゞるべからず。

領事にも老成にして事に親切なる人物を選ばざるべからず、且領事を進退する局に於ては、通商運輸交通及金融に關する他の諸局と協同すべきは勿論、商業學校造船學校及商業會議所商品陳列所等に連絡して、通商上の務を全うする事に注意すべし。

軍務省に付ての注意

軍務省は陸海軍を總轄するものにして、新立國の事故、陸海軍共將校下士の養成を急にし、兵卒は漸次其方針に從ひ增加せしめ、且兩軍共國家經濟の思考を、其行政上に注ぐべきを要す。

一國安を保つ、

國安を保つの行政は、社會の存立進步に一日も缺くべからざるものなり、國威を張る行政には、外方に向つて妨障を排し、而して國安の行政は、內部に向つて損害を防ぐ、二者相俟ちて國民の生存及獨立を全うす、故に國安の行政も、亦國民全般の利益、或は時としては一臣民の利益にまで保護を及ぼすことあり、今此行政上講究すべき要綱を揭ぐれば。

第一國家の治安を維持する事、

第二公衆の身命を保護する事、

第三公衆の財産を保護する事、

第四社會の不能を救恤する事、

右四項に向つて力を致さしむる爲に、内務省を設くべし、以下四項に付き一々其必要の注意を述べん。

注　意

第一項の行政は、最も緻密の注意を要するものにして、其施行の得失は往々志士の氣を激せしめ、終に治安を維持せんとして、却て之を害するもの尠からざれば、深く講究せざるべからず。

第二項の行政は、恩威共に行はざるべからず、且つ醫術衰へ衛生振はざる國柄にあつては、殊に艱難を極むべきを以て、廣く其行政の得失利害を研究せざるべからず。

第三項の行政は、啻に盜賊を防ぐのみならず、凡行政干渉を以て、水害火災等の豫防に力を致す事密ならざるべからず、且つ金融の安康を害し、商業社會の安全を妨

げ、或は賃金小作料、若くば貸借條件等にして、行政の干渉を要するものは、其警察上最も注意せざるべからず。

第四項の行政は、鰥寡孤獨及癈疾不具の類にして生計を失ふものは、自身の不幸のみならず、其結果の及ぶ所は遂に社會全般の不幸に至るべきを以て、之を教育して其緒に安せしめざるべからず。

一國財を整ふ、

國財とは國家の財産にして。其行政は即世の所謂財政是なり、國家百般の政務は、必ず之に相當の費用を要す、財政なるものは此費用の供給を司るものにして、其整否は國の行政全部の盛衰に繫るのみならず、國民全般の休戚に繫ると云ふべし、國財行政上研究すべきの綱領を掲ぐれば、

第一、歳計豫算法、

第二、稅則の立案及租稅の徵收法、

第三、國庫金の保管及出納法、

第四、國有財産の管理法。

第五、國債の整理及消却法、

此行政を擔任せしむる爲には、大藏省を設く、

大藏省は國財行政の中央機關にして、專ら右五項の職司に任ずるのみならず、社會の金融に干涉を及すべき任務ありて、國家の專占業たる貨幣鑄造は、實に此職に屬せざるを得ず、尙ほ進んで干涉すべきは、金融制度の類にして、郡國立私立銀行は、其監督する所に係はる、此故に同省は金融安全の行政に付ては、內務省と協同し、實業進步の保護に付ては、又其主務と協同し、國有財產の管理に付ては、則ち諸般の主務廳と協同し、政費支辨監督に付ては、會計檢査局の力に依るものとす、今右五項の講究すべき要點に注意を述ぶ。

第一豫算上の注意、財政當局者は、歲出を支辨し得るの責任、歲出を支辨し得るの保證に供するのみならず、猶一步を進め行政の大方針に從つて、各省主務の輕重を定め、歲計豫算の全體に付て、充分の責任を負はしむべし。

第二稅則立案上の注意、關稅徵收の寬嚴は、一面に於て內地土產の盛衰に關すること勿論なれども、他の一面には國庫收入の增減に關係あるを以て、稅率を若干の

割合に定めて、適當なるや、稅率の昇騰が、反て收入の減少を來すことなきや等の問題は、深く講究せざるべからず。

第四國有財產管理上の注意、國有財產とは、官業及官有物を總稱するものにして、其收益は國庫歲入の一部を補ふに足る、而して之を管理するは、財政當局者のみに非ざれども、他に一任して關せざる弊を生じ易きを以て、直轄者と連脈貫通して、遺算なきやう組織せざるべからず。

一國俗を善くす、

風俗の改良と智識の開發とに因て、文明の進步を圖るの行政は、行政部中未だ此より神聖にして、且高尙なるものなし、此行政に任ずる爲め、敎部省を置き、其消極手段に付ては、內務省をして其要重なる職司を有せしめ、又最高等の行政としては、宮內省に讓るべし。

此種の行政に任ずる者は、須らく俗界名利の外に超然として、社會智德の運行の洞見し得る者を選ばざるべからず、本來の性質より之を言へば、國俗に係はる行政、特に敎育の行政は、通常行政の部類に置くべからず、俗吏に感染せざる學者の圍中に之を

据置かざるべからず、殊に新開國の事故、國俗行政の勢力は甚だ强大にして、家庭の風儀に迄も、感化を及ぼすものなれば、之を尋常行政の階級に加へて、吏務の弊を波及せしむるは、甚だ不可なるを以て、深く此點に注意せざるべからず。國俗に係はる行政の部類中、深く講究を要する事物頗る多し、今試に行政手段の點より、直接及間接に屬するものを掲ぐれば、左の如し。

直接に屬するもの、

第一官立諸學校の管理、

第二官立圖書館博物館天文臺等の管理、

第三高等教員の養成及教科書の編修、

第四學位の授與、

第五國史の編選、

第六神官及官國幣社の保護及管理、

第七監獄の管理、

間接に屬するもの、

第一公立及私立の諸學校、並に感化院育兒等に係はる、保護及監督、
第二敎科書の檢定、
第三公私立の學術書、敎育會、圖書館、博物館、美術會、慈善會等に係はる奬勵及監督
第四著述出版に係はる保護及奬勵、
第五宗敎建設物の保存及監督、
右の外國俗の壞亂を防遏する爲に、干渉すべきもの左の如し。
第一著述圖書及寫眞、其他出版物の檢閱、
第二演說又は說敎、其他公開言論の監督、
第三演劇寄席觀世物、其他興行物の監督、
第四人事上總て風儀を破るべき、一切の所爲に係はる監督、
此の如き廣汎なる事物に付き、國俗上の行政を有效ならしむる爲めには、敎部省は內務省及司法省と大方針に付、一致の活動を爲さしめざるべからず、且善行美術等の奬勵を司る、最高等の行政は、宮內省に掌らしむべし。

注　意

國俗の行政は、其結果を永遠に期するものにして、臨機應變の策は、此行政に殆んど無用なれば、此行政に當るものは互に懇切協議して、相矛盾なきを勉めしむべし。

實業專門の學科程度は、必ず其國の進步と伴はざるべからず。

學位の授與及學藝の奬勵は、其主義を誤まるべからず、眞正の學者は素より名爵を以て榮とするものにあらず、然るに學位の如きものは、學者其人を勵ますと言ふのみにあらず、碩學高德を社會に旌はして、衆人に師表を示すが爲なり、故に學位の授與は、寧ろ吝に失するも、其濫に陷らざらんことを欲するなり。

著述出版の業にして、政府の當然に爲すべきものは、國史の編纂、統計の編修、字典の編修、語法の編修、法令の編修、敎科書の編修、又は內外地理圖の編修、

一國富を增す

古の專制惡政の、或時代にあつては、行政は人民を動物視し、之に鞭撻を加ふるが如きもの在りし雖も、今の行政は須らく人民を靈物視して、之に援助を望むにあらざるべからず、國富行政が奬勵を主旨として、實業社會に干涉を及ぼす所以のものは、社

會に存する百般の有形的事物を招請して、國の進步に協力せしめんと欲するが爲なり、此行政に勸業省を設く、其職司に屬して奬勵せしむる方法の講究すべきもの、左の如し。

第一法令的奬勵、

第二制度的奬勵、

第三補助的奬勵、

第四名譽的奬勵、

此四種の奬勵は、一般の行政にも要用なりと雖も、國富行政には創業國なるを以て最も必要なり。

國富行政の區域及目的を言へば國富とは、國民の富源を總稱するものにして、其行政の區域は、農工商業より、以て通運金融等の事に至る迄、凡そ有形上國富の、發達に資するもの、皆其保護奬勵を掌るものにして、其職司の爲め講究すべきものは、左記の種類に對する保護奬勵の諸制度なり。

第一農工牧畜漁業鑛山森林の類、

第二工業製造建築土木の類、

第三海外貿易內國商業諸會社諸取引所の類、

第四鐵道航海郵便電信の類

第五諸種の銀行、及諸の金融制度、

國富行政は、國富の障害を排除する事も、此職司に屬すと雖も、此點は多く國安行政の職司に委ね、其本來の目的、即積極手段なる國富の改進を保護奬勵するに在り。例へば森林法の如き、鑛法の如き、職工條例の如き、會社法の如き、之を法令的奬勵と云ひ、例へば博覽會の如き、之を制度的奬勵と云ひ、例へば利子補充の如き、益金補助の如き、其他金錢を以て奬勵するもの、之を補助的奬勵と云ひ、而して褒章賞牌、又は敍位敍勳、或は名譽職を授くるが如き、之を名譽職的奬勵と云ふ。

第三章　對淸貿易擴張案

前章述ぶる所、宇內一統論と云ひ、興亞政策と云ふ、共に君の理想にして、常に口にすべきことに非らず、偶々日淸の國交破れ、東亞局面の大變故に際し、一片報國の至誠は、君

實行者、而非二空論家一、

識二時務一在二俊傑一故能着二眼大處一蓄二經世之偉略一

人格之光蝕二經濟手腕一、

東方振興之第一着手

當時僅三十一歲

を驅つて自家所見の一端を吐露して、以て一世を警醒するの已むを得ざるに出でしめしのみ、君は實行者なり、斷じて空論家に非らず、其然る所以は、君の實歷之を證す、世君の出身と、其風采を想望し、豪傑肌の士にして、經濟思想の如きは疎なりしなるべしとなす者尠なからず、而して始めて前章の所論を讀み經濟思想の周密なるに驚く可し、夫れ時務を識るは俊傑に在り、唯だ夫れ俊傑、故に能く大處に着眼し、經濟の偉略を蓄ふ、唯た夫れ俊傑、故に能く實務に通じ、經濟の大手腕を有す、彼の空言徒に喜び、區々錙銖の利を爭ふものと日を同うして語るべからず、而して其往々にして如是誤解を受けしもの、君の經濟的手腕が、其人格の光に蝕せられ、世眼に映じ難かりしが爲めのみ、君は前章述ぶる如き理想を抱き、大局の挽回を以て、己れが任となし、拮据經營十餘年、死に至る迄も渝らざりし。

君は東方振興の第一着手は、先づ其通商權の掌握に在るを信じ、日淸貿易擴張を以て當面の題目となし、日淸貿易研究所、並に商品陳列所の設立を提唱して、對淸通商の急務を全國に遊說したり、當時僅に三十一歲の時たりしを知らば、以て其不出世の巨人たるを知るべし、余豈に好む所に阿する者ならんや、君は一面より見れば實に經濟の頭腦ある好箇の

貿易指導者たりしなり、事業家たりしなり、廿六年の秋公にしたる對清貿易擴張意見は當時君が懷抱の一端と、之が實施の手段たる研究所陳列所二事業の梗概を知るに足るものあり、左に之を錄す。

貿易は國家經濟の大本、生民富饒の樞紐たる、固より論を待たず、況んや優勝劣敗、富強是れ競ひ、弱肉強食鹿を中原に追ふの今日をや、富の存する所は、實に邦家安泰萬民鼓腹の繫る所なり、貿易の急務たる亦知るべし、然らば則ち彼の日清貿易の如き、之を歷史に考へ、之を現狀に照すも、殊に大に之を振興せずして可ならんや、精自ら揣らず大に日清貿易を擴張し、以て國家民生の公利を興さんと欲し、向きに日清貿易研究所を創剏し、而して古人百聞一見に如かず、居以て氣を移すの意に基き、特に之を清國上海に設立し、四方有爲の青衿、苦學鍛錬すること茲に三年、今や學課の程を卒へ、又商品陳列所の開設就り、卒業生の實地修錬と全國各府產貨者の研究と、互に相待て日韓、日清貿易の隆興を期するの違に至れり、今左に過、現、未三境の要領を講究し、以て清閱に供す。

第一項　日清貿易の必要

夫れ我國の淸國に於けるや、之を歐米の淸國に於けるに比するに、其距離の甚だ近きのみならず、其人種宗敎制度文物人情風俗嗜好生活を以てするに、彼は霄壤の差異あつて、我は頗る相伯仲せり、然るに彼我淸國に於けるの狀況は、却つて得失反對の觀あるは何ぞや、蓋し彼は人事の經營を盡して天然を補ひ、我は人事天然兩ながら之を等閑に附するに因らずんばあらず、是れ豈に今日處世の道ならんや、苟も然らず今日我國人をして、大に發奮以て日淸貿易に拮据經營すること、恰も歐米人の淸國に於けるが如くならしめ、而して其人情風俗の同じきを利し、其嗜好生活の似たるに乘じ、大に天然關係の利便を利用するに及ては、我供給は終始渝替することなく、彼の需要も永く窮極することなく、其勞之に同うして、其功必ず之に倍せん、日淸の貿易豈に之を振起せずして可ならんや。

且夫れ數年ならずして淸政府の大計畫に係る鐵道の淸國中樞の一大市場たる漢口を出でゝ、中原の各都府を貫き、北京に達し、轉じて山海關を經て、滿州を橫ぎり、西伯利亞鐵道に連接するに至らば、是れ即ち淸國貿易の更に一大進歩を現はすの時機にして、思ふに淸國に於ける、各國射利の競爭は、是より益甚しからん、之を近時泰西人

の頻りに大會社を組織して、以て同國に向うに徴するも、其れ亦必ず早晩の商戰に必勝を期するの意に外ならざる歟、果して然らば、今日我國は優柔不斷之を輕視すべきの秋にあらざるなり、必ずや上下齊心、天然の關係を利用して、人事の經營を悉くし彼の壟斷を奪ふて我商權を回復し、進で衡を中原に爭ふの用意なかるべからず、之に加ふるに今回銀貨下落の影響は、(當時我國未だ金本位制にあらず)我日清貿易上至大の好運を來し、夫の久しく東洋の商權を壟斷して、跋扈を恣まにせし歐米人は、今の金貨不權衡を來せし爲め、從來の形勢頓に一變せんとす、且又銀相場の變動毎に迷惑を感じたる淸商は、今や已に金貨國より輸入の最も不利益なるを悟り、本位を共にする我國に供給を仰がんとするの傾向あり、此の際此の時、世界の大勢を觀じ來れば、今や歐米人は攻めざるに自ら潰走せんとし、淸商は求めざるに我に好機會を與ゆるものなり、是の時に當りてや、日本人たるもの協力同心大に日淸貿易發達增伸の基礎を定め、以て歐米の壟斷を奪ひ、淸國人の望みを容れて、元と利害を共にするの關係を結ぶこと、實に今日の最急務なり。

第二項、日淸貿易者養成の必要、

日清貿易者養成之必要

清國の貿易額は、已に六億萬圓に達すと雖も、我國との貿易額は、未だ二千萬圓に出でざるのみならず、其本邦商賈の手に由る直輸出に屬するものは、僅かに淸人の十分一に止まり、其輸入の如きは殆んど全く支那人の掌握を出でず、而して其在淸日本人の現狀を見るに、上海は亞細亞第一の貿易港たるに拘はらず、隨て開店すれは隨て倒閉し、現に存するもの僅に若干戶に過ぎず、其他の諸港に至りては、寂々寥々存するが如く、亡するが如し、是を以て我邦人の支那貿易を言ふもの、前に懲り後に惡り、遂に以て向ふべからずとなすものゝ如し、然れども退て之を想ふに、支那に向ふもの必ずしも失敗せず、只缺點あるもの失敗するのみ、其失敗する所以を究めず、只管支那を以て向ふべからずと爲すものは、抑も亦誤れりと云ふべし、顧ふに其缺點の重なるもの三大端あり、而して其原蓋し眞成の性能を備ふる貿易者、乏しきに歸するに似たり、何をか三大缺點と云ふ、曰く第一日淸貿易直接の賣買をなすべき資格ある商人なきこと是なり。

三大缺點

第一缺點

今一例を揭て之を示さんに、抑輸贏の道は、彼我の情を知るを要とす、殊に淸國に於て然りとす、蓋し淸國は今尙大小の金銀塊を切斷して、之を使用し、種類の多き十有

五に至り、塊質の鑑定算計の方法、甚だ紛雜を極むるが如き、其度量衡は品質の繁き、一百餘種、使用分別煩錯無比なるが如き、百規民物紛々擾々、假令ひ具眼の士を以てするも、能く一朝一夕の徹底通達し得べきにあらず、然るに從來渡淸の我國の商人は多くは言語の通ぜざる、風俗の明かならざる、或は支那人を傭ふて其人を誤り、或は習慣を知らずして、需要の嗜好を傷ひ、或は運輸交通の便否遠近と、習俗節時の要措を審かにせずして、進退期を誤まり、緩急宜しきを失ひ、或は其貨物をして空しく滯積以て來季を待つの不幸に沈み、或は急遽の輸送、爲に運賃の高低を顧みるに遑あらざるの失策に陷るが如き、其他商家の要件として鹵莽滅裂皆不利の原とならざるものなし、失敗せざらんと欲すと雖も豈得べけんや、之を第一缺點とす。

第二缺點

第二、日本の荷主が、一時の便宜上より、物貨の權衡を失ふにも拘はらず、日本にて支那人に販賣すること是なり、假令ば玆に一物貨あり、神戸商人より之を在上海なる日本商店へ向け、委託販賣をなさんとす、其之を委託するに方り、荷主は以爲らく直輸せば必ず巨利を博し得べしと、乃ち同地の卸相場に一割を加へて之を送る、然るに該荷主或は同貨物を有する他の荷主が、一時金を要するに際し、在神戸支那人に現金を

以て同地の卸相場より更に五分或は一割を減じて賣却し、而して其支那人は、巧に時機の緩急と運賃の高低とを謀り、之を上海に送るとせん乎、其價の低廉なる爲め、忽ち前きの上海委託品價と衝突を起すに至り、遂に荷主と委託商との間に矛盾を來し、其勢の到る處、一變して不和となり、再變して憤怒となり、三變して貨物澁滯品質損壞、遂に怨恨を以て終るに至る、甚しい哉諸情疎濶の弊や、是吾人が常に見聞する所にして、其害勝て言ふべからず之を第二缺點とす。

第三、我國各地方に於て往々見るが如く、在清の日本商人が、同販路に同物貨を以て互に競爭する是なり、抑も今日商業の情勢たる、百目整然交通利便、彼の戰爭に於て衆合力を利用せざれば、勝ち難きと同じく、平時の戰爭たる貿易に於けるも、亦衆合力の必要なるは、人の能く知る所なり、況んや資本甚だ豐かならざる我國商人の、支那人の如き多資本者に對するをや、古語に曰く矢桿一束勇者も能く之を折ると得ずと、又曰く强弩の末は魯縞を穿つ能はずと、矧んや其未だ强弩ならざるものをや、其失敗する固より數の然るべき所なり、之を第三缺點となす。

支那に於ける貿易の情勢夫れ斯の如し、顧みて我國內實業の形勢を視れば、其支那貿

我國無ニ支那貿易商一

望ニ眞成貿易者出一

易たる誠に輓近の事に係り、前には沿革の徴して以て則るべきなく、後には慣行の依て以て、恃みとするものなきを以て、殖産興業を事とするものは勿論、老商業家と稱するものと雖も、多くは未だ彼の事情に通達せず、或は稀に少しく其事情を解するものあるも、皆目前一時の小利に眩惑し、將來永遠の大益を慮らず、其極貿易商は一も生産家に便利を與ふることなく、却て中間奇利を生産家より貪らんと欲し、生産家は過當の侵削を蒙むるを憤り、終に氷炭相容れざるに至り、其極生産家中有力のものは自ら進で開港場又は海外に取引を試み、貨物山堆需供衡を失ひ、遂に同業者の競爭を惹起し、不慣の結果一敗地に塗るを致し、其資財に乏しきものは、常に在日本の淸商、及我國仲買商の酷縛に遇ふて、徒らに呻吟するを免れず、是れ亦未だ眞成の性能を備ふる貿易者に乏しく、隨て分業の道立たざるに因る、其他團結の實擧らざる、資本の合せざる、亦皆未だ該貿易者の輩出せざるに歸せずんはあらず、然らば則ち我國今日實業社會の衰況を恢復するは、蓋し眞成の性能を備ふる貿易者の出否にあつて存するや知るべきなり。

退て支那商人の形勢を觀察すれば、啻に其本國の各港に商權を占め居るのみならず、

進で我開港場に蟠居し、蟻來麕聚。日に其數を加へ、多くは妻妾を我女子に娶りて、子孫を育し、以て晏然永住の策を畵し、我國の言語人情風俗より、物產嗜好取引習慣に熟達し、加之ならず連絡を彼の各港に保ち、運輸金融交通を便にし、內外相應じ緩急度を失せず、漸く將に我內地の生產に立入らんとす、其天然の關係を利用し、其人事の經營を盡すこと、亦密なりと云ふべし、宜なる哉我輕擧の商人が、每戰每敗、終に其商權を擧て一々彼の壟斷に歸し、輸入品は勿論、輸出品と雖も、我商人の直輸出に係るものは實に支那人の十分の一にも及ばざること、豈に長大息の至りならずや。

夫れ殖產興業貿易擴張は、我國今日急務中の最急務たり、官民一致奮つて之を振起せざるべからず、然るに前條の形勢に付て之を見れば、我國の實業社會は、孰れの日か能く其位置の製造人たり職工夫たるの實を免るゝを得んや、然らば則ち之を救濟するの術如何、曰く其法他なし、玆に一大日淸貿易者養成所を設け、眞成熟達、自ら我國富强の製造に任ずる、多數の有爲著實なる貿易誘導者を生じ、之をして需要供給の中間に鞅掌し、或は殖產家には、改良製造の得失利害を指示し、或は低價の原料を他より周旋し來つて、專ら販賣の一途に、其智能を應用し、以て逐次各生產家に便益を與

矯ニ正第一缺點一

矯ニ正第二缺點一

矯ニ正第三缺點一

ふるに在り、然るときは前の第一缺點を矯正し得るは、固より論なく、彼の淸國の要港及我國各地方に於ける需要者の、實況不明の爲め、一跌遂に久しく廢絕の姿なりし荷爲替は、再び之を興し得るのみならず、且其步割を滿足に貸與し得べきを以て、從來一時金融逼迫の爲め、仲買の猾商及在日本の淸商に、棄賣するの悲境を免かるゝを得て、玆に第二の缺點を消滅するを得べく、又其多年同窓同志親和の輩、四方相提携して、事に此に從ふに及では、第三缺點たる競爭の弊の如き、自ら大に救濟すべきなり。

只眞成の貿易者出づるも、其數尙少に止り、各地一致の方法を取る能はざるときは、假令其一地のもの能く其價格を保たんとするも、他地同業者の濫賣するものありて、是れ亦遂に物價の權衡を保ち能はざるに歸すべしと雖も、苟も其人充分多數にして、各地に散在し、東西連絡首尾照應するに於ては、始めて久しく外人に壟斷せられし、日淸貿易の商權、玆に回復するを得て、漸次我貨標を上位に進むるを得るのみならず、又且つ從來見るが如き、淸商限價の注文に羈せられて、自ら慊らざるを含んで、粗製濫賣するの弊消滅し、以て其信用を復するを得べきなり、是に於て貿易殖產興業家各

研究所之起因

研究所之創立及現況

自其所を得、循環固流其利を成し其用を全うし、以て分業の道確立すべく、又地方の有志或は實業家は、該貿易誘導者を聘し、或は彼にして自ら商社を起し、其資を該地與業殖産家、及其他より募集することゝすれば、其純益は則ち地方一般の潤澤たるは勿論、其事業たる海外貿易なるが故に、一張一弛直に國家經濟に影響し、結果の及ぶ所、啻に農工商業家の結合親和するのみならず、同地方擧て團結一致し得るに至り、於是乎始めて分業の道立つ可く、團結の實成るべく、從つて資力合し貿易擴張し物產亦發達すべきなり。眞成貿易者の養成、豈今日の急務と云はざるべけんや、是れ則ち日清貿易研究所の因て起る所以なり。

第三項、日清貿易研究所の創立及現況

日清貿易研究所は、前述する所眞成性能の貿易者養成と、兼て我國貿易品試賣買研究の爲に創立する所にして、明治廿三年六月始めて創立事務に着手し、徧く全國に就き、子弟を召募せんと欲し、精自ら五畿各道を巡歷し、到る處官民有志の賛成する所となり、或は地方税を以て有爲の青年を擇むあり、或は市郡費を以て秀逸の子弟を拔くあり、又或は獨力奮つて之に應ずるあり、其數無慮數百名、於是先づ之を東京に集合せ

卒業者八十九名

眞成貿易者

しめ、志操、身體、學術の三點を試驗し、同年九月七日、一同長崎港を出發し、同九日上海に到着す、同月廿日開所式を行ひ、爾來別紙の科程に依り、已に去七月を以て諸學科の卒業を爲せり、而して生徒は入學以來日夜勵精事に玆に從ひしと雖も、元來世間無類の創業に係り多少雜駁なる企望を包含せる多衆個人の集團たりしを以て種種の事情に關係して、去廿四年五月迄に退所せしもの四十二名、遂に百難を破り、千苦を排し、將來眞に不屈不撓以て必ず其志を貫かんと盟ひしもの、九十餘名に至り、終に今回諸學科の卒業を遂げしもの實に八十九名なりとす、今や海外異域の境、切磋卓勵、其業に從ふのみならず、親みの積む處因の疊まる處、信義相重じて吉凶相弔ふの狀、實に同胞も啻ならず、就中其前途の責任を重じて、愛國想念の感起に至ては、眞成貿易者の態度に愧づるものなきを信ず。

而して其學術進歩の現狀に就ては、別記科程順序の通り、經過し來り、已に滿三年の學科々程を完り、諸學科の卒業を爲せしと雖も、貿易の術たる繁密複雜なるのみならず、殊に營利に機敏なる淸商と角逐して輸贏を決するには、實地の鍛練深からざるべからざるを以て、尙二年間今回創立の陳列所及賣買取引所に在て、實際の業務に從事

せしめ、以て諸般の實務に經驗せしむるものなれば、其能く二年の實修を卒ゆるに至らば、始めて志操堅固にして且充分の技倆を備へ、日清貿易上完全の性能ある貿易者を得べきを以て、其實修を卒へし者には、日清貿易技倆證明書を附與するものとす、

商品陳列所

生徒養成の經過大要斯の如し、而して本年七月研究所の附屬として、日清商品陳列所なるものを、上海英租界九江路に創立せり、其目的たる、廣く日清貿易品の品評及試賣買を行ひ、以て我國各府縣實業家の便益を謀り、傍ら本所生徒實際の練習に充つるに在り。

陳列所之要領

第四項、商品陳列所業務の要領

其一、抑も支那の國たる、地の廣き三十七萬三千餘方里、人の多き四億一千餘萬、是を以て人情風俗習慣の差、東西南北霄壤懸隔せり、而して其各地異同の如何に精通するは、貿易上最も必要の事なるも、如何せん該國現今の情勢たる、獨り文學哲學を除くの外、百事討究の資料に乏しく、間々泰西人の著書材料ありと雖も、氣候地理書の外、概ね杜撰皮相の判斷にして、取て以て實際講究の資となすに足るものなし、よし假令ひ之ありとするも、百聞は一見に如かず、百見は一體に如かず、商家の務にあ

つて殊に然りとす、況んや其資料に乏しきをや、是故に生徒にして其講究を全からしめんと欲せば、宜しく各要港及内地必要の地點を巡歴し、實地に之を研究せしめざるを得ず、是れ第四第五學年の科程に、旅行練習を加へたる所以なり、乃ち卒業生は、其陳列所及賣買取引所に在て、貿易上の事物大低實地に會得するの後、清國諸要港を巡回せしめ、上海貿易と異同の點、及他日諸種の貿易事業を、經營するに必要なる調査を遂げしめ、又清國內地の一部に入り、日本物貨の最も重なる需要地と、支那物貨の日本に向ふべき最も重なる生產地とを、巡視せしめ、其需要生產の實況、及其地と最寄開港場と、金融運輸交通業の實況を精査せしめ、以て後來日清間貿易上の變化、即銀行の新設、汽船汽車の新通、電信の架設、新工業の創立、及天變地異其他の事變等に際し、臨機運籌の素源を蓄へしめ、以て他日清商と輸贏を爭ふの際、勝を制するに遺算なからしむるを要し、其結果を我官民に報告して、日清貿易經營の資料に供せんとす、然るに右の必要目的を果すに方り、生徒各自の負擔たる、毎月僅々の學資、到底完全の成果を結び難く、而して本事項の性質たる、後來我日清貿易發達の本源たるべく、其成功の如何は、實に國家民生に關係すべきものなるが故に、冀くは其資の

足らざる所、之が補助を政府に仰ぎ、以て其結果を全うせんと欲するなり。

其二、夫れ殖產興業貿易は、其關係互に密着して離るべからず、是を以て獨り貿易者の熟練の技倆を備ふるを要するのみならず、殖產興業家をして、產出製造の活眼經驗を蓄へしむるを要す、蓋し貿易者は殖產興業の用を爲す所以、殖產興業者は貿易者の利を完うする所以にして、二者相倚り相待つて澎然沛然、互に活動發揮すべきものなればなり。

然るに退て我國生產者の情態を察すれば、苟も外國輸出物品として言へば、其己れの生產品たる其物貨は、何れの國の何の用途に適するや、如何に改良して可なる可き、何れの貿易地に於て、何れの時期に盛なるや、否、又何れの物品の果して淸國に向くべきや否の如き、茫乎として一も之を知らず、夫れ斯の如き情勢を以て、經過し行くは、將た何れの時か能く殖產興業の發達、貿易の隆盛を望むを得んや、故に今日の急務たる、我國各府縣陸海產物及工藝品中何物が、果して淸國何地方の需要に適するや、否及其改良の方法如何、並に將來新販路を開くべき方法と、從來の輸出品をして益々增進せしむるの工夫とを、實際に試み、又淸國工藝品中、我國何れの地方に於て、何

れの品々を模造し得べきやを確かめ、又特種の商標を附し、精製品の販路を開き以て日本品の信用を恢復する等。

其他清國物産中、我國に輸入して、利益あるものは、其買出の方法、其産地及我國の需要地方とを詳かにし、以て我國實業家の便益を謀るにあり、是れ本所附屬として、日清商品陳列所を設立したる所以にして、創立以來已に各府縣の依頼に應じ、實際作の試賣買を遂げたり、然れども其責任關係の大なる、到底個人負擔の耐ゆる所にあらず、須らく公共の力を藉つて、之を擴張整理、以て其研究を全からしめざるべからず、而して其結果の如何は、直に國家民生利害に影響すべき業務たるが故に、冀くは其資の足らざる所、之が補助を政府に仰ぎ、以て其目的を果さんと欲するなり、今商品陳列所業務の、要領を擧ぐれば左の如し。

第一、同所は、日清貿易研究所の附屬として、先づ其本部を上海に設け、漸次支部を天津漢口廣東等の諸要港に開き、又我國の各要港に出品取扱所を置き、以て日清貿易の機關となし、普く我國各地方の生産物を陳列し、之を清人に媒介して、直輸出を便ならしめ、併せて清國物産の我國に輸入して、利益となるべきものは、之を我國

各地方に媒介して、其直輸入に便ならしむる事。

第二、我國各府縣の諸生產物に對し、彼國何地方の需要に適するや、其需要の多寡買買の季節、其物品に付改良すべき要點、荷造の方法、及將來の見込等を詳細に調査研究して、各荷主に報告する事。

第三、日本物品の信用を鞏固にし、又其信用を失ひしものを回復する爲め、精製品には特別の商標を附し、以て新販路を擴張する事。

第四、淸國工藝品中我國に於て摸造し得べき物品は、其標本を我國各府縣の生產者に媒介して、摸造品の輸出を誘導する事。

第五、歐米其他の諸國より、淸國に輸入する工藝品中、我國に於て模造し得べき物品は、之を我國製造者に媒介して、他國の輸入を防杜し、我國產の輸出を計る事。

第六、淸國の金融運輸交通、其他通商上必要の事項に關し、特に取調の請求ある場合に於ては、其求めに應じて、調査報告する事。

第七、研究所の生徒をして、將來我國實業者の顧問となり、眞成貿易者となるべき眞成貿易者の資格を備へしむる爲め、陳列所及同取引所の助手として、實際の業務に

従事し、以て實地の駈引を修得せしめ、且將來我國に在る商業學校の卒業生にして、日清貿易に従事すべき志願ある青年者に、實地練習の便益を與ふる事。

陳列所は前七項の目的を完うするには、實際賣買の營業を爲さゞるべからず、然るに本所の主旨は、日清貿易上單に公共の便益を謀るに在て、自ら營利事業に關係するを好まざるに依り、陳列所内に賣買取引所なる營業部を設け、之を大阪の豪商岡崎榮次郎氏に委託せしが、開業以來大に進歩して、過般二十萬圓の資金を以て、日清貿易株式會社を興し、岡崎榮次郎氏專務取締となり、同會社を以て、陳列所の賣買取引所を任ずることとなれり、其陳列所及賣買取引所の諸規則は別冊に詳かなり。

商品陳列所之創業

第五項　上海日清商品陳列所の創業、

陳列所は、清名瀛華廣懋館、賣買取引所は、日華洋行と稱し、英租界九江路と、漢口路の交角に位置し、本年七月四日を以て開業せり、開業以來、一般に日清兩國貿易の發達を促がす爲め、開設せしものにして、營利事業に非ざるとの故を以て一般に一種の好感情を惹起し來り、從つて稅關其他の取扱上、大に便益を得、顧客非常に多く、賣行亦甚速にして、意外の好結果を得たり、嗚呼本所や、地は萬里春申の滬頭に在り

日清貿易發達之淵源

境は東洋貿易の中心に屬す、各國人士視線の焦點に屹立して、日清貿易發達の淵源たり、其成功の如何は、實に國家民生の利害に繫る、其影響する所、蓋し亦少小にあらざるなり（明治二十六年秋）

第四章　媾和管見

戰後締盟關ニ東方之大局ニ

君既に清國の實勢に精通して、其の善後の策を講ぜんとす、何ぞ時俗に倣ふて、空論徒議するを爲さんや、君は日清戰後締盟の條件如何は、直に東方の大局に繫るあるを知り、先づ私見を上陳し、又廿七年十月對清意見に依り其一端を公にせり。

盟約條款

戰は國交の和を失ふに由りて宣せられ、和は宣戰の目的の達するに由りて媾せらる、而して所謂終局の勝を制し、勝利の實效を收むる所以は、媾和に伴ふ盟約の如何に由りて存することを思はゞ、他日北京城下に於て、我國が締結せんとする盟約の條款が、如何に國家に重要なるかを知らん、蓋し和は常にして戰は變なり、已に戰を宣する、必ず亦和を媾せん、和は誠に戰の局を收むる所以にして、戰勝の效果を完くすると否とは、一に繫りて媾和盟約の上に在り。

三大條件一曰斷ニ清國之干涉

顧ふに今度我國が、清國に向ひて戰を宣するや、其主眼とする所は、朝鮮の獨立を安固にして、永く清國の干涉を斷ち、以て東洋の平和を維持するに在り、去れば彼の城下締盟の日に當りて、我國が約款の第一に揭ぐべきものは、實に此目的に外ならず、蓋し清國政府は、一敗地に塗れ、惟命是從ふの外、奈何ともする能はざるもの、其要求に異議を挿む能はざるや必せり、況や其事たる、公にして義、其心たる仁にして俠なるをや、然りと雖も、清國にして單に再び朝鮮に干涉せずと云ふ、果して深く信ずるに足るか、清國政府が外交の經驗に富み、狡詐欺騙、以て得たりと爲すは、既往事實の歷々證明する所、交際諸國が夙に聞知する所にして、夫の英魯諸邦の如き、最も外交に歷鍊を累ぬるものと雖も、往々其詭計に陷ること少からず、去れば此國と盟約を結ぶに當りては、其盟辭如何に完美なるも、其約款如何に充全なるも、之が實行を確むるに足るべき擔保を取りて、之を我掌中に握るにあらずんば、遂に空文虛詞たるに至るの恐なき能はず、特に今回の如きは、我全國の力を擧げ、我多數の人命を犧牲に供せるものなれば、進で北京城下の盟を訂するの日は、必ず宜しく盟約の效果を實にせんが爲め、之が確乎たる擔保を領し、斷じて彼の狡詐欺騙を施すの餘地なからしむるべし、然らずんば我の國財

二曰保二東洋之平和一

を廢し民命を損て以て纔に買ひ得たる戰勝の結果は、徒に空文廢紙を得るに止まり、啻に當初の目的を達し得ざるのみならず、適ま以て歐西各國の笑を招くに至らんも亦知るべからず、是れ我媾和締盟の時に當りて、第一に深思熟慮せざるべからざる一大要件なりとす。

宣戰の目的は、已に盟約の條文に之を明載し、此盟約を確實にするが爲めに、其擔保を我に領得することゝせば、既に清國の干渉を杜絶するの效を收めて、又其詐術譎計に陷るの虞なく、朝鮮の獨立は自ら安固にして、我國戰勝の效果は、始めて充全ならん、然れども尚ほ深思熟慮を要するものあり、抑も我國が清に對して戰を宣するの大本旨は、專ら東洋の平和を保たんとするに在り、敢て朝鮮に比周して、清に寇するの意を挾むにあらず、故に清にして果して能く我眞意を解し、暴を朝鮮に加へざらんか、我は啻に永久彼を仇とせざるのみならず、進で彼の窮厄を救ひ、彼の振興を圖らんこと、猶ほ今の朝鮮を視るが如くならん、何となれば東洋の平和を保ち、唇齒隣佑の誼を全くせんには、固より如此ならざるべからざればなり。獨り憂ふる所は、清政府が一面自國人民の敵愾心を發揮せしめ、一面自家の曲を飾り敗を掩はんが爲め、政略上公報に私報に、中外の

新聞紙に、百方虚を傳へ、實を蔽ひ、力を極めて我の彼に對する非理不法を鳴らしたるより、彼國民は毫も其眞意を解するに由なく、漫に我を以て無名不義の師を興せるものと爲し、假令戰ひて非常の敗を取るも、其我を卑しみ我を侮るの念は、既往より甚しく、其和を媾じ好を修するの後に至ても、彼は仇讐怨恨の心を挾み、以て我に接し、是より兩國民の感情は永く睽離乖戻して、遂に融合一致の期なきに至らん、果して然らば、我は恩を朝鮮に施して怨を清國に買ひ、彼我の貿易長へに衰へて、隣好の誼竟に修まらず、東洋の平和は却て一大破綻を此に胚胎せん、是豈に我宣戰の本旨ならんや、去れば我國は須く朝鮮の獨立を鞏固にすると、同時に清國民をして偏く我宣戰の眞意を知らしむるの方案を行ひ、假令遂に彼等の敬愛を得るに至らざるも、侮蔑仇怨の念を戰後に留めしめざるべきこと、亦是れ締盟媾和上の一大要件なりとす。

何等之婆心何等之親切

所謂東洋の平和と興隆とを絶對的に、計圖せんには、日清兩國民間の惡感情を一掃して、之を融合するの外、進んで兩國の交誼を厚くし、交通を便にし、貿易を盛にし、以て相互の福利を增進せざるべからず、顧みて從來兩國の通商を觀るに、我の彼に於ける最惠均霑の約款なきを以て、歐米各國の商人が、享有する諸般の特例にも、我は獨り與かる

東洋平和之道、在二日清之融和一

三曰要ニ積極的通商條約之改訂、

を得ず。全國二十五の開港地中、我商人の廛舗を置き、互市に從事し得るは、其十五港に止まり、又歐米諸商人は、隨意に内地各處に行商し得るも、我商人は彼の十五開港場の外、容易に步趨を展ぶるを許されず、加之釐金税と稱し、清國内地に行はるゝ物品通過税の如き其歐米人に於けるや、子口半税と名くる特例あるに拘らず、我國人の輸入に係る物貨は、海關一遍の後、直に一般清民の物貨と均しく、内地到處に其苛征暴斂を受くるを以て、同一品質同一原價を有する商貨も、一たび内地に入るに及びて、其我よりすると歐米人よりするとに由り、非常に估價に徑庭を見るは、勢已むを得ざるのみ、此他我國人が歐米人に比して、通商上の不便不利を被ふる事情は、枚擧に遑あらず、日清貿易の振はざる、我商貨の彼地に入り易からざる、豈に怪しむに足らんや。

夫れ貿易は互の利に成る、今若し日清の貿易を盛にし、近くば以て彼此の交誼を厚くし、相互の福利を增進し、遠くは以て東洋の平和と興隆とを確實にせんと欲せば、戰勝媾和の時に於て、積極的に日清通商條約を改訂し、我國人をして單に歐米人の既得せる權利特典のみならず、更に進みて未だ歐米人に許與せざる所のものをも享受せしむべきこと、亦我國の最も意を用ゆべき一大要件なりとす。

償金正當

不レ待ニ縷陳一

區々の議は姑く措き、余が徹頭徹尾締盟の上に於て必行を期せざるべからずと信ずるものは、實に以上の三大條件に在り、萬一にも此條件中、一を闕かんか、余は竊に宣戰の本旨貫かず、戰勝の效果收まらずして、遂に或は驚くべく畏るべきの禍根を他日に貽さんことを恐る、若夫れ軍費要償の事の如きは、稱して義戰と云ふと雖も、我國は創業の時代に屬し、進んで我天職を盡さん爲には、百般の規模是より大に恢擴せざるべからず、況んや彼清國の財寶に富み、且裕なる、殆んど測知すべからざるが故に、我國が此次和を彼に許すの日は、直接間接に失ひたる利益と受けたる損害とを積算し、以て我瘡痍を癒やし、以て我軍備を盛强ならしむるに足るの金額を要求し、一時又は數回に之を納めしむるは、固より當然の事にして、必しも余の縷々陳辯するを要せざるのみ、故に余は爰に前述せる三大要件の要旨を條列し以て此篇の局を結ばん。

第一　朝鮮の獨立を安全にし、東洋の平和を鞏固にするが爲め、淸國をして盟約せしめたる條款履行の擔保として、我國は渤海に於ける最要の某軍港を預り置くべし。

第二　東洋の平和を維持する爲めに、我國は媾和の成ると同時に、淸國政府と協議の上、適當の方法に由り、淸國の鄙都人民一般に、我宣戰の大旨を說明し、之をして

東亞之興隆、日清之提携、

領土之大割讓不レ可レ求、償金之多額不レ可レ貪

徧く我國の眞意を領會せしむべし。

第三　日清兩國の福利を增進し、東洋の平和と、興隆とを期する爲めに、從來通商上我國が受けたる不便不利を一掃し、歐米各國に比して、更に優條親切なる通商條約を締結すべし。

君の立論は前數章に既述せる如く、宇內一統の理想に胚胎し、東亞興隆の日清提携に在るを信ずるものなるが故に、常に高處に着眼し、大局より打算して、毫も俗情に驅られず、堂々として王者の師たるの概あり。曩に退嬰萎縮如何にもして兩國の衝突を避け以て一時を糊塗せんとしたる當局者も、一旦戰の利あるを見るや、意忽ち驕り深く思を將來の難局に致さず、遼東割取すべし、山東占領すべし、四百餘州我馬蹄の蹂躪に任すべしと云ふが如き狀況にして、愛國心の一時に激動する所、一唱百和概ね當局に同せざる尠なし、是時に當り君は領土大割讓を求むべからず、償金多額を貪るべからざるを主張して、其論鋒一見甚だ振はず、動もすれば當局より迂腐視され、一世よりは怯懦視されんとするも君更に顧みず、廿八年三月我軍遼東山東に連勝し、敵の媾和使、其國都を出づるの日に於て、更に對清辯妄を公にし、世の惑を解かんと欲せり、其中に曰く、

着眼卓絶、有深謀、有遠慮

凡そ物には先後の順序あり、時に緩急の機宜あり、領土大割讓の事姑く、其義非義を措て問はずとするも、之を今日に行はんと欲するは、果して順序と機宜とを得たる者ならんや、否や、明治政府が、尙文の風を奬勵する二十餘年、朝野官民齊しく泰西の文物を取るに急にして、曾て東亞の事物を顧みず、東亞の安危興亡は、殆ど一に清國の治亂向背に由りて分る可きにも拘らず、我國人の清國を視るや、越人が秦人の肥瘠を視るより冷淡にして、現在干戈相交はるの日に及んでも、猶ほ未だ彼國の實力眞相を發見せざるの甚しきに至れり、幸に叡聖神武なる、　大元帥陛下の御威德と、　祖宗列聖數千年間陶養あらせられたる忠勇尙武の元氣とに賴り、勝を海陸に制し得たりと雖も、國民が東洋前途の經營に對する、必要の準備と覺悟とは、未だ一として備はるあらず、然り而して泰西列國が東洋に於ける、二十餘年の經營を觀るに、國交に軍備に、貿易工藝の實利に、拮据黽勉至らざる所なく、所謂西力東漸の趨勢は潮の海に涌くが如く、其威を養ひ機を覗ふの情形は虎の嵎を負ふが如く、殊に禹域四百餘州の形勝豐腴は、恰も彼等の涎を垂れ牙を鳴らして、瞬時も視線を轉ぜざる所也、此時に當り、沿海の一島一嶼を移動するも、忽ち東洋の禍機を發するに足らん、況や今一省又は多省の勝地沃土を擧げ、

三國干涉之來何足怪哉、

以て我の版圖に加へんと欲す、是果して時の機宜を得る者と謂ふ可き乎、殊に國民の覺悟と、準備と、未だ整頓せずして、遽に此一大難事を擧げんことを欲す、是果して物の順序を誤らざる者と謂ふ可き乎。

我國は連勝の餘威を以て之を求め、清國は連敗の餘喘を以て之に應ず、求むる所大なりと雖も、應ずる者拒む能はずとは、議者の假想する所ならん、顧ふに清國自身の抗拒力なきに至るは、或は然らん、獨り未だ知らず夫の涎を垂れ牙を鳴らして、環望する諸國は、果して袖手默坐以て我國の爲すまゝに任かす可き乎、彼英國は、平壤黃海の捷報達するか達せざるかの間に、早くも聯合干涉の議を提起せしに非ずや、當時他の諸强國が其議に同せざりしも、豈に盡く我國の進取を欲して然るならんや、英の提議は一たび敗れたりと雖も、他國の提議は、再び出でざるを保せず、聯合干涉の議は、一たび斥られたりと雖も、單獨干涉の策は、隱然施されざるを保せず、交戰中の干涉案は暫く頓挫したりと雖も、決戰後の干涉案は、相繼で試みられざるを保せず、一旦干涉四方に起り、紛々擾々復た經理收拾す可からざるに至らば、我國たる者は將に奈何にして其希望を遂げんとするや、名正しく事順にして秋毫非議す可からざるの事と雖も、猶左牴右吾容易に其

目的を遂げざらんことを恐る。而るを況んや名と事と未だ全く正順を得ざる者をや。今一歩を退き我國は、能く百難を排して、領土割讓の希望を遂げ得可しと假定するも、彼れ諸國は豈に我をして獨り得る所あらしめて已む者ならんや、曩者英國が協同干渉の議を發したるに當り、他の諸强國が之を斥けたるは、全く英が優先利得を壟斷するを疾忌したるに由れるに非ずや、此心を推して之を思へば、若し一朝我にして清國の一省を取らん乎、則彼等も各一省を取らざれば饜くまじ、我にして我に利便なる方面を割かん乎、則彼等も各其利便とする所を割かざれば滿足すまじ、之を要するに我國が領土大割讓を求むるの時は、即列國が禹域分食の素志を行ふの曉にして、我國が一省一郡を領得するの日は、即清國が四分五裂して豺狼の爪牙に掛かるの秋也、夫れ清國は已に四分五裂に終れり、赤毛碧眼の異種族は、中原に跋扈せり、此時に當り一省一島の新領は、我に何の裨益か有る、孤掌鳴らすに由なく、隻手江河を支ふる能はず、東洋の大事遂に爲す可からざる也。

且夫れ至誠至仁の心を體し、抜苦與樂の急に迫り、千萬已まんと欲して已む能はざるの時期に非ずんば、領土割讓の事は、未だ遽に求む可からず、若し徒に戰勝の餘威に任か

せ、敵國の失勢に乘じ、彼の土地人民を奪ふて我の版圖を廣むるを許らば、後患の伏する所、禍根の萠す所、必ず寒心す可き者あらん。

先見之名

是豈君之志

今より之を見れば、君の言ふ所鑿々として肯綮に中り、清國内外の形勢明々瞭々火を觀るが如し、當時若し當局をして少しく君の言を聽かしめば、曷んぞ遼東還附の悔あらん、戰後日清の關係も亦一層の輯睦を來たせしや明かなり。惜しい哉徒に君をして先見の名を成さしめたるを、又君は媾和約款第六條第四款の國家經濟の爲め大患を貽すを慮り、之が善後を策せんとしたるも成らず、終に君をして再たび先見の名を贏得せしむ、嗚呼是れ豈に君の志ならんや。

苦其心志、勞其筋骨、以斃于興亞問題

興亞之大偉人

之を要するに、君が興亞問題の爲め、其心志を苦しめ、其筋骨を勞し、斃れて猶ほ止まざらんとせしもの、其根柢深く牢乎として拔くべからざる信念あればなり、故に其隨時發表せし意見、若しくは各般の計畫、皆其揆を一にし、首尾一貫一絲紊れず、卓拔の見超群の識、常に時流に卓絶せるもの一として此の信念の果にあらざるなし。君を稱して興亞の大偉人といふ誰れか異議を其間に夾むものあらんや。

三　未成長の英雄

第一章　惜まれたる東方齋

一　人物論の難

傳レ人誠難、

前篇既に君の事歴を叙し、中篇已に君の抱負を述ぶ、而して今や君の人物論に入らんとす、古人曰く人を傳するは易し、其眞を傳ふる難しと、寔に然り、是れ史筆の古來往々にして後人の異議を免れざる所以なり、古人曰蓋棺而論定と、而かも棺を蓋ふも猶ほ定まらざるものあり、人苟くも生れて何事をかなさんと欲す、須らく其爲さんと欲する所を爲すべし、何ぞ其他を顧みるに暇あらんや、吾人の蹈まんと欲する大道は、坦々として砥の若く、復た何をか疑ひ何をか恐れん、是と云ひ非と云ふ、竟に何事ぞ、吾は吾たり、汝は汝たり、安んぞ他の是非により喜憂するを爲さん、況んや人死すれば精魂天に上り、形魄地に歸す、後人の毀譽褒貶の如き、痛痒相關せざる、墓所の草を拂ふと拂はざるが如きのみ、而して後人或は其善を揚げ、其寃を雪ぎ、以て世道を益せんとし、或は其幽を闡き、其晦を顯に

し、以て其人の眞價を發表せんとし、各自見る所を以て之を書く、書かるゝもの曾て輕重損益せざるも、書くものゝ異なる其顯はるゝ、亦た異ならざるを得ず、是れ正傳の愈々困難なる所以なり。

余が君を傳せんと欲するは、自序中既に述ぶるが如く、一片君を憶ふの至情の迸しりて此に至れるのみ、余は既に君を傳し君の理想を述べたり、更に君の個性を解剖し其人格を評論せんとす、而して余の君を見たるは、年漸く十九歳、最も英雄熱に犯されたる時代にして、親炙の間僅かに一年に過ぎず、故に君の人物評の如きは、之を君と交誼ありし先輩諸氏の談片によりて髣髴せしめ、余は唯だ十四年前君と接觸して直覺せる所を述べて、自ら滿足せんとす、而かも余の目的たる一は以て健忘なる世人に依り忘れられんとする未成長の英雄を地下に喚起して、其記憶を新にし、一は以て方今靑年子弟が立志の資料たらしむるに於て、足れりとす。

二　追悼の詩文

君の早世は時人に惜まれたり、訃報一たび傳はるや、知ると識らざるとに論なく、世擧つ

訃報一傳
擧世哀悼

て之を悲めり而して世に在る僅に三十八年、東奔西走して一處に定住せず、其志す所域外に存せしが爲め、內人に接觸するの機多しとなさず、而かも一旦膝を交へ、其謦咳に接したるものは、內外人を問はず、皆多少の印象を與へられざるなかりき、君の死するや各新聞社爭ふて訃報を廣告して、一錢を徵せず、生前君が債を負ひし高利貸すら、君の德に感じ靈前に供物をなさんことを請ふに至る、弔電弔文弔詩數百通の多きに上り、其範圍遠く淸韓人に亘る、今左に其數者を擧げん。

小人感化

島地默雷

嗚呼志士、荒尾精君、溘焉逝矣、訃報所ㇾ到、朝野內外、
聞者驚悼、莫ㇾ不二慟哭一、君以二去月一、病歿二臺北一、遺骨載歸、
輿送二東京一、本月本日、諸友相謀、盛擧二葬典一、本山法主、
降二命默雷一、臨二其儀筵一、爲二其導師一、捻ㇾ香誦ㇾ經、恭弔二英靈一、
嗚呼、
君之所ㇾ抱、志望遠大、才學卓絕、世皆仰ㇾ之、君之所ㇾ行、
轗軻困頓、忍耐不ㇾ撓、人皆感ㇾ之、有二此雄圖一、假以二數年一、

風雲際會、必奏二偉業一、惜哉不幸、天不レ假レ壽、二豎爲レ祟、
身心失レ和、一息遂絶、現當二異境一、功業未レ央、忽就二幽途一、
遺德猶盛、澤被二後昆一、志操公明、相二應佛心一、行爲正大、
冥二合佛事一、已有二盛德一、淨業自具、加以二妙法一、成道何疑、
明知
彌陀迎接、往二生淨刹一、諸佛圍繞、坐二寶蓮臺一、三明六通、
頓證二菩提一、七覺八聖、速得二涅槃一、
茲謚二法名一曰、不退院勇精居士、伏乞
三寶照鑑、哀愍攝受、

悼荒尾精君　　釋宗演

雖レ云三秋色屬二荒涼一。松菊依稀尚凌レ霜。一片精誠葬二何處一、
青山無三往不二靈光一。

渺水雲　　瑞鳳山人

矯々奇才最絶群。訃音此日世驚聞。不下從二朔漠一冐中氷雪上、

恨向二炎方一銜二瘴氣一。 一代豪雄孰知己、 暮年身跡我憐レ君。

英魂彷彿招二何處一、 腸斷天南渺二水雲一。

齎二雄志一 和瑞鳳山人 紫海漁夫

積羽沈レ舟衆口喧。 平心誰爲雪二君冤一。 深憐碧海齎二雄志一、

豈向二蒼旻一訴二薄恩一。 廿歲轗軻非二我志一、 一時通譯及二其門一。

遙思蠻島薯蕷酒、 惆悵臨レ風灑二九原一。

有爲才 空々子

雲海茫々魂不レ回。 青山落日獨低徊、 志存二朔漠一勳空在、

骨瘞二炎荒一命可レ哀。 萬古英雄數奇感、 六軍貔虎有爲才。

弔レ君欲レ酹黃花酒、 慷慨臨レ風淚灑レ苔。

評林子

禹域周游膽亦雄。 從軍子弟奏成功。 淒涼一代男兒志、

總付二轗軻躑躅中一。

同

飄然騎レ鶴去何翔。　千里傳聞獨斷腸。　他日招魂何處是、
蕭疎一樹碧桄榔。

同

四海飄零奈二異才一。　男兒到レ此亦堪レ哀。　生前我豈識レ君者、
一接二訃音一腸九廻。

悲辭　　姚文藻

古今來有下能負二天下之重一之才之士上、或遇或不遇、何可レ勝レ數、一死已矣、悲夫、荒尾精君之以疫二死於臺灣一乎、

君有下能負二天下之重一之才上而不遇、雖レ遇亦不レ顯、無三以展二其才一、遇不レ顯、才未レ展、年方强壯、世際二艱難一、而君竟死矣、

我辱レ交レ君、年歲相若、意氣相同、世願相似、我既不遇屢瀕二於死一、君又極相憐惜レ我者、我不レ死而君死、君死而我獨悲レ君、而益自悲也、亞洲之人、未レ能二盡知レ君而悲レ君、然而君固心二乎亞洲一者也、君死而心二乎亞洲一之人益鮮、亞洲之事且起矣、君胡不レ緩二須臾死一也、嗟呼我亞洲之人也、悲レ君自悲、悲二亞洲一也、悲哉悲哉、

東方齋之小傳

辭曰、

神州萬里。　嘉樹君藝。　結レ實累累、　蔚爲ニ國器ー。　廓清天地。

紹ニ繼君美ー。　靈今永慰。　世又奚悲。

弔詞　佐々友房

明治二十九年十一月二十八日、荒尾精君病を以て臺北府に逝く、嗚呼悲哉、君一武人より起り、熱誠軀を抛て東方問題に盡瘁せる十年一日の如く、對淸の事業を振興し、膺懲の機密に參畫し、或は後進俊秀の徒を鼓舞訓育して、國事に粉碎せしめしが如き、其功蹟世に赫々として芳名永く朽ちざるべし、其叙勳賜金の榮ある、亦宜なり矣、然れ共天下大に東方の將來を以て君に期し、君も亦以て自ら任じ、抱負頗る大に、經綸固より廣く、東馳西驅席暖なるに遑あらず、以て大成を永遠に期せり、而して處世數奇、加ふるに大功常に速成を得ず、是を以て十年經綸の迹、未だ抱負の半を實行せず、其事業も亦未だ天下の重望に添ふの時に達せざりき、嗚呼旻天無情、何ぞ假すに歲月を以てし、其事業を完成せしめざる、抑亦東洋多事の日、此有爲の人を失ふ、邦家の爲め誰か哀惜せざる者あらんや、況んや予の君に於ける、燕遊一朝の交に非ざるを哉、予の始めて君

を識る、實に明治十六年にあり、時に君陸軍少尉を以て、熊本鎭臺に屬し、尋常武官の間にありて、既に鬱然秀拔の氣を現はせり、後、君の清國より歸るや、共に手を把りて、東亞の大勢を談じ、意氣の投合する所、肝膽相照し、終に互に相提携して東方問題の上に周遊するに至れり、爾來十餘年、君が頭山滿氏と予とに於ける、其交誼恰も兄弟の如く、相對して洒然常に胸襟を披き、規圖する所あれば、必ず之を諮る、予も亦君が休戚を視る自家の休戚に異ならず、而して今や此休戚を同うするの友、溘然逝て還らず、區區の私情、豈に哀悼の切なるに堪へんや、曩に君の臺灣に赴くや、其事業着々緒に就き、吉報頻に至るを以て、遙に慶運を祝して其成功の速ならんことを望めり、何ぞ計らん凶電忽ち南より來り、君が訃音に接せんとは、忡々たる心緒、何の處にか訴へん、南洋の波瀾亦た渤湃として恨を語るに似たり、音容尚ほ眼前に髣髴たれども、再び君と相會して東方問題を高論するに由なきか、嗚呼悲哉、予偶ゝ病て故郷に在り、葬に會するを得ず、乃ち遙に一篇の弔詞を寄す、庶幾くば君が在天の靈、髣髴として來饗けよ。

第二章　名士の東方齋談

福本日南曾て『日本人』紙上に、一代の人物として南洲以下八材を擧げたる中に、君を加へて、曰く、

南洲以下八材

若し夫れ志業未だ伸びず、不幸中道にして殞したる者には、荒尾精あり、海内の健兒、今に至り君を思ひて已まざるもの、其器の尋常ならざりしを見るに足らん、吁臺天の訃音達せしより、既に八年、東方齋の墓木拱をなすも、君が日夕口にせし迂直の計、尙ほ耳に在り、念ふて一たび此に至れば、中夜悵々の情に堪へず。

眞に然り、君を念ふて中夜悵々の情に堪へざるもの、豈に獨り日南のみならんや、君が生前に於て最も親交あり兄弟の義を結びしもの、佐々友房あり、頭山滿あり、根津一あり、養育輔導第二の父母の誼あるは、菅井夫妻なり、佐々氏の君を弔ふの詞は載せて前章に在り、乃ち先づ頭山根津菅井の談を掲げて順次諸名士に及ばんとす、

（一）　頭山滿氏の談

天生の偉人

余は大に荒尾に戀れて居つた、諺に五百年に一度は天偉人を斯世に下すと云ふとあり、當時最も偉人を憶ふの時に荒尾を得たのであるから、此人は天が下せし偉人其人ならんと信せし位に、敬慕して居つた。

大西郷以後之人傑

德望超レ凡、識見絕レ群、

彼の事業は皆其至誠より發し、天下の安危を以て獨り自ら任じ、日夜孜々として其心身を勞し、多大の困難辛苦を嘗め益〻其志を勵まし、其信ずる道を樂しみ、毫も一身一家の私事を顧みず、全力を傾倒して東方大局の爲め盡くせし報公獻身の精神に至つては、實に敬服の外なく、感謝に堪へざる所であつて、世の功名利慾を主とし、區々たる小得喪に齷齪する輩と、全く其選を異にし、誠に偉人の器を具へ大西郷以後の人傑たるを失はなかつた。

彼の德望、識見、容貌、何れも偉人の風格を存し、凜乎たる威風の裡に、一種云ふ可からざる柔和にして、且つ能く人を安んじ、人を魅するの魔力を持つて居つた、此人ならば必然東亞の大計を定め、醉平として其主義を世界に普及し、頗る後世を益するの鴻業を成し遂げ得べしと信じて居つた、然るに絕大の抱負經綸を有し、德望識見共に超凡絕群なる斯人にして、中途に逝去せんとは、實に思ひ設けざる所であつた、彼の死するや、根津は余に書を送り、此時に於て此英傑を奪ひ去るとは、天は何の意ぞと、非常に痛恨の意を洩したが、余も畢生の恨事として眞に同情に堪へなかつた、余荒尾を信じ且つ敬慕したるは、實に此位であつた。

荒尾が上海にて事業を經營せる時分、非常に金策に困り三千圓なくば進退ならぬ境遇となり、急に余に訴へたが、余は固より金錢の貯なきを以て、如何ともすること出來なかつたが、其後今田主税が來て曰ふには荒尾の爲め高利貸より三千圓を借る約成りしも信用ある人の連印を要するを以て、鳥尾得庵に之を依願せんと欲す、君請ふ之を諾れとて、余偶〻京都に赴くの要あり、得庵熱海に閑居せるに依り、今田及金貸を伴ひ之に赴かんとせしに、途中にて得庵に出會ひたれば、路側の茶屋の二階へ得庵を引き上げ、他人を去らしめ膝を接して捺印の件を相談したるに、得庵曰く、高利貸より借金するに捺印することは出來兼るが、事急迫に屬するを以て、余に於て金策す可し、而して某氏に交渉すべきに依り人に嫌なきかと、余は曰く金さへ得れば何人たりとも敢て問ふ所に非らずと、因つて某氏より借用の事を荒尾に告げたるに、荒尾は大に閉口し、折角の御盡力なれ共某氏の金は斷じて借用致さぬと云ふを以て、然らば余が借りて君に貸す事とせんと謂ひしに、荒尾は既に某氏より借用の事を聞きたる以上は、借に忍びずとて主張するより、遂に鳥尾に斷ることにした、斯の如き所は餘程激しいものであつた。

崇尚

荒尾の崇敬して居つた人物は、三代頃の人物では夏の禹王抔を慕ひ、日本では南洲を敬

圍碁　友誼　智仁勇

慕して居つた。

碁なども少しは打つた、人の碁とは打方が變つて、一種の荒尾式で、眞中のみを固めるに力め、中々氣根强く勝つ迄は打つ、それで相手が氣根負することが常習であつた。

余が道樂をして濱の家へ泊り込める時分、荒尾と佐々の二人、非常に之を氣にして、轉宿を迫まる、それでは二三千圓なければ出られないから、其中始末して出ると云ふと、兩人が兎も角出て貰いたい、然らば二三千圓は如何にか金策して始末するとて切りに勸める、然らば余は出ると云へば、必ず出る故に、金を持來れと云ひしに、金を取つて後に出ると云ふは險呑だとて、頻りに危む故、遂に出ないことにした事があるが、荒尾も佐々も中々親切な心掛の屆く人であつた、今や兩人とも亡し、遺憾の極である。

（二）　根津一氏の談

君は智仁勇の三德を具へた人で、幼より倜儻にして大志あり、其度量の宏濶にして、氣宇の悠大なる、實に非常のものであつた、一旦事を企つるや熱心、且つ大膽にして、必ず仕遂げねば已まぬ精神を持つて居つた、缺點と云へば君は情に最も脆い人で、論語に所謂溫にして厲の、厲と云ふ所を見はさなかつた、故に小事に於て往々にして情に制せ

親識知仁

氣品高尙容貌雄大辭令端莊坐作有儀、

感化力

讀書

られた樣であるが、固より大局に關しては此失に陷らなかつた、是は君の度量の大なると、仁の美性より來れるものにて、所謂人の過や各其黨に於てす、過を觀て斯に仁を知るものにて、寧ろ尊むべき資質と云はねばならぬ、君は氣品高く容貌雄大、且つ言語動作に極めて落付きあり、人に接する極めて溫和にして、辭令端莊、座作儀を失はず、事理を見る甚だ明晰にして、事を處する從容、而し其機を過たず、尊むべく親しむべきものがあつた、晩年に至り修錬益〻其功を積み、所謂る聰明叡知にして、以て臨有るに足る也、寛裕溫柔にして以て容る有るに足る也、發強剛毅にして以て執る有るに足る也、齊莊中正にして敬する有るに足る也、文理密察にして以て別つ有るに足る也、との古語は君に於て其體性の槪を見るの感があつた。

君の最も絕倫なりしは、其感化力と、莊重の辯を以て理を說き情を說き、利害を說きて諄々として至誠面に溢れ、何人をも之れを感化し、之を說破するの天才があつて、支那人の如きは一見直ちに偉人として衷心君に推服した。

讀書は好める方なりしも、年少より國事に奔走したる爲め、若王子閑居時の外、始終忩忙に取紛れ、靜養耽讀の隙が少なかつたから、學問は餘り深くはない、然し間あれば書

武術

慕二大西郷一敬二曾國藩一

閑雅

見するの心掛あり、又書物を確實に選擇すると、聰明卓拔の天稟とを以て讀下すから、讀めば必ず多少自得する所あつて、之を實地に應用した、武術は君の最も嗜みし所で、上達の早き性で、擊劍も相應に使ひ、居合術は殊に名人であつた。

特に大西郷を慕ひ、支那人にては曾國藩を敬し、常に其等の言行錄抔を手にしては居つたが、晩年には藤樹先生をも崇んで居た、禪學が好であつたが充分に錬る隙なく、陽明をも學び傳習錄や藤樹全集等を座右に置て居つた。

君は武人の出に似ず事物に趣味の多かりし男にて、書を能くし碁も上手で、骨董美術の類をも好み、刀劍の鑑定も上手であつた、青年士官の頃には同僚は大抵下宿屋生活を爲し旗亭に上り酒食を恣にすると云ふ風なりしに、君は下宿屋生活を忌み、必ず何地に往ても小ながらも一戸を持ち、婢僕を雇ふて上品に靜に生活するを好んで居つた。

君は又社會經濟萬般の事物に、細心の注意を拂ひ博覽會、展覽會の如き事を觀るを好み、製造品、農產、林產、水產、其他美術品等を見る鑑識を有し往々專門家を凌ぐ程であつた。

（三） 菅井誠美氏夫妻の談

豪膽　親切　孝悌

余は鹿兒島出身なるが荒尾君は、普通の鹿兒島人の如く外觀のみの豪膽にあらずして、眞の豪膽なる人なりし、君は父母に對して孝行で、妹に對して慈愛深く、又あらゆる階級の人に叮嚀且つ親切にして、余等夫妻に對しては、特に心を用ゐて居られた、君が熊本又は支那に居らるゝ時でも、常に音信を怠らず、計畫ある毎に、必ず余に相談せざること無かりし。

操守嚴正

君の起居動作は、極めて嚴正にして、余が一週に一度午後七時に出勤し午前二三時に歸宅するに、君は決して床に就くことなくして、余の歸るを待てり、又降雪等の爲め、明旦歸宅することあるも、寢に就けるを見ず、以て君が守る所の嚴正なるを知るべし。

君幼少の時、即ち明治七八年頃陸海の少壯軍人等、余の宅に集り、盛に征韓論の氣焰を吐き、征韓に際し、若し支那の之を妨害するあらば、如何なる事を爲すも、是非兵を韓土に上陸せしめざるべからず、上陸さへすれば事必ず成らんのみ、而して韓を征したる後は支那を征し、之を四分すべしと云ふが如き激論屢々起りしことあり、青年時代に於ける君の支那四分說も、此等より胚胎せしに非ざるか、而して幼少時代に此等の談話を聞き志を支那に向けられたるに依りて考ふるも、國家を思ひ國家を憂ふるの念は、既に幼

夙興夜寐

最初俸給建ニ父母之墓碑ー

時に發せりと謂ふ可く、到底今日の少年輩の夢想だも及ぶ能はざる所にして實に感服の外なし。

管井夫人曰、君の勤勉なりしとは、通常人の及ぶ所に非らず、朝は拂曉より夜は二時に至る迄勉學するを常とし、斷へず袴を着し又食後庭園を散歩する際にも、暗誦を爲す爲め讀書しつゝ散歩せり、隣人其狀を見て、大に君の將來に囑望せり。

君は居常、其成業の期迄は双親の健在を祈り居りしが、不幸にして君が教導團を終へたる年に父君歿し、せめて母君のみにても健在ならんことを祈りしも、君の士官學校在學中に母君も亦白玉樓中の人となれり、君は士官學校を卒へ少尉に任官するや、最初に得たる俸給にて兩親の墓碑を建設し、以て報恩の誠意を致されたり。

君は寒中足袋を穿たず、又火鉢をも用ゐざりし。

（四） 大隈重信氏の談

君とは親交ありしと云ふにあらねば、其詳を知らざるも、頗る愉快なる男子にして、將來東洋に於ける支那の位地の重大なる關係あるを思ひ、上海に學校を設け有爲の青年を率ゐて、支那の研究を爲す、此研究をするに語學が必要である、そこで向ふに學校を

異常之忍耐、異常之勉強、養成ニ有用之人材、

興し有爲の青年を敎育すると同時に、支那人と接して支那の語學を研究させる、支那で學校を設くると、日本人に支那語を敎へるに大なる利益である、又上海は殆んど支那に於ける中立地の如き、一種不思議の都會で、支那にして支那に非らず、或は英國の如き、佛蘭西の如き、亞米利加の如き、專管居留地を持つて、而して總ての居留地經營が、領事館共同の下に行はれて居る、居留地の行政は、列國々際會議に依ると云ふやうな不思議な、先づ世界にア、云ふ土地は珍らしいと思ふ、支那の主權の下に、各國が共同して行政權を有つて居る、さう云ふ所に學校を設れば、支那を研究するに便利が宜いと同時に、支那に於て最も勢力ある言葉は、英語である、其英語を學ぶにも便利である、而して支那の最も優勢なる內地の貿易の咽喉は、上海である、長江に依つて內地の交通が便利を得て居る、そこで支那に於ける貿易若くは列國の支那に於ける國際間の狀態を見るにも便利である、上海に學校を造らうと云ふ考は、君が創意か否かは知らないが、君が異常の忍耐と、異常の勉强とを以て、興した所の學校、其學校から出た所の學生が、日淸間の政治貿易其他平和を保つ上にも、大に用を爲すの人材となつたと思ふのである、是は全く荒尾君の力である。

東亞之先覺

先見扼二咽喉一

同文會之淵源

人望而畏敬之

未だ君等の學校を造る時には、日本人も或は世界も支那をそれ程に思つて居なかつたが、僅かの間に、支那の問題が全世界に擴つて、毎年米國大統領の下す教書にも、支那の問題のないことはない位に、世界が支那の問題に重きを措て居る、而して世界の四分の一以上の人口を有つて居る、大帝國である、又無限の富を有つて居る、此國が盛んになれば、世界の商業上に此程利益なことはないと認めて居る、是に於て商業市場として餘程重きを措て居る、一度平和が破るれば、商業が衰へる故に、門戸開放機會均等と云ふことは如何なる野心を有つて居らうとも、列國が同意せざるを得ない、此は世界の平和を保つに最も有力なる共通の根本主義になつて居る、さう云ふ樣に世界が支那に注意する、其支那の最も主要なる咽喉は上海、其上海に於て學校を興したのは、今日まで非常に有効なるのみならず、將來に於て永遠荒尾君の爲したる事業、荒尾君の興したる事業、荒尾君の精神と云ふものは、益〻光輝を放つものである、彼の同文會は全く君の衣鉢を繼いで興つたものである。

君は立派な體格を有つて、人望んで畏敬する樣な人で、何でも强硬な意志の人の樣に記憶に存して居る。

功績偉大

（五）大迫尚敏氏の談

荒尾君の小さい時分に、顏丈は知つて居たが、年の違ふた爲め、親しく話したこともなく、又自分は田舍師團を回つて居たから、親しく話す機會もなかつたが、二十三四年の頃自分が參謀本部に勤務して居る時、初めて談話を交ふるに至つた。君は直接軍人として支那の內情探索をなさずして、貿易とか商業とか云ふ方面より、着手されたるを以て、大に便利を得られた、今日では支那語を克く知つて居る人も多いが、日清戰爭當時は少ないものであつた、君が支那に着眼されたのも、餘程早いもので、日清戰役のみならず、我對清貿易にも偉大なる功績を樹てられた。

余が近衞の大隊長をして居る時に、士官を集め、東洋語學校教師の弟、長氏を師とし、廣部精氏が支那語を幾分解して居られたから、通譯として夜間支那語を學んだ、其時分語學に關する書籍なかりし爲め、士官連中で醵金して、亞細亞言語集なるものを、廣部氏に編ましめた、此時に支那語を學んだ人々が、支那に渡り、旅順其他の見取圖を取りたる爲、後日日清戰役に大に便利を得た、我々の支那語を研究した時分、君は未だ若くて士官生徒であつたから、此仲間には加はらなかつたが、其後軍人としてゞなく、商人

征清大捷之原因、在三君及同志門人之貢獻

として研究されたから、大に成功された、實に日淸戰役に於て大捷を獲たる重なる原因は、君及其同志門下の人々の働きである。

誠實之人

君の性格は、熱心な意思の强い人で、自己の目的を貫徹するの勇氣に至つては、感心であつた、人に依つては君を批評して豪傑の風をする人と惡口する者もあつたが、之は誤りで決して豪傑風を衒ふ樣な人ではなかつた、實は誠實なる人であつて、其早世は誠に惜しむべきことである。

（六）　川村景明氏の談

前途有望之士

余が荒尾君を知つたのは、十六七年頃、熊本師團の參謀長を勤めて居た時で、君は少尉であつた、其時分の青年士官は、皆短褐粗衣、勇壯活潑なものであつた、君も其一人で其時分から前途有望の士と思ふて居た、君は早くから支那に志して居られて、日淸貿易研究所を設立されたに依り、余の倅が近視眼で、身體も丈夫でなく、軍人とする譯に行かなかつたので、又倅自身も異國の士と爲りたいから支那に遣て呉れよと、荐りに願ふ故、研究所に入れた、長い間上海に居て、君の世話になつた、倅に何も得意のものは無かつたが支那語が出來たから、日淸戰爭には第一軍の通譯官をして御奉公をした、自分

が倅を研究所に入れたのは。單に貿易をさせる爲めのみならず、外にも母國の爲に盡すこともあるだらうと思つて入れたのである、所が肝腎の君が、亡くなつたから、大に遺憾に思ふた。

君は風采から起居動作、一切の點に於て。鹿兒島人としか見えず、久しくして後ち始めて名古屋の生れであつたことを知つた、君は青年將校として、氣概あり且つ又議論も立つて有望の人と思つて居た、實に君の人物を信じた、大に信じた、川上大將よりも見込れて、大將も大に信用して居られた、君が逝いたのが早や過ぎた、もう五年でも十年でも存命であつたら、東方の爲め一層の貢獻をせらるゝことが出來たらうに、實に惜しいことをした、而して君は篤實にして豪膽で物に動せぬ人であつた。

（七）　高島鞆之助氏談

敬服熱心

荒尾君を知るに至りしは、余が大阪の師團長時代で。貿易研究所設立の際であつた、時を經る既に二十年、茫漠として餘り記憶に存するものなし、君が常に來て其計畫を談じ熱心企畫の事に從ふに至りては、大に敬服し、且つ贊成の意を表し、助力する所もあつた、君は非常の熱心家であつたから、其精神を以てせば。成功の容易なることを信じて

偉大之感化力

多大之功績

疑はなかつた、君が研究所を設立するに至りしは、要するに大に支那に活躍せんとするに在つたので、支那語を自由に使ふこと能はずんば、活動することを得ず、故に生徒を養成するに當り、支那語の研究を盛んにし、文學術のみにては不充分なるを以て、實地の經驗を積ましむるの必要あるを以て、商品陳列所を設け生徒をして實地の經驗を得るに努めしめた、然るに未だ其抱負の十分一も成功の域に達せずして長逝せられたのは、實に痛恨の情に堪へない、君や偉大なる感化力を有し、夙に清國に着意したるの結果空しからず、日清の役に於て多大の功績を致せるは、世人の普く知る所である。

（八）田鍋安之助氏の談

明治二十二年春余始めて支那に赴いた時、荒尾君が漢口に開設せる樂善堂に寄寓し、翌年正月迄滯留して、此舖は君が身を晦ますの方便として岸田吟香氏に謀り、岸田が上海に開いた樂善堂の支店として設けたもので、主として藥劑及書籍を販賣し、傍ら雜貨をも售つて居た、此等の藥劑書籍等は、賣るに從ひ上海本店より送つて來た、君と岸田氏との間には、極めて親密なる情交あり、氏は書簡杯にて君を呼ぶに、賢姪の稱を用ゐた程であつた、余が渡淸せし時には、君は偶〻研究所設立の計畫を抱いて歸朝し、朝野に運動

せる際なりし爲め、同地滯在中は、終に君の謦咳に接することが出來なかつたが、君と志を同うして相集れる幾多の志士と交り、略々當時の狀況を知り得たるのみならず、君の一生中最も趣味多きは恐らく漢口時代であると思ふから、聊か見聞する所を述べて見よう。

英俊集ニ漢口ニ

當時漢口に於ける日本人は、樂善堂同人と領事館員のみで、樂善堂は西洋式と支那風の折衷建二層樓で、結構裝飾餘り見苦しからぬ建物であつた、君の不在中此舖を預りしは中野二郎にして、店員日人七八名、淸人五六名にて販賣に從事せしも、商賣は餘り振はなかつた、此舖の特色は、店員外なる有志團にして、余の滯留當時身を此團中に寄せたるは、

濟々多士

中野二郎、浦敬一、中西正樹、宗方小太郎、山內嚴、白井新太郎、高橋謙、石川伍一、山崎羔三郎、片山敏彥、緒方二三、井深彥三郎、井手三郎、荒賀直順、藤島武彥、北御門松二郎、廣岡安太等の諸士であつて、此等諸士は、大抵己が風雲の氣に驅られ、混沌たる支那の狀態を以て、非常の功を樹つるに便なりとし、單獨に支那に航せしものが、期せずして玆に相會したのである、故に當時の諸士は皆な一騎當千の士にして實に意氣沖天の槪あり、能く艱苦に堪へ、途を分つて廣く四方を跋涉し、四百餘州殆ん

ど有志團足跡の到らざる所なく、各地の風俗人情を察し、山河の險要を踏査し、以て他日の用に供せんとしたのである。

當時此等の事業の困難なる、今日より想像も及ばざる程で、新聞もなく調査の機關もなく、加ふるに支那內地は、殆んど鎖國の狀態で、官民共猜疑心强く、外人に對しては何事をも隱蔽せんとするの風があり、且つ開港場を距る數里の處にても、外人の旅行は往往危險を生ずることあるの有樣であつて、此等旅行者は、一は調査の便宜よりと、一は多く經費を要せざるよりと、危險豫防の點とより、何れも支那人に假裝したのである、而して其足溜りとして最も重要なる地點には、樂善堂の支店、又は出張所を設けた、即ち北京、長沙、重慶等である、余が行つた時漢口に居たのは、中野、白井、山崎、片山數士などで中西、井深二士は君に隨つて日本に歸り、宗方、井手氏等は北京に在り、高橋石川氏等は白川に居たが、余の滯在中漢口に歸來した、又山內氏は上海に、藤島、荒賀諸氏は歸朝中で、浦氏は余の到着前一箇月伊犂に向け出發したので、遂に相見るの機を得なかつた。

其時君は僅に一中尉で、給料とても言ふに足らざるのに、如何にして此等の費用を支へ

節儉力行

品性高潔

眼中無二强賊一、一言感二賊魁一

たかと云ふに、別に後援者ありしは勿論なれど、主として行商の方法に據つたのである、即ち有志團の士が旅行するには、必ず藥種又は書籍を携帶し、之を賣りながら旅費を支辨し行くのである、尤も此等旅行は極端に質素で一人一日十錢か十五錢で足りたのである、然し元と營利の目的を以て商賣するものに非ざれば、到底收支相償ふの理なく、結局少なからざる損失となつた樣である。

余が有志團と交り、心に感ぜしは其品性の非常に高潔な事であつた、諸士は何れも二十歳より二十六七の青年なるも、曾て花柳の風に染みしものなく、其旅行商賈の際の如きも、之を以て私嚢を肥さんとの考を抱きしもの一人もなく、最も質素なる旅費を支辨することが出來れば、夫を以て滿足したのである、余は其後幾多の名士に交を結びたれど、終に諸士の如きを見ず、其品性の時流に卓出するや遠し。

有志團の旅行中には水滸傳的逸話多し、或時藤島武彦氏が書籍を船に積み旅行したる際、船頭の手引で、一夜數十人の强盜に襲はれ、書籍は盡く陸上に運び去られたことがあつた、當時氏は尙二十歳許りの少年なりしが、膽力人に秀でしかば、敢て騷がず平然として賊魁に見へ、筆談を試みて曰く、公等の狀貌を見るに、一方の豪傑なり、何ぞ巨萬の

・容貌動作服二清人一

豪富を掠めずして、余が如き小賈を劫かすや、余は公等の爲めに之を惜むと、賊魁如何に感じたものか、盗品を再び送り返したと云ふ。

漢口樂善堂は豪傑連集合ゆゑ、其志望單に支那經略にありたるを以て、研究所設立には多少反對ありしも、支那人側にありては、何れも口を極めて君を讃歎し、中心より推服せるものゝ如くであつた、是れ君の從容として迫らず、威重ありて激烈ならず、溫厚にして福氣の溢れたる風采態度の然らしめしもので、君の卓出してる風采態度は、日本人間に勢力を得るにも有力なる助となりたるは疑ふべからざれ共、別して之に重を置く支那人を動かすに力があつたのである、後年君が一有志家を以て從來何等の因緣なき臺灣に入るや、忽ちにして支那人間に於ける聲望の、時の總督を凌ぐに至りしもの亦之が爲めである。

余は二十三年九月、一旦歸朝し、熊本、久留米、福岡等に往いたが、丁度君が九州各縣を遊說して程なきことゝて、到る處君の評判を聽いた、久留米には林田守隆氏に遇ひしに林田は曰、擧世政論に熱せるの際、偶〻君が支那貿易の急務を絕叫して來たから、自分等は恰かも義兵の起來れるが如き感をしたと、林田は筑後西鄉と呼ばれた人である、又福

岡なる某有志は、殆んど君に魅せられたるものゝ如く、其演說筆記を切拔きて家に藏し、客ある毎に朗讀して歎賞した、後年佐々友房氏余に談りて曰く、荒尾とは熊本にて知り居たれ共、支那より歸りし時は別人の如く、人物を上げ居たりと。

明治廿四年夏、余は日清貿易研究所の囑托を受け、上海に赴き、始めて君と相見るを得、其より三年間同地に留つて居たから、善く君の人と爲りと事業を知ることが出來た、當時研究所には九十餘名の學生あり、全國各府縣より募集したるもので、中には縣費若くは郡費にて來れる者も少なくなかつた、所長は勿論君で、敎頭には猪飼麻二郎、敎員は御幡雅文、草場謹次郎、淸人桂某。英人アストル等の諸氏である、漢口有志團の山內巖、中西正樹、高橋謙等の諸氏は、設立當初は何れも皆斡旋の勞を取つたが、余が往きし時は、已に辭し去り、唯宗方小太郎氏と片山敏彥氏とが居たのみであつた、又根津一、小山秋作、西村忠一、宗方小太郎の四氏は君を輔佐して學校の幹部を形成して居た、研究所が一種の特色を帶び、其學生が愛國的精神に富みしものは、全く此數氏の獻身的感化を受けたものと謂はざるを得ない、根津氏の君に於ける、殆んど兄弟の如く形影相伴へり、此時世人は唯君のみを知り居たれど。裏面に於ては根津氏に負ふ所多く、根津、小山諸

惡衣惡食、志在ニ國家ニ砥ニ礪士道ニ、感ニ化後進ニ

英雄男兒、半生心血、

氏が此學校の爲めに傾注した赤誠は、實に人を動かすものがあつた。

同時代には、君を初め根津、小山、宗方、西村諸氏、何れも無妻であつたが、曾て狹斜の巷に足を入れしことなく、粗食敝衣に甘んじ、心は常に天下國家に在り、談ずる所は悉く士道を砥礪するの言ならざるはなかつた、是を以て全校九十餘の學生も、自ら其風に習ひ、內地の青年に有勝なる不品行の噂を、曾て耳にしたることなく、淫猥の風盛んなる上海居留民間に、全く別天地を爲して居つた、本來此學校は、其名の示す如く一箇の商業學校なれど幹部の人々の武士的性格は、學生の氣風を感化し、日清戰爭の起るに當ては、終に幾多の殉難者を出すに至つたので、寔に尊むべき氣風が滿ちて居た。

君は半は上海に留り、半は內地に歸ると云ふ有樣で、不在の時は根津氏其代理をして居つた、其上海に在るや訪問の客常に絕えなかつたが、君は如何なる人にも、自ら應接し、特に青年を愛し、諄々として訓諭するを常として居つた、君は校務の傍ら、此等の客に應接し、內地の知友及學生の父母と書簡を往復する等にて、終日忙はしく、夜十二時一時頃迄、事務を執ることが常であつた、然れ共君が最も心を苦しめたのは、實に經濟問題であつて、惜む可し此英雄男兒半世の心血は、此學校の維持の爲めに灑ぎ盡くされた、

英雄心血
生ニ烈士一

廿七年征
露軍、
鳥尾得庵
屋神武太
平策、欲ス
移ニ民長
白山一帶
地ニ建テ東
方瑞西
國ヲ偉人
所レ見如レ
合ニ符節ニ
可レ謂レ奇
矣

君は如何なる困難の際にも憂愁の色を顯はせしことなく、肥大なる其體量も減せしを見なかつた、研究所は第一期生八十九名を卒業せしめて閉鎖することゝ爲つたが、卒業生は實地練習の爲め設けられたる商品陳列所に入り練習したものである、後程なく日清戰爭となつたが爲め、其内の十餘名は、奮然身を犧へにして國難に盡瘁せんことを誓ひ變裝して深く敵地に入り敵情偵察に從ひ、幾多の殉難者を出だせしことは、世人の普く知る所である。

君は學生の卒業後、程なく內地に歸つたが、朝鮮の風雲漸く急ならんとするや、頭山滿氏等と謀り、玄洋社の壯士二百餘人を率ひ、朝鮮に侵入する計畫を爲し、已に其準備を整へたが、形勢の變化は、終に此計畫を中止せざるを得ざるに至らしめた、此時の事に付後君が語りし所に據れば、長白山の南北に一國を立てんとの志を抱ひて居つた樣である。

君は熖々たる功名心を有し、且つ之を遂行するに相當なる膽勇、智略、度量を備へて居つた、君には高遠なる道念なく、又宗敎心と云ふべき宗敎心もなく、死生靈魂等の問題には何等の疑問も趣味も有つて居なかつた、唯現世に一大事業を爲し、英名を後世に傳へんとの一念にて、萬事を處理し、夢寐之を忘るゝ能はざるもの丶如くであつた、君は

容貌風采宛然南洲之壯時、

大匠用心、旁人不知、

俗人を籠罩するの識量もあり、平地に波を起すの機略もあり、其辭は莊重にして善く人を動かし、其容貌風采は人をして坐に西郷南洲の壯時を偲ばしめた。余は後に多く當世知名の士を見たるも、風雲兒として英雄漢として終に君の右に出づるものを見なかつた。君は何處迄も世間的の人で、若王子閑居中君を慕ふて同地に集りし青年少なからざりしが此等の守るべき訓戒として、君が書して與へたる條規中、佛教又は老莊の書を讀むべからずとの一箇條があつた。又或時客に耶蘇教の事を語り、不當の批評を加へしより、其坐に連りし余（余は耶蘇教徒に非ざれ共）が、強く其論を駁擊したるに、君も其時は多く言はなかつたが、翌日に至り昨日は耶教の御説法を承り云々との書面に、ビールを添へ贈り、程なく自ら訪ね來たことがある、又以て君の面目を窺ふ可しである。

君は質朴直截なる種類の俊傑に非ずして、名聞好の俊傑であつた、それは研究所の財政最も困難にして根津、小山諸友が、粗衣粗食苦心慘憺たる時と雖も、其內地に歸るや、堂々として大臣の樣であつた、或時小山氏が今少しく身邊の事を質素にせんことを忠言せしに、是許りは出來ぬとて拒みしと、蓋し如斯虛榮心は君の功名心と相伴ふて離るべからざるものであつた。

古之君子、容儀莊重、今之紳士、容儀輕佻

或時余君を訪ひしに、偶〻片岡健吉氏來り相對して談ぜり、君の堂々として鷹揚なる態度と片岡の質素謙讓なる擧動は、恰かも長官と屬僚の樣にありて、異樣の感を催ふしたのである。

天助巨人

研究所設立の初、農商務省の補助に信賴し、已に各縣にて募りたる學生は陸續上京せる際、右の補助は中止せられたるより、君進退維れ谷り、一夜人定つて自殺せんとせしに、不思議なる哉、臺所に在りたる釜が、異樣の響音を發して鳴出したれば、君は忽然感ずる所あり終に自殺を思止まつたゞといふ、人の一心凝りたる時は、妙なことのあるものなりとは、君の屢〻人に話したことで。此一事は君の自信心に大なる强味を加へた樣である、蓋し君は天の冥助あるものと信じて居た。

（九）　黑瀨義門氏の談

余が大阪師團に中隊長たりし頃、荒尾君は下士官であつたから、餘り多く交際もせず、又同じ中隊に居つたとも短かゝりし爲め、精しくは知らないが、餘程隊務に勤勉な人であつた、性質は敏活豪邁にして、邊幅を飾らず、名古屋生れと云ふも、少しも名古屋人の樣に見えない、其姿勢と言ひ、言語と云ひ、鹿兒島人としか見へなかつた、日清戰役

に偉大の戰捷を得たのも、君の力に依ると多大である、又國家の爲め有益なる事業を經營せられた人であるから、成る丈け材料を多く蒐めて故人の眞相を傳へたいものである。

（十）　山内巖氏の談

撃劍

余が荒尾君と識つたのは、君が士官學校時代宗泰院に居た時で、常に君と撃劍を試みたが、君の撃劍は、遺憾なく君の人格を發揮し、小手、胴抔に向はず、渾身の力を以て敵の面のみを狙ひ、其撃方亦非常に鋭かりしかば、余は其時既に君が尋常一般の人に非らずして、有爲の人傑たるを認めた。

談古

君は好んで古英雄の事蹟、其他歴史上の適切なる疑問を提出し、自己の意見を開陳して、他人の見解を徵するを常として居つた、又談古今の聖賢英雄忠臣義士の事に及ぶや、一言一句總て熱誠を以て語り、時としては之に感じて涙を流す程の熱血漢にて、當時意見相投合して、早朝寺庭に撃劍を試み、夕刻卓を圍んで議論を鬪はしたる連中は、少くも十名以上であつた。

交際振りは、頗る嚴正にして、時間、約束等を嚴守し、又人の不善を假借する能はず、其面前にて詰責したことも稀れならざりしが、詰責されし者も、之を恨むことなく、却

至誠接人

つて心よく感ずるに至つたのは、君が誠心誠意の然らしむる所であつたのである。

君の士官學校時代は、君の純粹なる眞面目を發揮せる時代にて、研究所設立後日清戰役迄東京大阪等にて種々奔走を爲せし頃は、必要上己むを得ず、多少の權數を用ひし樣であつたが、京都退隱時代は大に克己の工夫に力を致し、再び本來の純粹なる性行に立戻りたるやうに感ぜられた。

理解力

君の學問は深き素養ありしと云ふこと出來がないが、理解力强大にして、其れが爲め事物を判斷するに極めて切實なる、斷案を下す力を有つて居つた。

衆生緣

君は非常に衆生緣の厚かつた人で、一種の溫味ある引力を有し、今少しく年を假し研究と修養とを積まば、偉大なる人物となりしに相違なかつたのに、中道にして逝き、其天稟の偉才を發揮することの出來なかつたのは、寔に邦家の爲め惜しむべしである。

感化力

君は能辯の人に非らざりしも、達辯の人にて、言々力あり、嚴正にして而かも溫和なる君の擧動態度は、大に其辯を助け、人を魅し人を感動せしむるの力を有つて居た、時に不合理の言なきに非らざるも猶ほ聞く者をして感心せしめた、君には多くの有爲の人士が感化せられしのみならず、宿屋の主婦車夫馬丁の微賤に至る迄、其德を敬慕したので

ある。

器宇の何んとなく大なりしことは、東洋學問の賜ならん、ナポレオンの如く切迫したる所なく、自ら悠々たる所があつた。

君の爲したる事業に就ては、批評すべき點あれども、君は死に到る迄自己の爲にせずして、總て國家の爲め天下の爲めなる奉公心より働いたのは、大人物の大人物たる所以にして、敬服の外はない、若し缺點と云へば名譽心の非常に强大であつたことであるが、

是れは年壯にして志望大なる君として、蓋し免かれない所であらう。

大抵の人は、君に遇へば同化さるゝに至る、是れ生來大人物たるの素質を有つて居たので、天品と云ふて宜からう、隨分失敗蹉跌して殆んど其日の生活に困するの窮境に在ても、悠然として毫も之を辭色に顯はさざりしは、其抱負の大なるを窺ふ可きである。

（十二）前田正名氏の談

荒尾君と余とは、精神常に相感通して居つた、東洋の事情に精通すると此人の右に出づるものなしと信じ、東洋の事に關し、國家は此人に委ぬるも敢て差支ないと思つて居た、明治廿二三年の頃、農商務省で各局の官吏を集め、君を請して支那東洋事情の演説を請

政府聘ニ處士ニ爲ニ演說一、以レ君爲ニ嚆矢一、

兩役貢獻之功、遠在ニ戰將之上一

ふたとがあつたが、當時在野の士を政府に招聘し演說を請ふが如きは、全く絕無にして君を以て嚆矢となす、而して余微力にして君に充分なる助力を爲し得なかつたのは、今に遺憾とする所である、君が研究所設立の爲め、各地を遊說するや、地方廳に於て或は山師ならざるやと疑ひ、問合せ來る向もありしが、君が熱誠の人を感ぜしむる所、衆をして眞に憂國の士たるを感ぜしむるに至つた。

屢〻思ひ浮べ人にも語る所であるが、彼の日淸、日露の兩役に於ける君の功績の偉大なりしは言はずもがな、余をして特に感を深ふせしむるは、學生を薫陶し支那の事情を研究せしめ、以て兩役に貢獻せしめしとにて、其功は實に砲烟彈雨の間に出入せし將校の能く及ぶ所でないのである、彼の研究所出身者の行動は、實に君の精神の發露せしものにして、此等の人を世に表彰せずして止むは遺憾の次第で、宜しく此等の志士を祭り、其功績を不朽に傳へん爲め招魂社を建設するの必要を認むるのである。

（十二）　福島安正氏の談

自分は君とは親しく交際はして居たもの丶、日本に居ると少なかりし爲め、君の事業に就き能く記憶して居らぬ、それで自分は間違たり、不安心な事を御話するは死者に對す

忘己利害、擧全身以貢獻國家

同志之誠

空己以奉國家

る譯でないと信ずる故に、結論丈けを御話しする、即ち唯一言自分に於て決して、間違ひないと確信することを言ふて置く。

荒尾君は自己の利害を度外にし、顧慮することなく、全身全力を献じて、國家の爲め盡くした人である。

（十三）　小山秋作氏の談

根津君は己を空ふして荒尾君の事業を助けられた、本當の相談相手は根津君であつた、根津君は常に表面に立つことなく、陰にありて荒尾君の短所を補ひ、其間に在りて毫も自ら名を博せんとするが如きことがなかつた、兎角事業が苦境に陷る時には、双方とも紛紜の起り勝ちのものなるに、終始一貫荒尾君を助けられたのは、誠に感服の外はない、大に謝せねばならんと思ふ、獨り根津君のみならず、荒尾君の仲間同志は、互に激論抔することと曾てなかつた、是れ畢竟總ての人が自己を空ふし、專心邦家の爲め事に從つたからである、故に他の仲間では激論すべき等の事柄でも、常に談笑の間に爲したのであつた。

研究所の創立に當り、君は政府の補助金を財源として計畫し、全國を遊説して學生を集

苦心慘憺

誠心誠意

逆境

めたるに、農相交迭の爲め、補助金を得る能はざるに至りしかば、一時苦境に陷り、進退谷まりしも、生徒の出金と根津氏や余等の旅費及手當迄をも、事業費に投じ、尚ほ不足の分は、川上將軍より出金を請ひ、遂に君の不屈不撓の精神により、活路を開くに至つた、其の上海到着後も常に資金に缺乏したれば、余等は食料其他一切の費用を、一箇月六圓にて支辨するの有樣で、甚しきは余が家兄より士官學校卒業の際與へられし銀時計を、三回も典質した位であつた、然るに此窮境を生徒等に知らしむれば、不安の念を生ずるのみならず延て死解の悲運を招くやも知れざるを以て、飽く迄有力なる後援あることを示すの必要あり、其苦しみ一方でなかつた、當時毎月の拂は千二三百圓で、冬季に至り冬服を生徒に支給する時分には一萬圓近くも拂つたこともあつた、常に金錢に缺乏せる爲め、生徒等に支給する食物も、粗末であつたが、幸に敎職員の誠心誠意で敎鞭を執られた爲め、生徒等も之に感激し、あるべき筈の不平も至つて尠なかつたが、中には堪へ切れずして中途退學せしもあり、結局八十九名を卒業せしめた、君は其間に於て資金調達の道を講ずる爲め、內地に歸りて奔走したるが、時々內地よりする君の手紙に接する毎に、上海に於ける苦しみを慰めて居た、以上は廿四五年頃に最も苦境に陷いつた

時代のことである。

廿六年川上大將の來滬を機として、卒業式を擧げ、其より實踐部を起す爲め、七間に九間の二階建の洋館を英人より借り、余の擔當の下に、貨物を陳列し、役員及卒業生は支那風の長屋に住して、日々陳列場へ通勤したるが、事務の分擔等の編成は、理想通りで至

順境

極好況を呈し、西洋人も來れば支那人も來り、今の三越よりも猶ほ雜鬧する位の有樣であつて、一日の賣上高千五六百圓に上つたこともあつた、客の方でも店の性質を知りて、値切ることもなかつた然し試賣場と云ふ立場より、商賣せる爲め、賣れない品は、全く賣れ

逆境

ず、其の爲め破產した商店もあつた、斯く實踐を繼續しつゝある間に日清戰爭が始まりかけ、間もなく領事等は引上げ、陸軍省及荒尾君よりの詳細の通知に接したるを以て、之を生徒に讀み聞かせ、暗號電報を定めて余は一旦歸朝するに至つた。

川上大將は君を非常に信任し、終始君を提撕し扶掖せられた、君が少中尉時代に於ても

偉人知ニ偉人ハ

大將が他の將官連と談話中、君の來るあらば、席を避けしめ、以て君と面談し、又大將が君と對談中に他の將軍の來るあるも、君との談を終るに非らざれば、面會せざりし位であつた、又廿四年の末研究所が財政に苦しむこと甚しかりしとき、一日余は君の依賴

使哉々々

美談可レ傳

昔時生二大人物一今豈不レ生二巨人一

を受け大將を訪ふて、助勢を交渉したるに、生憎好方便なく急を救ふ能はざる旨を告げられたる爲め、非常に失望して邸を辭せんとするや、大將余を呼止めて曰く、明日更に來るべしと、余は曰く、御融通の道なければ再訪の要なしとて辭し去りたり、然るに翌日に至り大將より使を以て來訪を促がされたるに依り、直に至れば大將は曰く、邸宅を擔保として、四千圓を調達したり、之を以て荒尾の急を救へとのことであつた、如何に大將が君を信じ君の事業を助けられたかの一端を窺ふに足るのである。

（十三）　三宅雄二郎氏の談

君と相識るに至りしは研究所創立當時よりなるを以て、餘り詳なとは知らない、君は寡言にして何んとなく人を引付くる所があつた、名古屋の地は、昔時信長秀吉の如き大人物を出したが、今日は振はない。前臺灣民政長官の水野氏や、今の長官大島氏等が出て居るが、人物が小さい。君は此等の人々よりも輪廓が大きく、もつと人物が大きく出來て居たと思ふ、昔し大人物の出た地の人であるから、其影響を受けたのかも知れぬ、君は計畫あり之を行ふに熱心であつた、能くわからぬが西鄕流で。大きくなる機會に遭遇すれば大きくなることが出來るが、然らざれば無爲にして化するかとも思はれる、半途にして充

其人既大其事亦大

與二士卒一快飮、得レ意可レ想、

莞爾對二醉客一、大度可レ欽、品行方正、神佛權化、

分天禀を發揮せずに亡くなつたけれども、知人等に深く印象を與へたのによりて考ふれば、大なる器らしかつた、漠然ではあるが人に何等かの感じを殘して居る、西郷の樣に大きく伸びる事は出來なかつたとしても、普通の人の如く齷齪たることなく、遠大の事業を志して居たに相違ない、二十七八年役に多くの通譯官を出して、大なる仕事の爲めに、研究所を設けたのであつたらう、兎に角君は大きくやらうとし、又大きく人を動かさうとした人である。

（十四） 白川一來氏の談

君は十四五年頃徹院（宗泰院）に來り自炊生活をせられた、食物等極めて質素で何んでも好き嫌なく食して居つた。豚と豆腐に醬油をかけたのが好物であつた、誰人にも平等に交際し、兵卒抔の來る時は、豚や酒を以て之を饗し、其後で餠を御馳走するを常とし、酒は冷で坐の中央に甕を据へ、杓子にて茶碗に汲んで共に飮を樂しみとし、又親切で難義の人を救ひ、常に莞爾として人に接し、人が酒に醉ふて亂暴するも怒る如きことなく笑つて居られ、實に腹の大きい人で、又寡言の人であつた、品行方正、まるで禪坊主の如く、否な君自身が既に神や佛同樣になつていた。夜は大抵十二時頃就寢し、讀書しては

大志不レ遂、君終無ニ祝時一而逝矣、

先見之明

財散則民散、豈但清國、西洋諸國無レ不ニ悉然一、皇國獨不レ然、財散則民死、有レ死而已、雖レ然在レ上者、不レ可レ不レ講ニ富國之道一也、

冥想し、毎夜坐禪の稽古をせられた、朝は未明に起き寒暑の別なく、墓所の椎木を相手に木刀を揮ひ、又日曜祭日には友人等と擊劍を試みられた、君曾て余に向つて曰く、人は皆少尉になれば其祝を爲すが、自分は國家の爲め大事業を爲したる時、始めて祝するのだと。

（十五）　森清右衞門氏の談

荒尾君は、實に先見の明ある人であつた、君曾て余に向つて曰く、日清戰爭後清國は償金支拂後の政策として、鐵道政策を採ることが必要であると思ふ、李鴻章も必ず此政策を取るに相違なく、列强も鐵道布設權に競爭すべし、而して交通機關の普及するに至らば、支那の形勢は一變する、君は土木に關係するから、今より此方面に着眼するが可いと、成程今日になつて見ると、君の言ふ如くなつたのである、又淸國人は清朝建國の初より財散ずれば民散ずと云ふことを敎へられて居る、故に淸國人は金錢以外に何物もなく、何よりも金を作らねばならぬ樣に敎へられて居る、故に彼等に對するには、外交にても商業にても、總て此考を以て懸引せねば必ず失敗すると云ふて居られた。

君は豪傑風に見えたから、實業や經濟の頭腦に乏しい樣に想つて居た人もあつたらうが

抱二經濟之大策一

經濟之眼光、服二豪商一

日本興業會社之前身

大度如二南洲一

決してそうでない、實は大なる經濟的頭腦の人であつて、君の目的は支那を我國第一の得意とし、經濟的に開發する積りであつた、君が晩年臺灣に行かれたのも、勿論善後の大業に就き、抱負があつたに相違ないが、樟腦事業の經營も、慥に一の重なる目的であつたと思ふ、彼の頭の堅く容易に他の說に雷同せざる江州の豪商十數名も、君の經濟的卓見に感服して、遂に臺灣にて樟腦事業を起すことを賛同したが、是は全く君の發意であつた、余は江州人に非らざるも君の經濟的眼光に推服した一人で、共に樟腦事業に加はり其社長に選まれた、後の日本興業會社の前身である。

一言にして君の人物を評せんか、大西鄉が君の如き人物であつたらうと思はれる、齷齪せず腹の極めて大なる人であつた、君が存命せば日清間も、餘程今日より融和し、圓滿に進むであらうと思ふ。

第三章　逸事逸話

君の大阪鎭臺に在るや、眞性コレラに罹り避病院に送らる、當時避病院に送らるゝ者生還することは殆んど稀なるに、君は療養數日にして全快したり、君を治療せし醫官某曰く、君

體格壯健、氣力旺盛

の全快するを得しは全く體格の壯健なると氣力の旺盛なるが爲めなりしと（根津一氏談）

英姿颯爽

明治十五年冬士官學校の卒業後撮影せし寫眞は外套を被ふり肩を怒らし劍を按せり、英姿の颯爽たるを見るこれ恒吉少尉（忠道）に贈りたるもの、其裏に題して曰く、

古人曰以レ義制レ事以レ禮制レ心。繇雖レ愚一世履二行之一。

舟中結義

明治二十七年の頃、君頭山滿佐々友房と一日舟を墨江に浮べ、痛飮快談の後、兄弟の約を結ぶ、而かも誰れを以て兄とすべきかに就て議論あり、年齡よりせば佐々頭山荒尾の順序なるも、君服せずして曰く佐々君は三百頭顱中の一人にして、頭山君は石炭掘の親分なり、而して余は支那を呑下せんとする者なれば、事業上の優劣よりして、余は長兄たらざる可からずと三人手を拍ちて大笑す。（白岩龍平氏談）

異相

君一日武昌の黃鶴樓に登る觀相者あり、君の袂を扣へ熟視して曰く停府豐滿、公は王者の相あり、鳳眼波長くして貴自ら成る。（緒方二三氏談）

石龍子相三豪傑

石龍子觀相を以て鳴る、君曾て佐々友房頭山滿と相伴ふて石龍子に至る、三子皆一世の雄覇氣自から眉宇に溢る、石龍子熟視して曰く右は日本の豪傑、中は朝鮮の豪傑、左は亞細亞の豪傑なりと、時に佐々右に、頭山中央に、而して君は左方に坐せりと云ふ。（同）

服唐衣、戴孔明冠、

君の淸國に在るや好んで唐衣を服し、孔明冠を戴き、夏時は羽扇を持す、奇偉の風、痛く淸人の注目する所となり、非凡の偉人として衆俗敬虔の念を深うす。(同)

不爲疾言遽色

君寛厚の長者曾て疾言遽色せず、車夫婢僕に至るまで一言半句の叱咤を加へしを見ず、靄然として座上春常に滿つ。(同)

笑談服諸豪

君の淸國にあるや、土曜日の定例會議後は、豚の鋤燒に紹興酒を酌み交はして、同志週日の積勞を慰するを常とす、酒酣に耳漸く熱せば、議論沸騰し果ては組打に杯盤を蹴飛ばすなど、狼藉することあるも、君は曾て辭色を動かさず、徐に兩雄を宥めて曰く、何れも議論の歸著點は同じぢやと、流石の豪傑連も此一語に拍子抜けして、風雲忽ち收まるを例とす。(同)

包容衆論

君は何に限らず、苟くも自說を吐かず、常に衆論を調和して之れを包容せり。(同)

宏量如海、能感化人

君は輪廓大にして、宏量海の如く、且つ熱誠事を謀るの風あり、事の成ると成らざるとは寧ろ問ふ所に非ざるが如し、而かも其感化力の大なる天稟に出で、一たび君に接するものは何人も欽仰の念を起さゞるもの莫かりき。(同)

私淑

君は常に曾文正公西鄕南洲に私淑し、寡慾にして駐在武官時代の俸給手當の如きは、擧げ

て之れを同志に投げ出し、其中より小使錢を仰ぐ始末なりし。(同)

恩人

川上將軍は君の忘るべからざる恩人にして松方侯爵も絶えず君の爲めに斡旋の勞を取られたり。(同)

嗜好

君は何等の嗜好と性癖なかりし。唯だ酒間古今の英雄を品隲し、興到れば、紫電一閃居合の技を演じ、以て英氣を養ふ。(同)

叔姪

君の支那に在る、岸田吟香と相得て遂に叔姪の誼を結ぶ往復の書にも叔姪の語を用ゐ。通商總覽第二編の跋文にも吟香は我姪荒尾精云々と特書せるを見る、君の支那事業に於ける吟香の援助に依る多大なりしと。(同)

參禪

君の京都に寓するや、建仁寺默雷和尚に就き參禪す、余一日君を訪ひ悟道の如何を問ひしに微笑しつゝ曰く、僕の方が理窟が善き樣なれども、言下に痛棒を喰ふには聊か閉口せざるを得ずと。(同)

濃情

二十七年後余が陳列所の帳簿を持して京都に至り先生を訪問したる時、土産として松茵豚のラカン等を携へたるに、先生自から之れを料理して膳に上し共に酒杯を傾けたり、其溫乎たる態度は師弟の關係よりも、寧ろ父子の親あるが如し、此の如きは獨り余に對しての

みならず他門下生に對しても皆な然らざるなし。(三谷末次郎氏談)

大量

二十八年の暮一夕醉ふて先生の門を叩き、其說を聽く、睡氣切りに至り覺えず坐眠す、程經て目覺めたるに先生は端然として坐を崩さず。余を見てヱヘンと咳して笑はる、若し常人なりせば必ず怒りて直ちに訓誡を加ふる所なるに、先生は唯莞爾たるのみ、此の如きは自ら勉めてせらるゝに非らず。天性溫雅にして大量の人たればなり。(同)

訓誡

先生は尋常人が其子弟に向つて訓誡するが如きことなく、談話動作の裡に、無限なる訓誡を與へらる。(同)

鑑識

先生の人を觀る全く人の意表に出でたり、常に曰く人を觀るに平生相接する時は却つて觀難し、瑕を拔き去つて觀る時は能く顯はると。(同)

篤行

君常に觀音經の軸を懷にす、彼の木曾山中にて猪と見誤られ狙擊せられたる時に危き一命を拾ひ得たるも此の一軸の庇蔭なりとて、其後は一層之れを信ぜられたり。(白川一來氏談)

二十二年五月宗泰院改築に著手し十月竣工するや、君偶〻來訪せられ、曰く自分共が疊を惡しくしたからとて、本堂の疊四十枚を寄附せらる、信徒等大に其篤行に感じ、益々尊敬を加へたり。(同)

熟慮斷行

君平素立案若しくば計畫を立てんと欲するや、暗室に端座して、數時間の考慮を費し、遺漏なく順序方法等を組織して之れを記し、一旦其立案せし事を遂行せんとするや、迅雷耳を掩ふの暇なく、直ちに猛進す、而して最も人と異なりしは、頭腦の極めて數理的思慮に富みしにあり。（山内巖氏談）

信服主婦

長崎の旅館綠屋の主婦非常に君に信服し、君の長崎を過ぎるや、必ず種々の斡旋を爲し、其研究所を設立し生徒を率ゐて上海に赴きし時の如き、主婦は態々上海迄君を見送れり、主婦常に曰く、荒尾さんはゑらくなります、貴下等も出來るだけ御助けなさい、自分も金が出來たら加勢しますと、主婦は每年暮に必ず四斗入の清酒數樽を上海なる君に贈り、君の正月の飲料に供するを例とせり、又た主婦は君を大黑さんと呼べり、常に君が笑顏なりしが爲めなり。（同）

愛青年

君最も青年を愛し、常に之を集めて酒を飲むを無上の樂となし、醉へば則ち居合を拔き興到ればオヤセセドウドウと云ふ歌を面白可笑しく謠ふて人の頤を解きしと。（同）

君の幼時、漁村にて漁夫の子弟等と衝突し、君の一行は之れに襲擊され這々の體にて逃れ去りたるも、君は從容として怒り狂ふ彼等を諄々として說破し、微傷だも受けずして無事

威膽力

に歸來せり、如何に君が幼時より威服の力を有せしかを知るに足る。(菅井誠美氏談)

服裝

學校時代及其後も君は木綿の白衣を着し、羽織は丸一の紋を附せり、支那に赴きし後は多少身邊を飾るの必要あるを以て、絹布を着用するに至れり。(小山秋作氏談)

第四章　東方齋と著者

一　相遇の奇縁

相遇奇緣

明治二十八年三月四日、余は新たに海軍學校を辭し、東都に遊學せんとするや、途偶〻京都を過ぎり、夙に風采を想望せる、君が鴨東鹿ヶ谷に高臥せるを聞き、其謦咳に接せんと欲し、相國寺僧堂に參禪しつゝありし、小林全信師に就て、紹介狀を得、潛庵遺稿を携へて若王子山麓に君の閑居を訪ひ、志を東方に抱きて海軍を辭し、之より東上專ら政治經濟の學を修め、徐に爲すあらんと欲する所以を語り、教を請ひたるに、君は一見舊の如く、大に余の志を賛して曰く、吾れ士官學校生徒たるの日より、渡淸の念止む能はざりしも、容れられずして業を終へ、居ること三年、漸く其目的を達するを得たるに反し、君は幸に早く籠中を脱するを得たり、寔に邦家の爲め慶賀する所なり、須らく翼を鼓して萬里鵬搏を

物ニ本末アリ事ニ先後アリ

試む可し、然れども物に本末あり、事に先後あり、君旣に志を決し東方の興隆を以て自任す、即ち立志の根本義に悟入し、男兒世に處する所以の道を窮め、略〻東方の大勢に通ずるを急務とす、然る後必要の政治經濟を學び、以て體用を兩全し國士の素養を積む可きなり余も暫らく當山に隱遁して道を修め。前途の大計を按じ、旁ら興亞學院の如きものを設けて、天下の俊才と共に相研鑽するの意あり、現に高橋、頭山等に協議中なり、君の志余に同じ、願くは相携へて東方の爕理に任ぜられよと、年少の余を麾いて、懇に宇内の趨勢より、東方の現狀に說き及び、而して丈夫の此間に處する所以をも詳述せられ、且つ東上を延期して、余と共に起臥せば如何と、余も亦學問の時弊に鑑み、志立たず道明かならずして、漫に泰西形而下の學を修むるの本末を顚倒せるを思ひ、斷然君の敎に從ふに決し、翌日君の斡旋によりて、隣家なる川越某の二階に僦居し、日夕君に親炙して、指導砥礪を受けたるが、大學の三綱領八條目の如き、靜坐默思して最も工夫を力めしめられたり、前に書を飛ばして、三四友人を招集したるに、四月初に至り木下國明信山より來る、乃ち君の居を距る北數町なる鹿ヶ谷に一屋を僦し、共に之に移り住む、君之を東方齋別院と命名し曾國藩の家訓を經とし、君が獨得の見を緯とし、修身課程を定め、研究の規律を設け、

修身課程

同好の在洛學生高宮議、田野橋次、立花凜太郎、佐々木頼母等とも語らひ、毎日君に就き心學及支那語の研究をなせり。二十四貫に餘る大兵肥滿の君が阿々の聲を其硬勁なる舌端に依つて發音する所、正に是れ一場の喜劇にして、相顧み覺えず失笑を禁じ得ざりしなり、五月に入り宮坂九郎、曾根原千代三、大原信亦來り加はる、次で月の中旬更に若王子山中の延年臺に移居せり。

修身課程

主敬、　威儀要二齊肅一、言語要二簡明一、行步要二靜定一、行爲要二丁重一、正二視聽言動一、思之不レ中レ節者、而要下身心須臾至レ不レ離二良知一、此是化レ凡入レ聖之正路、出入之活機、換骨之靈方、願神之妙術也、若不レ於レ此下レ手、則或入レ覇入レ僞、或歸レ仙歸レ佛、學者宜二體察一。

靜坐、　毎日不レ拘二何時一靜坐一回、正位凝レ命、如二鼎之鎭一、體驗靜極生二一陽來復之仁心一、

早起、　黎明即起、

養氣、　刻々留レ心須レ呑二吐四海一、

學經、　毎日不二間斷一、

讀史、　毎日不レ下二二十葉一、

寫二日記一、每日所感及身過口過心過、以二楷書一省記書、

右揭二吾人切磋之要目一、事未來不レ可レ邀、事已往不レ可レ追、學必諸躬、問必諸心、以須レ勤二現在一也、

若王子は、洛東の名區にして、其飛瀑は夏季に宜しく、其楓葉は秋時に佳、又櫻花あり風光頗る閑雅、幽邃、筇を曳くもの四時絶えざるも、臺は幸に山の中腹に倚り、池塘の上に在りて、俗客の到る稀なり、若し夫れ日暮るれば四隣寂寥、唯松濤の颯々たるを聞くのみ、間もなく前田清哉、達藤留吉來泊し、田鍋、白岩等の諸士亦之に假寓し、同勢一時十名に上りしことあり、兩三の鍋釜十數の椀具、所謂君は溪流を汲み我は薪を拾ふて、自炊生活を爲し、櫃底時に空を告ぐれば、燒芋に肚を飽かしむ、或は夜半戸外に出で、天を仰いで高吟するあり、未明に山中を馳て、麋鹿を侶とするあり、徹宵讀書するあり、相戒め相規して、刻苦勉勵須臾も怠らず、余句あり以て當時の風尚と志氣の旺盛とを髣髴せしむ。

結盟壯士鹿溪中。　意氣投來昆季同。
短褐携レ瓢探二景勝一、　終宵剪レ燭罵二英雄一。
乾坤有レ待書生寠、　廊廟無レ聞宰相功。

千歳一機何日是、片帆破レ浪五洲風。

而して君は余等の仰いで以て泰斗とせし所、當時恰かも大本營は廣島より京都に遷り、大纛を駐めさせらるゝあり、加ふるに勸業博覧會の擧あり、洛中洛外の雜鬧空前絕後にして、君の閑居を叩く朝野の名士、日に跡を絕たず、君が同志及門下の士の來り訪ふ者頗る多く、而して我梁山泊も亦常に友人の寄寓する者數名、夏季に至つて海軍舊同窓の來往甚しく、梁山泊亦た盛大を極めたり、斯くて三月より約半ヶ年日夕君に親炙して、略ぼ大勢に通じたるを以て、一旦親しく大陸に遊び、其風土に接して豪宕の氣を養はんと欲し、君に請ふて渡航の機を得るに力めしが、十月二十六日に至り君余を招きて曰、君等の志を達するの秋到れり、余曩に君等を東京に推選したるに、頃日返翰あり君等を上京せしむべしとの事なりと、余輙ち宮坂、曾根原の二友と、其夕刻上京の途に就き、十一月四日陸軍省の關係を以て臺灣行に決し、十日歸洛君に謁して恩を謝し、南溟萬里の舟に上りぬ、余等去つて同志の徒相前後して山を出で茲に延年臺の閉鎖を見るに至る。

君と余との關係斯の如きのみ、而かも相遇ふて一見肺肝を披瀝し、忽ちにして起居を共にするに至れるは、君が青年を愛するの性癖に出づるものなる可しと雖も、亦以て相遇の奇

縁と謂はざるべからず、鹿ヶ谷梁山泊は、實に君が一夕の傾談に其端を發したるものにして、起居を共にする僅に一年に滿たざりしも、余が君に受けし感化は、頗る大なるものあり、當年を回顧すれば、猶ほ其狀況の眼前に髣髴たるを覺ゆ、本春韓京より東上の途、京都を過ぎり若王子に到る、風光依然故の如きも、人事幾變遷して復た舊盟を討ぬるに由なし、乃ち社前の旗亭川越に憩ひ、主婦と會して當年を語る、曾遊の跡歷々心頭に浮び、感慨無量なり、君の舊居は爾來四代の持主を更め、門外寂寥人聲なく、庭前の藤樹一株古色を帶びて蜿蜒屋背を掩ひ、瀟洒なる內門、庭中の奇石、さては彼の堂、此の檐悉く是れ當年を語らざるなし、更に山を登り舊延年臺邊を逍遙するに、既に毀たれて年久しきが如く墟址に草木の繁茂せるを見るのみ、俯仰豈に多少の感慨なからん、乃ち君の舊居延年臺の墟址、及君建つる所九烈士の碑を撮影し、沈思に耽りつゝ薄暮漸く下山せり、時を經る僅に十四年、人事の變亦急ならずや。

感慨無量

九烈士之碑

二　余の見たる東方齋

三宅雪嶺、曾て君を以て未成長の豪傑となし、其志を伸ぶる能はずして早生せられたるを

著者之東
方齋評

哀悼せり。

日南福本氏は、君を評し英雄の資を抱いて、英雄の運命を缺けるものとせり。

余も亦思ふ、君は所謂未成長の英雄にして、即ち英雄の資あつて英雄の運命を缺けるものなりと。

明治太平の聖世に人と爲り、三十有八の短生涯、其間に偉業を建つるが如きは不可能なり、其間に德器を大成するが如きも亦不可能なり、君の事業は悉く未來に存し、君の人格は唯未來の修養を俟ちしなり、君の若王子山居時代は、則ち君が前途の經綸と克己の工夫に專念せし時代にして、君の將來は山を出でたるの後に在りしなり、看よ、戰後一たび淸國に航するや、内外貴紳爭ふて君に聞き、一たび臺灣に渡るや、一布衣を以て其勢望忽ち全臺を掩ふに至れるを、君の進境以て察すべからずや、經綸の策旣に胸中に成り、人格亦大に圓熟して、此より將に大に雄飛を試みんとするに當り、旻天何等の無情ぞ、忽焉として其生を奪ふ、余が君に冠して未成長の英雄と云ふ所以、之が爲めなり、英雄の資あつて英雄の運命を缺くと云ふ所以、之が爲めなり、是れ世人の君を惜しみ余の最も君を惜しむ所以なり。

附　殉難十二烈士略傳

九烈士

日清戰役の發端に於ける、九烈士功績の偉大なるは、常人の與り知るに及ばざるものあり、所謂赫々の功無しと雖ども、其隱微の間に於て國家に貢献せし勳功は、遙に斬將搴旗の功に勝るものあり、和成るの後　朝廷其功を錄し叙勳賜金の事あり、且つ其英靈を靖國神社に合祀し、歲時典祭千秋に廟食せしむ、死して餘榮ありと謂ふ可し、然れども諸士轗軻零丁滿腔の經綸を施す能はず、大志を齎して一朝難に殉するに至つては、余豈に之を悲衰悼惜せざるを得んや、是れ余の東方齊の傳後に附傳し、永く世に表彰せんと欲する所以なり、九烈士を誰とかする、曰く山崎羔三郎、曰く鐘崎三郎、曰く藤崎秀、曰く藤島武彥、曰く大熊鵬、曰く猪田正吉、曰く楠內友次郎、曰く福原林平、曰く石川伍一是なり。

一　山崎羔三郎傳

山崎羔三郎傳

君は筑前國鞍手郡山口村の人、舊福岡藩士白水淸八の第三子にして、出でゝ山崎氏を襲ぐ、幼にして双親を喪ひ、祖母によりて保育せられ、福岡中學、鞍手學校藤雲館等に學び、又漢籍を海妻某筒井某に學ぶ、人となり沈毅豪邁、氣宇濶達、夙に四方の志を懷き、廣く天下の士と交る。

東方政策

此時に當り、朝野の政客內黨爭を事とし、敢て東方の大計を顧みる者なし、君深く之れを慨嘆し、其東京にあるやハットソン氏に就て英語を學ぶの餘暇、都下の名士論客を訪ふて東方政策の急を說く、君が荒尾氏に邂逅して、其知遇を得るに至りしも、實に其際に在りしなり。

君東洋の形勢轉た危急なるを觀、他日必ず爆發の機あるを察し、先づ淸國に根據地を定め、我國人をして淸國の地理、人情、風俗を考察せしめ、平時は殖民及び貿易の業に當たらしむるときは、一擧兩得の良策なるを以て、遂に渡淸の志を決するに至る。

招有爲青年

是に於て有爲の青年を招かんが爲め、百方奔走し僅かに十餘名の同志を得たるも、經費に支障を生じ、屢々謀りて屢々破れしかば、暫く奈良縣に至りて英學會を創立し、學生を敎授し時機の至るを待つ、幾くもなくして、歸縣して家兄及び縣內有力の士に謀りしも、終

に賛同を得る能はず、君依て斷然同志の士と共に渡淸するに至れり、時に明治二十一年九月三十日なり、發するに臨み國風一首を咏ず。

蚊やり火の身は鋸木屑となるとても

國の爲めには何か惜しまむ

以て其献身報國の誠意を窺ふるに足る。

献身報國之誠意

君の淸國に至るや、荒尾氏と共に漢口に在り、辮髮漸く長く、言語も亦熟するに至りしかば、遂に孤劍飄然內地探檢の途に上りぬ、將に發せんとするや、諸友を顧みて曰く、斗の如き膽と鐵の如き脚とは、吾財產なり、而して今や此新しき扮裝と三寸不爛の舌とあり、前途何の難きことかあらん、諸君幸に意を安んぜよと、これより君は常致誠由子羔と稱し藥商となり醫者となり、或は賣卜者となり、甚しきは乞食となりて山野に露宿し飲食を絕つこと數日に及ぶことあり、或は淸吏に逮捕せられ糺問を受けしことあり、其間雲南貴州の蠻地を探檢し、瘴癘の境に出入して備さに辛酸を嘗め、不撓不屈能く難に耐へ、四百餘州の大、君の足跡を印せざる所僅かに數省あるのみ、斯くて在淸前後七年、語學に熟達し、風俗を知悉する、同志中多く其匹を見ず、明治二十三年南部地方探檢の爲め漢口を發する

豪語强ニ人意

四百餘州不印ニ足跡ー僅數省、

寄二家兄一書

抱負何大

前、家兄に寄せたる一書は、最も君が意氣の壯と抱負の大とを見るべし。

去る十一月漢口より、鎭口及び揚州の旅行中無事、甚だ愉快の旅行仕、一昨二十九日歸堂仕候、途中別に支那人に見顯はさるゝ事無之、拙弟の姓名は常致誠字子羔と稱し候、住所は或は福建人と曰ひ、或は廣東人と呼べり、却說拙弟等の事業も、實に至難至艱の業にして、前古未だ有らざる大事を圖りたること故、非常の辛苦艱難は甘んじて受くる覺悟に候得共、兎角其端緖に就くこと甚だ困難にして、一進一退未だ望を付ける場合に立至らず、誠に焦心至極皆々千思萬慮の淵に沈み居候、拙弟豫て心中に決する所あり到底我が同志者の事を成就するには、第一着の目的、即ち之が根據地を得るに在ることを感定仕候、然るに此根據地、即ち割據地を得ること、實に至難にして、支那天地廣しと雖も、甚だ得難き事に候、雖然邊境政化の洽からざる地を周遊して、一心に搜索することあらば、又地肥風土の便に依るべき處なきにしもあらざるべし、若し之を得之を占むることを得るに至つては、其地に割據して暫く世の志士壯夫を集め、生養訓練以て世機に乘せば、大事豈亦何の難きことかあらん、方さに腐敗の淸廷を壓することを得らるべきなりと、常に思慮を定め居候、然るに未だ時機を得ず、又南北何れを擇ばんや、未決

意氣何壯

なり、然るに豫て申上置きたる北邊行の事、來年初夏に大抵決行可致、北方は、土肥へ機應、便を得ると雖も、本朝滿廷の基業地にして、政化兵機隨分密に行屆候に付、其地に潜伏して根據地を築くこと甚だ困難なり。因て南邊の安きに如かざるべしと確案仕候故、來年北行の期に至るまで南邊に周遊して、其地勢を窺ひ、其地利を審査せんと欲し用意略整ひ、本年中に孤劍飄然南邊に飛遊せんと決心仕候。昨二十九日歸堂したれども、本年も只一日の餘日あるのみ、故に來年一月四日を以て發程の起算に候、これより南、雲烟萬里湖南の水、貴州の山、雲南の野、廣西の森、福建の郊、虎狼豺豹の窟に入り、猺獞（之れ貴州雲南廣西に住する野蠻人）の苗蠻の巢に遊び、瘴癘毒霧の間を彷徨して、以て決志を遂することを務むべし、前途渺茫、無事なるを保せず、若し幸ひ神明の加護を得、旻天の祐を受れば、本年中に再び上海に達することを得べく、男子の事を成す、豈に容易ならんや。方に粉骨碎身を甘んず、此行實に自から壯なりと存候、愉快雀躍の至りに御坐候、別に臨み再言す、家兄乞ふ自愛せよ、拙弟も誓て艱難に打勝ち、凱歌を奏して歸るべし、若し志を達し好根據地を得る時は、直ちに上海に歸り、之に處する準備を爲すべし、亦南邊志を得ざれば、來年方に北胡に向ふべし、秘密を乞ふ。

十二月三十日　　　　　　　　　　　　常　致　誠

白水家兄大人

研究所

幾くもなくして、日清貿易研究所の設立せらるゝや、君入りて其庶務を處理し、大に勉むる所ありしが、將來擴張の計畫に就き、有力なる實業家の助力を得んが爲め、二十四年五月を以て、一旦歸朝し、九州京阪及常總の間を奔走せしも、當時議會紛擾して、朝野の有志他を顧みるものなかりしかば、君の企畫は遂に水泡に歸するに至れり、是に於て郷里鞍手郡に歸り、犬鳴谷に閑居し、悠々自適筆硯に親み、行水日記の著述に力を致せり。

二十七年六月韓國東學黨亂起

然るに荒尾氏書を寄せて、君の渡清を促がすこと頻なりしかば、二十六年六月廿六日再び起て清國に航し、漢鎮熊家巷に寫眞舗を開き、漸次に宿望を達するの階梯を作らんとし、大に劃策する所あり、越て廿七年六月朝鮮の變報に接するや、君時に上海に在り、踴躍して曰く、國恩に酬ゆるの機至れりと、直ちに起つて朝鮮に赴き、當路者に謁して、具さに方略を開陳し、其容るゝ所となりしかば、清人に份し、牙山の敵營に紛れ入り居ること數日、悉く敵情を探知し、終に敵兵の怪しむ所となり拘禁せられしも、能く奇智を以て彼等を欺き、敵營を脱出し、晝夜兼行して京城の我軍に復命しぬ、我軍の作戰計畫は、多く君

份二清人一入二牙山敵營一、探二知敵情一、奇智脱二敵營一、

牙山戰捷全因二君偵察之功一

自二牙山一寄二家郷一書

當時狀況如レ見

が探知せし報告によりて定められしと云ふ。

七月二十三日、我軍朝鮮王城外に戰ふや、君は大院君の邸宅守護として、大に盡力し、後第九混成旅團の成歡牙山を攻撃するの際は、司令部に屬して戰爭に勤め、京城に凱旋するや、龍山兵站部附となり、專ら通譯の任に當れり、牙山より凱旋後戰報を家郷に寄せたるの書あり、左に掲ぐ。

大暑の候、益御清適奉賀候、降而小生事も、無恙奔走罷在候條、乍憚御放神可被下候、當朝鮮國の形勢は、既に諸新聞紙等にて御見聞被成たるならんと存候條、詳細は贅報たるべく、荒増し記載仕候、終に已むを得ず砲聲刀光の威を示し處置せざるべからざる時機に立至りたるは、去る二十三日にして、其前夜中に朝鮮に政府の改革と、清兵撤回の請求をなせし決答を催促し、若し遷延するに於ては、決然たる處置に出でざるべからざることを兼て申込たりしが、此夜の決答滿足すること能はず、故に夜半より夫々仕度致し、我兵も漸々と城内に繰込み、王城の周圍に近づき、二十三日昧爽三門を押開き、王城に入込めり、於是王城護衛の韓兵抵抗を始めたり、吾兵三回の吶喊と共に銃聲は響けり、戰ふこと廿分許りにして、銃響漸々疎稀となり、久之戰は停止し、王城は吾兵の占

領する所となり、四つの門樓悉日本兵の護衛するを見たり、次で國王を擁して事大黨を斥け、大院君を擁して王城に入れ、攝政となし、校正廳を開き、日を逐ふて弊政を釐正せんことを期せり、始め韓兵は王城の後山に據りて發銃し、それより退きて、其後側の一村落内に據り、終に兵器を悉く放棄して、北漢山地方に逃れり、吾兵それより西門の兵營東門内の營兵武庫屯營等、京城内に在る總ての營兵を擊散し、軍器は悉く奪取し、一銃一丸を遺さず、數百の人夫及輪卒を以て、萬里倉旅團本部の倉庫に運べり、大砲は殆んど二十門に及ぶべく、小銃は二千挺を越へ、彈藥米糧等は擧て數ふべからず、（中略）斯くて城内は再び靜謐に歸し、悉く吾兵の保護の下に歸したりしが、支那人は凡て逃走せり、朝鮮政府の改革は、略ぼ緒に就けりと雖も、牙山の清兵を打拂ふに非らざれば、到底完全なるものと云ふ可からず、因て朝鮮政府より牙山清兵の撤回は、都合好く處置せられたしと云ふ依賴狀を取り、二十五日より吾が旅團は、牙山に向け出發せり、旅團長は大島少將、參謀は長岡少佐、福島中佐、上原中佐、中原副官、河野副官等にして、歩兵廿一聯隊、十一聯隊、砲兵一大隊、及騎兵工兵電信隊衛生隊輜重兵各若干、午前十一時發足、漢江を渡り果川縣に至り露宿す、行程三里許り、吾が全軍は茲に吶喊の聲を揚げ

全線突進す、敵の諸砦相續で陷り。兵器彈藥遺棄途に滿つ、始め吾全軍の吶喊するや、敵八門の砲を發射し間斷なく邀擊せしが、其の多くは吾軍の後方に爆裂せり。次で吾が騎兵の襲擊に會し、大砲凡て吾軍に奪はる、(併し悉く其要を拔去り用をなさゞらしめたり)斯く頻りに進みて頻りに陷いれ、全營六七個、皆な吾が占領する所となり、敵は建昌縣地方に向て退却せり、死するもの一百有餘人、吾軍三十餘人を失へり、天幕三百張を奪ひ、旗幟二十餘旒を取る、旗幟凡て營將の姓を記せり、魏、徐、葉、憑、聶等なり、皆一營の守將たり、次で走敵を追擊し、午前八時頃吾軍を集め、直ちに牙山に向つて出發せり、東隊は、迂路を取りて牙山の南面に出でんとし、一隊は直路を取り牙山東面より入る、成歡牙山を距る三里許り、途中敵の散卒を捕へ殺すこと算なし、大雷風に逢ひ、午後五時頃東路の一軍牙山に入る、牙山は敵の棄る所となり一兵卒をも駐めず、直ちに入りて其倉庫を奪へり、聞く牙山には孫某なるものを留め、兵五十人を以て守れりと、(中略)予は昨日戰場にあり、輿に乘じて默過すること能はず、敵銃を奪ひ發銃することを悅べり、終に旅團本部と失し、此日前衞と共に牙山に入れり、然るに旅團司令部は迂路を取れるを以て、此日迄未だ牙山に着せず、時下大暑凌ぎ難く、兵士の疲憊するもの少なからず、第一困難なるは

居民日本人來攻のことを聞き。悉く逃亡して薪水を給するものさへもなく、殊に途中の如き兵士渇して田水を汲み飲むに至れり、予は旅團本部の未だ來らざるを以て、此夜は市中に露臥し、糯を食ふて僅かに飢を止め、殊に可笑きは、先日予支那衣裝をなして牙山に忍び入り、殆んど一週間敵情探索に從事せしとき。宿とせし韓旅屋の主人に出會せしことなり、彼は能く予が面を知れり、彼は能く予が清兵と一處に飮酒し、談話せしことを知れり、予が此度日本兵に從ひ銃槍を肩にして來りたるを見て、彼は予が顏を見て苦笑せり、彼は予が裝束を見て驚けり、彼は予が先きに穩かにして今暴なるを見て怪めり、彼は劈頭に予に向て數言を放てり、予は惜い哉彼が言語を解すること能はず、直ちに袖を別てり、三十日予は旅團本部を尋ねんと欲し、再び來路を回れり、未だ一里ならずして給養隊の屯浦より來れるに逢へり。彼等は今朝速かに牙山に入るべしとの本部よりの命令に接せりと云ふ、予以爲らく然らば本部も亦將さに今朝牙山に入るべしと、因て歸れば。既に牙山の南路より、本部は來着せり、直ちに本部に到りしに、少將及參謀等皆な予の來るを見て、大笑して曰く。昨日予を戰場に失す、予が銃を肩にして進擊するを見たり。而して予に似たる支那人の死屍を見たり、恐らくば戰場の露となりたるなら

んと思惟せり、而して今恙なきを見たり、可慶可慶と、予再三罪を謝し退く、此日牙山に宿す、成歡及牙山の戰利品は、此地より白石浦（膽即ち清兵上陸の地）に泊せる汽船に牽引せしめ仁川港より龍山の本營に送付せり、（下略）

八月十二日　　山崎羔三郎

白水　致様

井上保次郎様

中和平壤功勳亦多

吾軍益々北進するに及び、君は第九旅團司令部附となり、八月二十一日京城を發し、途中病に罹りしかば、開城に留まり療養數日にして、黃州に至り、始めて軍隊に追及し、夫より中和に平壤に或は偵察斥候となり、或は鄉導となり、或は物品徵發俘虜訊問に當り、人民鎭撫に任じ、勤勉以て吾軍の便益を圖れり、其功尠少ならず、平壤陷落の後第五師團司令部附に轉じ、一旦廣島なる大本營に歸りぬ。

特別秘密之重任

十月四日大本營に伺候し、間もなく第二軍司令部附通譯官を命ぜられ、拔んでられて特別秘密偵察の重任を授けられ、十月十六日を以て軍司令官大山大將以下幕僚と共に、清國盛京省に向つて出發せしが、發するに臨み、家兄に書を送りて訣別の意を漏らせり、其書家

此行不レ期ニ生還一

何等之決心

鄉に達するや、家兄は令弟と共に廣島に赴き、君の行を送れり、此時君懇ろに語りて曰く、此行素より生還を期せず、出發の日は即ち其命日なり、成敗は天にあり、唯潔く死して國を辱しめず、以て　皇恩に報ゆるのみと、此語竟に讖を爲す。

十月二十三日第二軍大同江碇泊中、我陸兵の上陸に先ち竊に花園口附近に上陸し、夫より普蘭店を經、遼陽方面の敵情偵察の重任を受け、明くる二十四日夜支那服の旅裝を整へ、水雷艇に搭じ暗に乘じ出發せり、別るゝに際し參謀官等と慇懃に握手の禮を爲し、訣別して曰く、此行奇功を建てずんば、再び生きて閣下等に見えずと、飄然として深く虎穴に進入せしが、爾來杳として其蹤跡を絕ちぬ。

後十一月六日我軍金州城を占領するに及び、衙內の簿書を檢して初めて君の十月二十六日清國巡羅兵の爲めに碧流河の邊りなる渡船場にて捕へられ、鐘崎三郎、藤崎秀の二士と共に金州海防分府第二獄に繫囚せられたる證跡を得しも、其顛末秘密にして知ること能はざりしが二十八年二月六日偶ゝ我民政廳雇淸人王某の言に依り、始めて其詳を知るを得たり。當時君は鐘崎藤崎の二士と共に、獄に繫がれ、日夜慘酷なる鞭笞苛責を受け、我軍情を糺問せられしが君は、言語の通ぜざる風を爲して隻辭を發せざりしも、其竟に免かる可から

壯烈懾ニ虜膽ー

東向拜ニ聖天子ー

神州男子之典型

年三十有一

異數之盛典

忠死之二字

ざるを見るや大聲呼んで曰く、我は大日本帝國臣民福岡縣士族山崎羔三郎なり速に我頭を斬れ我何ぞ死を畏れんやと、神色自若として毫も平日と異ならず、獄吏舌を卷きて其豪膽に驚く。陰暦十月三日、鐘崎藤崎の兩士と共に、金州西門外の刑場に護送せらる、清國の法囚徒を刑するや、皇帝を拜せしむ、依りて三士に命じ西南に向ひ清國皇帝を拜せしむ、三士大に怒り罵て曰く。日出の國　聖天子の在るあり何んぞ蠻主を拜せんやと、東向して動かず、儈手怒て刀を以て其面を亂打す、流血淋漓、爛腑眼鼻を分たざるに至るも、三士終に屈せず從容として死に就けり、時に君年三十有一、屍を城の西南二丁餘、旅順口街道の右側に埋む。

三士の知友向野某澤本某王某、を伴ふて之を檢し、之を司令部及民政廳に報す、因て翌日司令部副官醫師憲兵及譯官僧侶等と其地に赴き發掘すれば、果して三屍あり身首處を異にし、頭面處々刀痕を存し、嚴寒の爲め凍結して其慘狀實に見るに忍びず、衆相顧みて熱涙潸然たり、乃ち僧侶をして讀經せしめ、之れを茶毘に附し各遺骨を二分し師團長山路將軍忠死の二字を墓標に書し盛典を設け、同九日を以て廳外の招魂社内に改葬し、其一半は各之を鄉里に函送せしむ、嗚呼將軍智勇絕倫、勢望六軍に冠たり、而して今や英斷以て三士の忠節

捨レ生取レ義之碑

三崎山

義話可レ傳

義士之墓側、建ニ三烈士之碑一、得ニ其處一哉、得ニ其處一哉、

を表彰し仁愛枯骨に及ぶ、三士死して餘榮ありと謂ふべし。

次で根津一、三士の忠烈を長へに傳へんが爲め、碑を金州城北門前の山上に建て、題して『大日本志士、山崎羔三郎君、鐘崎三郎君、藤崎秀君、捨レ生取レ義之碑』と云ふ、其山無名にして海中に突出し岬をなす、而して三士の姓崎字を冒すを以て、之れを三崎山と命名す、其岩燧石の大磐石にして、容易に刻字する能はず、已むなく其の岩石の中央に朱桐油を以て三崎山の三字を大書し、能く雨露に耐へて永く洗滅するなからしむ、支那の俗、義を尙ぶ故に志士が生を捐てゝ義を取るを見れば、自他を問はず、齊しく之を尊敬し、敵人たるの故を以て忠義の士を辱しめず、因て山麓の民家をして將來此の碑に詣づる日本人あらば、必ず花と水とを供すべきを以てし、銀十兩を與へ去りしが、後ち日本人の此碑に參詣するものあるときは、彼れ招かずして花水を携へ來り、參詣者も亦多少の勞錢を與ふるにより、益々悅び曾て之を忽にせざりしと云ふ。

占領地守備軍の撤去するに際し、我が軍は鄭重なる保護を加へ、此の碑を日本に送還せり、碑の海外より來りしは、之を以て嚆矢とす、乃ち捨生取義の意に基き、泉岳寺に謀りて之を四十七義士の墓側に建つ、義士の墓に詣づるもの、必ず三烈士の靈を弔ふと云ふ、碑の

裏面に文あり、曰く、

征淸之役、第二軍譯官、山崎鐘崎藤崎三氏、銜ニ上將之命一、變レ服深入ニ敵地一、不幸見斃ニ毒及一、余建ニ此碑於ニ金州城北之山頂一、以表ニ其義烈一、旣而朝議還レ地撤レ兵、有司收レ此齎歸、乃更立ニ于泉岳寺一、傳ニ諸不朽一云、

明治丙申年四月　　知人　根津一識

二　鐘崎三郎傳

鐘崎三郎傳

立志卓然在ニ報國一

君筑前國三潴郡靑木村大字靑木の人、父を寬吾といふ、母は小野氏、君其第二子、明治二年一月二日を以て父の寓居、同國鞍手郡八尋村に生る、幼にして父を喪ひ、十一歲にして從兄福岡市勝立寺住職加藤日龍の徒弟となる、人となり豪膽不羈、勇悍敏捷にして、殊に快辯を有し、文才に長ず、赭顏威容、其中藹然たる和氣あり、佛書を學ぶこと九年、謂へらく方今文物日に進む、何ぞ方外を以て一生を終らん、宜しく國家有爲の人才となり、一世の智勇を推倒すべしと、遂に陸軍々人たらんとし、之を日龍及び親戚に謀る、屢々謀りて屢々斥けらる、是に於て普通學を修むるに托し、同地の私立養鋭學校に入る、明治十九年二月

幼年學校生徒募集に應じ合格す、日龍之を聞き大に怒り、懲戒して遠く他寺に移さんとす、然れども君の志奪ふべからず再度上京するに至る、當時山縣監軍部長に呈したる具申書左の如し。

具申書

三郎儀

家素と貧窶、且つ幼時父を喪ひ、稍長じて母兄の命に依り、從兄勝立寺住職加藤日龍なる者の徒弟と相成り、佛學修業罷在候、然るに三郎儀平素陸軍出身志望にて、屢々日龍及び親族の者へ右素志相談じ候得共、孰れも佛門の身妄りに他志を抱く可らずとて、一人も賛成するもの無之に依て、乃ち佛學の傍ら普通學研究致度旨を以て、日龍に請ひ、私立養鋭學校へ通學致し候、此校は津田信秀の創設せるものにして、士官學校豫備科を授くる所なり、依て專ら幼年學校入學檢查課目修學致候、然るに昨十九年二月幼年學校生徒募集有之候に付、該校々長信秀と謀り、密かに入學願書差出し候、同年四月檢查官派出に相成り福岡にて檢查有之候に付、直に應試仕候、然る處日龍間もなく三郎が幼年學校に志願したることを聞知し、急に養鋭學校を退校せしめ、切りに懲戒の上將さに遠

浮屠氏何無慈悲
衷情可憐

く他寺へ預け置かんとする折柄、在京の友人より幼年學校學科檢査に合格したる旨、豫報致呉れ候、依て自ら思ふに、若し逡巡不斷、機會を失せば、終身素志を達するの期無かる可しと、遂に意を決し日龍所有の金六十二圓餘を默借し、多年養育の恩を受けながら、妄りに命に違ひ、家を出るの罪を謝するの書と、該金を成業の日迄借用致すとの證書とを殘し置き、直に上京致候、着京の上書狀を以て在郷の知家より、日龍許へ謝罪致候、然るに日龍は已に三郎が脱走せる即日、裁判所に告訴致、曩に殘し置きたる書類を以て證憑と致候由、然るに三郎事、未だ此事を知らず、再審檢査も猶日數有之候故、宿所等幼年學校檢査掛に屆け置、牛込成城學校へ入學致し居候處、同警察署より拘引に相成り國許警察署へ傳遞護送に相成り、福岡監獄未決監に於て缺席の儘、裁判言渡相成り候に依り、故障申立候處、直ちに御採用の上、前裁判を取消し、更に別紙の通り無罪宣告相成候、依て右に關する事件は双方に於て和議相調、全く結了仕候、右保證人相立事實具申に及候也。

明治二十年　月　日　　本人　鐘崎三郎

保證人　河村隆實

旻天何無
情

監軍部々長　山縣有朋殿

然れども不幸にして家兄の重患に罹れるを以て、再び歸國せざるべからざるの悲運に會し歸れば即ち家兄は既に逝く、依つて前志を中止し家兄の後を繼承し、三潴郡役所雇となる、數月にして辭して長崎に遊び、御幡雅文氏に就て、支那語を研究す。

當時荒尾精氏、日清貿易研究所設立主意書を世に公にし、各地の新紙爭ふて之を掲載す、君其知友に語つて曰く、荒尾精なる人、清國上海に於て、日清貿易研究所なるものを設け大に我國青年を奬勵し、東亞の貿易を擴張せんとす、之れを熟思するに、歐米の天地、今や大に定まる、而して殖民貿易の事業は、文明と共に一日も忽にす可からず、我國に於ても亦之と其勢を同ふす、然らば中原の鹿は歐米に非ずして、東亞に在り而して支那帝國今や老朽腐敗せり、十年を出でずして必ず變あるべし、此時に當り不肖三郎皇恩の萬一に酬いんことを期すと、直に東上し荒尾氏を訪ふ、氏君の奇才を愛し、之を厚遇して慰め歸らしむ是れ君が荒尾氏の知遇を受るの始なり、既にして長崎に歸り、復た御幡氏に從ひ刻苦勉勵す、已にして鎮西日報社に入り、顯輯に從事し、顯敏奇才を以て推さる。

廿四年春上海に渡航す、居ること半歳、同地日本青年會に入會し、後聘に應じ安徽省蕪湖

男兒報國
在二今日一
苦心慘憺

の日本商店に入る、二十六年六月歸朝、翌二十七年三月再び渡淸し、南北地方を視察す、會々東學黨の亂起り、日淸の關係將に不穩ならんとす、君謂らく男兒國に盡す今日にありと、因つて山東直隸の間に在りて敵情探査に從ひ、又た旅順に渡り、海軍大尉瀧川具和を助け、渤海灣の測量に從事し、支那人に扮裝し大に盡す所あり、熱河に於て洪水の爲め、船破れ錨其他機械を流失す、よりて新調修理の爲め上陸し、天津に到るや、半島の風雲愈々急に海洋島沖の戰報既に傳はり、荒川天津領事は、四十一人の居留民と共に將に歸國せんとす、而して君は同志石川伍一と止まりて、諸方面の情況を偵察して、本國に報知し彼の李鴻章をして我半島出師の運動機敏なりしに一驚を喫せしめたるもの。亦君等が夙に淸國の計畫を探知し、以てこれを本國に諜報したるに由らずんばあらず、既にして淸國政府は君等の行動に疑を抱くに至りしかば、已むなく小村公使の一行と共に歸國せんとしたるも、敵國の軍情を偵察すると否とは、我進擊軍の利害に關する至大なるものあるを以て、君は石川伍一と共に奮然身を挺し其任に當るに決し、暗夜に乘じて船を出で、漸く天津を脫出するを得たるも、敵の探索終始君等の四圍を離れず、石川伍一は敵手に斃るゝに至る、君は天津を去り、同地より山海關に至る。沿道の敵の軍情を探査し、屢々危地に陷りしも

千歳一遇、一死報レ國、

用意何周到

讀至レ此、誰不ニ感泣一、

辛ふじて虎口を脱し、九死に一生を得て歸朝し、大本營に復命し、大に賞賛を博し、直ちに大本營附通譯官となる、時に廿七年九月十二日なり、當時君の親友某氏に送りし書簡能く君の面目を傳ふるものあり、特に之を左に掲ぐ、

拜呈時下益御多祥奉賀候、降て小生も昨日電報致候通、九死に一生を得て、一と先づ歸朝　本日午前八時半着京致候間、御安神被下度候、抑も今回日清事件に就ては、固より國論のあるあり、敢て生等の一議を要せず候、唯生は實に千歳一遇の好機會にして、一死以て國に酬い、家を興し名を揚げ、平素の志望を達せんことを熱望致候、是れ蓋し生が一己の功名心の然るに非ず、實に兄等數年來、三郎が不肖を捨てず、常に表裏庇護せられたる知己の恩に酬いんとの情、轉た切なるに依てなり。

予の向に盛家を退身したるが如き、家名を繁太郎に讓り退隱して、家名の斷絕せざらんことを計りたるが如き、皆今日あるを期したるなり、大事に臨み決死に躊躇せんことを避けたるに外ならず、若し三郎にして今日潔よく死する能はず、亦一の功名をも樹つる能はざらんか、上國家に對し不忠不義の臣たり、下は父兄に對して不孝不弟の賊子たり、亦知己者を欺き義者を害する惡魔たらんのみ、三郎不肖と雖も天下に志望を負ふの

士氣全腐矣

大丈夫不レ建ニ功于當世一、當レ遺ニ芳于百世一、

一血性兒なり、豈何を苦んで此愚を爲さんや。

故に事の漸く急なるに及びて、天津北京在留の國民、皆悉く去り一の留るものなし、而して敵國の軍情を偵察するの周到なると否とは、我進擊軍の利害に關するや頗る大なり、然れども此要地に一の日本人の忍んで偵察する者なきは、嗚呼士氣全く腐る矣、尙此時余及外同志一人奮て止まるに決し、苦心の末漸く天津を脱出するを得たるも、敵の探察は始終余等の四圍を窺ひ、事甚だ迫れり、而して三郎命未だ盡きず、此等の輩を捲き上げ、徐々進んで內地の偵察を遂げたり、而して外一人の同志は不幸にも敵の捕ふる所となり、慘刑に處せられ、終に斷頭場裡の露と消えたり、今日暫く其名を記せざるも、三郎豈一歩を彼に讓らんや、彼同志は實に國家の爲に死せり、彼は芳名を萬世に殘せり、而して其芳魂は、永く國祭の榮を享て、笑て日本の進擊を先導すべし。

人間幸に當世に生る、大功名を樹つる能はずんば、一死正に芳名を百世に殘すべきなり、三郎幸にも

皇祖威烈の擁護に依りて、未だ彼の捕ふる所とならず、去月廿六日天津を發し直隸各地を探査し上海を經て歸國復命するを得たり、草莽の微臣三郎が名は辱くも

烈士苦行達ニ天聽ニ、破格賜レ謁、萬死有ニ餘榮一、

辭令一

大元帥陛下の御聞に達せり、一家の面目一身の榮譽不過之候、御喜び被下度候、不日從軍の資格も相定候に付、其節は詳細に申送り候間、右樣御承知被下度候、而して小生は更に〇〇地方へ出張致す筈に御座候、然し今回は口にこそ容易なる樣に申居候得共、九死一生を得候事も無覺束御座候、併し非常なる危險を冒さゞれば、非常の功を奏することも難し、一死以て此目的を遂ぐる決心に御座候故、出發の際は大總督宮殿下に拜謁の儀内達有之候次第に付、三郎が生前死後共に最早思ひ置くこと更に無之候。(中略)幸にして三郎が命盡きず、凱旋の日は三郎が胸間には榮譽なる帝國勳章の輝々たる事を記憶せよ、然らざれば永く靖國神社に國祭の榮を享けん、倶に是れ男子終生の大面目、兄請ふ弟が爲めに祝せよ。

君廣島に在る凡そ二箇月、其間君の冒險的奇功は、畏れ多くも 大元帥陛下の叡聞に達し遂に破格を以て特に當時所用の支那服裝及物品を携帶し、拜謁の榮を辱うするに至れり、是れ實に君が萬死すと雖も、猶餘榮ありとする所、其辭令の寫左の如し。

明四日午前九時、貴下の支那服裝にて軍事探偵を爲せし事を奏聞する事と相成候に付、當時所用の物品一切携帶當本營に於て、着裝可致旨被達候條、此段及通知候也。

辭令二

郷ニ俸給ニ養ニ成士官候補生二人ニ

一死報レ國、年僅二十有六

明治廿七年十月三日　大本營陸軍副官部

鐘崎三郎殿

侍從職に於て御用有之候條、袴羽織にて至急當營に出頭可有之候也。

明治廿七年十月四日　大本營陸軍副官部

鐘崎三郎殿

斯くて君は前二通の辭令と、天賜の酒肴料茶菓及衣類等を郷里の姉婿に送附して訣別の意を表し、十月中旬第二軍司令官大山大將に從ひて渡滿せり、是より先。君通譯官となり、特に若干の手當を受るや、其手當を擧げて稻垣滿次郎氏に托し、士官候補生二人を養成せんことを乞ふ、稻垣其義氣に感じ、直に之を諾し斡旋の勞を執りしと云ふ。第二軍の進んで大同江に碇泊するや、水雷艇を派して漁人を捕へ、其衣服を剝取し、君をして之を着せしめ、暗夜水雷艇に搭じ花園口附近未詳の地に上陸し、夫より進んで碧流河方面より旅順敵情を探査せしむ、途中遂に敵兵の捕ふる所となり、別路を取りし山崎藤崎の二士と共に金州の獄に繫囚せられ、二士と同じ運命に遭遇し、鞭撻慘酷なる苦を受け遂に恨を飮んで、金州城外の露と消えぬ、時に年二十有六。

十三折レ節攻レ學

人推爲二長者一

三　藤崎秀傳

君名は秀字は實夫、雲岬と號す、大隅始良郡桃城の人、明治四年三月十八日を以て生る、父を廣志といふ母は米良氏君は其長子なり、明治十五年始めて鄕校に入りしも、桀驁不羈にして課業を事とせず、常に山海に獵漁し、往々晨に出で月を戴いて歸る、而して父君措て問はず、母君深く之れを憂ひ、屢々戒諭すれども聽かず、乃ち朝に天滿宮に詣り、夕に精矛廟に拜して、兒の改悛以て學に志ざし、他日偉器たらんことを祈る、年十三翻然悟る所あり、其より節を折り學を攻め、日夜孜々として懈たらず、母君欣然每宵自ら餠を作りて之れを與ふ。君之を食し睡魔を驅り、刻苦勉勵往々寢を廢し、燈火耿然として曉に徹することあり、偶々同鄕の有志郁文館を開設して、士風の振作を計る、君乃ち行て學ぶ、君人と爲り眞率豪宕、邊幅を飾らず、能く友を愛し衆を容る、事を謀り難に臨むや、誠心敢行す、館中爭論起る每に、君の調停を得て始めて安んず、是を以て人皆推して長者と爲し、大事を成すの偉材とせり。

幾くもなくして鹿兒島造士館に入る、君常に人に語て曰く、天下の快事豈海軍將校となり

得意可レ想

艦隊を率ゐて五大洋を横行し、以て神州の武威を輝かすより大なるものあらんやと、依つて海軍學校受驗の素を養はんと欲す、不幸二豎の侵す所となり、空しく病床に呻吟するもの二年、病稍癒ゆるに及び、熊本濟々黌に學ぶ、君時に年十有九歳なり、君の濟々黌に在るや、一日醫に就き、其體格を檢せしめ、其の軍人の資格なきを知り遂に志を改め良賈となり、國家富强の道を講ぜんと欲し、鄕を辭し長崎に出づ。

時に荒尾精氏、日清貿易研究所を上海に創設せんとし、來つて長崎にあり、官民間に遊說す、君其說を傾聽し、荒尾氏に見え告ぐるに素志を以てし、且つ深く前途を託す、荒尾氏も亦君の熱誠を喜び、直に之を諾す、玆に於て君歸鄕し双親の同意を請ふ、而して當時對淸の思想未だ僻陬の人を動かすに至らず、且つ從來屢々其志尙を變ぜしが故に、父君盛怒して之を聽許せず、次で荒尾氏の鹿兒島に到り對淸の演說をなすや、莊重の辯、熱誠の態、百二都城の人士を驚倒して、人心靡然として荒尾氏に向ふ、君乃ち荒尾氏に見え、詳に歸鄕後の窮狀を告げしに、氏大に同情を表し、學資の一半を補助することを約せられ、更に君をして兩親に謀らしむ、兩親遂に之を許容せり、此に於て二十三年五月召募に應じて、上京、入所の試驗を受けて無事合格するを得たり。

企圖遠大

日清啓レ釁

志士之境遇、使二人酸鼻一

是歳九月同窓と共に、上海に航し、二十六年六月業を卒へ歸朝す、君の歸朝するや知友に語つて曰く、予他日機に乘じて四百餘洲を跋渉し、城塞の嶮要、民物の豐否を察し、又古英雄の遺跡を弔ひ、以て國家有事の日を待たんと欲すと、意氣自から昂然たるものありしと、斯くて二十七年四月、上海商品陳列所に入る、君常に曰く、余曩きに半費生として研究所の科程を終るを得たるは、全く荒尾先生の力なり、禽獸尚且つ恩を知る、況んや人をやと、故に陳列所の事務に從ひ、萬一の報恩を期せしが、幾くもなくして同年七月東學黨の亂起り、延て日清の釁端を啓くに至る、君乃ち上海に在つて、竊かに清國の動靜を窺ひ、軍國の爲めに奔走する所あり、既にして藤島楠内二士清人の爲めに捕へられ、偵察頗る急なり、因つて大熊鵬向野堅一二士と共に長崎に歸る、時に君は父君の家郷にありて病に臥するあるも、奉公の念止む能はず、偶々同郷の士成田菜の郷里に歸るあるや、君書を家君に致たし、又成田に托するに己に代り父の病を看護せしむ、志士の境遇亦憐むに堪へたり。

既にして急電に接し大本營に到る、時に廿七年九月廿四日なり、大熊向野兩士と共に擧げられて陸軍通譯官と爲り、第一師團附を命ぜらる、參謀總長有栖川熾仁親王殿下、殊に君等を延見して謁を給ふ、三士夙に辮髮を蓄へ清語を善する者、乃ち十月十六日第二軍に從

三烈士殉レ節

新羅王食二脅肉一

年二十有三

ひ、廣島を發し、全軍大同江に碇泊す、二十四日晴夜に乘じ水雷艇に搭じ、竊に盛京省花園河口に上陸し、直ちに敵情探索の密旨を受け、淸人に扮し、道を分つて深く敵地に入らんとす、發するに臨み、大寺參謀長、懇に握手の禮を爲し、慨然として其壯行を送る、寔に風蕭々として易水寒く、壯士一たび去つて復た還らざるの槪あり。

此時に當り淸兵大に行路を戒嚴し、重賞を懸けて日本探偵の士を物色し、旅券を携へざる者は、悉く逮捕せしむ、此間に出入して能く奇功を樹んとす、君の任務も亦至難と謂ふべし、終に淸兵の捕ふる所となり、金州の獄に送らる、到れば則ち山崎羔三郎、鐘崎三郎の二士先づ在り、獄吏三士に問ふに我軍情を以てす、三士答へず、叱して曰く、我輩生命鴻毛に齊し、何んぞ呶々するを爲さん、早く吾頭を斬れと、拷問鞭韃頻りに至り、肉裂け骨碎くるも、復た一言を發せず、淸國の法、人を刑するとき囚人をして皇帝を拜せしむ、因て三士をして西南に向はしむ、三士肯せずして曰く日出の邦　聖天子の在るあり何んぞ虜主を拜せんやとて、東向堅坐して動かず、死に至る迄罵りて口に絕えず、時に年二十有三。

四　藤島武彦傳

藤島武彦傳

鹿兒島書生中之最少年

膽氣呑牛

孤劍入禹域

容貌如婦人膽氣似猛虎

君鹿兒島縣士族藤島良士の嫡子、鄉里造士館に學び、年十六に至り士官學校に入らんとて、上京し、同人社に入學す、君鹿兒島書生中の最少年なりしを以て、之れを輕侮するものあり、君之を知り一日同縣學生を伴ひて、日比谷練兵場に至り、器械體操を爲し高足駄を穿ち最高梁木の上を濶步し、半途に至り跳つて地上に飛下す、足駄爲めに兩折するに至るも、君直立毫も顏色を動かさず、學生等之れより、深く君の膽勇に服し、之れを推重すといふ。

同人社に在ること約一年。一朝大に感ずる所あり、支那に入りて爲す所あらんとし、明治十八年、年甫めて十七孤劍禹域に入り、先づ上海に航す、時に荒尾氏漢口にありて、志士を集むと聞き、途に揚子江を遡りて、之れに加はる、當時同所に集まるもの凡十數名、皆志を支那經營に抱き、大事を爲さんとする有志家にして、所謂豪傑の集合團なりき、然るに君は齡未だ弱冠ならず、容貌恰も婦人の如き美男子なりしが、其志想の堅固なると、膽氣の絕倫なるとは、同志間の畏敬重視する所なりき。

君血氣少壯、最も猛烈の事を好み、萬死の危地に出入して、更に意に介せず、或時(當時荒尾氏樂善堂の名を借り、漢口に書籍賣藥の販賣店を開設し、同志の士をして或は其書籍賣藥を携帶販賣して、各地を旅行調査せしめ、或は數箇所に支店を設け、漢口本店と連絡

膽氣感ニ賊魁一

與ニ拳銃一所謂置ニ赤心於腹中一者

往復せしめたり）君同志一名と共に、漢口より民船を雇ひ書籍を搭載し、漢水に由り甘粛蘭州府に至るの途中、一夜海賊の襲ふ所となり、頭目趙某兩三名の小賊を引率して、船内に入り、君に迫り貨物及金を出さしむ、君渡清日猶淺く、未だ支那語に熟せざりしを以て福建人と稱して、頭目と筆談を交ふ、曰く余公の狀貌を見るに、必ず一方の豪傑ならむ、何んぞ富豪を掠めずして、余が如き小賈を劫すや、余公の爲めに之を措むと、頭目は君が一見婦人の如き容貌を以て、僅かに二十歳前後の少年なるに拘はらず、平然何等恐怖の態なく從容として、筆談するに感じて、曰く、予數年海賊を業とし、多數の人士に會せしも、膽氣未だ子の如きを見ず、敬服の外なし、子の貨物は、一切之れを奪はざるべければ、請ふ記念として携帶品中の一を與へよと、君乃ち帶ぶる所の拳銃を出して與へしかば、頭目大に喜び謝して曰く、此江岸一帶予の配下數千あり、到る所に散在して旅客を俟てり、故に予は命を傳へて今後決して子の貨物を奪はしめじ、幸に意を安んじて前途に進まれよと、誓約して去る、同行せし同志某、嘗て人に語つて曰く、予當時氣縮み膽怖れて爲す所を知らざりし、想ふて此に至れば、冷汗背に洽く、實に慚愧に堪へずと、後賊魁趙某捕へられて襄陽の獄に繋がる、君之を聞くや、往日の義氣を思ひ、彼れを獄中より救はんとし、晝夜

宛然水滸傳中之人

乗行、彼地に到れば、前日既に斬に處せられ、獄門に梟せらる、君乃ち其首を奪うて馳せ走る、守兵追來り漢水の濱に迫る、君首を腰に結び、身を躍らして漢水に投じ。泳いで前岸に達せんとせしも、中途にして疲勞甚しく人事不省となり、波に從ひ浮沈し岸に觸れ蘇生し、漸く首を埋め、辛うじて漢口に歸來せしといふ。

年少豪傑

君嘗て河南に入り。八百屋となり、有志と交り、土情民俗を探る、其地一武辨あり、最勇悍にして、暴横良民を凌辱す、君之れに向つて爭鬪を挑み、捧を揮つて亂打し、以て其不逞を懲らす、爾後彼れ萎縮し敢て暴横を爲さず、土民君を德とし稱して年少豪傑と云ふ。

膽氣異常

君曾て江西省廬山附近を旅行す、日暮て道を失し、山中に入り、宿を求むれども得ず、忽ち火光を認め、其所に至れば、三人の山賊粥を炊くあり、君突然其側に至り、濕衣を乾かせしに、山賊等は、其容貌婦人に似たる美少年なるを以て大に怪しみ且驚き。茫然爲す所を知らず、君猿臂を延して、會釋もなく其炊ける粥を取りて食ひしが、軈て身體の溫まると共に、疲勞漸く生じ、遂に火傍に横臥し覺へず眠に就けり、然るに彼等山賊は、君が大金を所持せるを見て、相謀て睡眠に乘じ之を奪はんとす、君奮起し短刀を拔いて之を叱咤睥睨せしかば、彼等懼れて逃散じたり、大膽極まる君は、其儘更に眠に就けり、然るに一

時逃げ去りし山賊等は里閭に至り、軍人に告ぐるに山中一人の盗賊あるを以てし、軍人を導いて來りぬ、君奮起健闘の際懐中せし短刀、鞘を迸り君の右前額を傷け、其血流れて目に入り、遂に彼等の爲に捕へられ、知縣衙門に送られ獄に投ぜらる、審問を受くるに及び君飽くまで日本人たるを秘し、琉球人にして福建に住し、支那各地を旅行しつゝあるものと稱せり、而して官憲遂に君を山賊と認め、數日の後將に斬に處せんとす、偶々前の山賊一人捕へらる、其罪狀中君を山賊なりと誣ひ捕へしめしとの言ありしを以て、君の寃漸く解け、宥されて支那兵卒二名の護る所となりて、漢口に歸る、以て君が膽氣の異常なりしを見るべし。

君は其後續いて漢口にありて、支那の實情を研究しつゝありしが、荒尾氏同志の士と上海に日清貿易研究所を開きしも、資金に乏しく經營甚だ困難なるを見るや、君は其鄉家の資產家なるを以て資を得て實業を營み、以て荒尾氏の事業を助けんと欲し、歸朝して大坂に紙草製造所を興して、其經營に當る。

二十七年東學黨亂起り、延て日清間の紛議となり、大島旅團仁川に上陸し、清兵亦牙山に上陸して、兩軍對抗の勢を取るや、君は兩國徒に相對峙し、他列國をして漁夫の利を收

めしめんことを憂ひ、當路に上書し和戰の速決せざるべからざるを說き、一朝開戰するに於ては、自ら一身を致して國家に盡すべきの意を以てせり。

斯くて君は支那に渡りて、同志を糾合し、國家の爲めに大に盡す所あらんとし、長崎に至れば既に牙山の攻擊、豐島海戰の報ありて、最早日本船の、清國に航すべきものなし、

探二查敵情一、便二我軍一

よりて獨逸船に搭じて、上海に航し、同志を集めて、深く支那各地に入り、其國情を探查し、種々の方法により、調査の結果を其筋に報じ、次に我軍の作戰計畫に便益を與へたり其後朝鮮方面の作戰進行するに從ひ、君は先づ南清の情況を請查し、其より直隷を經て滿州に出で、鴨綠江方面に至り、將に滿州に侵入せんとする第一軍と會し、之れに南清直隷滿州の情況を告げ、其軍の案內者たらんとし、上海より船に搭じて、寧波に到らんとす、然るに船中同乘者の怪しむ所となり、君終に逃るべからざるを知り將に身を跳らして甬江に投せんとし、衆の捕ふる所となり、道臺衙門に送らる、而して君の風貌優秀擧止堂々たるを見て士官なりと認め、巡撫自から審問することゝなり、浙江省抗州に護送せられ、巡

猛虎破レ檻

撫審問する所となるや、日本軍に有利なる事柄のみを供述し、更に實狀を吐かず、よりて獄に投せられ、慘酷なる拷問に遭ふ、幾くもなくして破獄を企て、牢舍を破り了り、獄外

に出でしも、長日月の入牢と、過酷なる拷問の爲め身體の疲勞甚だしく、遂に人事不省に陷り、再び巡吏の捕ふる所となり、終に斬らる年二十有六、平和克復するや、淸國禮を備へ遺骸を送致す、因つて横濱に於て之れを茶毘し、遺骨を鄕里に送る、朝廷其功を賞して大尉相當の待遇を以て金三千圓を賜ふ。

年二十有六

君幼より倜儻にして大志あり、膽氣絶倫、屢々虎穴に入る故に一見無謀馮河の如しと雖とも、上智の資にして聰明英敏事理を見、機微を察する甚だ明瞭にして、文章を作るや曾つて稿を起さず、千言立どころに成るの槪あり。

上智之資

五　大熊鵬傳

大熊鵬傳

君幼名常太郎、後鵬と改む、筑後國浮羽郡船越村の人、家世農、父を萬次郎といひ、母は某氏、明治二十三年三月久留米中學明善校を卒業す。

時恰も荒尾氏の日淸貿易研究所を創立せんとするの際なりしかば、君其募に應じ、九月東京に來りて考試登第し、同窓生と共に上海に航し、研究所に入る、君資性卒直、寡言溫厚、忠愛人と爭はず、沈着剛毅を以て同學中に稱せらる、夏暇友人數名と共に、上海附

沈着剛毅

近を遍歷し十日許にして歸來す、炎熱の旅行笠を用ひず、日光に直射せられ面皮皆剝げ、紅紫の斑點となり、其狀宛がら古香爐の綠青を生ぜしに似たり、同窓綽名して香爐面といふ。

香爐面

君研究所を卒へ瀛華廣懋館に入り、實習を爲すこと一年。二十七年七月日清干戈を交ゆるに當り、北京天津の公使領事を始め、居留日本人悉く歸來し、上海其他各港領事居留民も亦悉く退去し、清國事情を日本に報知せしむるに由なし、是に於て君慨然一身を擲ち國家に盡さんことを誓ひ、二三の同志と共に支那人に扮し、上海に潛み、九死を冒し敵勢を探り。之を本國に報告し。大本營の參考に供す。

冒二九死一探二敵情一

十月大山大將第二軍を引率して將に出征せんとするに際し、君は上海より歸りて同軍附通譯官となる、同軍は廣島を發船し、朝鮮大同江漁隱洞に至り。先づ海軍をして花園河口なる上陸地點を偵察せしめ、水雷艇に命じ、山東角近海の。漁舟を捕へ其漁父を司令部の乘船長門丸に伴ひ來り、着する所の支那服を剝ぎ、君及猪田正吉二氏をして之を纏ひ、支那人に變裝して。夜に乘じ花園河口附近に上陸し。大孤山方面の敵情を偵察せしむ。其後杳として其消息を聞くなし。

變レ服偵二察敵情一

當時支那の名將たる提督宋慶は、平壤作戰應援の爲め、旅順金州の駐軍歩兵七千砲七十門の大軍を率ゐて、義州に到着したるも、平壤の敗報を聞き、退いて九連城を拒守し、遂に第一軍の破る所となり、砲の全部を遺棄し、殘餘の歩兵を率ゐて大孤山方面に退却し、偶第二軍花園河口上陸の報を聞き、大孤山を燒拂ひて、岫巖街道より旅順に退軍せる際にして、恰かも大熊猪田兩士が彼の方面に到着すべき頃なりしを以て、宋軍の爲めに捕虜若しくは殺戮されしならんかとは、是れ當時第二軍司令部に於て推測せし所たりき。

其後宋軍の田庄臺方面に在るや、我使用せる支那人間諜の報告によるに、宋慶の傍ら二人の日本少年ありて、宋將軍頗る之れを愛護寵遇せりと。其れ或は大熊猪田二士に非ざるなきか、果して然らば如何にもして二士を救はんものと、我軍に於ても大に苦心したり、當時我軍滿洲方面の守備は、奥師團に一任し、他師團は悉く大連灣に引上げ、一齊に直隷平野に進軍するの作戰計畫なりしを以て、營口方面の軍は大連に向ひ、一時退却をなさゞる可からず、其際若し敵軍の尾撃を蒙らば、甚だ不利なるを以て、一先づ敵軍を猛烈に擊破して之を恐怖せしめ、敵と隔離して退軍するの必要ありしかば、我軍の田庄臺を攻擊するや、餘力を殘さず、桂師團は遼河左岸に展開し、全砲兵を加へて牽制に任じ、山路師團と

年二十有五

野津師團とは、遼河氷上を渡つて左右より田庄臺を迂廻して、滿洲作戰中最も猛烈なる攻擊を試み、殊に四面より火攻を加へしを以て、宋軍は殆んど全滅し、宋慶纔かに身を以て免かれしが如き事情なるを以て、二士若し敵軍中に在りたりとするも、此時清軍と同じく命を殞しゝなるべく、其平和克復後遂に歸來する能はざりしもの、其れ或は之れが爲めならんか、朝廷其功を賞し大尉の待遇を以て、特に遺族に金三千圓を賜ひ、之れを追賞す年二十有五。

猪田正吉傳

六 猪田正吉傳

君筑後國久留米市櫛原町の人、舊久留米藩士猪田重秀の長子にして、明治三年二月十六日を以て久留米に生る、五歲にして父を喪ひ、一姉二弟と共に母氏の鞠育する所となる、苦學勉勵十一歲にして小學の業を畢ふ、而して家政日に困しむ、外舅佐竹某資を投じて久留米中學に入らしむ、業を卒へ高等小學の教員となり、後ち大阪に赴き志を得ざること數年、會々荒尾氏日清貿易研究所を上海に興し、學徒を東京に募る、君之れを聞き蹶然起つて東上し、考試に合格して校費生と爲り、一行に從ひ上海に赴き、苦學力行三年にして業を

自進當ニ雜局ニ

三士變シ服、闇夜上レ岸、

年二十有六

卒へ、日清商品陳列所に在り、幾くもなくして征清の役起る、君商品陳列所經營の傍ら、清兵の動靜、軍艦の出入等を查察し之れを本國に報導するの任に當る、八月末召されて歸朝し、大本營に詣り、陸軍通譯官を拜命し、九月第二軍に從ひ出征し、朝鮮を經て遼東に至り、花園河口より上陸す、時に二十七年十月なり。

是より先き軍議先づ沿岸の敵情を探らんと欲し、而して其人を難んず、君山崎大熊等の諸士と共に自から進んで其任に當たらんことを請ふ、是に於て水雷艇を潜放して漁舟を拿捕し、漁父の衣服を剝取し、三士をして清人に扮裝し、一夜闇に乘じて岸に上らしむ、此時に當り我軍未だ一兵をも上陸せしめず、敵軍の警防最も嚴密にして所在の津浦、周ねく戍兵を配置し、行旅を查察し、又懸くるに重賞を以てして我諜者を捕縛せしむ、且つ豫め研究所各員の照影を頒布し、以て物色に便ならしむ、三士既に上陸し、君乃ち獨り大孤山方面に向ひ敵地の情形を偵視し、遂に終る所を知らず、時に年二十有六。

君資性溫厚、志氣堅忍、其研究所にあるや、課餘を以て雜役に服し、事ある每に輙ち自から難を擇び、易きを人に讓る、而して學業優秀、操行端正、大に師友の愛重して望を屬する所たり、我軍既に遼東一帶の地を占領し、山崎鐘崎藤崎三士の遺骸を得て之れを葬りし

も、獨り君と大熊二士の屍を得ず、蓋し二士共に宋軍の捕ふる所となり、遂に命を授けしものに非ざるか、二十八年官命により四月十五日を以て死節の日と爲す、二十九年七月弔祭の資二十五圓及び遺族扶助料一百圓を母氏に賜はり、三十三年十二月更らに三千圓を賜ひ、其功烈を追賞せらる。君死して餘榮ありと謂ふべし。

七 楠内友次郎傳

君舊嚴原藩學官青木文造の第二子、母は橋本氏、慶應元年二月十六日、肥前國三養基郡田代街頭鳥栖に生る、父の學官たるや、移りて藩學東明館の官舍に居る、館は演武場に接す、故に君幼時の嬉戲、亦文武の二道を出でず、常に城廓又は武者繪を寫し、群兒を部署して、野外に健鬪するを以て唯一の娯樂とす、明治二年東明館に學び、傍ら家訓を受く、同四年父君暴に病歿し、家兄亦大患に罹る、君時に七歲、能く母を省し、兄を慰むること、殆んど成人の如し、同年天本氏を冒す、瓜生野町日新小學校に入學し。常に學績衆を拔き、行爲卓拔嶄然として頭角を露はし、屢々縣廳の賞する所となる、卒業の後、師に就き經史を修め書法を學ぶ

講レ文學レ劍

省二母君一

後ち故ありて養家を去る、時に家兄教職を鹿兒島に奉ず、因つて君を任地に召し、勤學せしむること四年、十七年四月、兄の友鹿兒島士楠元直矢、同籍楠內氏の附籍ありて、承繼者なきに苦しみ、君を請ふて其家を嗣がしむ、是れ君の楠內を稱する所以なり、而して尙ほ家兄の寓に在りて、英漢數の諸科を各專門家に就き硏鑽す、其志身を軍籍に寄するに在り、是を以て勤學の餘暇、大に筋骨を鍛錬するに努め、庭內に柱木を樹て、每曉棒を揮ひて之れを撃ち、戞々の音、四隣の夢を破る。

十八年二月士官學校生徒を募集す、君踴躍之れに應ず、視力足らざるの故を以て、合格せず、遂に軍人たる志望を擲たざるを得ざるに至り。笈を負ふて東上し、東京專門學校に入り、邦語法律科を學び、後ち英語法律科に轉ず。

二十三年日清貿易硏究所の設立さるゝや、會々家兄東京にあり、君乃ち硏究所に入らんことを請ふ、家兄之れを賛し、荒尾所長に就き其意を致す、所長既に募集人員の滿つるを告げしも、其熱望を察し、特に入學試驗を行ひ、特待生に加へらる、君母君を鹿兒島に省し、長崎に出で、一行と共に上海に航して硏究所に入り、二十六年業を卒へ鹿兒島に歸省し、九州の海產物を調査し、更に中國及び大阪の海產物等を調査し、且つ各地の商況を視察し

東洋風雲方急

日清交ニ干戈一

隱レ身探ニ敵情一

犠ニ牲一身一、欲レ報ニ國家一、

翌廿七年一月再び上海に航す。

同年初夏の候、偶々横濱貿易新聞社長某、清國内地視察の途次上海を過ぐるに會ひ、其懇請により、相携て深く内地に入り、其狀態を觀察し、數月を經て上海に還り、赤痢病に罹る。當時書を家兄に寄せて曰く、方今東洋の風雲轉た急なり、請ふ若干の資を得て病を療し、時機の到來を待たんと、家兄之れを見て、金を送り、且つ誡めて曰く、身體壯健ならざれば、識見僻み易し、故に一たび歸朝して、保養を加へ、更に謀る所あれと、既にして日清干戈を交ゆ、君更に家兄及び姉弟に書を送て曰く、今日の事國家安危の岐るゝ所、皇運の隆んなる、素より疑ふ可からずと雖も、苟も臣民たるもの偸安の隻影だもあらんか、異日の事復た知る可からず、弟幸に聊か敵情に通ずる所あれば、一時身を隱し、以て國家の爲めに謀る所あらんと欲す、然れども輕擧は動もすれば忠孝の大義を誤る虞あれば、愼重を旨とし、一時音問を缺くべし、宜しく容赦ある可し。故に此書に返翰なからんことを請ふと。斯くて君は一身を犠牲にして、國家に報ゆるあらんと欲し、支那人に扮し上海に潛伏して、南清の情形を本國に報告し、大本營の參考に資せり、己にして福原林平と謀り共に與に遼陽奉天の地境に於ける敵情偵察の任務を帶び、同年八月十日福原林平と共に

湖北商賈と稱し、支那客棧に投じ、翌十一日營口行の便船に搭じて、目的地に赴かんとす然るに發船俄かに延期して、十四日となり、客棧の滯在數日に渉りたるが爲め、其擧動の怪むべきを認められ、終に清國偵吏の捕縛する所となる、而して其地佛租界に屬するを以て、佛國領事に轉致され、爾來同館內にありしも、九月初旬に至り遂に同領事より上海道臺衙門に送致せられ、道臺の鞠審に附せられしが、清官君の態度風采の優秀なるを見て、必ず日本の將校ならんと思惟し、特に糺問して我軍情を知得せんと欲し、依て南京に轉送され、總督自ら之れを糺問するに至り、久しく慘酷なる拷問を受け、遂に慘刑の下に殺害せらる、時に年三十。

時年三十

八　福原林平傳

福原林平傳

君諱は林平洞巖と號す、美作國東北條郡加茂村の人、父は喜作、母は花谷氏、君は其長子なり幼にして學を好み馬場不知也翁に就て學ぶ、後西薇山翁の監する備の閑谷黌に入り、勉學大に勉め、嶄然として群生に拔んず、人となり豪邁卓絕滿身總て是れ膽、常に曰く丈夫寧ろ玉碎すべし、何ぞ能く瓦全をなさんやと、慷慨國を憂へ意氣軒昂、熱涙の下るを覺へず、

可ニ玉碎一、不レ可ニ瓦全一

海晏老師贈二利劍一爲レ贐

徹山翁送別之辭

匹夫不レ可レ奪レ志

惟義之從

夙に東洋の大勢に着眼し、雄心勃々抑へんと欲して抑ゆる能はざるものあり。
荒尾氏の、日清貿易研究所を上海に創立するや、君躍然清國に航し、研究所に入り、明治二十三年夏業を卒へ歸朝、親を省し、幾くもなく高見武夫と共に再遊の途に上らんとす、發するに臨み、國清禪寺海晏老師に謁す、老師二士の壯圖を知るもの、其行李中一劍を藏むるを見、之を奪ふて曰く、是れ鈍力なり、予は二子の行を餞する更らに利劍を以てす可し、此の劍や陸に犀角を斬り、水に蛟龍を斬り、光芒閃々紫電の迸るが如しと、言終つて水晶の珠數兩連を與ふ、君等欣然として曰く、無比の日本刀なりと、即ち之れを首に桂けて去る、徹山翁亦其尋常汗漫の遊に非ざるを知り、諸生を講堂に集め、其行を送つて曰く、今や福原生高見生と遠く清國に遊ばんとす、福原生父母堂に在り、祖父九十に垂んとせり、余其行を賛せん乎、祖父父母の在るを奈何せん、其行を留めん乎、三軍の帥奪ふ可きも君等の志凛乎として奪ふ可からず、且君等此行恰かも虎穴に入るが如し、前途茫々際涯あるなく、之を如何すべき、然りと雖も天下の志士は天下の志士を知る、荒尾氏は天下の志士なり、君等其知る所と爲る、語に曰く士は己を知る者の爲めに死すと、死生命あり、窮達天に在り、君等の進退は惟だ義の在る所に從ふ、父母膝下の孝養は、兄弟の在るあり、往け矣

獻身遊國

年二十有七

壯なる哉、此行と。

二士之を聽て感慨歔欷禁ずる能はず、滿堂の生徒皆涙を揮はざるなし。

斯くて同年十一月上海に至り、商品陳列所に入る、越へて廿七年日清戰端を啓くや。君は一身を獻じて邦家の爲めに盡さんと欲し、支那人に扮裝し、上海に潜伏して、南淸の敵情を探査し之を本國に報告して、大本營の參考に資せり、又楠內友次郎と共に、遼陽奉天の地境に於ける敵情探索の重任を帶び、八月十日竊かに陳列所を出で、湖北の商人と詐稱し支那客棧に投宿し、翌十一日營口行の便船に搭じて目的地に赴かんとしたるも、不幸にして出帆俄かに十四日に延期せられ、滯在數日、其擧動を疑はれ終に支那偵吏の捕縛する所となり、道臺衙門に引致せられんとせしも、其地域の佛租界に屬するの故を以て、佛國領事に轉致せられ、爾後同館內に在りしも、遂に九月初旬に至り、同領事より上海道臺衙門に送られ鐵窓の下に呻吟し、道臺の鞠審に附せられ後南京に護送せられ、總督の糺問する所となり、遂に斬らる時に年二十有七。

縛に就くの前數日、上海より家大人に送りし書翰は、實に其絕筆にして、讀み去り讀み來りて至誠惻々人を動かすものあり。

生爲ニ忠義之人ニ
死爲ニ忠義之鬼ニ
威靈千歲
守護ニ神
州ニ七生
人間、古
今同轍、

前略

天皇陛下には、伊勢の御大廟大神宮様に御告げ被遊候て支那を御征伐なさるゝとの事を承り感涙の至りであります。

御陛下には恐れ多くも、此度はたとひ日本神州の焦土となるとも、朕が子孫必ず振起するものあるより、外國の手をからず征伐するとの御事、かゝる場合でありますす、誠に涙の外はありません。日本志士たるもの、大君のため神州のため、刻苦しまするは、此時と存じます。

それで林平事は、物の數ならぬ身なれども、深く覺悟しましたから、今日よりは、暫くの間は手紙は出しません。支那の內地に入り込みます、大日本が支那を服する樣に致します、此の際一度歸朝仕り度も、豫て御國の爲めに一身をさゝげ居る我身に御坐候得ば、此度となりて、一片の赤き眞心は、とめてとまりません、及ぶ丈けの力を盡します。御許被下度候、萬一若しやの事御座候とも、御心配被下まじく候、萬一の事御座候得ば、假令兒が身體たをれても、兒が眞心は神となり、佛となり、天となり、地となり、日となり、月となり、山となり、川となり、風となり、雨となり神州大日本國を守護します、

孝子之至情

威靈は千歳の下にあります、かく迄の覺悟をして居ますから、御安心被成下候。乍去左樣な運氣のない兒ではありません、神佛の守りある事必ず無事で御目にかゝる事であります。

豪膽英邁の御父上樣、何卒此覺悟は、御喜び御許被下度候、黑木村御氏神樣、木山神社、八幡神社へ宜敷御傳へ被成下度候、申上度事は山々なるも、少しせわしく、もはや思ふ心も此外にありません、白山石神御歸り、御聞取可被下候。

上海より

皇明治廿七年八月八日　兒　林　平

父上樣膝下

烈士之神靈、現二道臺衙門一

平和克復後參謀本部より、委員を南京に派して、楠内福原兩士に關する、始末を取調べしめたるに其復命報告書中に曰く、兩士刑死後數日、其神靈道臺衙門に現出す、官民大に之を恐怖し、更に棺衣を莊麗にして改葬す、此事當時南京に於て、人口に膾炙せり云々。其遺屍を日本に還送するに方り、日本の忠臣義士なりとて、數多の儀仗兵を附し、特に招商局輪船に搭載して、上海に送り、日本の官憲に交附せり、後横濱に於て茶毘に附するの

際之を檢するに、果して其棺衣共に莊麗善美を盡せりと、嗚呼眞心神となり、威靈千歲神州を守護するもの、是に於て乎驗あり矣。

九　石川伍一傳

石川伍一傳

慨二東洋之時事一、決二渡清之志一、

調査麗然爲レ册、

君秋田縣陸中國鹿角郡毛馬内町の人、舊南部藩士石川儀平の長子なり、慶應元年を以て生る、九歲にして學に就き、後笈を負ふて東都に遊び、攻玉社に入り、刻苦數年、年十八九にして東洋の時事日に非なるを慨し、其頽勢を挽回せんことを期し、遂に渡清の志を決す。斯くて明治十七年長崎を經て上海に航し、曾根海軍大尉の寓に居りしが、後荒尾氏漢口に樂善堂を興すに至るや、君行いて其事業を助く、已にして松田滿雄と共に四川に入り、全蜀を一周し、苗蠻の巢窟に入り、幾度か危難を冒し山川の形勢と、人情風俗を視察し、其調査する所、麗然册を爲す、附する處の繪圖、亦精密を極むといふ、廿四年歸朝更に天津に至り、大に畫策するあらんとし、山東直隸盛京の地を精査し、時の海軍駐在武官を輔けて、邦家の爲め盡す所尠なからず、左の書翰は君が天津領事館に在りて、日清戰爭前清國財政調査に關し、北京公使館の中島書記官(雄)に寄せたるもの、而して中島書記官も亦欵

軻不遇、有爲の器を抱いて、今や不歸の客となる、故に特に掲げて兩士を追懷す。

一昨夜御願申せし、清國財政一件に付、意志未だ盡さゞる所ありと存じ、之を筆にして貴下に呈す、亦公務の妨をなすを避け、口舌の及ばざる所を補するのみ。

清國財政現況調査のことは、先年積氏當地駐在の節、多少材料を蒐集し、其後井上海軍少佐、(少將敏夫)之を繼續し、現に調査に從事せるも、戶部事務の浩繁にして、款項の混淆錯雜なるが爲めと、成書少く、尤も戶部則例あれども、以て現況を査知する能はざるにより、容易に下筆の緒に就かず、爾來京報摺の財政上に關するものを抄錄すること一年、之により歲出入の概況を知らんと欲せしも、各省の奏報齊一ならず、此にあつて彼になきものあり、或は款項の接續せざる等のことありて、充分の結果を見る能はず、且つ蒐集の材料未だ以て書を編するに足らず、是に於て清國に在勤する、尤も久しく、其內外の文物制度に精通し、注意周密材料に豐富なる貴下の輔助を仰がざるを得ざるに至れり。

財政編纂之主意

抑も該財政編纂の主意は、南北洋海軍經費、海防費、東北邊防費、鎭邊軍餉、甘肅新餉等、兵費軍器製造及新事業に係る、經費の財源は、何等の款項より支出し、其財源の果して

金力之所レ在、强弱之分處、

非ニ敢私一レ之、以欲レ報ニ國家一

確實にして渇絀の患なきや、否や、又其經費を如何に分配支出するやを査定し、兵力の消長伸縮に關する根源を知らんと欲するにあり、而して有事の日に當り、政府の採用すべき財源は、何れの邊にあるべき歟、現今如何に財政を理しつゝあるかを査明し、猶ほ文明の利器を輸入するに餘あるや否やを知らんと欲せり。是に於て財政全般に亘る調査の必要を感じ、近世財政上の沿革より、戰爭河決等の事變に際し、是迄如何なる救濟策を採用したりしやを略叙し、現今實收の地租と其調定額との差如何、海關厘金鹽茶稅等の歲入より、諸俸給並に曩に列擧せし兵費新事業費、旗綠營の兵費等、一切の歲出を調査し、其支出入款項の混淆錯雜せる形況と、挪移流用財政の困難なる情狀を事實上より證せんと欲するに在り。

現今の時勢、金力の在る所、即ち强弱の分るゝ所にして、中乾以て外强を示すべからず一國財政の張弛を見て、其盛衰消長の機を豫卜すべきなり、而して我邦未だ隣邦淸國の財政に係る、成書あるを見ず、此れ僕が大に憾とする所にして、命を受け不肖を顧みず進んで其任に當りし所以なり、幸に不棄の榮を蒙るを得ば、乞ふ秘篋を開き、其財政に關するものを示されんことを、僕敢て私に世に公にして自から功とせんには非ず。少佐

偵察敵情資我軍

年二十有九

烈士臨死、神色自若、受三丸而始斃、

の命を受け之を編するに止まり、寸毫も自から爲めにする所なし、若し不棄の榮を賜はば少佐の感謝措く能はざる所にして、後日其恵を報ずるの材料なからんや、公使館報告の差支なきもの丶供覽は、已に小村書記官(壽太郎伯)にも稟明したれば、是亦た拜覽の榮を與へられんことを乞ふ。

明治二十六年十一月廿二日　石川伍一

中島大八

次で日清の役起るに及び、君は鐘崎三郎と共に天津に在り、諸方面に於ける敵情を偵察して本國に密報し、我軍の行動に資する所頗る大なり、而して君等の行動、早くも彼國官憲の探知する所となり、止むなく小村公使等と共に歸國せんとしたるも、敵情を偵察するの最も須要なるを想ひ、一身を犠牲にし後に留まるに決し、暗夜に乘じて船を出づ、時に敵の探偵終始君等の四周に纒ひ、危險身邊に迫りて、九死に一生を得ること難し、斯くて鐘崎君は、幸に虎口を脱し得たれども、君は遂に城內支那客棧に於て、敵兵の拿捕する所となり天津城外に銃殺せらる、時に年二十有九、君臨刑の時神色自若、從容として刑場に立ち、三彈を受けて始めて斃る、一彈は鼻下を貫通し、一彈は胸腹を穿てりといふ、諸同士之を

聞き、哀悼せざるもの無し、越へて二年其遺骸を收め、東京音羽護國寺に改葬す、君人となり謹厚純朴、氣宇洒然、和氣人を薫す。生平篤學勤勉、細事と雖ども苟くもせず、交友に敦くして、名利に淡なり、常に曰く予他の嗜好なし、只杯中の物を愛す、君亦夙に英學の素あり、文筆に長じ。支那時文は、特に其得意とする所、又識見に富み、同志中の俊才なりしと云ふ。諸士沒して後一年、明治廿八年荒尾東方齋根津山洲と謀り、九烈士の碑を若王子畔東方齋閑居の山莊下に建て、其父の名を併刻して、家門の光榮と共に。殉國の遺烈を不朽に傳へらる、碑文は山洲の撰ぶ所にして、書は東方齋の筆に係るといふ。

碑　正　面

征清殉難九烈士

山崎羔三郎
石川伍一
藤島武彦
楠内友次郎
福原林平
鐘崎三郎
藤崎秀
大熊鵬
猪田正吉

君表紹之碑

嗚呼王事至レ茲、請纓レ身而俟ニ後世一矣。嗟乎此諸君起時之言、思レ之憶レ之、夢寐豈能得レ

忘焉哉、

碑裏面

嗚呼我夙知レ之此九氏者、眞是東洋之志士也、嘗有レ見ニ國家之前途一、孤劍獨行、奮跋ニ涉禹域ニ者數年、具嘗ニ艱難一、而詳通ニ其國情一焉、征清役、慨然自起、有ニ大所レ決、或體ニ大本營之意一、或啣ニ上將之命一、變レ服深入ニ敵地一、不幸覺遂斃ニ於苦節一矣、其始從レ事也、都十有五員、而其能生還者、實不レ過ニ六人一而已、若其經營苦心之情狀、與ニ進止慘膽之光景一、則世已膾ニ炙人口一、故今省焉、茲特掲ニ嚴君諸氏之芳名一、共傳ニ于不朽一云、

山崎氏者、筑前國福岡簀子町之人、白水淸八君三子、年三十一、死ニ遼東金州一、

石川氏者、陸中國鹿角郡毛馬内町之人、石川儀平君長子、年二十九、死ニ直隸天津一、

藤島氏者、薩摩國鹿兒島池上町之人、藤島良士君長子、年二十六、死ニ浙江杭州一、

楠内氏者、肥前國三養基郡田代村之人、青木文造君次子、年三十、死ニ江蘇南京一、

福原氏者、美作國北條郡加茂村之人、福原喜作君長子、年二十七、死ニ江蘇南京一、

鐘崎氏者、筑後國三潴郡青木村之人、鐘崎寬吾君次子、年二十六、死ニ遼東金州一、

藤崎氏者、大隅國始良郡加治村之人、藤崎廣志君長子、年二十四、死ニ遼東金州一、

讀書通ニ大義一、不レ屑ニ々章句一

大熊氏者、筑後國浮羽郡船越村之人。大熊萬次郎君三子、年二十四、死ニ盛京之地一、
猪田氏者、筑後國久留米櫛原町之人、猪田重秀君長子、年二十六、死ニ盛京之地一、

三烈士

浦敬一、廣岡安太、高見武夫、之れを三烈士といふ。三士偉勳の見るべき無しと雖も其志常に興亞に存し、寤寐國家を忘れず、之をして九烈士の地に處らしめば、豈に寸歩を讓らんや。余其志を齎して歿するを悼み、三烈士傳を著し、九烈士と併せて、十二烈士と稱す。

一　浦敬一傳

君初め敬三郎又省三と稱し、後敬一と改め、子和と號す、父は坂本琢。舊平戸藩士たり。母は田村氏君萬延元年四月四日を以て生る。同藩士浦貞元養ふて嗣子と爲す。幼にして學を好み藩學寮に入り、後楠本端山翁に學び、刻苦勉勵、經史子集を讀み、略ゝ大義に通じ、復た章句に屑々たらず、常に人に語つて曰く、平戸先輩、多く因循姑息、大有爲の機に乘

慨先輩之覆轍
師表自任
慨時勢起四方之志
自任清國之經略

じ挺然時局の難に任ずる者なしと、心竊かに先輩の覆轍を避けて、大に爲すあらんことを期す、明治七年君年甫めて十五、舊藩主松浦公君を擢んでゝ世子(厚伯)の侍伴たらしむ、君の淺草松浦邸に在るや、常に世子の師表を以て自ら任じ、侃々諤々、敢て忌憚する所なかりしと云ふ、在京三年、期滿ちて歸鄕す、時に君年十八、家道豐かならず、十二年二月職を警邏に奉ぜしも、固とより其志に非らず、十三年冬之を辭し、十四年四月上京して同人社に入り、七月更に專修學校に轉ず、翌春養父大患の報に接し、即時歸鄕し、晝夜看護盡さゞる所なし、既にして養父病大に怠るに及び、君をして田村成三の長女と婚儀を擧げしむ、次で君再び上京、十六年七月を以て業を卒ふ、君大に喜び謂て曰く、聊か以て父母を養ふに足ると、而して君は遂に學ぶ處を以て父母を養ふ能はず、時勢に慨し、奮然四方の志を起し、交を志士に結び、以て國家の安危に任せんとす、是に於て九州に、中國に、浪華に往來し、內外新報社に入り、一莖の筆を以て、天下を警覺せん事を期す、是より先き君の熊本に遊ぶや、佐々友房熊谷直亮等諸士と交り、殊に宗方小太郎と相善し、時事を痛論し、奮つて清國の經略に任せんと欲し、心竊かに決する所あるものゝ如し。

二十年十月君の將に清國に向ひ、帝都を發せんとするや、人あり數百金を與へ、君の志を

孝子之至情

稱二甫敬一一

對露策

孤劍向二朔北一

助く、君之を受けて西下し、長崎に至り其金を鎭西日報社に托して曰く、僕の生還必すべからず、而して家に老親の門に倚るあり、僕去るの後、家計窮迫の狀あらば、幸に之を以て奉養の一端に充てよと、飄然として西航す、時に荒尾氏、同憂の志士と、共に漢口に在るに會し、其群に入り清語を學び辮髮を蓄へ、名を甫敬一と稱して、宛然一個の支那人と化す、當時恰かも露國が西比利亞鐵道敷設の計畫を發表して、列國の注意を喚起せし際なるを以て、對露策は同志間懊惱の問題となり、北邊踏査の急を感ず、是に於て君衆望に依り此重任に膺ることゝなり、二十一年五月、孤劍朔北に向ふ、當時の消息は同志の一人たる山崎羔三郎の家兄に寄せたる書翰略ぼ之を盡くすものあり、左に錄す。

前略浦氏は、昨年五月末、北御門河原二氏と漢口を發し、西北伊犁に向ひ進みたり、此地は露西亞の國境に接し、現今已に露國より北國境まで鐵道を敷設せり、先年一度露西亞の侵略を蒙りしも、其後淸露談判の上回復することを得たる土地にて、境土守護の要區に御座候、抑も吾黨事を中土に歘起し、內亂爭離の日に當りて、隣邦鴟梟、其の隙に乘じ、其慾心を逞ふせんと欲するは、必然の事にして、火を觀るよりも明かならん、然らば今日に際し、豫め之が備を爲すに非ずんば、啻に鷸蚌漁獲の災に陷るのみならず、

毒を百世に流し、東洋の大勢を誤ると必せり、而して中原逐鹿天下紛々擾々の時、手を分ち勢を殺ぎて、其防禦をなすは、到底爲す能はざるなり、故に今日より之に處する策を講せずんばあらず、浦氏此行蓋し其意に出でたるものにして、外は專ら露國侵入の衝を障碍し、内は傍ら機に臨み變に應じ、中原獲鹿の業を助けんと欲するに在り、然りと雖も八千里外の異域に入り、此事を爲し、此務に服するは、實に誠に至難なり、而して彼等奮つて之が衝區に當る、其精神の壯烈爽雄なるは、嘉賞するに堪たり、又浦等三人出發するに先ち、藤島大屋の兩氏は、甘肅省蘭州府に至り、書肆を開かんと欲し、千圓餘の書籍を携へ發程せり、(此處にて後より來る浦氏等と會合し、右書籍より得たる價金を浦氏等に渡し、其費用となし、藤島氏は浦氏等の一行に加はり、大屋氏は其報告の爲め漢口に歸る約束なりき)。

斯くて浦氏等は、炎天を冐し、千辛萬苦蘭州府に達し、大屋氏等の書店を百方搜索するも見出すと能はず、依て一小屋を借り、之に詑居し、兩氏の來るを待つと三十日餘、(三人共言語未だ通せず、故に旅行劵を所持せり、)而して猶來らず、因て謂へらく途中必ず變あり恐らく賊手に仆れしならんと、相議して浦氏一人漢口に歸り、事業費を整へ再來らん

而して北地寒冷將に堆雪に及ばんとす、以て北行すべからず、正に明年(即ち本年)を期し、再び此府に相會せん、其期に至るまで離散せんと、北御門氏は北京に向ひ、河原氏は之く所を知らず、斯くて十月二十九日夜、浦氏は漢口樂善堂に來着、北御門氏も北京に着したる由、頃日聞及べり、又大屋藤島二氏は、浦氏等に先だち出發せしが、途中旅費缺乏之進退谷まり暫らく襄陽に止まり開廛、漸く費用の資を得て、九月某日蘭州府へ出發せしも、此れ浦氏等蘭州府退散の二三日後なり、兩氏夫より蘭州府にあり、本月(即一月)四日の夕相共に漢口に歸れり、此等の齟齬より、終に昨年は西北邊に手を伸ぶること能はず、空しく經過せり、浦氏大抵舊正月蘭州府に向ふ豫定なり云々。

發するに臨み、君の賦せし留別の長古は、眞情流露、愴々悽々、人をして卒讀に勝へざらしむるものあり、而して宗方小太郎の送別の詩、亦慷慨淋漓丈夫兒の眞情を看るべく、共に余の愛誦措かざる所、今荒尾氏の別歌と幷せて之を左に掲ぐ。

臨レ發ニ漢江一賦　　浦　敬　一

不レ能ミ拖レ紳垂レ帶顯ニ令名一。又不レ能ミ安レ分亭レ樂答ニ慈情一。疎狂漫懷蓬桑志。落魄江湖何所レ成。堂上年高髮如レ雪。依々只恃兒長成。一痕紅淚縫レ裳夜。萬般愁思作レ書晨。兒也茲

去千萬里。漂跡恰似水上萍。茫々天涯雁書絶、不知何時侍双親。仰訴天兮天不應。伏訴地兮地無聲。彷徨回ㇾ首何所ㇾ見。陰雲漠々漢々濱。

送二浦敬一之一伊犂一　　宗方小太郎

世事如二亂絲一。紛々不ㇾ可ㇾ解。舉世鬪二奇巧一。國事日沈淪。强鄰竊朶ㇾ頤。危機如二累卵一。誰能挺身定二鴻基一。獨有三我黨當二此責一。君鞭二白馬一走二天涯一。我掉二扁舟一入二渤海一。時勢變遷難二豫知一。把ㇾ臂交ㇾ膝豈復期。想君西出二邊關一時。天山草木盡秋聲。萬里平沙連ㇾ天處。無限客路多二辛酸一。胸間靜蓄十萬師。腰下斜掛斬ㇾ蛇劍。事成應ㇾ幷二吞北陲一。不ㇾ成沙漠埋二其骨一。大道與ㇾ君相追隨。鬼神此時泣二壯烈一。君不ㇾ見大厦一傾難二復支一。良匠祗能防二未然一。哲人獨悲天下悲。靜者只知微妙機。送ㇾ行遠到二漢水涓一。長天無ㇾ雲月光冷。

浦君の伊犂に行くを送りて　　荒尾精

もろともに、あすの命も、はからねば、
けふを限りの別れとやせん。

斯くて雄心勃々孤劍遠く邊外に向へる君は、山崎羔三郎の書翰に記せる如く、故ありて蘭州府より引返したるが、更に準備を整へ、翌二十二年三月二十五日を以て、藤島武彦を伴

踪跡杳然、時年三十、

至誠貫天日、凜然起懦夫、

ひ漢口を發し、七月西安を經て、九日蘭州に着し、更に進んで嘉谷關を越へんとし、藤島は故ありて中途より歸來せしも、君は蹶然獨行萬里絕漠を度りて、伊犂に向ひ、踪跡杳然竟に行く所を知らず、時に年僅に三十。

是より先、君の再擧に關し、當時在北京の宗方小太郎は不同意を唱へ、寧ろ語學に熟達せる石川伍一を適任とし、君を漢口本部に留めんことを主張せしも、君の決心と本部の決議動かすべからず、終に決行するに至りしと云ふ、君一書を宗方に寄せ、其志を言ふ、至誠天日を貫き、懦夫をして起たしむるの概あり。

一書謹呈仕候、大兄の御事業も、逐日御都合好く相運び居候趣き、欣喜之至奉存候、偖過日大兄より荒尾氏に寄られたる書信を拜見するに、新疆行の事に付きて、二子異論を唱へ、竟に見合せる事に相成たる旨承知仕り、意外千萬の儀に御座候、二子は去年漢口を發する時、共に死生を同うし、險を冒して力の及ぶ限を盡さんことを誓ひながら、今日に至りて、何とか異論を申出し、遂に違約するの擧動を呈するに至りたるは、眞に驚呀に堪へざる儀と存候、原來彼二子は、初め敬一の引薦する所に係り、而して忽ち此の如き擧動に相成たる次第、諸同志に對して、面目なき儀に御座候、凡そ有志者が大事を

以レ信交レ之、以レ義接レ之、以二大事一爲二目的一、

任ずるの時に當りて、互に小事を挾んで相調和せず抔とは、決して有間敷事にして、或は平時は少しく調和せざる事あるにせよ、本氣に事を成さんとする時に當ては、同心協力、小事を以て大事を敗らざるや、固よりの事に可有之。今三人同行中、互に意見を持ちて相爭ふが如きことあるも、要するに其胸中少しく不淡泊なる所あるより生じ來りしものにして、殆んど兒童の喧嘩と一般、之を彼是喋々甲是乙非するは笑ふべき事に御座候、故に三人の者が、時に兒童の喧嘩をなすも、齒牙に掛くるに足らず、苟も信を以て交はり義を以て接し、共に大事を成すことを目的として之に從事せば、何人と雖も、共に事を成すべからざるはなしと、敬一平生自信致居、目前の有樣は一笑に付し居候處、不幸にして中途に於て計畫行違ひ、互に相睽離するに至り、區々の心跡未だ明なるに至らずして、遂に諸君をして此三人は相調和せず、共に事を成すべからずと云はしむるに至る、誠に以て耻入たる儀に御座候、畢竟敬一才識淺劣の致す所にして、自ら責むるのみに御座候、蓋し此度異論の起る所以は、第一資金の少なき事、第二之に任ずる其人に非ざることの、二點に在るものゝ如し、今度の擧たる資金少なく、言語通ぜず、且つ經驗なき人々に候間、固より失敗なきを期し難く、完全なる成算は充分に立ち不申候。然

れども敬一等之を顧みずして險を冒して進まんとするは、已を得ざるものありて存すればなり、何ぞや、今日新疆の事たるや、外部に於ては最も緊要なる所にして、其形勢未だ詳かならず、故に速かに其形勢を探り、其地に於て同志者配布の方法を定むるは、極めて急務に有之、然るに今日我黨の事業、未だ擴張せず、資金充分ならず、內部の本支店さへ辛うじて維持し居る位にして、迚も充分なる資金は新疆に差向け難きは必然に有之、然れば資本の充分なるを待ちて、新疆の事に着手せんか、必ず機を誤り事に後るゝの憂可有之、故に先づ少許の資金を以て同地に入込み、其形勢を探り、其配布の法を定め其基礎を建つる見込を立て、而して後年內部より資金の送來を待ちて、充分なる事業に取掛り候存意に有之候、又た之に任ずるに其人に非ずとの說は、敬一等自ら之を知らざるに非ず、才識淺薄固より以て如此の大任に當るに足らざるべしと雖、然し御承知の通り今や同志の徒、極めて少なく、急に適當なる人物を求めんとするも得べからず、故に敬一等力を揣らず德を量らず、自ら進で第一の先鋒に當るものに有之、而して後年に至りて、追々同地に適する人物の來るを待ち、愈々充分なる事業の成るを期し可申候存意に有之候、今度二子は既に異見ありて同行せざることに相成候得共、我行に於ては、決し

て差支無之故、二子の來ることは、毫も願ひ不申、二月中藤島と共に漢口を出發して、最初諸同志に約したることを實行可致候、事成れば、我黨に歸せん、成らずんば獨身其責に當らん而已、惟鞠躬盡力斃而後已、我同志に對する義を盡すのみに有之候條、御心配なき樣奉願候、二子は如何なる方向を執るや、當堂に於ても資金を送る都合付き不申候に付き、當分の間自分にて如何とか計畫致し居候樣致度存候、右者御起居伺旁此段申上候、匆々不一。

浦　敬　一再拜

宗　方　大　兄

二白二子蘭州を立つ時、荷物は如何せしや、中には緊要のものも有之候間、若し預け置き居候得者、今度取出可申に付、此段二子へ御尋問の上御披被下度候也。

一篇經綸談

君が出發の前日、家大人に寄せられたる長文の信書は、君が一篇の經綸談にして、君の眞骨髓を顯はせるもの、其長篇の故を以て之を省く能はず、掲げて以て君の面目を紙上に躍然たらしめんとす。

寄家大

一書謹呈仕候、維時暖氣相催候處、伏惟倍々御機嫌能、可被遊御動履、恐悦之至に奉存

人ニ書抱負遠大、經綸雄偉至誠泣レ神、有ニ此一篇、君可ニ以傳ハ

歐洲諸國對清政略

英國

候次に不肖儀無恙消光罷在候間、乍憚被安尊慮奉冀候、偖不肖儀去年五月清國北邊地方巡視の見込にて、漢口を發し、甘粛省蘭州府まで歷遊仕候處、急に用事出來、漢口に引返し今日まで漢口に寓居罷在候ひしが、時候も追々暖氣に相成候に付、前の見込を實行仕候積にて、明二十六日漢口を出發し、北向可仕候間、左樣御了知被下度奉冀候、不肖儀清國に渡航以來、實地に就て、清國々內の形勢及歐洲の淸國に着手する方略を熟察するに、實に驚くべき有樣に有之、先づ歐洲諸國の淸國に對する有樣を略述すれば。

英國は東洋政略に於ては、最も早くより着手する所にして、淸國の南海なる香港を奪領してより、着々歩を進め、各港に於ける利權を占むるのみならず、又た淸國の中央なる楊子江の權力をも占めんと欲し、近來四川省重慶府開港の條約を實施せんが爲め、漢口より重慶に通ずる汽船を作り、淸政府と談判し日ならずして汽船を通じ、開港することに相運可申、又た印度より延長せる鐵道は、追々緬甸を經て、淸國の四川雲南に連接することに計畫致居候得者、是亦た遠らずして成就可致候、蓋し英國の今日淸國に對する政略は、陽に淸政府を援助し交際を厚くし、以て露國を防ぎ、而して東洋に於ける權力を保持せんとするにあることは、十目の視る所に有之候。然れども若し油斷致し候得者

將來印度の覆轍を履むに至るや、素より測るべからざる儀に可有之候。

佛國

佛國は安南を征服せし後、未だ手を出さゞれども、其清國々境なる雲南に注目し居ること一日の事に無之候。

獨國

獨逸の東洋政略に手を着けたることは、近來に候得共、其規畫する所頗る巧なるを以て非常に進歩し來り、李鴻章の顧問にも、自國人を入れ、海軍の指揮官にも、總て自國人を入れ、種々の方便を用ひて清政府の信用を買ひ、而して財政軍略等の事にまで立入り、貿易上に於ても近來東洋に其勢力を大にするに至りたることは、著しき事實にして、比公のなす所、測るべからざる儀と被存候。右に擧げたるものは恐るべきは恐るべきことに候得共、直接に奪略の實を顯はすにあらず、先づ種々の方便を以て東洋に於てする權力を占め、而して將來の計をなすに過ぎず候得共、

露國

露國に至りては、滿腹の雄圖を展べんと欲するの方略、日に急に最も恐るべきものに有之候、露國の目的は御承知被遊候通り、其圖南の大志を抱くや、一朝一夕の儀に無之、一地を奪うては一地を略し、漸々蠶食して、中央亞細亞は大半其有に歸し、一方に於ては阿富汗斯坦を越へて、印度を衝かんとし、一方に於ては清國の新疆蒙古滿洲及朝鮮と

境を接し、之を略して遂に清國の本部に討ち入るの計畫は、日に歩を進め西比利亞鐵道は四五年を出でずして、黑龍江を經て浦潮斯德に連接可致、中央亞細亞鐵道は、數年ならず清國の新疆に達すべし、斯くすれば露國に於て、大兵を繰り出すに、數日を費さずして清國々境に討入ること容易にして、淸朝の兵備にては、迚も防禦は行き不申候、而して又清國の內地に於て緊要なる地には、商人に扮して武官を入込ましめ、甘肅より新疆に至るの要路及北京より黑龍江に至るの要路には、處として露商若くは露教宣敎師を配付せざるはなし、(英佛の宣敎師も到る處に在り)此等は皆軍略上の偵察に從事するものに有之候、又漢口福州其他一箇所に於て、大なる茶製造所を設け、之を擔任するものは、佐官以下の武官にして、陽には北淸地方の利權を占め、陰には他日雄圖を展ぶるの方略をなし居候、其雄圖の盛にして、其準備の着々步を進め居るには、實に寒心之至に有之候、歐洲の清國に對して手を着くる有樣は、概略如此勢に御坐候處、

顧みて清國の形勢を看れば、實に紀綱解弛、內治腐敗國勢最早萎靡不振の域に陷り居候有樣にて、漢の賈誼が火を積薪の下に置き其上に寢し火未だ燃るに及ばずして因て之を安と謂ふ、方今の勢何を以て之に異ならんと、痛哭流涕長大息致したるは、實に清國今

日の形勢を謂ふべきものと被存候、然るに清國の内治は、如斯萎靡するにも拘はらず、外觀に關する國防等に至りては、日々強盛に赴き候有樣有之、因て其內實を知らざるときは、日々進歩の實を顯はし來る樣相考候者も有之候得共、決して然らざる儀にて、其外觀に見はるゝ者は其實の進歩には無之候、蓋し外部を張りて內部に力を用ひざるものは、則ち今日清國々是の在る所にして、其國是の玆に一定せし所以を迹ぶれば、往年長髮賊回々教徒捻匪等相繼で大亂を起し、十八省中其蹂躪する所となり、此際政府は更に英佛と隙を開き、一戰して太沽破れ、再戰して北京危く、帝は熱河に逃れ、漸く城下の盟をなして其局を結了するに至れり、而して國內の叛亂は曾、左、李、湖等諸功臣の力に因りて平定し、小康を得たれども、外國との交渉は之より日に紛難に赴き、實に安心すべからざる事と相成申候、此時に當て國內瘡痍未だ癒えず、外國との關係は日に急なり一定の國是を定めて之を處せざるべからざる場合に臨めり、然るに國內は瘡痍未だ癒えざるも、不平の徒は旣に根を絕ちたれば、亦非常なる叛亂を企つる憂なし。故に內國は姑らく唯平穩に之を鎮撫すれば、內より天下を覆へさるゝの虞なかるべし、特に恐るべきものは外國に在り、須らく大に力を外事に專らにし、以て外患を防ぐべしとは、當時

清國々是

朝議の在りし所にして、嘗て曾國藩の將に死せんとするとき、李鴻章左宗棠等に遺言して、今日内顧の患は已に絶たり、最も憂ふべきは外患にあり、故に内治は徐々に之を區處して可なりとして、專ら力を外防に盡し、其患を防ぐべしと謂れたりしは、即ち清國の國是を確言せしものにして原來一に此針路に因り、今日に至るまで固執して變せざる儀に有之候、是を以て海岸防禦等は頗る堅固に相成、海軍も近來に至りては殆んど東洋を雄視する勢を有し。其他之に付て施設する所往々觀るべきもの有之候、又國防を擴張するには之に要する資なかるべからず、故に各所に機器製造所を設け、招商局の滊船を盛にし、鑛山を開き電線を架し、今又官立銀行を起さんとする等總て國防を急にするより來るものに有之、外觀の進步は國是のある所にして、力を專らにする所に係れば。追々相運び居候得共、内國實力上の進步は決して夢にだも見ざる有樣に御座候。

内部之眞相

今其内部の眞相に立入り概略を述ぶれば、數百年の積弊を承け、上下腐敗紀綱解弛の極に達し、此儘にては扁鵲ありと雖も、救ふ能はざる域に相成居候、蓋し清朝政府は元と滿洲より起り、漢土を統一したるものなれば、漢土を制御するにも、一種の政略あり、其政略を約言すれば即ち外國人にして並吞せし國を治むる術に有之候、法制律令の如き

多くは前代に依りて、更に微密を加へ居候得共、所謂固有の政略なるものは、其間を貫き一事一物として此分子を含まざるものなく、脅迫となり籠絡となり、牽制となり、嚴酷なる上下の分別となり、而して其弊たるや腐敗となり拘滯となり猜疑となり隔絕となり、宗祖立法の意も今日に至りて實に進步を妨げ發達を害し萎靡不振の原因となり居るもの枚擧に遑あらず候、此の事は立法上政治上より來る弊害にして、今之を事實に徵し陳述せんとすれば、頗る長きに涉り候、故に姑らく之を置き、

腐敗之最甚者

其最も腐敗の有樣たる一例を陳述し、內部の有樣を推考相成候便に供すべく候、最も甚だしき腐敗の有樣とは、即ち官吏私を爲すの弊に候、此弊たるや上は大臣より下は地方の小吏に至るまで、天下到處之れなきはなく、其風習固結して釋くべからず、偶〻其間に立ち淸廉の官吏あるも、却て不首尾となり、遂に其職を全うする能はざる有樣なる故、

賄賂公行

上官は之を下官に求め下官は之を人民に貪り、賄賂公行するのみならず、國庫金竊取者橫行すと云ふも誣言に非らず候、其私する金額多き一例を擧ぐれば、湖北の總督の如き年俸二萬兩許に候處、其實際の收入高は年々三十萬兩に上り、知府知縣の如き年俸千兩に候處、收入高は年々四五萬兩に上り候由、是等は皆下官及人民の賄賂と官金の私しと

官吏所レ私、三倍ニ歳入ニ

に因るものに有之、（公然官金を私用はせざれども種々の名義にて收入す）又各衙門内に居る書役、即ち書吏と稱する小吏の如きは、給料一月間一二兩に過ぎず候得共、書吏の株を他人に讓り渡すには、五六百兩乃至千兩の報酬を以てする由に有之、其平生私に收入する金員の多額なるを推知すべき儀に有之候、國家の實力を消耗する官吏の私するより大なるはなく、淸朝政府財政の困難は畢竟此の如き弊、其大原因となるものにして、政府に於て年々歳入額は大抵一億萬兩許に候處、官吏の其中間に於て私に種々の名目を附し、人民より取立つる金額は極めて多く、或る確實なる想像を以てすれば、殆んど政府收入の三倍に上るべしとの事に候、人民の財源を涸渴せしむるものは官吏に在り、政府の國計を困耗せしむるも官吏にあり、而して官吏獨り不正の富を得ること丶相成候ては、國家何を以て相立ち可申哉之のみならず政府に於て鋭意兵備の擴張を計るにも拘はらず、官吏に於ては其金員を私せんが爲め、定額の兵員を減じて、多くは半數計となし、一營五百人の定制なるを三百人に減少して、其餘を偸收するもの各省到處然る有樣にて、現に武昌城の兵員の如きも此通りに有之候、又鑛山機器局其他種々の事業を政府に於て創立するも、官吏に於て不正の所業多きがため、充分盛大ならしむるを得ず、又裁判の如き賄賂多きものは勝ち、

少なきものは負く、故に一訴訟あれば賄賂の入費頗る多く、正印官にして已に然り、小吏に至りては其威權を用ひ、苛酷誅成實に言ふに忍びざるものあり、人民の之を畏るゝこと虎の如く、訴訟あるも可成之を官に出さずして、郷里の紳士に仲裁を請ふもの多き由に有之　右に擧げたるものは其概略にして、事々物々皆然らざるはなし、外國人の我等より見れば實に驚き入る儀なれども、元來數百年の積習に浸潤し居るものなれば、上下共に恬として怪まざるは、亦想像外に有之候。

譬喩切實

夫れ國家紀綱の解弛する上下の腐敗する如此有樣に有之候得者、假令外部に力を用ひて一時强盛なるが如き觀をなすとも、譬へば大木の既に老朽し將に倒れんとするものを、四方より棒を以て之を支持するが如きものにして、一時綠葉繁茂するが如く見ゆるも、其中心既に蠹す、久しきを持するの理無之、一朝疾風の起るに逢ひ候得者、迚も之に抗することは出來申す間敷候、右に述べたるが如く國是及政治の點より觀察すれば、清國の進步は容易に觀るを得べからず、其命脈も長からざる樣に考候得共、若し大豪傑あり之を維持振興することに力を盡すべきものとすれば、稍望を屬すべき儀に有之、因て其

人物

人物と稱せらるゝ人を觀察するに、著名なるものは李鴻章、吳大徵、劉銘傳、曾國荃、曾紀

斗筲之輩不レ足レ算

禍機一發

日清關係

澤、彭玉麟、張之洞、楊昌湄の徒にして、其內李と吳とは爲すことあるの才なきに非れども、追々老朽致候得ば、生前に志を展ぶることは難かるべし、其餘の人々も或は老朽し或は器小にして、迚も大經綸の才を展して此國勢を一大改革することは、六箇敷かるべしと被存候、又其下に位するものを見るに無能の滿人に非れば、則ち文科出身の八股文より練上げたる人物にして、大有爲の才器を抱くものを得ることは覺束なかるべしと存候。

清國々勢此の如く、又大改革をなし振興するの望なしとすれば、到底歐洲諸國の駸々乎として雄圖を逞うし來る勢を支ゆることは期すべからず、數十年を出ずして禍機一發形勢上に一大變動を來すに至るや、鏡に懸けて見るが如く、實に危急存亡の秋と被存候。

清國は我邦と脣齒輔車の地勢をなすのみならず亞細亞の中原に位し、之を保てば亞細亞に覇たるに足り、之を失へば亞細亞なきに至り可申、故に我邦に於て進で歐洲と威を爭はんとするにも、此の地勢を連合するにあらざれば、出來不申、又退て歐洲の進取を防がんとするにも、此地勢を利用するにあらざれば。出來不申、若し一朝歐洲をして清國の命を制せしめんか、我邦は形格し勢禁まり、進むことも出來ず、退くことも出來ず。遂に共に滅亡に至るは必然の運にして、清國なければ則ち我邦なきと同樣に有之、され

日清同憂

ば今日清國の憂は實に我邦の憂、手足の疾にあらずして腹心の疾に可有之候。今の清國に對する計策を論ずる者、或は云ふ之と交誼を厚うして共に東洋の大勢を挽回すべしと、或は云ふ之と一戰して我が威武を輝すべしと、若し夫れ席上に於て之を論ずれば可なり、然れども實際手を下さんと欲せば、兩方共に容易に行ふべき事にあらず、何故かと申すに、彼れ臺灣朝鮮の事件以來、常に我に對して猜疑の念を挾むこと一朝一夕の事にあらず、且つ彼れ自ら大國中華を以て構へ、深く我を輕んじ、我亦彼の腐迂なるを侮り、双方意氣投合せざるや極めて甚だしく、我假令節を屈して交を求めんとするにせよ、彼れ却て己に奉承するものとなし、驕傲の念を生ずるのみに有之候、加之彼の國勢今日の如き有樣に候得者、之と交を厚うして共に東洋の振興に任ぜんことは、到底覺束なき儀と被存候、然れば則ち彼と一戰するを以て得策なるかと云ふに、彼れ國內は衰弊すと雖も、國力を擧げて海岸防禦に力を用ひ居れば、外部頗る堅固に、其軍艦の如きは充分我より勝れるものゝ如し、我之を擊破する萬全の勝算あるか、假令勝算ありとするも充分に善後の方策あるか、若し善後の方策なくして疎忽に爭端を啓くに至らば、禍結で釋けず、所謂鷸蚌の爭漁夫の利となるは必然の事と被存候、夫れ和するも戰ふも容

和戰共難

講ニ東洋大策一、以報ニ國家一、

具ニ遠大之見識一、以建ニ百年之大計一、

易に行はるべからずと致せば、今日の如く爲すことなきに放棄するより外致方なしとせんか、清國の勢は遂に歐洲の爲めに制せられ、東洋の事亦恢復すべからざるに至り可申、是れ國家を憂ふるものゝ實に痛哭流涕長大息する所にして、奮進勇爲大計大略を定め、以て此の形勢を濟ひ國家の爲め東洋の爲め、長久の基を立てざるべからざる所以に御座候。抑も今日一局部に眼を配りて戰を論じ和を說くも、素より何の益もなきことにて、大に眼を東洋の全局面に注ぎ、以て其根本を立つるの規畫をなすにあらざれば、決して此の形勢を濟ふ能はず、亦長久の基を立つべからず、而して此の規畫をなすや素より速成の功を見んとするものゝなし得べきものにあらずして、大且遠なる見識を以て之に從事し幾十年の後。其功を收むることを期すべきものに有之候、然るに不肖儀見識謭劣なるのみならず、天下の形勢も如何に相成候哉。清國の狀態も果して見る處の通りなる哉、萬事未だ充分なる考慮相付不申候得者、所謂根本を立つる方策は何の處より手を下すべきやとの事に至りては容易に言はるべきものに無之、且又不肖の身を以て徒らに大志を抱き候は、眞に蟷臂を以て車に向ふが如く、疎狂にして淺墓なる考なりと御愍笑も可被遊候事と存候得共、東洋の形勢此の域に至り候上は、力を計り力を顧み候暇無之儀にて、

鞠躬盡力斃而後已

亞細亞人之職分

鞠躬盡力斃而後已み亞細亞人民たるもの丶職分を全うする而已に有之候、苟も自ら先きんじて亞細亞人民たるもの丶大義を天下に唱へ、亞細亞遠大の策を天下に明に致し候得者、我國小なりと雖も、清國衰へたりと雖も、必ず風を聞て起つもの可有之、假令不肖生前に志を達する能はざるも、不肖の志を繼ぎ之を達するもの有之候得者、滿足の至に有之候。

前年清國に渡航の際拜辭するに臨で、不肖の目的を申上奉るべき筈の處、却て彼是御心配を相掛け候樣にては誠に恐入候次第と存じ、故に商業熱心の旨を申上置き、他日折もあるとき平生の目的を申上候はんと存じ、今日まで差扣へ居候處、今より之を考ふれば誠に恐縮の至に堪へず、依て今日北向に臨で、不肖の目的、即ち前條に述べたる次第を尊聽に達し候、不肖の心事御憐察被下、不孝の罪御宥恕被下度奉願候、不肖が此志たるや一時の感激に因て出たる儀に無之、今日我邦內政治上の小波瀾に關係致し、政黨とか國會とか區々たる事に奔走仕り居候位にては、迚も國家の大勢を濟ふことは出來不申、

抱負遠大

國家の大勢を振張せんと欲せば、亞細亞の大局面より手を下さゞるべからずと、千考萬慮して斷然之に決したるものに有之候得者、其目的とする處遠且大なるを以て、不肖な

至誠悃々
思レ親之
情、湧ニ溢
楮面ニ讀
而至レ此、
誰不レ興ニ
孝志ニ、詩
曰孝子
不レ匱永
錫ニ爾類ニ、

がら敬一の身は敬一一己の身に非ずと自ら任じ居候、されば世の冒險者流が、輕忽に一壯事を成して、自ら快とするものと比することは、深く耻づる所に有之、故に一擧一動自ら重んじ、失誤なく、禍害なく、疾病なき樣、萬般注意可仕、昔日の故態は脱却仕候積に候間、此邊の所は省尊念候樣、偏に奉願候、不肖目的の存する所は、前述の通りに有之候間、是より清國内地及外藩地方を經歷仕候存慮に有之候處、今般幸に都合を得候に付、一人の親友を伴ひ、明日當地を出立して北邊地方を經歷し、邊外の有樣及露國交界の有樣等を篤と視察の上、明後年冬頃上海に回來候積に有之候得者、歸着次第早速我邦に歸省奉拜尊顏、萬端御敎示に接し可申候間、夫れ迄は御機嫌を奉伺候儀は一切出來不申此儀は御海容被下度奉願候、不肖儀少小より漫に四方の志を抱き、常に遠遊を事とし膝下に奉侍するを得ざりしのみならず、御一家困難之際、如何とか計畫相立て可奉安尊意筈の處、未だ其事をも盡すを得ず、且又志佐に於ても、非常の場合に相迫り居候處、是又未だ區處の道を得ず、別に兄弟の恃んで以て後を托するものも無之、而して身を挺して遠く異郷に入込候儀、誠に不孝の極、恐悚惶懼申上樣も無之次第にて、一念此に至る毎に、血涙橫流剛腹も寸裁せんとする儀に候得共、不幸にも今日の時勢に遭遇仕り、

死生有レ命志士不レ忘レ在ニ溝壑一

托ニ後事於ニ親友一何等之周到

知レ義知レ恥志士之本領

未だ兩全の道を盡すを得ざる事に有之、不肖の微衷を御照憐被下、不孝の罪御宥恕被下度偏に奉願候、明後年即ち今年より三年の後は、北地を一巡して上海に出で、早速歸省可奉拜　尊顏、其節を期して將來の事彼是　尊敎に接し、御家政上の計畫も、如何とか相立て幾分か御安心之道を相計り候存慮に御座候間、今日より其時の來るを相樂み居り候、然れども死生禍福は天に在り、不肖既に一歩を踏出し內地に入候上は、如何なる厄難に遭遇するやは測るべからず、往時武道の盛なりし時武士たるものは、一たび門を出づる時は何れの時死するやも知るべからずと、覺悟せし如きの覺悟なからざるべからざる儀に有之故に、如斯事なしとするも萬々一此の如き事に逢遭せば、實に終天の憾に候得共、志士の常分にて致方無之儀と覺悟罷在候、就ては若し萬々一此の如き事に遭遇仕候節は、後事は如何とか世話致し吳れ候樣、平素不肖の親友なる荒尾精氏に依託罷在、同氏に於ても義氣深重此事を承諾相成居候間、決して信を失はざる儀と存じ、之を恃みて稍々安心罷在候、勿論同氏に於ても今日より御家政上の補助等をなすと云ふ事は、決して出來不申、假令出來るものとするも、義に於て此の如き事を受くべきものにあらず候得共、萬々一不肖に於て四五年間も存沒詳かならず、後事を處分するものなきの時に

至りては必ず、平生約束の信義は、失ひ不申、御耻辱に相成らざる程の事は、如何とか御世話可申上事と奉存候、荒尾氏本邦へ歸省の時は、御知せ申上候樣との事に候ひしも今度は匆々の歸國にて迚も御面會は出來不申候儀に付、御報不申上候、再び來清の上、此年の秋頃、又再び本國へ歸省相成候筈に有之、其節は同氏は商業の事に關し、各地巡廻の見込に候間、長崎にも滯在し、其中同氏或は同氏の書生平戶に來り拜訪相成かも知れず、多くは拜訪相成積りの樣話され居候、荒尾氏は大に商業を擴張する見込にて、將來充分此に關する大なる見込有之、有爲の人物に有之候、同氏の事業は當時商業を擴張するに有之、不肖は之と趣きを異にしたる事業に候得者、前文に論じたる亞細亞恢復論は不肖一人の考へにて、同氏等の事には關係せざる儀に有之候條、左樣思召被下度候、又樂善堂に居りては、務めて商業熱心の體を裝ひ、領事は勿論同堂內に居り日夜起居を共にするものと雖も、不肖の心事を知るもの少なく、又今度の旅行に付ても、其何の地に到るやは存じ不申、且つ不肖既に頭を辮髮とし支那服を着し居、言語も可なり出來候に付、今度內地に入込み候節は、日本人の資格を打棄て、支那民人の資格にて、各地巡遊仕候儀に有之候、故に領事館に於ても不肖の蹤跡は知り不申候、是れ決して物好きにて

安二親心一是孝道之第一義、

如此仕候儀には無之、此の如き樣子ならざれば充分各地を巡り、事情の觀察は出來不申候故に有之候、就ては不肖の目的と行爲を尋る人有之候節は、矢張商業專一の旨御答置被下、且又北邊地方巡廻の事も御明かし被下間敷奉願候、又三年間は樂善堂とも音信を絕ち候間、荒尾に御問合せ相成候ても今何れの地に在り何事をなし居るや、其蹤跡は一切相分り不申候間、左樣御了知被下度奉願候、併し前文にも繰り返し申上候通り、不肖今日の志に於ては、輕擧疎忽の擧動は毫も不仕候積に候のみならず、支那內地巡遊者は許多有之候得共、一人として異變ありしもの無之、何も掛念なることは無之候間、此儀は深く御安心被下度奉願候、偖御家事に付ては別に何も申上奉るべき事無之只深く願ひ深く禱り奉り候儀は、常々御大事に御珍重被遊、滋養等は決して缺かせられず、運動を適度にせられ、而して若し御不快あらせられ候節は、少しの事にても怠りなく御服藥あらせられ、陪々御壯康にあらせられ度き一事に御座候、御母樣に於ては不肖の遠行に付きて嘸々御心細く思召され候はんと、痛念の至に堪へず、別段書を呈せず候間、可然御安心被遊樣御仰せ上られ度謹而奉願候、又田村祖母樣志々岐谷姉樣にも、別段書狀を認め不申候に付、おときを御遣はし被下、少々內地見物仕度に付、漢口を出發せし旨申述候

樣おときに仰付られ被下度、又おときにも、別に書面を認めず候間可然仰せ聞けられ度奉願候、時下暖氣には相成候得共、寒氣朝夕猶ほ消せず、御大事に御保養奉禱候、書は意を盡さず、筆を擱して眷々之至に堪へず候、　恐惶謹言。

明治二十二年三月二十五日

於清國漢口　不肖男　敬　一頓首再拜

家　大　人膝下

廣岡安太傳

時年二十有二

二　廣岡安太傳

君肥後熊本の人、幼にして藩儒生駒氏の門に學び、稍長じて四方の志を抱き、鬱勃たる雄心、雌伏するに堪へず、明治十九年清國に航し、上海城內馮公館に寓し、支那語を修め、居ること二年、去つて北清各省を跋渉し、山河の險夷風物の粗密を究め、漢口に出で樂善堂志士の群に入りて、其事業を助く、既にして高橋謙等と巴蜀の山中に入り、一時重慶支部に在りしが、二十二年四月孤劍重慶を發して、深く貴州の蠻界に進み、大に爲す所あらんとして、蹤跡杳として聞くなく、遂に消息を絶つに至る、發する時年二十有二。

君人と爲り一目を眇し、謹嚴にして談笑苟くもせず、熱誠事に當り、百折屈せず。實に得易からざる人材なりしと云ふ。

浦廣岡二士の末路は、常に同志諸士の追慨措く能はざる所にして、宗方小太郎兩士と交り最も深く最も能く兩士を知る、因つて左に其の撰ぶ所、在上海招魂碑文を載す。

亡友招魂碑

浦君敬一、平戸人、明治二十二年三月念五日、單身發二漢口一、萬里度二絶漠一、深入二新疆之地一、廣岡君安太、熊本人、明治二十二年四月某日、由二重慶一赴二貴州一、各欲レ有レ所レ爲、二君去後十二餘年于茲一、蹤跡杳然、料已非二斯世之人一矣、

我輩與二二君一、同二志于當年一、追慨不レ能レ措、與二同志一相謀、建レ碑以垂二不朽一、

方今時局日艱、東亞百年之計、有レ待二于俊傑之士一者多矣、二君當時之苦心、早已知レ有二今日一歟、嗚呼所謂先二天下之憂一而憂者、於二二君一見レ之矣、我輩已悲二二君之亡一、又不三敢不レ勉レ終二其志一也、

明治三十三年二月

友人　宗方小太郎撰

三　高見武夫傳

高見武夫傳

從西薇山學經史

氣骨稜々既露頭角學哲學

就井上圓了學哲學

參釋宗演學禪

君備前岡山の人、高見由信の第二子、母は阿部氏、明治元年四月廿八日を以て同市新道に生る、幼にして浦上氏に養はれしも、故ありて家に歸る、君少壯にして岡山原泉學舍に學ぶ。學舍は池田學校の後を承け、西薇山翁の監督する所、君蒼髮癯顏の小丈夫にして、氣骨稜々多く人を許さず、磈磊卓落の氣、自から眉宇の間に表はる。

薇山翁の閑谷山黌を再興するや、原泉學舍に在りし者移り學ぶ者多く、君も亦之に從ふ、君平生寡言深默、手に卷を釋かず、夕陽斜めに東嶺の雲を射て、晩鴉啞啞塒に歸るの時、君必ず林叢の下に散歩し、丘壑の間に逍遙し、高歌朗吟す、其聲琅々懸泉の音と相應じて妙調高遠なるものあり、同窓の士以て奇となさゞるなし、二十四年晩秋家を辭して、東都に遊び、井上圓了に就て哲學を研鑽し、勵精刻苦、大に會得する所ありしが、猶ほ以て足れりとせず、更に鎌倉圓覺寺に到り、釋宗演禪師に參し、坐禪觀法に力む、幾くもなくして、大悟徹底する所あり、宗演君の殊に見性の功あるを見て、微笑居士の號を授く、蓋し拈華微笑の意なり、圓覺寺は鎌倉五山の一にして、禪師は夙に緇流巨擘の名あり、來つて參禪

するもの最も多く、博識の士の暑を鎌倉に避けて三伏の夏を坐禪三昧に送らんとするものあれば、居士公案を提出して之を試む、皆な其の奥妙高遠なるに驚き、禪師を問はずして去る者十の八九なりしと云ふ。

會東方齋、航清國

荒尾氏の商品陳列所を創設するや、日清兩國の間に來往して計畫する所あり、一日鎌倉圓覺寺に供嶽禪師を訪ふ、微笑居士に接して禪を談ず、氏乃ち居士の才を奇と爲し、胸襟を披きて東方の形勢を論じ、志の相投合する所、居士を誘ふて清國に赴かんことを勸む、居士固より東洋經略の念あり、禪窟に雌伏するもの、龍蛇の池中に蟄するに異ならず、喜んで之に從ひ、匆々行李を調へて、郷里に歸り、別を親戚故舊に告ぐ、其將に渡清の途に就んとするや知友に語つて曰く、風雲の機近く清國の末路に在り、一蓋の笠、一雙の履、支那四

抱壯圖

百餘州を跋渉せんとするもの、豈に唯だ觀光采風の爲めのみならんや、大に東方經略の壯圖有ればなりと、以て意氣の壯を見るべし、斯くて廿六年十一月上海に航し、居ること半歳、浙江の名勝を探り、遂に普陀山法雨寺に入りて參禪す、同寺の左師奇材を以て君を遇

入普陀山、待風雲之機

せりと云ふ、君の普陀山に入る固より單に坐禪三昧に耽けらんが爲めにあらずして、風雲の機の到るを待たんが爲めなり。

悠然脫二襯衣一書二絕命詩一

旣にして、二十七年夏六月東學黨の亂は、延て釁端を日淸兩國の間に啓き、福原林平は、軍事探偵の故を以て捕へられて、先づ國難に殉せしが、捕吏は又海を距つる普陀の靈寺に入り、微笑居士を禪榻の上に縛せり、檻輿君を擁して波濤を凌ぎて、寧波府に入るや、米國領事、君の爲めに斡旋する所尠なからず、殊に法雨寺の老禪師の如きは、勉めて君の罪無きを證す、訊鞠數旬、獄吏も亦君の罪無きを謂つて之を宥むるあり、獄窓の裡に在りと雖も、悠々自適毫も苦患を覺えず、斯くの如きもの月餘、君は忽ち杭州府淸波門外の刑場に引致せらる、獄吏君を伴つて曰く、卿は敵國の軍事探偵に非らざると歷々證左あり、故を以て今將に放釋せられんとす、請ふ來れとて、鐵鎖を釋き檻車に載せ去る、君刑場に到る迄、其身の斬戮せらるゝことを察せざりし、檻車を出て從容席に着く、兵勇場を圍み、獄吏前に在り、君之れを訝かる、吏の壇に在るもの聲を激まして曰く、敵國の民、皆な捕へて斬に處す、罪の有無は問ふ所に非らざるなりと、君玆に於て悠然白襯衣を脫ぎ、其表に左の辭世の詩を書す。

此歲此時吾事止、　男兒不三復說二行藏一。

蓋天蓋地無端恨、　附與斷頭機上霜。

年二十有七

書し終るや、白刃一閃身首忽ち處を異にす、嗚呼有爲の志を齎して、禹域に赴き、未だ風雲に際會せずして空しく斷頭臺上の露と消ゆ、君の遺憾復た想ふべし、時に年二十有七。

詞藻

偶成　荒尾精

少小元期擴二斯文一。愧吾四十尚無レ聞。風塵閲盡春秋老、
道義講來夙夜勤。身後功名存二竹帛一、眼前窮達本浮雲。
得下將二隻手一回中天日上　不レ問當年第一勳。

日本全游後之作　同

薩海館灣眼底窮。蜻蜓何處復伸レ雄。試從二芙蓉峰頭一望、
巴蜀山川指顧中。

同　同

遠近のあやなす雲も日に增して
千里行く身の心せはしき

北筑途上　　浦　敬一

凍雲漠々雨雪急、豐山筑水望凄然。峻路羊腸行人絶、
其奈征馬嘶レ不レ前。嗟我漫抱蓬桑志、奔二走四方一已幾年。
身迹轗軻業難レ就、嘗盡世味酸與レ辛。世味酸辛不レ足レ顧、
平生所レ期自剛堅。君不レ見東漢豪英班定遠、壯圖投レ筆平二北邊一。
又不レ見本朝奇傑田長政、雄飛杖レ策入二南暹一。丈夫豈無二功名地一、
羞他垂レ頭乞二人憐一。俯仰感來意氣奮、叱咤驅レ馬擧二長鞭一。
朔風捲レ雪萬壑震、夙期單騎渡二幽燕一。

讀二家書一　　同

父曰我兒勤レ學不、母曰我兒無二疾憂一。書辭慇懃無二他意一、
對レ之再拜涙自流。小少漫抱四方志。遠遊辭レ家已幾歲。
世路間關業未レ就、跡狂常爲二慈親累一。一念至レ此如二斷腸一。
遙望二西天一獨悲傷。嗚呼何時侍二膝下一、怡々奉レ歡捧二壽觴一、

送㆔高原兄赴㆓伊岐㆒　　同

遙望㆓西北㆒是韓州。　茫渺雲山入㆓兩眸㆒。　武末城頭君試見、
當年遺跡尙存不。

錄㆓舊作㆒贈㆓高雅兄㆒　　同

西馳東奔未㆓嘗閒㆒。　復負㆓劍書㆒下㆓紫關㆒。　波激太玄千里海、
雲迷北筑萬重山。　雄圖看遍立㆑駒處、　義俠交來屠狗間。
馬革包㆑屍是常事、　丈夫何問大刀環。

失　題　　同

人生不㆑滿㆑百　在㆑世如㆓過客㆒。　何事營々爭㆓枯榮㆒、
不㆑讓骨朽復無㆑跡。　看來古今幾變更。　個裏誰是人中英。
奈勃列翁和聖頓、　遂使㆔豎子成㆓大名㆒。　抱㆑膝仰㆑天獨莞爾。
丈夫志業果何似。

某將㆘遊㆓歷九州及畿內之間㆒而至㆗于東京㆖賦㆓古體一篇㆒以贈呈、

同

大丈夫固當二雄飛一。　豈可三鬱々守二伏雌一。　壯圖蔽レ世膽如レ斗、
要レ制二天下有為機一。　遠遊萬里事二豪放一、　探遍東陲又西陲。
深山晝暗號二豹狼一、　蒼海波激躍二鯨鯢一。　想君單衣提二一劍一、
雙脚踴躍呼二快哉一。　箱崎祠頭猶存二伏敵字一、　使三人慨然懷二往時一。
筑後河邊定遺二勤王跡一、　水聲猶覺激二餘威一。　懷レ古慨レ今感多少、
要レ看大業復屬レ誰。　君不レ見西漢馬遷極二禹域一　千載令史耀二其奇一。
況是抱二大有為志一、　壯遊豈無レ發二其奇一。　墨田江邊泛二斗酒一、
刮目將待君再來、

偶感　　　石川伍一

人生已過レ半、　夙志無レ由レ伸。　欲レ逐中原鹿、　曾訪萬里秦。　功名何所レ就、
壯心空逡巡。　遷固不レ可レ起、　李杜亦難レ臻。　試登二燕山頂一、　冀野接二天垠一。
茫々天下事、　碌々六尺身。　日暮途尚遠、　倒行豈良臣。　天上懸二明月一、
燈下見二古人一。　買二得高粱酒一、　暫且遊二雲津一。

除夜　同

年華此夕盡、遊子古燕間。人世多㆓愁涙㆒、日月無㆓關山㆒。

偶感　同

二十六年與レ水流。辜負平生覆育周。萬里客窓夢不レ結、
長大彈レ鋏歸無レ由。燕山積雪藍關馬、河海堅氷陸上舟。
雙親膝下弟妹好、定知霜髮加㆓幾縷㆒。鴻雁歸去暫斷絕、
奇患難レ分不肯憂。寒燈挑盡影明滅、願將迎レ新洗㆓舊愁㆒。

送㆓宗方大亮君歸朝㆒　同

風卷㆓寒漪㆒雪壓レ離。柳枝折盡轉傷悲。憶君桑梓奉レ歡日、
却是天涯思㆓舊知㆒。

送㆓宗方大兄北游㆒　廣岡安太

立志不レ難果レ志難。同心萬里結㆓金蘭㆒。飄㆓零雨露㆒錬㆓筋骨㆒、
跋㆓涉河山㆒見㆓大觀㆒。君須㆔好風浮㆓海涯㆒、我吟㆓殘月㆒倚㆓欄杆㆒。

理財自壯忠臣膽、呑炭人誇義士肝。色辨風塵無限路、
心懸南北有餘歡。桃花洞裏垂柳渡、岐臨留言挽玉鞍。

鎌倉圓覺寺　　高見武夫

百年覇氣落烟波、起伏春山積翠加。寂々化城獅子座、
天風吹散萬松花。

壽德庵　　同

白雲來宿石牕前。修竹當門洞口天。也與老僧樂其樂、
飢來喫飯倦來眠。

遊繪島　　同

雨後松林翠欲流。有人據岳起層樓。雲山碧海暮帆遠、
烟雨湖南萬里舟。

金陵秋詞　　同

銀河無影冷秋羅。畫壁酒醒如夜何。聽琵琶人倚閣、
疎燈瑟々照簾波。

舟行抵㆓寧渡㆒夜泊、是昔仲麻呂望㆑月處　同

落木冷雲古越秋。寒潮拍㆑岸夜天幽。
多情三笠山頭月、來照遠人萬里舟。

越城客舍、寄㆓懷日本東京諸故人㆒、　同

雲遊萬里一身輕。吳越風烟懷古情。
畫壁春燈今夜雨、落花風裏夢㆓東京㆒。

法雨寺夜坐　同

身與㆓梅花㆒太瘦生。寂寥禪閣一燈明。
夜深人靜聽㆓天籟㆒、屋角風鈴微有㆑聲。

味蒓園　同

秋雲欲㆑瘦雨如㆑絲。日落名園宿草悲。
一點疎燈心萬里、小樓剪㆑燭夜題㆑詩。

春日感懷　同

滿眼東風吹㆓滿林㆒。花開濺㆑淚鳥驚㆑心。
吳山越水三千里、

春與ニ春愁ニ一樣深。

夢痕錄、後半　　　　　同

訪ニ荒尾氏於ニ大阪花屋ニ、留數日且飲且談、常至ニ夜深ニ而寐、此間吾深知ニ荒尾氏ニ矣、嗚呼氏則天下之志士、而實曠世之偉人也、出レ阪也、到ニ梅田ニ與ニ荒尾益田秦諸士ニ、亦分レ手矣、夜入ニ神滬ニ、直投ニ輪船ニ、船已發却望ニ神滬ニ、夜山欲レ低紅燈千點、而團月照レ海、秋濤萬里、金波漣々、眞是天地之活畫也、吾在ニ船中ニ、而不ミ敢登ニ甲板ニ、船已過ニ讚岐ニ、連山競レ秀、海水涵レ綠白鷺雙々、風致明媚、眞可レ愛、其達ニ馬關ニ也、時已夜月明ニ潮上ニ孤雁啼入レ烟、柔櫓遙相答、而船燈隱ニ見於山影海色水霧溟濛之際ニ、宛然亦天地間之一活畫也、登レ陸也、宿ニ繞翠樓ニ、吾聞ニ馬關之勝ニ久矣、而未レ游ニ其地ニ也、天明因與ニ洞巖ニ同レ車、北到ニ小瀨戸ニ、兩山對峙、大潮流ニ其間ニ、而潮勢如レ箭、白帆如レ飛、眞鎭西之奇觀也、若使ミ李白視ニ此景ニ、必也曰天門中斷楚江開、南到ニ壇浦ニ、謁ニ壽永之古陵ニ、山勢之峨々、蓋如下訴ニ孤憤ニ者上、海潮拍レ岸、其聲如レ泣、古碑苔滑、宿草秋寒、吾掬ニ裳川一杯之水ニ、以弔ニ平家千秋之寃魂ニ、或登ニ紫石之山ニ、或拜ニ赤馬之宮ニ、想レ舊撫レ今仰俯感慨、涕涙久レ之。東坡曰、人生知レ字憂患之初、古人不レ欺レ吾也、蓋馬關望レ之有ニ一衣帶水之間ニ耳、然天暮因歸レ館、嗚呼馬關之勝、不レ期而一遊亦奇哉、初夜船已發ニ馬關ニ海天如レ墨、風濤漸惡、

已而狂瀾捲天、怒濤震海、船休簸蕩、山嶽潜形、鯨鰐出舞、於是乎船進不得、退不得、天曉船泊文字關、以避難、因與洞巖登陸、頗得知文字之勝、亦不奇乎、此日與楢崎氏邂逅、氏則遊支那多年、今亦欲往朝鮮、亦奇遇也、吾有詩云、日暮酒醒人下樓。天涯重聚又離愁。碎雨冷煙青山路、文字關頭欲老秋。夜宿石田、天曉與洞巖到渡止場、海天如拭、秋濤千里、而輪船先我已解纜、不能之如何、則即直上鐵車、赴博多、路過香椎之古陵、經千代之松原、則到敵國降伏之祠、遂入博多、而此間一面臨海、一面據山、山則連山起伏雲烟蒼茫、海則潮痕一碧水天髣髴、於是乎頗發今昔之感矣、過其松原也、玉沙玲々、青松流翠、微波拍塘、瑟々有聲、亦是鎮西之佳景也、而吾亦不期而視之亦奇中之一奇也、直從博多再投輪船、船已發、天亦暮、獨立船頭、顧望覇家臺之雲樹、山色遥隱見落日蒼煙之際、越一日、船到長崎、遂投綠屋、聞有輪船此日航上海、吾以事不果、而上海之故人相待已久矣、因離杯一杯、使洞巖先發、嗚呼吾與洞巖同其行、同其苦樂如此、今亦相別、孤鸞入夢蓋亦奇哉、先是船中得一良友矣、曰池田某、崎陽野母之人也、篤厚而有才、奉職陸軍已八年、今任滿歸鄉、與吾同登陸、越一日來曰、聞君有故緩航一週、與吾同去遊我鄉亦不奇乎、想山之秀、水之明、亦足發詩興、而至巨口細鱗之美、則其味不可言、吾不覺曰妙、及期則

發、順風相送、布帆早日、到二野母一天已暮、即投二池田氏家一家人出迎、杯盤已備、乘レ燭擧レ杯各祝二其平安一、此地去二長崎一十里、地僻而人朴、夫妻相扶、兄弟相和、清風滿レ室、穆如可レ愛、嗚呼吾無レ感乎。越一日、僦レ船遊二樺島一、遊二脇津一亦遊レ岬。山秀水明、眞不レ負二所聞一、而至二鱸魚之美一、潑々上レ匙、或爲レ膾、或爲レ羹、風味自是天上之物、人間幾回得二之嘗一矣、留三日、亦歸二崎陽一、嗚呼吾嚮者與二洞巖一相別、實奇矣、而不レ期又爲二此小遊一、抑亦不レ奇乎、留二其崎陽一亦三日、於レ是乎崎陽之勝、亦知レ之矣。一日捲レ簾眺望、碧峯俊嶺、雙々互相對峙、一水盆淵、據レ山臨レ海、洋樓楚閣、玲瓏相映、金碧相照、兩岸千百之老松、鬱々森々、隱二見其間一、檣帆如レ林物貨輻輳、眞天府之良港而鎭西之畫景也、越一日投二輪船一、船已發天亦暮矣、獨立二甲板一則水天髣髴、東方只認二一髮之青一而已、蓋日本之山、亦不レ得レ觀也。嗚呼吾亦無レ感乎、雖レ然不レ期而吾烟霞之痼疾、時已得二少愈一、錦囊之詩料、時已得二少富一而悠遠之志、時已得二少養一矣、是皆不レ期而得、不レ圖到、實亦奇中之一奇也。越三日、始認二西方一髮之青一、赤髯笑指レ之曰、是呉淞河口之砲臺、支那之山於レ是乎吾始見レ之矣、蓋從二長崎一到二揚子江一、三百五十里、更溯二江口一四十八里、左折入二呉淞一亦溯レ江十三里、始達二上海一、上海即古呉之地也、因天涯與二故人一相遇、其喜可レ知也、其快可レ想也、而楊子江頭之明月、呉城之風煙、多レ感多レ愁、亦可レ知也、居未レ滿レ月、飄然亦爲二

海南之遊、孤帆萬里、遂到普陀山、投法雨寺矣、蓋亦吾之志也、居數日、登臨逍遙、獨相其地眞是南海之瀛洲、而天下之奇觀也、四面臨海、雲濤莽渺。千里一碧、而遠樹雲島、如遠如近、亂點於烟波縹緲之際、而孤帆桂席、暮風斜送、其最近而浮青雲梳綠鬟者、謂洛伽山、山則有寺有庵、亦有水晶宮云、而顧望普陀山、松老杉古、山骨稜々、如龍之躍、如虎之嘯、或如奔馬、或如臥牛、有欲落而不落、有欲騰而不騰、或起或伏、奇岩怪石、千態萬狀、得而不可形容、而白雲紅樹點綴其間、有人乘竹輿登此景也、欲畫而不能畫、欲筆而不能筆、隔嶺渡水、塔宇相聳、金碧相映、若其到煙雨濛々暮鐘相聞之時、頗有南朝四百八十寺多少樓臺烟雨中之觀、而白沙如玉、青松凝翠、月明團々、雁聲搖落、曰金鼎沙、怪巖奇石。如躍如舞、石髮鬖々、如獅子、曰獅子洞、據山臨海竹樹蕭々、有草臺、有石橋、遙與洛伽山相對、風景如畫、曰洛伽洞、到梵音洞、則眞千古之靈場也、倚鐵欄拾石階而下。白石玲瓏、碧苔如油、奇草異木、叢生其間、冷風拂衣、龍氣忽腥、大潮澎湃、與洞巖相激、瀼々轟々、如百雷之轟、如獅子之吼、水霧四起、白日失光、四顧冥々、而兩山忽如裂、斷巖絕壁、不知其幾千丈　小堂架其間、倚欄望之不寒而肌生粟、毛骨悚然、　冷氣徹骨、　其千古之靈場、古有龍王居之、亦非偶然也、內安置觀音大師、香火常盛、蓋普陀之山、普陀之水

奇景勝地、蓋可三以レ百數二レ之、而吾足跡未レ到也、故不レ能二之筆一也、聞レ之春則桃花流水、宛然一大桃源之仙區也、夏則萬嶽積翠、千峰明媚、萬里無レ雲、大月照レ海、水風微動、涼氣入レ閣、夏而秋、嗚呼吾謂二之海宇之瀛洲一、謂二之天下之勝地一、亦非二偶然一也、於レ是乎吾烟霞之痼疾可レ得二少愈一、吾萬斛之詩情、可レ得二少蓄一、而吾大鵬之志、可レ得二少養一也、吾今爲二孤劍天涯之客一、而擅二勝於萬里之外一、嗚呼亦不レ奇乎、更有二從レ是奇者一焉、何也、嚮吾在二日本鎌倉一、參二得大乘之禪機一踟跌有レ年矣、其到二廓然悟入一、則自想男兒有二遠圖一、而不レ得二志於當世一、一衣一鉢、飄然放二浪江海一、傲二笑四方一、石火雷光、毒二殺天下之英雄一、詩賦風流、千秋之業、亦足レ垂三名教於二百代一、補二世道於二天下後世一、亦不レ快乎、於レ是乎慨然欲レ爲レ僧、而未レ決也、人々皆曰、高見爲レ僧、高見爲レ僧、而吾遂不レ爲レ僧也、人々皆曰、高見落レ髮也、今也吾飄然爲二天涯之孤客一、而落二髮於萬里之外一、蓋有レ所二大決一也、嗚呼亦奇哉、到二其普陀一也、各僧大喜、隨時厚遇、隨處欲レ迎、蓋如二有レ待者然一也、豈亦不レ奇乎、先レ是余在二吳城一也、與二慧光和尚一相知、余到二普陀一也、與二慧光一同二其行一、暮發二上海一、曉過二寧波一夜泊二鎮江一、從二足海一、遂入二普陀一矣、投二其法雨寺一也、亦同二其室一、憂樂起臥、亦同レ之、而吾入レ清日淺、言語不レ通、如レ啞如レ聾、如レ痴如レ魯、吾從二慧光一而來歟、慧光從レ吾而來歟、豈亦不二奇緣一乎、而飛二錫於天下之奇勝一、印三足跡於二海南之瀛

洲一起二伽藍一樹二法幢一、巖然如レ開二普陀之佛國一者、實爲二我日本慧鍔大禪師一云、蓋去レ今八二百年於此一矣、今吾從二日本一萬里來二普陀一、落二髮於開山塔之傍華嚴殿一、嗚呼亦實千載之奇緣、而東西之奇遇也、一夜石波天驚、秋雨撲レ窓、悄然獨坐、剪レ燭靜聽二、想身世一、想去撫來、茫々乎如レ雲如レ煙、恍惚乎、如二醉中之醉一、如二夢中夢一萬感交聚、仰俯感慨、欲レ眠而不レ能レ眠、欲レ語而不レ能レ語、感極而泣矣、雖レ然吾半生之業、吾自取レ之、而所以レ取レ之者、則天意也、非二偶然一也、然天意固邈矣、未レ可レ爲二容易之看一、强名レ之曰レ奇、又曰二夢夢一、即眞耶即夢耶、眞實無妄是謂二之誠一、孔子曰、誠則天之道也、誠レ之則人之道也、韓公亦有レ謂曰、士之能獨立獨行適レ義而已、不レ顧二人之是非一、皆豪傑之士、信レ道篤自知明也、嗚呼吾固至愚、而志頗不レ小、妄期二遠圖一、誓二大成一、今也亦獨離レ鄉、放二浪江海一、捨レ親落魄、天涯孤劍、萬里蕭條、抑亦何心哉、雖レ然自信愈篤、自知愈明矣、亦何暇二人之是非一、歎二身之流落一也、只猛然獨盡二其心一、慨然獨行二其志一、吾之外無二天地一、無レ山無レ河無レ險無レ夷、獨立獨行、積レ日積レ月、壁立萬仞、或如二蛟龍之躍一、或如二猛虎之嘯一、且夫獅子一吼、野牛腦裂、泥丈夫一揮、天柱蹴而可レ碎矣、地維踏而可レ粉矣、嗚呼使下吾之所二抱負一有レ成、則師友之恩可レ報、而不レ愧レ爲二忠孝之人一也、抑亦可レ不レ負二其平生一矣、泥免レ爲二孔子之罪人一也、而使三韓公起二於九泉一、撫レ髯一笑、相逢而不二自愧一也、雖レ然有レ志二

於萬里之外一、雲山相隔、前途之險夷、與二事之成敗一則吾不二自知一也、諸葛孔明曰、臣鞠躬盡レ力斃而後已、至二成敗利鈍一非三臣之明所二豫視一也、嗚呼孔明者天下之奇才也、而猶自警如レ此矣、況吾輩至愚、惟鞭撻斃而後已矣、是眞體二天道一行二人道一也、且可レ謂レ知二之天命一矣、嗚呼男兒生而不レ爲二孔明之罪人一、則可三以得二少安一也矣、時亂雲如レ崩、老木吼レ風、開レ窓則天色如レ墨、寒星落々、景亦奇矣、 明治二十七年一月卅日、 於二法雨寺戒堂一識焉、

巨人荒尾精終



（巨人荒尾精）

明治四十三年九月五日印刷
明治四十三年九月十日發行

著作者　井上雅二

發行者　東京市神田區小柳町十三番地　關宇三郎

發行所　東京市神田區小柳町十三番地　左久良書房

印刷者　東京市小石川區久堅町百〇八番地　山田英二

印刷所　東京市小石川區久堅町百〇八番地　博文館印刷所

一冊金一圓二拾錢
送料金十六錢

特

明治四十三年九月改正

出版圖書目錄

東京市神田區小柳町十三番地
左久良書房

塚原澁柹君著

時代小說

澁柹叢書

箱入 美本

卷第壹 由井正雪 (十版)

金壹圓貳拾錢 送費金拾八錢

慶安の事は史中の異變にして、由井正雪は一代の怪傑也。明治無二の時代小說家の筆は之を寫して、天下の珍、具はるもの三。

卷第貳 大鳥逸平 (四版)

金壹圓貳拾錢 送費金拾六錢

俠奴也。事や名や歷史の一端を、染むるに過ぎざれど、時代の謬なるもの、虛なるものを排して、斯人ひとり高し、此書重むずべし、道心日に廢れゆく今の世に。

卷第參 葵と桐 (四版)

金壹圓 送費金拾四錢

秀吉は先に小牧に揄し、家康は後に聚樂に順す。大局萬全の捷を期せむに、和平は止むない、茲、兩雄の心は合符中原の鹿、獵夫の利は與らず、梧桐葉ゆる時青葵の慶、亦盡しぬ。

卷第四 木村重成 (七版)

金九拾錢 送費金拾貳錢

豐家亡ぶるの時、烈士雲のごとかりしも、この風流武者を除けば、大阪兩度の役は、あまりに色彩に乏し、名も玉串の堤に殘る香や、長門其人の生涯はいかに。

卷第五 眞田幸村 (六版)

金八拾五錢 送費金拾貳錢

上田役中の會合には、父兄遂離の裡に盡す孝悌、九度山隱の落去には、恩讎反目の間に貫く仁義、與亡成敗は兵家の累のみ、武夫は唯恥づ死後の名と、武士道第一人者、眞田幸村。

卷第六 水戸光圀卿 (四版)

金九拾錢 送費金拾貳錢

顯藤神の如き忠犬、可憐の主を扶けて、遂に報復の功を奏す、太田馬場の裁斷、孝行は十三の總角、闊達士を愛する左衛門督光圀卿、げに香木の馨ばしきよ嫩葉にして。

塚原澁柹君著

時代小説

澁柹叢書

箱入 美本

桃山御殿	山田長政	別木騷動
近刊	近刊	近刊
龜山讐討	渦須雲庵	佐倉宗吾
近刊	近刊	近刊

小杉未醒君装畫　満谷國四郎君口繪

故國木田獨歩著

小説 運命（六版）

金七十五銭　送費十銭

欺かざるの記 前篇

金貳圓五拾銭　送費 内地十八銭 清韓臺灣樺太四十銭

愛弟通信 新版

金九十五銭　送費十銭

題已に痛絶、想豈に恨絶ならざらんや、一巻九篇、盡く人生の大秘奥を穿透し來りて、字々刀舞し、句々戟躍す、如是の小説は娯樂的作品に非ず

目次

運命論者　巡査　酒中日記
馬上の友　悪魔　畫の悲み
空知川の岸邊　非凡なる凡人　日の出

清新の想と燃犀の明とを有する著者が生涯を通じて最も紀念すべき五ヶ年の日記に收むる所や何？煩悶もあるべし、慰藉もあるべし、其戀は如何、其涙は如何、時に或は恩人を罵り、舊知と反き、感情の赴く所山峙ち海横ふ。

文學が獨り平和の産物にあらざる限り、戰の巻にも幾多の詩材なかるべからず。愛弟通信は實に著者が海軍従軍の際に得たる金玉の文字にして、慘たる戰鬪の間に生れし詩材を、自在に捕捉して、縱横に説述したるもの、蓋し好個の戰爭文學といふべし。

近刊書目

小山内薫君著

病院

著者其母と其姉との病床に侍して十幾年を閲みし、顧みて自ら醫士の任務あるを思ひ、其家庭を病院に擬して本書を成す。蓋しこれ著者の長篇に於ける第一の試作にして、別に一境地を拓けるもの、庶幾は來つて其聲を聞け。

泉鏡花君著

簑振袖

其文其想共に明治文壇の珍とするに足る著者の近業なり。久しく君の靈腕に接せざりし我が讀書界は、爰に本書を得て其渇を醫すべく簑振袖のゐしがつぎ／＼の振舞は今こゝに言はぬが花かも。

生田葵君著

俳優組合

忽ちにして妖姚花の如き美婦たり、忽ちにして赤心人を泣かしむべき忠臣たり、其他或は白面郎、或は強賊、或は侠妓と夫々に扮して檜舞臺に別天地を展ける俳優の上にも、様々の世話場はあり、久方の空飄ける凧にも浮世の糸の離れぬぞ是非なき。

紀行文集

著者 細川花紅逸人
序文 後藤宙外君
附錄 中村春雨君
口繪 山中古洞君
挿畫 一條成美君

小品紀行 **うぶ聲**

金參拾九錢
送費金四錢

轗軻の半世、淪落の微軀、骨をこの山に曝さむとするに、妄念なほ火よりも熾なり、水のながれ、雲のたゞずまひ、白露隕つる夕や、細雨粘する朝や、そこに惱みなきか、そこに煩ひなきか、……

遲塚麗水君著（三版）
齋藤松洲君裝畫

紀行文集 **ふところ硯**

金七拾五錢
送費金八錢

筆を染めて書き綴りたる旅の記の、其の墨の香の源は、古場の花の涙、廢院の月の雫、さては夜の泊の蓬の窓より掬ふ江の、水いろいろ、心さまざま、いづれも是れ清趣橫溢。

小島烏水君著
丸山晩霞君畫
中澤弘光君畫

紀行文集 **雲表**

金八拾錢
送費金六錢

著者自ら題していふ、山の精舍は自然に返れと叫び、水の說敎は生命短し藝術長しと語る。我は何の智識の人に敎ふるものもなし、唯、ひたすらに歌はばや、踊らばやと。

著者 細川花紅逸人
附錄 島崎藤村君
口繪 梶田半古君
挿畫 中澤弘光君

小品紀行 **茂志保艸**

一冊 金六拾八錢
送費金八錢

ああ、倨傲の「人」、刻薄の「世」、壓抑や、陷擠や、殘虐や、日夜心神を惱まして、この飄零の羸軀を責め、愁風徒に萬恨を寄せぬるきのふけふ、惱めるものは寧められ、苦めるものは慰められたり。

伊藤銀月君選著
小杉未醒君漫畫

海洋紀行 **海草**

一冊 金五拾錢
送費金四錢

本文には海の紀行十五篇、卷頭には海の漫畫十葉を收め、附錄に川上眉山、兒玉花外、齋藤弔花、塚原澁柿、山崎紫紅等諸君の詩文を掲ぐ。

少年書類

巖谷小波君著
久保田米齋君畫
お伽十二時
金八拾五錢
送費金拾錢

巖谷小波君序
泉鏡花君
宇野靜春君著
橋本邦助君畫
お伽花束
金六十錢
送費六錢

目次

目次

巖谷小波君著　久保田金僊君畫
お伽芝居

第壹篇
おもちやの窟
一冊金八錢
送費金貳錢

第貳篇
鷄の手柄　龍宮のお使
一冊金拾參錢
送費金貳錢

第參篇
清正幼物語　春の神
一冊金拾貳錢
送費金貳錢

詩歌書類

馬場孤蝶君選著
一條成美君作畫
詩集 **花がたみ**（三版）
一册金參拾四錢
送費金四錢

若き血潮のあふれては詩にうつくしき花と咲きその花びらのとりどりを名もふさはしき「花がたみ」、幸ある子等が一卷の詩集の花の香に醉ひてわれと我が詩のうるはしく清くゆかしく咲きなむを待つ。

河井醉茗君選著
中澤弘光君作畫
詩集 **桂の卷**
一册金參拾貳錢
送費金四錢

桂の卷は、詩歌の光明にあこがるゝ五十九名の若人が、藝術の殿堂に高踏せむとする第一歩なり。このささやかなる卷の名をも世に傳へしめよ。

山崎紫紅君著
平福百穗君畫
法華詩篇 **大日蓮華**
金六拾錢
送費金六錢

法華經の信者たる作者、法華經の行者たる聖人が、法華經の布教、弘通終りて大還告を頌す。字字眞佛、天下に不朽なるものは法華經、詩壇に不朽なるもの、此の大日蓮華是れ。

伊良子清白君著
長原止水君畫
詩集 **孔雀船**
金七拾錢
送費金六錢

君が描ける自然には心血の色あり、君が謳へる人間には微妙の情火あり、平生の鈴韜潜修を傾注して、此卷成ると。

あやめ會詩集第二
齋藤松洲君畫
豐旗雲
金四拾貳錢
送費金六錢

上田君の踏繪、高安君の炎の城、岩野君の夢なり魂なり、小山内君の一葉、山本君の靜なる日の海、河井君の不安、蒲原君のやまうど、野口君の英詩等、詩美絢爛たり。

平野萬里君著
和田英作君畫
歌集 **わかき日**
金四拾五錢
送費金四錢

わかき日の純なる情を歌ふに、新しき聲を以てせり。

齋藤松洲君編畫

松洲畫俳帖

近刊

和裝美本